

般若と龍と女神のドタバタ騒動記

アリアンキング

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

東城会直系真島組組長 嶋野の狂犬 真島吾朗と伝説の龍 桐生一馬

1年前 頂点に立つA―RISEを超えて伝説のスクールアイドルと呼ばれたμs
神室町にその人ありと呼ばれたこの二人とμs達が繰り広げる騒動の数々

これはそんな物語

目次

サブストーリー001	和菓子屋一家の珍騒動	1
サブストーリー002	遭遇！アイドル大好き少女	10
サブストーリー003	父の願い 娘の想い	20
サブストーリー004	街案内をお願いします！	30
サブストーリー005	園田海未の猛特訓！	39
サブストーリー006	娘を想う親二人	50
サブストーリー007	パーティに隠された秘密	62
サブストーリー008	強さに必要なもの	72
サブストーリー009	街がもたらす奇妙な縁 桐生編	91
サブストーリー010	街がもたらす奇妙な縁 真島編	114
サブストーリー011	静かな夜に男達は語り合う	134
サブストーリー012	神室町はハラショーな人でいっぱいです	151
サブストーリー013	仲良き事は素晴らしい	164
サブストーリー014	薄暗い森の中から	176
サブストーリー015	今日は花見だ！	188
サブストーリー016	暴走！アイドル大好き少女	200
サブストーリー017	お酒は程々に	211
サブストーリー018	希の神室町不思議探訪 路地の幽霊	223
サブストーリー019	宝探せばアイドルに当たる	234
サブストーリー020	クレインゲーム 一発勝負	246
サブストーリー021	前に進む者達	258
サブストーリー022	勝負の行方	268
サブストーリー023	元旦の屋上で愛を叫ぶ	288

サブストーリー1024 続 希の神室町不思議探訪 幻の河童

298

サブストーリー1025 友達が出来た日 | 307

サブストーリー1026 健康の一步は食事から | 317

サブストーリー1027 スイーツ巡りも楽しやない | 325

サブストーリー1028 鍋の如く温かく | 335

サブストーリー1029 大晦日に咲く思い出話 | 345

サブストーリー1030 絆はよいよい 饅頭怖い | 359

サブストーリー1031 南からの訪問者 | 368

サブストーリー1032 続 南からの訪問者 | 376

サブストーリー1001 和菓子屋一家の珍騒動

ある晴れた日 静かな住宅街を一人の男が歩いていった。

その男の名は真島五郎 東城会直系真島組組長であり、世間では嶋野の狂犬と呼ばれ恐れられている。何故、そんな男が住宅街にいるのか…その理由は数時間前に遡る。

「美味しい和菓子屋？」

「ええ 秋葉原近くの住宅街に美味しいと評判の和菓子屋があるそうです。」

「ほく それで、店の名前は何ていうんや？」

「確か、穂むらでしたね。」

「さよか…それなら早速、行ってくるわ」

「え？行くって、組長がですか？食べたいなら、私が行って来ますよ。」

「アホ！ こういうのは自分で行かんと意味がないやろが…それに最近、組に缶詰やったし、息抜きせんとな…ほな、行ってくるで」

「はい お気を付けて」

組の奴にそう言って、出てきたはいいが… 歩いてても目に映るのは、家ばかりやないか…

こんな所に美味しい和菓子屋が本当にあるんやろか？

変わらぬ風景にうんざりしている真島の正面から、三人の少女が歩いてくるのが見えた。

真島は天の助けと思いい、その少女達に道を尋ねる。

「すまん その嬢ちゃん達…道を探ねたいんやが、ええやろか？」

「え？み、道ですか？別に構いませんけど、何処へ行くつもりなんですか？」

三人の一人：青い髪を腰まで伸ばした少女 園田海未が怯えながら言葉を返した。他の二人も警戒しながら、真島を睨んでいる。

少女達が怯え、警戒するのも無理はない。何故なら、蛇の模様が刻まれた眼帯にスーツ姿の真島は、見る人に威圧感と恐怖の印象を与えるからだ。

その視線に気づいた真島は相手の警戒心を解く為、自分の名を名

乗った。

「ああ 別に怪しいもんやないで：ワシは真島吾郎というもんや：気軽に真島さんでも、吾郎さんでも好きに呼んだらええ なんやったら、ゴロちゃんでもええで〜」

真島がおどけた様子で自己紹介をすると、見た目とは違うギャップに三人も堪え切れずに吹き出す。

「ゴ、ゴロちゃん… あははははは…」

「ほ、穂乃果：笑っては失礼ですよ。ふふふ…」

「ゴロちゃんって、可愛い呼び方だね〜」

「そうやろ〜 それで自分達は何ていうんや?」

場が和んだ所で、今度は真島が少女達に名を聞く。

「あつ：そういえば、名乗ってませんでしたね。私は高坂穂乃果とい
います。真島さん さつきは睨んでごめんなさい。」

「私は園田海未といひます。先程は失礼をしました。」

「私は南ことりです。あの〜 呼び方はゴロちゃんでもいいですか
?」

「ことり： いくらなんでも、その呼び方は失礼ですよ。」

「別に構わんで： 好きに呼んだらええ それで道を尋ねたいんやが
：」

「さつきも言っていましたね。何処へ行くんです?」

「ああ この辺で穂むらという名の和菓子屋があると、聞いて来たん
や。海未ちゃんらは知つとるか?」

真島が目的の場所を聞くと、穂乃果が満面の笑顔を浮かべて答え
た。

「穂むらなら、この道をまっすぐ進んだ先にある階段を下りた先にあ
りますよ。ちなみに穂むらは、私の家なんです。」

「そうやったんか：えらい偶然もあつたもんやな 折角やし、お勧め
の和菓子を教えてくれへんか?」

「お勧めの和菓子ですか?それなら、穂むら饅頭：略して、ほむまんが
お勧めです。」

「ほむまんかあ〜 教えてくれて、おおきにな。 ほな、ワシはこれで

」

「はい、うちの和菓子をこれからもよろしくお願いします。」

穂乃果のさり気ない宣伝に、真島は微笑を浮かべる。そして三人と別れると：目的地の穂むらへ向かう。

真島は教えてもらった道を進んでいくと、自分が探していた和菓子屋 穂むらに辿り着いた。

「漸く、着いたで〜 それじゃあ、お勧めの和菓子を買って帰るとするかいのう」

真島が店の引き戸を開けると、店の中から穏やかな女性の声が聞こえてきた。

だが、元気な声も真島を見ると、小さく震える声に変わった。

「いらつしやいま・せ お、お客様 どれでも好きな和菓子をお選びください。」

「それなら、お勧めのほむまんを・そうやなく 五つもらおか」

「穂むら饅頭を五つですね？少し、お待ちください。」

真島の注文を受けると、女性は素早い手付きで饅頭を袋に詰めていく。明らかに早く帰ってもらおうという女性の雰囲気気付かず、真島は先程の出来事を世間話として話始める。

「そういや、さつき・その道である女の子達に会ったんやが、ええ子やったなく 特に穂乃果ちゃん・言う子がワシに道を教えてくれただけやなくて、ここのお勧めまで教えてくれたからなく」

その言葉を聞いた女性は、手を止めて真島を視線を向けると、恐る恐る尋ねた。

「あの… うちの娘がそちらに粗相をしませんでしたか？」

「うん？別にそんな事しとらんで…ただ、自分が自己紹介した時に笑つとったけど、そないな事で怒るほど…ワシも短気やないからなあ〜」

真島はそう言うが、穂乃果の母はある言葉を耳にしたあたりから、真島の話を聞いていなかった。

（人が自己紹介してる時に笑った!? あの馬鹿娘は一体何をしてるのよ〜 よりによって、こんな人を笑うなんてえ〜 拙いわ：ヤクザの

人は面子を気にすると言うし、下手したら穂乃果の身にとんでもない事が…)

(うん? どうないしたんや? 急に黙りこくって: しかめ面をしたり、青ざめたりと面白い人やなあゝ家の娘がという事は、この人は穂乃果ちゃんのお袋さんか: 母娘揃って、表情豊かやな)

二人はそれぞれ、別の事を考えていた。

だが、本来の用事を思い出した真島が、百面相をしている穂乃果の母親へ話かける。

「所で: ほむまんはまだかいの?」

「ああゝ お客様: 大変、申し訳ありませんでした。穂むら饅頭が五つで500円です。」

「そんなら、これで頼むで:」

「500円: 丁度ですね。ありがとうございます。」

「おう ここは面白いからなあゝ ほな、また来るで」

そう言い残して真島が店を出ていくのを見送ると、穂乃果の母親はへなへたと脱力してカウンターに突っ伏した。

自分が来た道とは、違う道を饅頭を食べながら歩いていると、何処からともなく陽気な音楽が聞こえてきた。

真島がその方向に目をやると、長い階段の上から聞こえてくる事が分かった。

この階段の上は: 確か、神社があった筈や:

一体、何をやってんやろう? 面白そうやから: ちつとばかし、覗いてみるかのうゝ

真島は興味津々の様子で階段を登り始めた。

階段を登り、真島が神社の境内に辿り着くと、そこには穂乃果達の姿があった。

「お? 誰かと思ったら、穂乃果ちゃん達やないか」

「真島さん: どうして、此処に?」

「この近くを歩いていたら、楽しそうな音楽が聞こえてきたから: 気になって、見に来たんや それで一体、何をしとったんや?」

「そうだったんですか: 実は、私たちはダンスの練習をしていたんで

す。」

「ダンス？何や・自分ら、盆踊りの練習でもしてるんか？」

「ええ、そうです。単調なリズムで手拍子をしながらって、違います!!!何をやらせるんですか。」

真島の言葉に釣られて、海未は自分の手を叩いてリズムを取るが、我に返って真島に詰め寄った。

「・何をやらせるって、自分がやったんやないか　ワシは悪くないよな？なあ、二人共・」

真島の言葉に穂乃果とことりは、コクコクと無言で首を縦に振った。

「なっ・穂乃果とことりもひどいです。」

「まあまあ、機嫌を治してよ。海未ちゃん」

「そうだよ。そんな顔は似合わないよ」

拗ねた表情を浮べた海未を穂乃果とことりが必死になって、宥めている様子を真島は穏やかな顔で見つめていた。

(この三人は仲よしやなく　海未ちゃんもノリがええし、面白い子や…)

真島は心の中でそんな事を考えていると、自分に対する視線を感じた。

何や？何処からか、視線を感じるのう…一体、誰や？

辺りを見回すが、自分に視線を送っている者は見つからなかった。

気のせいだと、思ったが…見ていた者の勘違いによって…この後、

真島は騒動に巻き込まれる事になる。

「大変だあく　お姉ちゃんと海未さんとことりさんがヤクザに絡まれている。早く、お母さんとお父さんに知らせないと…」

真島に視線を送っていた者は、自分の家に向かって全力疾走していた。

未だに海未を宥めている穂乃果とことりを見て、さすがに自分も悪いと思ったのか：真島も海未を宥める。

「海未ちゃんもいい加減に機嫌治し：穂乃果ちゃんことりちゃんも困ってるで」

「・そうですね。ごめんなさい：穂乃果、ことり、それに真島さんにも迷惑お掛けしました。」

「ううん 私は気にしてないよ。」

「海未ちゃんは笑ってる方が可愛いよ〜」

「元はといえば、ワシが原因やからなあ。海未ちゃんの機嫌が治って良かったわ。」

一方、その頃 全速力で家に帰ってきた雪穂は、息を切らしながら母親に自分が見た事を伝えた。

「お母さん・大変だよ〜 神社でお姉ちゃん達がヤクザに絡まれてたよ。眼帯を付けた怖い人だった。」

「何ですって!?! それは本当なの? やっぱり、笑った事を根に持っていて、穂乃果の事を狙ってたんだわ。」

「早く警察に連絡しないと、ええと：110番と」

「待ちなさい。警察に電話しても到着するまでに時間がかかる。その間に、穂乃果は連れて行かれてしまうだろう。ことりちゃんと海未ちゃんも無事では済むまい。ここは私に任せて、お前たちは此処にいろ」

「いいえ 私も行きますよ。あの子達が危ない目に遭ってるかもしれないのに、じつとなんかしてられません」

「私も行くよ。一人だけ、待ってるなんて嫌だからね。」

「：解った。それなら、皆で穂乃果達を助けに行こう・」

こうして、穂乃果の父と母・そして、妹の雪穂は穂乃果達を助ける為に神社へ向かった。

「ほ〜 穂乃果ちゃん達はスクールアイドルをやつとんたんか・」

「はい と言っても、元なんですけどね。時折、三人でダンスの練習をしてるんですよ。」

真島は穂乃果から話を聞き、自分達がやっていた事と元スクールア

アイドルである事を知る。

そして、疑問に思った事を真島は穂乃果達に尋ねた。

「神社から陽気な音楽が聞こえてきたのは、それが理由やったんか？ それにしても、スクールアイドルを辞めたのに何でダンスの練習をしとるんや？」

「それは・やりたいからです。練習したダンスを誰かに見せる事はなくても、一生懸命やる事で達成感を得られますからね。」

「それに・皆と息を合わせるのも楽しいんだよ。自分と相手が信頼してないと、それは出来ないから・・・」

「ダンスは体をよく動かすから、ダイエットにもなりますからね。最近、太ったような気がするし・・・」

海未、ことり、穂乃果の言葉を聞いて、真島はこの少女達への興味がさらに深くなっていった。

下手に飾らずに自分の気持ちを言える人間が真島は好きだからだ
：

しかし、そんな穏やかな空気は神社にやってきた三人組に破られる。

その三人組は穂乃果達を助けに来た・穂乃果の家族であった。

「その子達から離れる!!」

「え？お父さん・それにお母さんと雪穂まで：一体、どうしたの？」

「血相を変えて：どうしたんでしょうか？」

「解らないけど、いつもと様子が違うね。」

茫然としてる穂乃果達と真島の間に、三人が入り真島を睨みつける。

真島は、妙な迫力を感じる三人に気圧されながらも言葉を吐く。

「ちよい待ち：一体全体、何がどうなってるんや？」

「恍けるな 貴様はその子達を誘拐して、売り飛ばそうとしてるんだろうが・・・」

「そうよ。貴方の事を笑った穂乃果達の事を根に持ってるんでしょ？ ヤクザは面子を気にするから、馬鹿にされたと思ってるに違いないわ」

「お姉ちゃん達は、絶対に連れて行かせない！」

真島の問いに三人は、思ってる事を口にして答えた。

それを聞いた穂乃果達と真島は三人が盛大な勘違いをしている事に気付いた。

騒動の張本人である真島が事情を聞く。

「なあ・何で、ワシが穂乃果ちゃん達を誘拐して売り飛ばす事になったんや？」

「だって、貴方・この人が自己紹介してる時に笑ったって、聞いたのよ。だから、何かしらの報復をするんじゃないかと」

「そういう事やったか・ん？ワシはお袋さんに自己紹介の時に笑われたが、そんな事で怒る程・短期やないと言った筈やで」

「えい!?!そうだったんですか?ご、ごめんなさい。貴方の事を笑ったと聞いてから、変な考えを想像をしまして：その事を聞いてなかったわ」

穂乃果の母の誤解を解いた真島は、今度は雪穂の誤解を解く為に話しかける。

「そうやったんか・それで、雪穂ちゃんやったな?君は何で、ワシが三人に危害を加えると思たんや?」

「私は・境内でお姉ちゃん達を笑って見てたから、悪い事を考えてるんじゃないかと思ったの」

「そうか・ワシに視線を送ってたんは、雪穂ちゃんやったんやなあの時は、仲のいい三人を見て、笑ったんや。それに海未ちゃんのノリの良さも面白かったしのう」

「そうだったんですね。早とちりをしてました。ごめんなさい。」

真島の話の黙って、聞いていた穂乃果の父が申し訳なさそうな表情で真島に頭を下げて、謝罪した。

「・真島さんと仰いましたね?話を聞く限り、どうやら：二人の勘違いだったようです。事情を知らずに貴方を悪人にしてしまった。大変、申し訳ないことをしました。」

「別に気にしとらんから、ええで：頭を上げてくれや それに誤解されるのは慣れとるからの」

「真島さん…」

「確かに、ワシはヤクザやから：周りから忌み嫌われとる。せやけど、毎日を必死に生きてる人間に危害を加えるような事は、絶対せえへんで：信じられんかもしれんけどな」

真島は真剣な顔で自分の気持ちを伝えた。この場にいる全員も真島の言葉を受け止める。

「いえ、信じます。貴方が嘘を言ってないのは、目を見れば解ります。また、うちの和菓子を食べて来てください。」

「私も、大変失礼な事を言つてしまいました。お許しください。」

「私の方も：早とちりしてごめんなさい。」

「さつきも言つたが、気にしとらんからええ。また、今度和菓子を食べて来るで。その時に、お勧めの菓子をおしえてや」

一歩離れて、様子を見ていた穂乃果達も誤解が解けて、ホッと一息をついていた。

「どうやら、誤解は解けたようだね。」

「ええ。一時はどうなるかと思いましたが。」

「真剣な顔をしたゴロちゃんもカツコいいね」

「ことりちゃんの感性に時々、ついて行けなくなるよ。」

「奇遇ですね。私もです」

その会話は、真島の耳にも届いていた。

そして、心の中で真島は思う。

(やれやれ。ことりちゃんの呼び方は、ゴロちゃんです定着してしまつたのう。まあ、ええか。それにしても、穂乃果ちゃんの家族はいい人達やな。穂乃果ちゃん達の為に、ワシに立ち向かってくる勇氣もあるし、気にいったわ。それに海未ちゃんのノリは最高やった。今日、和菓子を買いに来なかつたら、この人達に会うことは無かつたやろうし：折角やから、神社でお祈りしていくかのう)

真島は、今日の出会いをくれたお礼を神様に言う為：賽銭箱の方へ歩いて行った。

ある日の午後に起きた珍騒動は、こうして幕を閉じたのである

サブストーリー1002 遭遇！アイドル大好き少女

東京にある眠らない街 神室町 人で溢れる街を一人の男が歩いていた。この男の名は、桐生一馬

堂島の龍の異名で呼ばれ、神室町や東城会に降りかかる脅威を何度も振り払って来た過去を持つ

そして現在、彼は沖縄でアサガオという孤児院を運営していた。

沖縄にいる彼が何故、遠く離れた東京の地にいるのか：理由は数日前に遡る。

「：東京へ1ヶ月の旅行!? 一体、どういう事なんだ?」

「どうしても、慌ててるの? 私は：そんなおかしい事を言つた?」

「当然だろう：何故、俺が1ヶ月も東京に旅行しなくちゃならないんだ：アサガオの運営の仕事だって、あるのに」

「実はね：皆からおじさんへの親孝行として、プレゼントなんだよ。私は、おじさんの保護者だから：この場所に残る事は出来るけど、他の皆は：いずれ、此処を出ないといけない。そうになると、面倒を見てくれたおじさんに恩返しが出来ないからって：」

「そうか：分かった。それなら、行かないとあいつらの顔を潰してしまふ事になつちまうな：しかし、俺がいなくて大丈夫なのか?」

「それは、大丈夫だよ。おじさんや私がない数ヶ月間も、皆はしっかりやっていたようだからね。今は、私もいるから：だから、楽しんできてね」

遙にそう言われ、アサガオの皆からも心良く送り出してもらったが：ここにきてても、やる事が無い。そういえば、ここに来るのは：いつも厄介事ばかりだったな。これは神室町をゆつくりと見て回るいい機会かもしれない。

そうして、桐生は久しぶりの神室町を堪能するために街の中へ歩き出す。

しかし、彼は知らない。自分がトラブルに巻き込まれる星の元に生まれ存在である事を…

「…こうして、見ると知らない店が多くなったなあ。人が多いのは相変わらずみたいだが：ん？あれは」

「あれ〜 また、この道に出ちゃったよ。誰かに道を聞いても、知らんぷりされるし、困ったなあ。」

街を歩いていると、何処からともなくか細い声が聞こえてきた。声があつた方向に目を向けると、気弱そうな感じの制服を着た少女の姿が目に入る。そして困っている少女を桐生は放って置けなかった。

「ちよつと、いいか？あんた：道に迷ってるようだが、何処へ行くのか：教えてくれないか？そうすれば、俺が案内出来るかもしれないからな」

自分の容姿を見た相手を、怖がらせない様に穏やかな声で桐生が少女に声をかけると、少女は親切な言葉に声の主へ顔を向けた。すると、途端に顔が恐怖に歪んで口をパクパクさせる。その様子を見て、心配になった桐生が口を開こうとした瞬間…

「誰かああ 助けてええええ」

少女の助けを呼ぶ叫び声が辺りに響き渡る。

周りを歩いていた人たちが足を止め、何だ？何だ？という野次馬根性で遠くから見る者もいれば、警察を呼んだ方がいいという者もいた。

野次馬の警察という言葉聞いた桐生は、咄嗟に少女の手を掴んで人を掻き分けながら走り出す。当然、手を引かれた少女も桐生と一緒に走る事となった。

10分後 公園通りと呼ばれる場所まで逃げて来た桐生は、自分が連れて来てしまった少女へ目を向ける。一度も止まらず、走って来た為か：少女の呼吸は激しく乱れていた。桐生は少女を気遣うように言葉をかける。

「大丈夫か？」

「は、はい 大丈夫です。そ、それより…貴方は誰なんですか？あと、ここは何処？」

「そういえば、名前を言ってなかったな。俺は桐生という…そして、こ

の場所は公園通りと呼ばれる路地だ」

「桐生さん・ですね？私、小泉花陽と言います。それと、さつきはごめんなさい。道を教えてくれようとしたのに、いきなり叫んでしまっただけです。」

落ち着きを取り戻した花陽は、桐生に頭を下げて謝罪する。そんな花陽に桐生は優しい表情で言葉を返した。

「頭を上げてくれ・咄嗟とはいえ、何も説明しないでここまで連れて来てしまったからなあ。その詫びも兼ねて、花陽が行きたい所へ俺が案内するぜ」

「良いんですか？行きたい場所と言っても、神室町に来るのは初めて来たから店の名前しか知らないんです」

「その店は何て名前なんだ？もしかしたら、知ってるかもしれないから・教えてくれないか？」

「アイドルキャットという名前です。ご存じですか？」

桐生はこの店の名前を知っていた。

花陽と遭遇する前にこの店のチラシを配っている人がいたのを覚えていたが、桐生はこの事実を教えるか迷っていた。

何故なら・その店は女性がアイドル衣装を着て、接客する店 いわば、キャバクラであったからだ：

それを知ってる桐生は自分の疑問を花陽にぶつけた。

「教える前にひとつだけ、聞かせてくれ・花陽は何の用があって、その店に行くつもりなんだ？」

「用ですか？私は・アイドルが何よりも好きなんです。その想いは、誰にも負けないつもりです。だから、私はその店へ行く為に、ここまで来たんです。」

「そうか 解った・事情は人それぞれだからな、その場所まで案内するぜ」

「本当ですか ありがとうございます。」

花陽の言葉にある種の覚悟のような気持ちを感じた桐生は、目的の店へ案内する事を決めた。

自分が勘違いをしているとは気付かずに：

桐生は花陽を連れて、ピンク通りを目指して歩き始めた。花陽もおずおずと桐生について行く。

劇場通りの道を歩きながら、桐生は様々な看板に目を向ける。その中に“アイドルグッズ専門店 アイドルキャッチ”と書かれた看板が目に入ったが、目的の店とは関係ないと目を反らした。

そして、花陽に目を向けると本人は地面に視線をやり、何処か思いつめているような感じだった。

(いつの時代も…この子みたいに自分の身に鞭を打つ子がいるもんだなあ。世の中が発展しても、まともに生活が出来ない人がいるのは：何ともやりきれないぜ。この子がもう少し、年齢が低かったらアサガオで引き取る事も可能なんだが、見た目からして高校生だからなあ。アルバイトとして、住み込みで働いてもらおうにもアサガオの運営もギリギリだから：それも出来ない 俺は無力だな：)

(良かった。これでやっと、探してた店に行ける 初めて来る場所で道に迷った時は、どうなるかと思っただなあ：親切な人に会えて助かった。だけど、いきなり手を掴まれて、連れて行かれた時は吃驚したよ。それにしても、桐生さんは何であんな事を聞いてきたんだろう？もしかして、アイドル専門店の関係者で私のアイドルへの想いを試したのかな？そして、案内してくれるという事は私のアイドルへの想いを認めてくれたのかもしれない。)

二人は全く見当違いな事を考えていた。

人で溢れる天下一通りから路地に入り、中道通りを抜けて：ピンク通りに出ると、ついて来た花陽の心に不安が過る。見渡す限り、色鮮やかに光る看板が目立ち、その場所には胸や足が見える衣服を身に纏った女性達の姿が目に入る。もしかしたら、自分に危険が迫っているのでは？と思った花陽は、思い切つて桐生に尋ねた。

「あの…桐生さんは一体、何処に向かつてるんですか？…ここは、どう見ても：未成年である私が来るような所じゃないですよね？私が探してるアイドルグッズ専門店がこの付近にあると、思えないんですけど…」

「え？花陽は、生活が苦しいからその店で働くつもりだったんだろ？

だから、せめて自分が好きなアイドルの格好が出来る場所を選んだんじゃないのか？」

「え？」「ん？」

ここにきて、二人が思い違いをしていた事が漸く発覚する。

場所は変わって、天下一通りの路地にある公園に二人はいた。ベンチに座りながら、桐生はむくれる花陽を宥める。

「すまない。どうやら、俺が誤解をしていたようだな…てっきり、生活の為に自分の身を犠牲にして、働くのだと思っていた」

「もう いくら、生活が苦しくたって…あんな店で働きませんよ…それに私はアイドルが好きでもあの店は嫌いです。だって、アイドルを汚しているから…」

「…それは言い過ぎじゃないのか」

「え？何がですか？」

「花陽が言ったアイドルを汚してるという言葉だ。アイドルが好きな花陽にとって、その店がやってる事は気にいらないのかもしれないそれでもあの店で働く者にも夢や目標を持っている人がいるんだ…それを理解しろとは言わないが、そういった人がいる事だけは忘れないでくれ」

花陽自身は貶めるつもり等は無かっただろうが、その言葉を聞き流す事は出来なかった。神室町に住み、毎日を必死で生きる人達を桐生は知っているから…

その言葉に花陽は顔を上げて、桐生を見つめると自分の発言を反省した。

「桐生さん ごめんなさい。確かに私の言葉は…そういう人達への冒涇ですね。少し、失念してました」

「いや、いいんだ。俺もきつく言い過ぎたな…改めて聞くが、花陽が行きたいアイドルの店は何を扱ってるんだ？」

「私が行きたいのは、アイドルグッズを扱う専門店です。以前、アイドルグッズの情報を掲載してる掲示板に神室町で幅広く、アイドルグッズを扱う店があると知ってやって来たんですけど、今からだと探す時間はないですね。」

「何？アイドルグッズ専門店？そういうえば、アイドルキャッチという名前の看板を劇場広場の通りで見たような…」

「本当ですか？その劇場広場は何処ですか？早く行きましょう。さあさあ、閉まってしまおう前に…」

「落ち着け・劇場広場は近いから大丈夫だ 案内するから上着を掴むの止めてくれないか？」

それを聞いて興奮した花陽は詰め寄り、上着を掴みながら矢継ぎ早に言葉を浴びせかける

豹変した花陽に気圧されながらも桐生は苦しそうに言葉を呟くと、我に返った花陽は顔を真っ赤にして手を放して誤魔化すようにはにかんだ。

二人は劇場通りに向かう為、再び 人で溢れる天下一通りを歩きながら桐生は花陽に話しかけた。

「そういや、花陽はどうしてアイドルが好きになったんだ？やっぱり、年頃の女の子はそういうのに憧れるものなのか？」

「そうですね。大勢の前で歌って、踊って皆を楽しませる姿を見て、アイドルが好きになったんですよ。それと、言ってますんですけど：私もアイドルをやってたんです。といつても、プロじゃなくてスクールアイドルですけどね」

桐生の質問に答えた花陽は、さらっと驚く事実を述べた。

「そいつは驚いたなあ。まさか、アイドルをやってたとは人は見かけによらないな」

「ふふ よく言われます。最初は、私も勇気が出せずに見てただけなんです。だけど、その時にスクールアイドルをやった人から：私もやってみないかと言われたのが切欠でスクールアイドルを初めたんです。今はメンバー3人が卒業して、解散してますけどね」

「そうか・それで、花陽を誘ってくれた人は友達なのか？」

「はい その人は高坂穂乃果ちゃんと言って、私の先輩です。いつも明るくて、太陽みたいな人なんですよ」

「太陽みたいな人か：きつと、温かい心を持った人なんだろうな。俺

も会ってみたいもんだな。それにしても、先輩をちゃん付けで呼んで平気なのか？」

「元々、スクールアイドルをやってる時に先輩後輩を意識しないように決めたんですが、本人はそのままでもいいと言っていましたからね。流石に学校では、先輩と呼んでますよ」

疑問に答えながら、優しい笑みを見せる花陽に桐生も釣られて笑みを浮かべた。

そんな会話を交わして歩いている内に二人は劇場広場へと辿り着いた。

そして、桐生と花陽は目を凝らしてアイドルグッズ専門店の看板を探し始める。

「この辺だったな。アイドルグッズ専門店の看板を見たのは：」
「あれじゃないですか？ゲームセンターの近くにあるやつです」

花陽が指で示す方向に目を向けると、アイドルグッズ専門店 アイドルキヤッチと書かれた看板があった。

「あれだな、俺が見た看板は：それにしても、よく見つけられたな。色んな看板の中から、一つだけを見つけるのは容易じゃないんだがなあ」

「そうなんですか？それよりも、早く行ってみましょう。善は急げですからね」

「おいおい 慌てなくても、店やグッズは逃げたりしないだろう：」
「何を言ってるんですか：桐生さんは甘いです。店には閉店時間があるし、アイドルグッズだって数に限りがあるんですよ。残り物に福があるなんてことわざは通用しないんです。だからこそ、自分が求めてるグッズを手に入れるには：誰よりも先に店へ入らないといけません。当たり前ですが、どの店にも常連がいますよね？店主も新規の客より、常連の為に新商品を確保して渡す事もあります。それ故：新商品を確実に手にする人も早い者からになるんです。いいですか？アイドルファンにとって、アイドルグッズを手に入れる事は戦争です。誰にも負ける訳には：いかないんです」

桐生のある発言に、豹変した花陽がマシンガンの如く言葉を浴びせ

かけるが：啞然として桐生の顔を見て、自分が熱くなりすぎていた事に気付き、最後は小さい声で呟くように言った。

最初こそ桐生も啞然としていたが、花陽のアイドルに対する想いの強さに感嘆する。自分が好きなものに熱い情熱を持っている花陽に桐生は好感を抱いていた。

「す、すみません 私、アイドルの事になると：熱くなってしまう癖があるんです。驚かせてしまいましたね」

「謝る事はない 好きな事にそこまで情熱を持つ者はそうはいないもんだ。だから、花陽がその事を気にする必要なんてないんだ」

「そう言ってくれれば、助かります。いつもは引かれてしまいますから：それじゃあ、行きましょう」

「ああ そうだな」

神室町を迷い、漸く：自分が探していた店に行ける花陽の気分は高揚していた。前を歩く花陽の後ろ姿を見て、桐生も顔を綻ばせる。そして、店が入っているビルの横にある階段を登り、意気揚々と向かう花陽に非情な現実が突き付けられる。その店の入り口には、本日休業日という張り紙が貼られていた。

「：本日休業日かあ やつと、辿り着いたのに」

「そう、落ち込むな。休みだったのは残念だったが、店の場所は知る事が出来たんだ。また、来ればいいじゃないか」

「確かにそうですね。桐生さん 今日ありがとうございます。道案内をしてもらったりと、色々とお世話になりました」

「気にするな 俺の方こそ、変な勘違いをしてみました。すまないな。それと、タクシー乗り場まで送るぜ。夜の神室町は物騒だからな」

「そうなんですか？それじゃあ、お言葉に甘えてお願いします」

近くのタクシー乗り場まで送り届けた桐生は、花陽にある事を聞いた。

「最後に一つ聞いていいか？花陽はスクールアイドルというのをやっていたんだよね？」

「はい そうですよ」

「そのアイドルの名前は、何て言うんだ？まさか、スクールアイドルと

いう…そのまんまの名前じゃないんだろ？」

「流石にそのまんまの名前じゃないですよ。私たちのユニット名はμ'sと言うんです。9人の歌の女神という意味があるんですよ」

「9人!?そんなにメンバーがいたのか…てつきり、花陽と穂乃果という子の二人だけでやってると思っていたからな」

「さらっと呟いた言葉に、桐生は驚いた様子を見せていた。それを見て、花陽はクスツと笑いをこぼしながら…説明を続ける。

「本音を言えば、今もスクールアイドルをやりたいと思ってるんです。ラブライブには参加しないで部活として、ライブをやりたいと考えています。だけど、その度にμ'sの事を思い出して、自分が作ろうとしてるユニットとμ'sを比べてしまうんです」

「俺は、アイドルの事を知らないから何も言えないが…別にいいんじゃないか？」

「え?何がですか?」

「μ'sと自分がやろうとしてるユニットを比べる事だ。花陽は抵抗を感じているかもしれない。だが、何事にも競争相手は必要だ。花陽がμ'sと作ろうとしているユニットを比べるという事はお前がμ'sを超えるアイドルにしたい。そういう想いがあるんだろう。それに目標が無いよりは、ある方がいい。だから自信を持っていいと思うぜ」

桐生の温かい言葉に、花陽は思わず泣きたくなった。あの日、自分がスクールアイドルになった事を思い出したから…そして、満面の笑顔で花陽は桐生に自分の素直な気持ちを言う。

「μ'sを超えるですか…考えた事もなかったです。そうか 比べるのは目標にしてるからだっただんだ。桐生さん 私…やって見ようと思います。もう一度、スクールアイドルを」

「踏ん切りは付いたようだな。俺も陰ながら応援してるぜ」

「はい ありがとうございます。それでは、これで失礼します」

「ああ またな スクールアイドル頑張れよ」

「桐生さんもお元気で」

タクシーへ乗り込む時に笑顔を見せた花陽の顔にもう迷いは無

かった。桐生もその笑顔に思わず、見惚れる。

桐生は去りゆくタクシーを見送りながら、心の中で花陽にエールを送った。

(どうやら、迷いは無くなった様だな。泣きそうな顔をした時は余計な事を言ったかと、不安だったが：花陽の背中を押す形になって、良かったぜ。これから先は：花陽次第だが、きつと μ, s を超えるよ
うなアイドルになるだろうな。あいつの魅力的な笑顔は大勢の人を惹きつけるだろうからな。それにしても、μ, s か：何処かで聞いたような気がするが、思い出せないな：まあ、いいか)

μ, s の名を何処かで聞いたような覚えがあり、桐生は頭を捻るが：一向に思い出せず、気のせいだと思おう事にした。そして、彼は夜の神室町の街中へと消えていく。

その姿を見ていた者がいる事を知らずに：

どうやら、彼の受難はまだまだ続く事になる。

サブストーリー003 父の願い 娘の想い

某日 午後 真島組の事務所で真島吾郎は椅子にもたれて苦しんでいた。目から涙をボロボロと流し、呼吸も荒く誰が見ても普通ではない事が分かる。苦しむ真島を組員達も心配そうに見つめていた。その中の一人が、意を決して前に出ると真島に言葉をかける。

「親父 大丈夫ですか？」

「だめやく わじはもうあがん もう ここまでかのう…：ごんな所で座って、死ぬとは…無念やあ どうぜやったら、戦いの中で死にだがつたでえ」

組員の言葉に真島は、いつもと違い弱音を漏らす。その姿は嶋野の狂犬と恐れられた男とは思えない程…：貫禄が微塵も感じられなかった。それを見た組員もこのままでは他の者に示しが付かないと、厳しい口調で真島を叱咤する。

「しっかりと下さい!! 花粉症で人は死ぬことはありませんよ。皆も見てるんですから、シャキツとしてください」

「ああゝ 何やどお お前は花粉症になつた事が無いから…：そんな事が言えるんや。この病気はめっちゃ辛いんやで」

「うっ そ、それは…：そうですが」

花粉症の苦しみは、本人にしか解らない。真島の言葉も最もである為、叱咤した組員も返す言葉が浮ばなかった。涙を流し、荒い息を吐きながら鼻水を啜る真島の顔に妙な迫力を感じたのも理由ではあるが…

このままでは、埒があかないと組員は自分がよく利用する病院を真島に紹介した。

「それだったら、西木野病院に足を運んだらどうです？あそこは院長自ら、診察をしてくれる良い病院ですよ。自分もよくお世話になってるんです」

「ほゝ 院長が診察するとは、珍しいのう それで、病院の場所は何処や？」

「秋葉原にある住宅街の近くです。大きい建物なのですぐ分かりますよ」

「また、秋葉原にいかなあかんのかあゝ 神室町の病院でもいいんやないか？」

組員の院長が診察をするという言葉に興味を抱いた真島が病院の場所を尋ねるが、その場所が秋葉原だと知ると：途端に興味が失せた真島はぶつきらぼうに言い放つ。

「そうは言いますけど、神室町の病院は以前、東城会が起こした騒動で緊急の患者以外は出禁を食らってますし：柄本医院に行っても、そんな事で来るんじゃないと追い返されるのがオチですよ」

「そういや、騒動で出禁にされとったな。柄本のおっさんだったら、確かに追い返されるやろうなあゝ はあ しゃーないから西木野病院に行つてくるわ。一人で行くから送迎はいらんで」

「解りました。お気を付けて！それにあの病院には美人の看護婦もいますから、親父も気に入りますよ。うぐう!？」

組員の説明を聞き、重い腰を上げて真島は西木野病院へ行く為に事務所をあとにする。

くだらない事をほざいた組員にしつかりと制裁を与えた事は言うまでもない：

1時間後 真島は組員から渡された地図を手にして、西木野病院の前にいた。組員の言っていた通り、大きな建物であり、住宅街が広がる中：その存在感で見る者を圧倒した。

「此処が西木野病院か。近くで見ると、すごいおうゝ こないな大きい病院やったら、人も仰山：来るやろうな」

そう ぼやいて真島は院内へと足を踏み入れると案の定、中は診察を待つ人達で混みあっていた。その様子に真島は顔を顰める。

「えらい人の数やなあ。こら 診察までかなり待たされそうや。ま

あ、自分が掛かるのは耳鼻科やから・早く終わるやろ」

「あの・耳鼻科の診察は、本日 やってないですよ」

一人言を呟いている真島にある少女が話しかける。突然の事に吃驚した真島が声の方向に振り向くと、赤い髪につり目の制服を着た少女が立っていた。

(いきなり、話し掛けるアホは誰や? 吃驚するやないか!?!?! な、何やねん、この別嬪さんは・制服を着てるから学生なんやろが、気品があるから大人っぽく見えるわ) それにあの目や、冷ややかに人を射抜く視線を送るあの目::気に入ったで)

(ヴェエエ!? な、何? この人::私の顔をジロジロと見て、変な人。それに蛇の眼帯なんて、気味が悪いわね。声を掛けたのは失敗だったわ。それに今日は病院の手伝いもあるから、さっさと話を終わらせて立ち去るのがいいわね。そうしましょう)

じつと見つめる真島に気味の悪さを覚えた少女は、心の中で結論を出すと自分の気持ちを口にする。

「::あの、私の顔に何か付いてますか? さっきから、じつと見てますが」

「す、すまんの 何でも無いんや そういえば、耳鼻科は休みやと、言っとったけど、ホンマか?」

「ええ 本当ですよ」

「参ったのうう 今日花粉症が酷くて、何とかしてもらいたかったんやが」

「それでしたら、内科に掛かってはどうですか? 今日の診察は院長が担当してますし、診察を受ければ、薬も処方されますからね。それじゃあ、私はこれで失礼します」

「教えてくれて、おおきにな・足止めして、すまんの」

頭を下げて少女が、立ち去ろうとした時::真島は少女を呼び止めて、名前を尋ねた。

「ちよっと待った。そうや ワシは真島吾郎という者や まだ、名前

を言つて無かつたの。嬢ちゃんの名前は何て言うんや?」

「名前ですか? 私は真姫と言います。今度こそ、良いですか? 急いでますので」

真島の呼び掛けに足を止めて答えると、すたすたと足早に立ち去る。自分の気持ちをはつきりと言う真姫に、真島は好感を抱いていた。やがて、その姿が見えなくなると真島は本来の目的を果たす為に受付に向かい、カウンターにいる事務員に話しかけた。

「もし 今日の内科に掛かりたいやが、まだ 受付はしてるやろか?」

「はい 午後の受付は開始したばかりですので、丁度良かったですね。それに今日は院長自ら、診察をする日なんですよ」

「ほく 身内やさつき会つたばかりの女の子も院長が診察すると聞いたが、ホンマやつたんやなあ」

「そうなんですよ。それがこの病院の自慢です。それでは、この診察届けに名前と症状を書いて、掛かりたい科に丸を付けたら、すぐ横のポストに投函して下さい。診察室は奥の方で3番の部屋の前でお待ち下さいね」

事務員に言われて、奥の方に行くところの数字が書かれたドアが目に見える。部屋の前にある椅子に腰を下ろすと、真島は辺りを見回す。内科の診察室の前には、思っていたよりも人はいなかった。

(どうやら、病院の待合室におつたのは午前の診察が終わつて：会計を待つとつた人達やつたんやなあ。これなら、診察もすぐに済んで、早く帰れそうやな)

辺りを見ていた真島は、心の中でそう結論付ける。そんな時、診察室から診察を終えたと思われる老婆と娘が出てきた。その二人に目をやると、二人の会話が耳に入る。

「そういえば、今日は院長さんは変わつたねえ。いつもと違って、妙な喋り方だつたからねえ」

「そうね。だけど、あんな院長さんも面白いと思うよ」

二人はそんな会話をしながら、立ち去つていった。二人の会話を聞いて、真島は少し混乱していた。

(今日は変わつてる? 妙な喋り方やと? 院長が診察するというだけ

でも驚きなんやが、これ以上に驚く事があるんかいな?…あかん 少し、混乱してきたわ)

「真島吾郎さん 3番の部屋にお入り下さい」

「お?もう呼ばれたか。早いろう。さて、院長がどんな人か楽しみやな」

混乱していた真島だったが、自分を呼ぶアナウンスを聞いて、診察室に向かう。うだうだ考えるよりも自身の目で確かめた方が早いと、真島は思ったからだ。

「こんにちは その椅子にお掛けになって下さい。今日はどうぞされました?」

診察室に入ると、眼鏡をかけた40代くらいの医者があり、真島に座るように促すと症状を尋ねる。言われるままに椅子へ座って、医者の後ろに視線をやると、先程会った少女：真姫が目映った。真姫の方も真島に気付いたのか、驚いた表情を浮かべている。

「おや?どうかしたんですか?」

「あ、ああ 後ろにいる女の子にさつき、今日は耳鼻科が休みだと親切に教えてもらったんや。この病院では、学生も雇つとるんか?」

「そうでしたか。いえ、彼女は私の娘ですよ。将来の為に時折、病院の手伝いをさせてるんです。それで今日はどうしました?」

驚く真島が医者に質問するが、医者は笑みを浮かべて真島の疑問にあっさり答えた。

そして改めて症状を尋ねる。

「そうやったんやな。今日は花粉症が酷くてのう。目からは涙がロボ口出るし、鼻水が止まらなくて困つとるんや」

「それは大変でしたね。それじゃあ、大人用の目薬と鼻水を抑える薬を出しときますね。ですが、内科では詳しい診断は出来ませんので後日、耳鼻科に掛かって下さいね。お大事に」

「ありがとうございます。ほな 失礼するで」

そう告げて、真島は診察室をあとにした。その足で病院の外にある喫煙所で一服しながら、診察室にいた真姫の事を思い返していた。

(まさか、真姫ちゃんが病院の手伝いをしていたとはなあ。それに

あの医者は自分の娘と言うとつたな：確か、今日は院長が診察する日やと、聞いたな…!!? という事は、真姫ちゃんも院長の娘やつたんか。成程のう。何処か気品を感じると思った理由が分かったでえ〜。そういうえば、将来の為に院長さんが言った時、少し：落ち込んだような顔しとつたな。あれはどういう事なんやろか?」

真島が真姫の事を考えていると、今度は会計の為に自分を呼ぶアノウンスが聞こえた。

「真島吾郎さん 会計窓口までお越し下さい」

「診察も早かったが、会計の呼び出しもえらい早いなあ。ほな 行かな」

口に啞えていた煙草を灰皿へ入れると、受付ロビーに向かう。

「真島様ですね。本日は初診の様ですが、保険証はお持ちでしょうか? そうでない場合は、診察料金が高くなります」

「保険証は持つとらんなあ。それだと、いくらになるんや?」

「そうですか。それでは、本日の料金は5千円となります」

「ほんなら、これで頼むわ」

真島は、そう言って財布から1万円を取り出すと事務員に手渡した。

「はい 1万円からお預かり致します。お釣りは5千円のお返しとなります。こちらは診察の領収書と処方箋となっております。それではお大事に」

会計を済ませた真島は、薬局で薬を受け取る為に訪れる。

ここでも人が少なく、椅子に座っていると数分後に自分の名が呼ばれた。

受付で薬代を支払うと処方された薬を手にして、自動ドアを抜けて外へ出て行く。

「真島さーん ちよつと、待ってえ〜」

今日の用事を済ませて帰路に就く真島が道を歩いていると、自分を呼ぶ声が聞こえてくる。

振り返ると遠くから走ってくる真姫の姿が見えた。

たったたつたと軽快な足音を立てて、自分の元までたどり着くと、はあはあと息が乱していた。

「どうやら、自分を探して走り回っていたようだ…」

「どうしたんや？そないに慌てて、ワシに何か用でもあるんか？」

「そ、そうよ。真島さんに聞いて欲しい話があるのよ」

「ワシに聞きたい事？一体なんやろか？」

「真島さんは高坂穂乃果という名前に聞き覚えはありますか？ある時、穂乃果達から貴方の事を聞いたんですが」

「おお あるでえ〜 確か、和菓子屋の娘さんで元気いっぱいの子やったな。それと真姫ちゃんは穂乃果ちゃんと友達なんか？」

真姫から穂乃果の事を尋ねられ、真島は先日の騒動を思い出した。

そして、真姫が穂乃果を知ってる事に驚き、今度は真島が質問する。

「…ええ 大事な友達で大切な仲間でした」

「でした？今は違うんか？」

「いえ、そういう意味じゃないんです。穂乃果とは今でも大事な友達ですが、そう言ったのは私が穂乃果達とスクールアイドルをやっていたから…」

「そうやったんか」

「はい そうなんです。実は…以前、元メンバーで同級生の子からまた一緒にスクールアイドルをやらないかと誘われたんです」

真姫は重い口を開くと、自分の悩みを語った。

それはある夜 花陽の電話から始まりを告げる。

「え？もう一度、スクールアイドルをやらないかって？」

「うん 私と凜ちゃんと真姫ちゃんの三人で、スクールアイドルをやりたいんだ。駄目かな？」

「そんな事を言われたって、いきなりすぎるわよ。それに今までの活動だって、両親に無理を言ってたのよ。2年生になったら、医者勉強に専念すると約束したから許して貰ってたのよ」

「そうなんだ… だけど、聞いて真姫ちゃん。スクールアイドルと言ったけど、ラブライブ！とかは参加しないし、あくまで部活の範囲内でやろうと思ってるんだ。だから、少し考えて見てくれないかな？」

私が無理を言ってるのは解ってるけど、お願い…」

「話は…解ったわ。だけど、考える時間を頂戴」

真姫はその一言を言うと、電話を切る。自室のベッドに腰をかけた、真姫はその晩…花陽から誘われた事で一睡も出来なかった。その話を聞いていた真島は、重い口を開くと真姫へ問いかける。

「話は分かった。それで真姫ちゃんは…どうしたいんや?」

「どうしたいって、それが解らないから貴方に相談を「ちやう」え?」
「確かに…真姫ちゃんは、悩みに悩んでいたんやろな。初対面のワシに相談するくらいやったやからなあゝ せやけど、その答えは真姫ちゃん自身で出さなあかんのや。真姫ちゃんの本心はどうなんや?」

答えが出せない真姫に真島は少厳しい口調で言葉を投げかける。その言葉を聞き…真姫は暫く俯いていたが、顔を上げると凜とした表情を浮かんでいた。そして自分の本心からの気持ちを大きな声で吐き出す。

「私は…まだ、音楽を辞めたくない。私の作った曲で皆を楽しませたい。そして、花陽達とスクールアイドルがやりたい」

「なんや。自分の中で答えは決まっていたんやないかあゝ まあ、勉強も大事やけど、やりたい事をやるんも学生の本分やで」

「確かに…やりたいからやる。私はそれを忘れていたのかもしれない。家に帰ったら、両親に自分の気持ちをぶつけてみるわ。今日はありがとうございました」

一礼してお礼を言い、去ろうとする真姫に真島は激励の言葉をかける。
「おう しっかりと青春を謳歌するんやで」

その言葉を聞き真姫は、真島へ振り返る。

そして満面の笑みを浮かべ、再び一礼をすると去っていった。

真姫の姿が見えなくなると、真島は口を開き、一言呟く。

「なあ、真姫の親父さん…そろそろ、出てきたらどうや? ずっと、聞いておったんやろ?」

「やっぱり、気付いていたんですね」

そう言って、道の角から真姫の父親が姿を見せた。

「まあ、職業柄：人の気配に敏感やからなあ。それより、真姫ちゃんの気持ち聞いてたんやろ？親父さんはどう思ってるんや？」

「私としては、真姫には医学の勉強をして、医者になる為の経験を積んで欲しい。だけど、あの子のあんな姿を見て、私はあの子のやりたい事を応援しようと思ってます。医学の勉強はいつでも出来ますが、貴方が真姫に言ったやりたい事をやるのも学生の本分という言葉も理解も出来ますから」

「そうやな。それに真姫ちゃんの音楽があれば、病気で心が弱ってる患者も救う医者になるやろうしなあ」

「心を救う医者ですか… 確かに真姫ならそれが出来そうですね」

真島の言葉に、真姫の父親も頷いた。

そして、ある疑問が頭に浮かんだ真姫の父親は、真島に詰め寄って尋ねる。

「気になっていたのですが…真島さんと真姫はどんな関係ですか？去り際には笑顔まで見せてましたね」

「ちよい、待ちや ワシは真姫ちゃんの相談を聞いただけやで。親父さんが考えてるような事は何もなくてええ、まあ、真姫ちゃんは別嬪やからなあ 今から唾を付けておくのもええな」

「な、何ですってええええっ!! 子供に手を出すなんて、貴方は最低ですな」

「ここから 人に向かって、最低なんて、そう簡単に言ったらあかんでええ、それに人聞きの悪い事を言うなや。ワシが誤解されるやんか」

「あ、すみません。少し、取り乱しましたね」

「別に気にしとらんから…別にええで それより、真姫ちゃんの気持ちも考えんといかんや。他人のワシが言う事やないけどな」

「そんな事はありません。貴方のおかげで真姫の本心を知る事が出来ましたからね。私も真姫ともう少し向き合って行きますよ。真島さん…それでは、私は仕事があるので失礼します」

真島に深く頭を下げ、静かな足取りで去って行った。

後ろ姿を真島は静かに見つめながら、今日：出会った二人の父娘の

事を考えていた。

(やれやれ 父娘揃って、面倒な二人やのうゝ せやけど、真姫ちゃん
の悩みも解決したし、親父さんも真姫ちゃんの気持ちを知れた事や
し、一件落着やな。はあ 花粉症の診察を受けに来ただけやのに…え
らい一日やったなあ。折角やから、穂むらで饅頭でも買うて行くかい
のう。疲れた時は甘いものが一番やな)

そして、真島は穂むらに向かって、住宅街をのんびりと歩いて行っ
た。

サブストーリー1004 街案内をお願いします！

ある日の午後 澄み渡る青空を見上げながら、桐生一馬は神室町を一人散策していた。

天気も快晴という事もあり、街は大勢の人で溢れている。

人ごみが流れる劇場広場を眺めて、桐生はポツリと言葉をもらした。

「今日の神室町はいつも以上に人が多いな。まあ、今日みたいな天気に出かけたくなるからなあ」

人で活気がある街を見れるのが嬉しいと思う反面 このままでは行きたい所に行けないと思った桐生は散歩を諦める事にした。けど、いい天気なのにホテルでダラダラと過ごすのは勿体無い。これから何をしようかと煙草を吸いながら考え始めた。

（うーむ いい天気だからと外に出てみたら、こんな事になるとはなあ。この人ごみを見る限りでは何処の店も混んでそうだし、参ったな：考えてもいい案が浮かんでこない。どうしたものやら：仕方ないから適当に歩いて時間を潰すとするか）

考えに没頭しているうちに手に持つ煙草も短くなっていった。そんな時 ふと、視線を前にやると看板を持った一人の男が目映った。男が持つ看板には「本日限り！アクセサリー大安売り」と大きな文字で書かれている。

しかし、自分には無縁の物だなと結論付けて吸殻を灰皿に入れた。桐生がその場を立ち去ろうとした時、女性の声が聞こえて足を止める。

「あの…すみません。少し、お時間宜しいですか？」

桐生は何だ？と周りを見渡すが、目に映るのは人ごみだけだった。おそらく、違う人にかけた声の間に自分がいたのだろう。そう思っ
て、桐生が歩き出すと先程の女性の声が聞こえてきた。

「あの～ お願いですから…私の話を聞いてくれませんか？」

今度は勘違いではないと桐生が声の主の方に振り返ると、そこにいたのは紫の髪を二つに結んだ女性が立っていた。そして、桐生が女性

に要件を尋ねる。

「…さつきも声をかけたようだが、俺に何か用か？」

「二度も足止めしてごめんなさい。貴方をお願いしたい事があるんです」

「その前にあんたの名前を聞かせてくれないか。流星に見ず知らずの人の頼みを聞く訳にはいかないからな」

「あつ、ご、ごめんなさい。自己紹介が遅れましたね。私は東條希といます」

「そうか。俺は桐生一馬だ。それで…俺にお願いとは何だ？」

お互いの自己紹介が終わり、桐生は希に要件を尋ねる。

「その前に…場所を変えませんか？此処で話すのも何ですから…」

ばつが悪そうな表情で希は場所を変える事を提案する。

周りは大勢の人で賑わっていて、ゆつくりと会話が出来る様な状況ではない。希の提案に桐生も頷いた。

「…そうだな。ここだと落ち着いて話も出来ないからな…近くにある喫茶店でいいか？」

「はい。大丈夫です」

「じゃあ、行くとするか。人が多いから逸れない様にしてくれよ」
「解りました」

行く場所も決まり、桐生は希を連れて中道通りにある喫茶アルプスへ向かい歩き始めた。時折、後ろを振り返って希が逸れていないかを確認しながらも足を進める。そんな希も逸れないように必死に桐生の後をついて行った。

(やれやれ…まさか、こんな事に巻き込まれるとは思って無かったぜ。それにしても、俺にお願いしたい事とは何だろうな？まあ、考えても解らないし、早いところ喫茶アルプスに行くか。そして、さつきと用を済ませてホテルに帰ろう)

(ふう〜 どうなるかと思っただけど、上手く行って良かったわ。以前、花陽ちゃんから聞いたけど…桐生さんはいい人やなく。時折、振り返ってウチが逸れてないか確認してくれるし、歩く速さもウチに合わせしてくれるからなあ。これなら、ウチのお願い事も何とかかなりそうや

な。引つ込み思案な花陽ちゃんが信頼するのも解る気がするよ)

それぞれの事を考えながら、歩いている内に二人は喫茶アルプスに到着した。店内に入ると、多少混んでいたが座れる席は空いており、二人は近くの席に腰を下ろす。桐生はメニューを手に取ると希に話しかけた。

「何か飲むか？」

「いえ、流石に悪いですよ」

「遠慮はしなくていいぜ。それと折角、喫茶店に来たんだ。何も頼まない方が悪いだろう？」

「確かにそうですね。それじゃあ、私はミルクティーとショートケーキにします。あっ 代金は自分で出しますよ」

「いや、代金も俺が出すから気にしなくていいぜ。店に誘ったのは俺だからな」

「でも…」

「いいんだ。それに年上の言う事は聞くもんだぜ」

「そうですね。それでは…ご馳走になります」

希は桐生の好意に素直に甘える事にした。そして、桐生が手を上げて店員を呼ぶと注文を伝える。数分後、店員が注文の品を運んでやって来た。二人は注文の品に一口飲んでから、本題に入る事にした。

「それで俺に頼み事というは何だ？」

「はい 私のお願いとというのはこの街を案内して欲しいんです」

「街を案内して欲しいか…それに答える前に一つ聞いていいか？どうして、俺なんだ？街の案内なら他にいくらでも方法があった筈だ」

「質問に質問を返して申し訳ないのですが、桐生さんは小泉花陽という子を知っていますか？」

希の話に出た名前を聞いて、桐生の脳裏にあの時の出来事が浮かんだ。気弱そうに見えて、自分の意思をしっかりと持っている子という印象を桐生は抱いている。そして、ある疑問が桐生の中に生まれた。

「ああ 知ってるぜ。以前、その子に街を案内した事があるからな。それと東條は何故花陽の事を知っているんだ？」

「実は…その時、私は二人の後をつけていたんです。偶然、神室町に買い物に来た日に花陽ちゃんを見かけて声をかけようとしたら、桐生さんが花陽ちゃんを連れて走り出したから…厄介な事に巻き込まれたんじゃないかと心配になったから…」

「そうだったのか…それは心配をかけてしまったな。すまない事をした」

希の話聞いて、桐生は頭を下げて謝った。その姿を見て、希は慌てて言葉を発する。

「頭を上げて下さい。あの時、何があったのかは花陽ちゃんから聞いてます。だから、謝らなくてもいいんです」

「そうか。そういえば、東條と花陽はどういった関係なんだ？姉妹にしては似てないようだが」

「私の事は希でいいですよ。桐生さんは年上ですし、苗字だと呼び辛いでしょからね。花陽ちゃんは私の2年下の後輩です。それと、一年前はスクールアイドルをしてた仲間なんですよ」

「そうか。それなら希と呼ばせてもらうぜ…今、スクールアイドルと言ったな？もしかして、そのグループはμ'sという名前じゃないのか？」

「!?…桐生さんも知ってたんですね。確かに私がやっていたスクールアイドルの名前はμ'sです」

「花陽が教えてくれたんだ。それより、少し話が逸れてしまったな。知りたい事は大体解った。それで希は何処に行きたいんだ？」

「そうでしたね。私が行きたい所はアクセサリーを扱ってる店に案内して欲しいんです。何処か良い店を知りませんか？」

アクセサリー屋に行きたいという希の言葉に桐生は思案する。

（アクセサリーかあ…俺はそういった物に疎いからなあ。試しに思い付いた所から行ってみるとするかな）

「解った。それなら、行くとするか」

「はい。お願いします」

「それじゃあ、俺は会計をしてくるから外で待っててくれ」

「解りました。今日はご馳走になります」

「気にするなと言ったろ。大人しく俺に甘えておけ」

そう言い残し、桐生は伝票を掴むとレジに向かった。

その発言を聞いた希が目潤ませ、赤面してる事に桐生は気付いていなかった。

そして、桐生は希がある店に案内した。そこは昭和通りにある“ル・マルシエ”というブランド物を専門に扱っている店であった。

「ル・マルシエ？ここがアクセサリー屋なんですか？」

希は店の看板を見つめて、桐生に尋ねる。

「いや、アクセサリー専門ではないが…この店ならそういった物を扱ってるからなあ。まあ、ブランド品ばかりだから値が張るけどな」

「そうなんです。確かにここならいい物が見つかりそう…桐生さん今、何て言いました？その…ブランド品がどうこうと…」

「ああ この店はブランド物のバックやアクセサリーを扱ってるんだ。だから、いい物が揃ってるぜ」

「私は唯の大学生なんですよ!!そんな高い物を買えるお金なんて持ってませんよ。他の店は無いんですか？」

平然と答える桐生に対して、希は思わずツツコミをいれた。希の言葉聞き、桐生は再び思案する。

(この店は駄目なのか…他にアクセサリーを扱ってる店となると、思い付くのは…そうだ!“えびすや”ならあるかもしれないな。よし、今度はそこに行ってみるか)

「そうか。考えてみれば、確かにブランド品は無理だよな。近くにえびすやという質屋があるんだが、そっちの方に行ってみるか？あそこは色んな物が置いてあるからな」

「質屋ですか…色んな物がありそうで面白そうですね」

「よし、それなら行くとするか」

次に行く店が決まり、桐生は希を質屋まで連れて行く事にした。その道中、桐生は希にある事を聞いた。

「そういえば、希がスクールアイドルをやろうと思ったのはどうしてなんだ？」

「…私がスクールアイドルをやろうと思ったのは…ある三人を見てからなんですよ。私が通っていた音ノ木坂学院は入学する生徒が少なく、廃校の危機に陥っていたんです。私と友達の絢瀬絵里という子と一緒に生徒会で廃校を阻止しようとしたけれど、いい案が浮かばなくて悩んでいた時…ウチ、私はスクールアイドルを結成して、廃校を阻止しようとする子達に会ったんですよ。私がスクールアイドルをやろうと思った切欠はそれです」

「そうだったのか。それで希はスクールアイドルになったのか」

「はい。とは言っても、私がメンバーに加わったのは最後ですけどね。友達がスクールアイドルに反抗心を持っていましたからね。結局、その子もメンバーに加わりましたけど…」

その当時を思い出しているのだろう。希は優しい笑みを浮かべる。それを見て、桐生は μs に対する興味が深くなっていくのを感じていた。そして、二人は次の目的地であるえびすやに辿り着く。

「ここがえびすやだ。気に入るものがあるといいな」

「そうですね。とりあえず、入りましょう」

「ああ そうだな」

店の扉をくぐると、狭い店内に置いてある様々な品物に希は目を奪われた。そして、奥のカウンターに立っている店主が客に気付くと、元気な声で挨拶をする。

「いらっしやいませ！おや？桐生さんじゃないですか？神室町にいらしていたんですね」

「ああ ちょっとした小旅行でな。暫く、神室町にいる事になったんだ」

「そうでしたか。それと…後ろのお嬢さんはどちらさんで？桐生さん

のお子さんかな？それとも嫁とか…」

店主の言葉を聞いて、希の顔が真っ赤に染まる。だが、それに気付いていない桐生は店主の言葉をやんわりと否定した。

「そんな関係じゃない…希とはつきつき会ったばかりだからな。ここに来たのは街の案内を頼まれただけだ」

「そうでしたか」

桐生の言葉を聞きながら、店主は希の方に目をやると、今度は何処か不満そうな表情を浮かべている。そんな希を店主は不憫に思っていた。

（頼りになるけど、こういう事に関しては頼りないお人だからなあ。このままだと、可哀想だね。よし、私がお膳縦して彼女の機嫌を治さないよ）

心の中で密かに決意した店主は希に話しかける。

「ところで今日は何をお探しで？うちは小さい店ですが、幅広い品ぞろえと質が自慢でしてな。もしかしたら、お嬢さんが欲しい物が見つかるかもしれませんよ」

「え？あ、ああ 私が探してる物ですね。今日はアクセサリーが欲しくて、それを扱ってる店を探していたんです。こちらにそういった物は置いてありますか？」

いきなり店主に話しかけられて、ムスツとしていた希は慌てて質問に答えた。

「アクセサリーですか…それなら丁度よかったです。一つだけ、在庫があるんですよ。今、お持ちしますね」

そう言うと店主は奥へ引っ込んでいった。二人のやり取りを黙って見ていた桐生が希に言葉をかける。

「どうやら、探してる物は見つかったようだな」

「はい 唯、どんなアクセサリーなのか気になる所です」

「この店で扱ってる物の質は確かだ。まあ、見るだけは見てみるしかないな」

二人の会話が終わった時、タイミングよく店主が品物を持って戻って来た。

「お待たせしました。これがうちにある最後の一つですよ」

店主がそう言って小さな箱の蓋を開ける。その中に入っていたのは、金色のネックレスだった。淡く輝くその品に希は完全に魅せられていた。数十秒程、経ってから希はおずおずと店主に尋ねる。

「あの、これなんですが、一体いくらなんですか？見た所、かなり高そうに見えるのですが…」

「値段ですか？ああ これは5000円で結構ですよ」

「5000円!?!…こんなに綺麗なのに…」

店主が言った値段に希は驚きを隠せなかった。素人目で見ても、高価な物にしか見えないからだ。傍で見ていた桐生も希と同じ気持ちだった。

「ああ 確かにこれは普通ならもつと値が張ります。だけど、この品はアウトレットですからね。よく見て下さい。チェーンの一部分が欠けてるでしょ？これだけで商品価値なしとあぶれたんですよ。それをうちが引き取って安く売ってるというわけです」

「そうだったんですね。決めました。これを買います」

店主の説明を聞いて、安い理由が分かった希は迷わず購入を決意する。

例え、一部が欠けてるとしても綺麗な品物である事は間違いないからだ。

希は財布から五千円札を取り出すと、店主に差し出した。

「お買い上げありがとうございます！それではお包み致しますので、少々お待ちください」

希から五千円を受け取ると、店主は丁寧にネックレスの包装を始めた。数分後、綺麗に包装されたネックレスを手にして希は嬉しそうな表情を浮かべる。その様子を店主と桐生は優しく見つめていた。

用事を済ませた二人は店をあとにして、タクシー乗り場にいた。そこで希は桐生に向けて、深々と頭を下げてお礼の言葉を述べた。

「桐生さん 今日はどうもありがとうございます。桐生さんの案内してくれたおかげで素晴らしい物も安く買えて良かったです」

「いや、俺はたいした事はしてない。まあ、希が気に入った物が見つかって良かったな」

「はい…そうだ。宜しければ、桐生さんの携帯のメールアドレスを教えてくれませんか？」

「俺のアドレスか。別にいいぜ」

ふと、思い付いた事を希は桐生に伝えた。それを聞いた桐生は快く了承すると、携帯を取り出して希に手渡す。

桐生から携帯を受け取った希は、慣れた様子で操作する。そして、登録が済んだ様で携帯を桐生に返した。

「これでよし。困った時はメールしていいですか？」

「ああ 俺で良ければいつでも力になるぜ」

「ええ その時はまたよろしくお願いしますね」

桐生の力強い言葉に希は満面の笑み見せると、最後に頭を下げてタクシーに乗り込みと神室町を去って行った。

それを見送ってるいると、ピピッと軽快な音が聞こえた。どうやら、自分の携帯からの様だ。桐生が携帯を見ると、希からのメールが届いていた。

「今日は本当にありがとう。桐生さんと会えたのはきつと、スピリチュアルのおかげやね」

メールの一文に桐生は頭を傾げるが気にしない事にした。

(スピリチュアルって、どういう事だ？まあ、いいか。何だかんだで暇を潰せたからな。感謝するのは俺も同じだぜ)

そして、快晴の空の下を街の中へ向かって桐生は歩いて行った。

サブストーリー005 園田海未の猛特訓!

ミレニアムタワー内にある真島組事務所。その一室で真島は最近、嵌っている映画鑑賞をしていた。壁に飾られている大型の液晶テレビには一人の人間がゾンビの大群に貪り食われるシーンが鮮明に映し出されている。普通なら目を背ける様なシーンであるが、真島は獯猛な笑みを浮かべて楽しげな様子で視聴している。

「いや、やっぱり 海外のゾンビ映画はええのう。日本のゾンビ映画は迫力がいまいちやからなあ」

そして映画もクライマックスへと突入し、最後は主人公たちがぎりぎりの所で脱出した直後にミサイルが飛来する。その後 街はゾンビと共に跡形もなく吹き飛んでしまう。主人公達は街が在った方を見つめてお決まりの台詞を吐くと、エンディングテーマが流れ始めた。その直後、真島は電源を切り液晶テレビは暗転する。ふと、時計を見ると時間は既に12時を回っている。

（そーいや、もう昼飯の時間やったか。道理で腹が減る訳やな。せやけど、あの映画を見た後で肉とかは食いたくないのう。そや、久しぶりに穂むらへ行ってみるか。穂乃果ちゃん達にも会えるかもしれないの）

善は急げと真島は身支度をして、事務所をあとにした。後に厄介事に巻き込まれるとは知らずに…

1時間程して、真島は秋葉原の住宅街に到着した。以前は迷っていた道も今では見慣れた道となっている。

（…最初、ここに来た時は似たような風景で戸惑ったが、今では迷わず行けるようになったな。よく見ると、一軒 一軒違う作りになっとなる。こういう変化に気づくとこの場所に馴染んで来たようで嬉しくなるで）

辺りを見回しながらのんびりと歩いていると、真島は遠くに海未の姿を見かける。奇遇だと思い、声をかけようとした真島だったが、不意に見えた海未は真剣な表情を浮かべている。その様子が気になっ

た真島は海未の後をつけることにした。

真島が付かず離れずの距離を保ちながら慎重に尾行していると、ある建物の前で海未が急に立ち止った。それを見て不味いと感じて、咄嗟に道の角に隠れるとそこから顔を出して様子を窺う。その姿は何処から見ても不審者その者である。

それから数分経った頃だろうか、海未は決意の表情を見せてその建物の中に入って行く。その一部始終を見ていた真島は角から姿を現して海未が入って行った建物を見上げると、目に映ったのは“和菓子屋 穂むら”の看板だった。

“どういうこっちゃ？”と真島は海未の行動が読めなかった。だが、考えたところで答えは出ないと当初の目的である和菓子を買う為に真島も店に入る事にした。

店に入ると、いつもと変わらず穂乃果の母親が店番をしていた。そして、真島に気付くと笑顔で話しかけてきた。

「いらっしやいませ！あらく？真島さんじゃないの。今日は何をお求めですか？」

「おう 美味しい和菓子を食いたくなってな。そうやなく 今回はほむまんを10個貫おうかの」

「それは丁度良かったですね！今、出来立てほやほやのほむまんがありますよ。それと今日は大福もお勧めです」

「ほくそうなんか。そんなら、大福も10個もらおか」

「毎度ありがとうございます。いつも、うちの和菓子を買ってくれて嬉しいですよ」

「当然やろく 頬っぺたが落ちる程、美味しいからなあ。それにお袋さんや親父さんの和菓子は日本一や。ワシはそう思うとるよ」

「あらく 嬉しい事を言ってくれるじゃないの。その言葉を聞くと、

この商売をやっていて良かったと思うわね」

真島の言葉に穂乃果の母親は心から喜びを見せる。真島も喜ぶ穂乃果の母親を見て、心が温かくなるのを感じていた。

しかし、その時 温かい雰囲気粉々に壊すような叫び声が店の中に響き渡った。

「あああああああああつ!!もう嫌ですく どうして、私だけなんですかああああ」

「な、何や!?!今の叫び声は?」

「ああゝ またか…海未ちゃんも負けず嫌いだからねえ」

突然の叫び声に驚いている真島の耳に穂乃果の母親が呟いた言葉が聞こえた。

(そういえば、海未ちゃんがこの店に入って行くのを見たな… それにお袋さんの様子だと、事情を知っているみたいやな。正直、気になるし聞いてみるとするか。もしかしたら、ワシも何か力になれるかもしれへん)

「なあ。お袋さん。一体、海未ちゃんは何をしとるんや?負けず嫌いとか言うとったけど、何か勝負でもしとるんか?」

「ああ 勝負と言ってもトランプのババ抜きよ。あの子、思ってる事が顔に出るからいつもそれで負けるの。それでいて、負けず嫌いな性格だからねえ」

「成程のう。確かに思ってる事が顔に出るんやったら、何度やっても勝つことは無理やろなあ」

「そうなのよね。私も諦めるように言ってるのだけれど、勝つまでやめないと聞かなくてね」

叫びが聞こえてから数分後 2階から落ち込んだ海未を慰めながら穂乃果とことりが降りてきた。

「ほ、ほら、いつまでも落ち込んでないで元気出してよ海未ちゃん」

「そうだよ 今日駄目だったけど、今度は勝てるから次は頑張ろうよ」

「放っておいて下さい。どうせ、次も私が負けるに決まってるんです。下手な慰めは無用です」

穂乃果とことりが必死に慰めるが、海未は完全にいじけてしまつて聞く耳を持たない。流石にこのままでは埒が明かないと真島が海未に話しかけた。

「なあ 海未ちゃん。穂乃果ちゃんのことりちゃんがこんなにも気に掛けてくれてるのに、その態度は無いんやないか？勝負に負けて悔しいのは解るけど、大人げないと思うで」

その言葉に海未は唇を噛み締めて睨みつけた。真島は海未の視線を真っ向から受け止める。そんな二人を穂乃果とことりは不安そうに見つめ、カウンターでは穂乃果の母親が静かに傍観の姿勢を貫いていた。

息が詰まるような状況の中、真島を睨みつけていた海未が目を逸らすと声を震わせ自分の気持ちを吐き出した。

「私だって、分かっているんです。自分が大人げない事は。だけど、悔しいんですよっつ！ いつも、自分だけが負けてばかりで… うっ 今度は負けない！ 次は：勝つんだと自分に言い聞かせて挑んでも勝てないんです」

「…：確かに負けっぱなしは悔しいからのう。試しにワシと海未ちゃんてババ抜き勝負してみんか？それによって、治すべき所を指摘出来るやろうしな」

「私と真島さんで勝負ですか？ …：だけど、私が負けるに決まっていますよ」

「別に勝ち負けは気にせんでええ。知りたいのは海未ちゃんの弱点なんやからな」

「そうですか。だけど、ババ抜きで弱点とか関係あるのでしょうか？」

「それはやってみれば分かるやろ。ほな、いっちょやるとしよか」

「解りました！それでは一度だけやりましょう」

負け越していた事もあり、ババ抜きをやる事に消極的な海未だった

が、真島の説得で一度だけやる事にした。

穂乃果の部屋に場所を変え、真島と海未は向かい合っていた。交互にカードを抜き、徐々に手札が減っていくにつれ、海未の表情が強張っていく。その様子から海未がババを持っているのは誰が見ても解る程であった。

（これは不味いです。今の手札は4枚のうち… スペードの4が1枚
ダイヤの10が1枚 ハートの5が1枚 そして、ババが1枚。何とか、このババを真島さんに渡さなくてはいけませんね）
（まさか、ここまで解りやすいとはいうく これじゃあ、何度やっても負ける筈やな。どうにかして、ワシにババを握らせようとしてるのが丸見えや）

真島が海未からダイヤの10を引き当て手札から捨てる。次に海未が真島からスペードの4を引き手札から捨てた。お互いの手札が2枚になり、勝負の決着が付くのも時間の問題だろう。ここにきて、海未の表情がさらに強張っていく。そんな海未の姿を見て、こみ上げる笑いを堪えて真島は海未の手札に手を伸ばす。

海未は自分の手札に近づいてくる真島の手を凝視していた。この手が掴むカードで勝敗が決まるのだから無理もないだろう。迫る手が右のカードに向かった時、海未は心の中で勝利を確信し、本人も気付かぬうちに微笑を浮かべる。

しかし、無情にも真島の手は左のカードを抜き取っていく。その現実には敗北を意味しており、海未は床に手をついて崩れ落ちる。

「うう やっぱり、負けてしまいました。途中まではいい調子だったのに…」

「まあ、元気だしや！とりあえず、海未ちゃんが治すべき所は分かったで」

その言葉を聞いた海未は勢いよく立ち上がると、真島に掴み掛かって尋ねた。

「それは本当ですか？私の治すべき所とは、何処なんですか？早く教えてください」

「ちよ、少し落ち着きや。これじゃあ、何も言えんで」

鬼気迫る表情の海未に気圧された真島が言葉を発すると、我に返った海未は掴んでいた手を放した。

「ご、ごめんなさい。つい、興奮してしまいました。それで私の治すべき所というのは、何ですか？」

「それはな、単刀直入に言うとうと海未ちゃんは心で思ってる事が表情に出とるんや。それで海未ちゃんの手が相手にばれて、最後は負けるっちゆうことや」

「そ、そんな… 私の考えが顔に出ていたから負けたというんですか？じゃあ、さっきの勝負も…」

「せや、顔に出とったで。ワシが右のカードに手を伸ばした時、海未ちゃんは笑みを浮かべてたからう。それは右がババやと言ってるようなもんやからな」

真島の指摘に海未は開いた口が塞がらなかった。まさか、自分にそんな欠点があるとは想像していなかったからである。だが、穂乃果とことりの表情を見て、真島の指摘が事実である事を示していた。

「…どうやら、穂乃果達の反応を見る限り、真島さんの言ってる事は本当みたいですわ。それじゃあ、私がババ抜きで勝つことなんて無理だったんですね」

「いや、そんな事はあらへんで。要は思ってる事を顔に出さなきゃいいだけやしなあ」

「そう言われましても、そんな簡単に出来れば苦労はしませんよ」「諦めるのは早いとちやうか？まだ、出来る事はあるはずやで」

「出来る事ですか？一体、何でしょうか？」

「そんなもん 決まっとるやろが、勝負に勝つ為にやる事は一つ：特訓や」

真島の提案に穂乃果とことりは驚きで何も言えずにいる中。海未は目を輝かせて真島の意見に賛同した。

「特訓ですか!! それは素晴らしい提案ですね。確かに弱点を克服するには、鍛錬あるのみです。その特訓ですが、いつやるんですか？今からですか？早く教えてください」

「だから落ち着きや。もう少しで夕方になるし、やるとしたら日曜やな。その日なら時間もあるからなあ。せやけど、問題なんは場所やな。広くて、誰の迷惑にならん様な所がこの近くにあればええんやが」

「場所ですか。確かに人の迷惑になつてはいけませんからね。そのような場所と言えば… あっ 一つだけあります。あそこなら、問題ないでしょう」

真島の言葉に思案する海未の脳裏にある場所が浮び、名案とばかりに手を叩く。その様子を見て、真島は海未が口にした場所について尋ねる。

「特訓に最適な場所があるんか？そこは何処なんや？」

「すぐ近くの神社ですよ。以前、真島さんと穂乃果の家族と一騒動があったじゃないですか」

「ああ 成程のう。確かにあの神社やったら、広いから周りに迷惑が掛からんな。それじゃあ、明日はそこに集合や。特訓の用意はワシがしといたるから、場所の確保を頼んだで」

「はい 場所の使用許可については、私が取っておきます」

真島と海未が特訓の段取りを決めていく中。部屋の隅で静観していた穂乃果とことりはぼつりと呟く。

「私たち 完全に置いてけぼりだね」

「うん それにしても、ババ抜きで勝つ為に特訓って、一体何をやるんだらう？ 私は想像出来ないや」

「それは私もだよ。だけど、真島さんの表情を見ると、かなりきつい特訓である事は間違いないと思う」

「確かに… 何か悪そうな顔してるね」

二人の視線の先には薄笑いを浮かべた真島がいた。その時、海未は真島に背を見せて何処かに電話を掛けていた

「はい 解りました。忙しい時にすみません。それでは失礼します」

電話の相手と話が終わり、海未は振り返ると通話の内容を真島に伝えた。

「場所の事ですが、とりあえず使用許可は貰えました。詳しい話は明日神社でするようです」

「さよか。集合の時間はいつ頃なんや？」

「向こうの都合もあるので、使うのは12時以降にして欲しいそうです。この条件を守ってくれるなら、自由にしても良いと仰ってました」

「12時以降かあ。まあ、向こうの都合もあるからしやあないな。使わせてくれるだけ、感謝せんと。そんなら、ワシは明日の準備があるから、これでお暇するで」

「解りました。それではまた明日」

海未から話を聞いた真島は、明日の準備をする為に穂むらをあとにする。部屋の中には、明日の特訓に想いを馳せて心を躍らせる海未と不安げにしている穂乃果とことりだけが残っていた。

翌日 真島は特訓に使用する道具を持って、待ち合わせ場所である神社へ向かっていた。今日の天気は快晴という事もあり、その道中に散歩をする人を何度も見かける。

「ええ天気やな。今日は特訓をするには持ってこいやのう」

青空に浮かぶ太陽を見つめて、一人呟く。

そうして、昨日と変わらぬ道を歩いていると神社へと続く階段の前に辿り着いた。

真島が階段を登ると、境内にいる4人の姿が目映る。そのうちの1人は巫女の服を着た女性であった。真島が視線を送ると、巫女服の女性は真島に対して警戒の色を見せている。

「おう。皆、揃つとるな。うん？そこにいる姉ちゃんは誰や？もしかして、この管理人なんか？」

「ウチは東條希。ここではバイトをしとるだけやで。それで貴方は穂乃果ちゃん達とどういった関係なん？」

「…ワシは真島吾郎というもんや。穂乃果ちゃん達は、ワシの友達や。信じられへんかもしれんけどな」

希は疑いの目で見ていたが、表情を和らげると手を差し出した。穂乃果達の様子を見る限り、真島の言っている事は本当なのだろうと信じたからだ。真島も手を伸ばして、軽い握手を交わす。

「先程は失礼しました。以前、似たような風貌の方と自分の知りあいにいざこざがあつたんよ。それで今回もそうなのではないかと、疑っていました」

「ワシと似たような風貌の奴なあゝ。そんで、その子は大丈夫やったんか？」

「はい。それは私の誤解でしたから。この場所を特訓で使いたいと海未ちゃんから聞いたとるよ。真島さんが持っている金属バッドと大量のボールは、その特訓に使うものなん？」

「おお そうや。この場所なら広いし、人気も少ないから周りにも迷惑にならんと思うてな」

「そうなん？まあ、自由に使つてもいいけど…あまり、騒がんようにな。一応、此処は神様を祭る神社やからね。それじゃあ、特訓頑張りや。ほなゝ」

そう言い残して希は仕事に戻っていった。希を見送った後、海未は真島に特訓の内容について質問する。

「それで真島さん。今日の特訓は何をするんです？」

「おう 今日の特訓で身に付けるのは、透明な水面の様な心と岩の様

に揺るがない度胸の二つや」

「その二つとババ抜きで表情が出ない様になるのは、どう関係あるんですか？」

真島が言っている事がいまいち理解出来ない海未は首を傾げる。

「解らんか？波紋がない水面の様に冷静を保ち、岩のような度胸があれば、手札が少なくなっても自分の思ってる事を表情に出さない様に出来るんやで」

「成程。それは素晴らしいです！ それなら、早速特訓を始めましょう」

「そうか。ほな、ボチボチ始めるで」

真島の説明に感銘を受けた海未が急かすように特訓開始を迫る。やる気に燃える海未を見て、真島は笑みを濃くして頷いた。

4人は開けた場所まで移動すると、真島は海未へ離れて真正面に立つよう指示を出す。その指示通りに位置に着くと、金属バッドを構え手にしたボールを勢いよく海未の方へ打ち飛ばした。唐突に飛んできたボールに恐怖を感じ、目を閉じてしゃがみ込んでしまう。そんな海未へ真島は厳しく言葉を掛ける。

「目を瞑ったらあかん。そんな様じゃ、いつまで経ってもババ抜きに勝てへんぞ。それでもええんか？」

「そ、そんな事を言ったって、さっきのボールはかなりの速度でしたよ。万が一顔に当たったら、どうするんですかああ」

「あほ ワシがそないなヘマをする訳ないやろ。それとも、ここで辞めるか？尻尾巻いた犬の様に逃げるんか？昨日の悔しさを忘れたんか？辞めるか続けるか、選ぶのは海未ちゃんやで」

真島の叱咤を受けて、海未の表情が変わる。そこには先程の恐怖は微塵も感じられなかった。雰囲気感化された穂乃果とことりも声に出して、海未を応援していた。

その様子を静かに見ていた真島が改めて海未に問いかける。

「…特訓続行でええな？」

「はい お願いします。もう、目を瞑って怖がったりなんかしませんから」

「よう言った。そんじや、どんどんいくで〜」

こうして、真島と海未の妙な特訓は数時間に渡り続けられた。最初こそ、怖がつっていた海未だったが、次第に笑みを浮かべて飛んでくるボールを見つめる事が出来るようになっていた。

日も暮れ始めてきた頃 この過酷な特訓は終わりを迎える。その後、一同は場所を穂乃果の部屋に変えて、海未は穂乃果にババ抜き勝負を申し出た。

「穂乃果 今日の特訓の成果を試す為に私とババ抜きをして下さい」

「うん 解ったよ。だけど、私も負けないからね」

海未の覚悟を感じて、穂乃果は勝負を受けた。その結果は…

海未の敗北だった。

「うう〜 どうして、どうして勝てないんですかあああ!? あんなに厳しい特訓をしたのに。まさか、また私の考えが表情に出っていたのでしょうか?」

「うーん 表情は出てなかったけど… ババのカードに手を伸ばした時に海未ちゃんってば、目を細めるから丸分かりなんだよね」

穂乃果の言葉を聞いて、海未はバタリと後ろに倒れた。心配した穂乃果とことりが駆け寄ると海未はショックの余り気絶していた。それを見て、真島も溜息を吐く。

（やれやれ 海未ちゃんが勝利を掴むのはいつになる事やら。この分じゃ、まだまだ先は長そうやの。まあ、乗りかかった船やし、最後まで付き合ったるか）

二人に介抱されている海未に視線をやりながら、真島は静かに決意を固めていた。

どうやら、海未の受難はさらに続きそうである。

サブストーリー1006 娘を想う親二人

神室町にあるホテルの一室で桐生一馬は電話をしていた。電話の相手は沖繩にいる遥である。そして、遥から言われた一言に驚きの言葉を失った。

無言になった桐生を心配した遥の自分を呼ぶ声で我に返り、慌てて言葉を返す。

「…なあ。遥 もう一度言ってくれないか？さつきは何かの冗談だよな？」

「もう、おじさんってば、ちゃんと聞いててよ。おじさんは暫く、沖繩に帰って来なくてもいいよ」

やはり、自分の聞き間違えではない。まさか、大切な家族であり、娘ともいえる者から帰って来るなど言われるなど思っていなかった。それ故 感じた衝撃は計り知れない。そして、桐生は声を震わせながら遥に事情を尋ねた。

「どうして…いきなり、そんな事を言うんだ？俺は遥を怒らせるような事をしたのか？もし、そうならばつきりと言ってくれ」

桐生はそう言いながら、自分が遥を怒らせる原因を思い返していた。だが、そんなものはいくら考えても思い浮かばない。

(何故、遥はあんな事を言ったんだ？もしかして、旅行へ行く前日に食べたプリンの事で怒ってるのか？いや、数年前ならまだしも、高校生になった遥がその程度で怒る筈はない。まさか、反抗期か？年頃の娘は父親を嫌うと言うし、それで俺が嫌になって帰って来るなど言ったのかもしれない。この日がとうとう来てしまったのか)

遙を怒らせた原因を考えていたが、途中から親ばか全開の思考になつている事に当然ながら、桐生は気付いていない。

「……ぶつ、あはははははは。おじさん、何か勘違いしてるでしょ？ 帰つて来なくていいと言つたのは以前、ヒマワリに代理で園長をしていた先生がアサガオに来てるからだよ。それで事情を説明したら、おじさんの代理をやってくれると言つてくれたんだ。私も手伝うし、詳しい事は電話でおじさんの指示を聞けば済むからって、おじさん話を聞いている？」

「ああ 聞いているぞ。だが、いくら何でも二人に任せつきりというのはなあ。先生に迷惑を掛ける事になるんじゃないか？」

「私もそう思つただけだね。考えてみたら私はアサガオに残るんだから、今のうちに孤児院の仕事を覚えた方がいいんじゃないかと先生に言われたの。それでやってみたくなつたんだ。やっぱり…駄目かな？」

遙の言葉を聞いて、桐生は優しい笑みを知らずに浮かべる。まだ子供だと思つていたが、いつの間にか大人になつていたようだ。その事が嬉しくもありまた寂しくもあつた。

「だけど、桐生は自分の道を進もうとする遙の背中を押す事にした。解つた。お前がやりたいようにやってみろ。だが、これだけは約束してくれ。決して、無茶はするなよ。それと何かあつたら、すぐ俺に連絡してくれ」

「うん。ありがとう。何かあつたら、必ず連絡するね。それじゃあ、おじさんも旅行を楽しんでね。折角、神室町に来たんだから」

「ああ 分かつた。思う存分堪能させてもらうぜ」

「うん また電話するね」

「じゃあな いつでも電話待ってるぜ」

その言葉を最後に電話が切れる。桐生は受話器を元の場所に戻し、ベッドに腰かけて一息吐いた。

桐生は窓の風景を見ながら、先程の会話を思い返す。

（一緒にいるから孤児院の仕事を覚えるか… 以前も似たような事があった。確か、遙がアイドルをする為に大阪へ行った時だったか。あの時と今は違うとはいえ、遙をあの場所に縛り付けて良いのだろうか？ 遙だって、やりたい事や夢もあるだろうし、出来る事なら何でもやらせてやりたい。風間のおやつさん、由美、俺はこんな時どうしたらいいんだろう？ 何を言ってもやれば良い？… 考えても答えは出るわけないか。街をぶらついて気分を変えた方がいいな）

考えれば考える程、気分が落ち込んでいくのを感じた桐生は気分転換をする為に神室町へと繰り出した。

ホテルから街にやって来た桐生だったが、当てもなくぶらついていたら、1時間程歩いていると、中道通りへ続く道の前で喫茶アルプスのチラシを配っている店員が目に入る。

桐生は腕時計で時間を確認すると時刻は12時を回っており、折角だから喫茶アルプスに向かう事にした。

中道通りを進み、喫茶アルプスが見えてきた時、ある女性がオープンテラスに座っていた。その女性は黒のシャツに白のスーツを着ており、見るからにやり手のキャリアウーマンといった感じである。桐生が女性の横を通り、店内に入ろうとした時、女性の眩きが耳に入ってきた。

「この遥ちゃんという子は可愛いわね。アイドルとして、これからという時に辞めてしまうなんて勿体ないわ。縁があれば、うちの学校に来て欲しいわね」

「!?… すまない。少し、話を聞かせてもらっていいだろうか？」
「え？ え、ええ 構いませんよ。立ち話も何ですから、相席でよければお掛け下さいな」

女性の眩きに聞き覚えのある名前が出て、桐生は女性に話しかけ

た。座っていた女性も最初は驚いた様子を見せたが、柔らかい微笑みを浮かべると目の前の席に座るように勧めた。

「ありがとう。俺は桐生と言う者だ。先程、遙という子をうちの学校に来て欲しいと言っていたが、あれはどういう事だろうか？」

「ご丁寧にも。私は南と言います。それと桐生さんの質問ですが、そのまんまの意味ですよ。私は音ノ木坂学院という女子校の理事長をしておりますね。それでうちの学校に来て欲しいと言ったんですよ。それにしても、女性の話を盗み聞きするなんて、いい趣味とは言えませんね」

「それは申し訳ない。つい、知った名前を聞いて気になってしまったな」

桐生の質問に答えると理事長はやんわりと注意する。それを聞いて、桐生は素直に謝った。

そして、今度は理事長が桐生の言葉に疑問を覚えて質問を投げ掛ける。

「そうだったんですか。ああ その前に何か注文をされてはどうでしょう。折角ですから、ご馳走するわよ」

「いや 会って間もない人にそこまでしてもらうわけにはいかない」

「あら 女性に恥を搔かせるんですか？桐生さんはひどい人ねえ」

理事長は悲しそうな顔をして、その言葉を吐く。その言葉を聞いた周りにいる人達は桐生に冷たい視線を向けた。詳しい事情を知らない者がこの状況だけを見れば、桐生が理事長を脅している様にしか見えないから無理もないだろう。

「お、おい 一体、何を言い出すんだ。それじゃあ、俺が悪者じゃないか」

「それなら、私の顔を立ててご馳走させていただきますいな」

「…解った。それじゃあ、一杯だけご馳走になるぜ」

理事長の強引さに桐生は折れて、席に座ると一杯のコーヒーを注文

した。数分後に運ばれてきたコーヒを一口飲むとある事を尋ねた。

「そういえば、南さんは音ノ木坂で理事長をしてると言っていたな。それなら、東條希という名前に聞き覚えはないか？」

「ええ 知っているわよ。うちの生徒でしたからね。それより、桐生さんは何処で彼女の名前を知ったのかしら？」

桐生の言葉を聞き、理事長は眉間に皺を寄せて険しい顔をする。卒業したとはいえ、自分の学校に通っていた大事な生徒の名前を知っている桐生に警戒心が生まれていた。もしや、よからぬ事を企んでいるのではないか？ありとあらゆる疑問が理事長の心の中に浮かんでくる。

「ああ 実はこの間、本人から街の案内を頼まれてな。この街は初めてで道が解らないから、自分が探してる店まで連れて行ってくれないかとな。名前はその時に聞いたんだ。それにスクールアイドルをやっていた事もな」

「そうだったの。桐生さんには、世話を掛けてしまいましたね。どうも ありがとうございます。私からも礼をいしますわ」

「いや いいんだ。俺自身も楽しかったからな。それと、遥を音ノ木坂に来て欲しいのはスクールアイドルの為でもあったのか？僅かな間だが、遥もアイドルをやっていたからな」

理事長は事情を知ると、表情を和らげ桐生に礼をした。それをやりわりと受け止めると、今度は桐生が理事長に疑問を投げ掛ける。

「…そうねえ、それもあるのだけど、私としては音ノ木坂に来て、もっと充実した学生生活を送って欲しいと思ったからなのよ。アイドルという職業をやっていると周りから妬まれたりするでしょう？」
「確かにそうだな。人は自分に無い物を持っている人に嫉妬するからな」

「ええ だから、学校での生活は本人にとって、苦痛と感じる事もあったでしょうね」

「成程な。それでアマチュアとはいえ、アイドルがいる音ノ木坂に来

て欲しいと思つた訳か」

桐生は理事長の話聞いて納得した。あの時、呟いた言葉もついでから出たのだろう。理事長は時計に目をやり時間を確認すると、桐生に向かつて言葉をかける。

「そろそろお暇しますね。代金は言った通り私が払っておきますわ」

「ああ こちらこそ。それと：今日の夜にまた会えないか？まだ、話したい事が：いや 何でも無い。今の言葉は忘れてくれ」

「あら そこまで言っておいて、何でも無いという事はないでしょう？夜には仕事が終わるから私としては構いませんよ。こちらでも聞きたい事がありますからね。ただし、変な事はしないという条件付きですよ」

「勿論だ。それでは、今日の夜 19時にミレニアムタワー前で待っていてくれ」

「解りました。19時にミレニアムタワー前ですね。それでは失礼します」

再び会う約束をして、二人は別れた。

数時間後 ミレニアムタワー前に桐生の姿があつた。約束の時間まで10分以上あるが、誘つた自分が遅れてはいけなと余裕を持って来ていた。備え付けのベンチに座って、今日会つた女性の事を考えていた。

(あの時、咄嗟に誘つてしまつたが来てくれるだろうか？考えようによつては口説いてる様に思つただろうし、その場を離れる為に口約束だけをしたのかもしれない。だけど、あの人は嘘を吐いてる様には見えなかつた。：まあ、時間になれば分かるな)

約束の時間が訪れ、仕事を終えたサラリーマンや店の宣伝をしているキャッチで溢れる道を見回しながら、桐生は理事長の姿を探していた。しかし、自分が待っている人物の姿は一向に来る気配はない。

「やっぱり、来るわけないか。考えてみたら、初対面の人間の誘いに乗るのはおかしいからな。所詮、口約束の約束なんて「私は守りますよ」え?」

自分の独り言に重ねるように発せられた言葉に驚き、桐生が振り向いた先には理事長の姿があった。

「遅れて申し訳ありません。少し、仕事に手間取ってしまいましたね。待たせたかしら?」

「いや、そんな事はない。こう言っただけは失礼だが、来てくれるとは思っていないかった」

「そう。さつきも言ったけど、私は口約束でも守るわよ。生徒にも約束を守るように言ってる私が守らないと示しが付かないでしょう?」

桐生の言葉に理事長はそう返した。教育に携わる者としての信念がその言葉に込められている。それを感じ取り、この女性に対して尊敬の感情を抱いた。

「ああ そうだな。それじゃあ、何処か落ち着ける場所に行くとしたら。ここで立ち話も何だからなあ」

「そうね。ところで何処に行くのかしら?」

「そうだな…:そういうえば、この近くの路地に俺がよく行くバーがあるんだ。その店に行くとしたら。それにそのマスターとは顔見知りだから、顔も利くからな」

「あら 素敵ね。それじゃあ、エスコートをお願いするわ」

「美人にそう言われては気が抜けないな。しっかりとエスコートさせてもらうぜ」

桐生の台詞に思わず、理事長は赤面する。だが、朴念仁と周りから言われる桐生は当然ながら、その事に気付いてはいなかった。

二人は人でごった返す路地を通り、桐生はいきつけの店であるバンナムに案内した。店の戸をくぐるといつも通り店内は酒を飲みに来た客で賑わっている。カウンターにいるマスターが桐生に気付き、明るい笑顔を向けて挨拶をしてきた。

「やあ これは桐生さん。ようこそ いらつしやいました。今日は美

味しいウイスキーが入荷したところですよ。おや？そちらの女性は誰です？桐生さんのお知り合いですか？」

「まあ そんな所だ。それより、今日はこの人とゆっくり話がしたい。奥の席は空いてるか？」

「ええ 丁度、二人用の席が空いていますよ。それと飲み物はテーブルまで運びますので注文を聞いて宜しいですか？」

マスターは気を使い、二人がゆっくりと話が出来るように計らってくれた。桐生はウイスキー 理事長は焼酎を注文した後、奥の席に向かつていった。

「いい雰囲気のお店ね。マスターも気が利く人だし、これからは私もこの店に足を運ぼうかしらね」

「気に入ってくれて、何よりだ。この店が繁盛してるのは、酒の質もあるがマスターの人柄に惹かれて来る人も多いからなあ。俺もその一人だ」

席に着き、店内を見渡し理事長は店の賛辞を口にする。桐生も自分が気に入っている店を褒められて、嬉しそうな表情を見せる。

「お客様のお気に召して、私としても嬉しい限りです。お待たせいたしました。こちらが注文のウイスキーと焼酎となります。それと今日は私の奢りとさせていただきます」

「おい マスター。気持ちは嬉しいが、いい酒をタダで飲むのは申し訳ない。代金はしっかりと払うぜ」

注文の品を運んできたマスターが穏やかな笑顔でそう呟いた。だが、桐生はマスターの好意をやんわりと断る。今日の昼に理事長にも奢られている為、流石に抵抗を感じていたからだ。

「いいんですよ。そちらの別嬪さんにこの店を褒めてもらったお礼です。それに桐生さんには、色々世話になりましたからね」

「桐生さん 折角ですから、マスターのご好意に甘えましょう。ここで押し問答をしてもキリがないと思うわ。そのかわり、次に来た時は少し高いお酒を頼んであげればいいでしょう」

「…そうだな。それじゃあ、今日はご馳走になるぜ。ありがたいなマスター」

二人の言葉に折れた桐生はマスターの好意を受ける事にした。その言葉を聞き、マスターは満面の笑みを見せて深く一礼すると、その場を去っていった。

テーブルに置かれたグラスを手に取り、一口飲むと桐生はおもむろに口を開いた。

「昼間、貴女は俺に聞きたい事があると言っていたな。それは一体何なんだ？」

「そうそう、聞きたい事は桐生さんと遥ちゃんの関係が知りたかったのよ。桐生さんの様子だと、遥ちゃんとは深い関係にあると思っただから」

「遥と俺の関係か：確かに深い関係と言えるな。だが、少し長い話になるけど、それでも構わないか？」

「ええ。ぜひ、聞かせて頂戴」

理事長は真剣な様子の桐生を見て、同じく真剣な顔で頷いた。張り詰める空気の中 桐生は静かに語り始める。

「詳しい経緯は省くが、あれは俺が久しぶりに神室町に来た時だったな。偶然、入ったバーで遥に出会って、それから一緒に行動する事になったんだ。その後、遥の母親が不幸に巻き込まれて亡くなってしまったって、俺が引き取って面倒を見ていたというわけだ」

「そう そんな事があったのね。だけど、大変じゃなかった？その子だって、貴方に懐くまで時間が掛かったでしょう？」

「いや、そうでもない。最初こそ、戸惑っていたが、すぐに打ち解けてくれたからな。それからは一緒に料理したり、時には遊園地に行ったりもしたなあ。普段は我儘一つ言わないが、その時は思う存分楽しんでいたよ。あの時の事は俺にとってもいい思い出だ」

「いい父親をしているのね。そういえば、貴方は今何をしてるの？」

桐生から語られた話は理事長が想像していたより、驚くべき内容であった。二人の間には重い空気が漂っている。そんな重い空気を振り払う為 理事長は話題を変えて話しかけた。

「今か？今は沖繩でアサガオという孤児院を運営している。現在は遥が知人のサポートを受けて、俺の代理をしているよ」

「あら？遙ちゃんはまだ高校生でしょう？いくら、知人の助けがあるとしても遙ちゃんに任せつきりというのはどうかと思うわよ」

桐生の話を聞いて理事長は耳を疑った。教育者の性なのか、桐生にかける言葉も自然と厳しいものになっていった。

理事長の言葉を正面から受け止めて、桐生は自分の気持ちを吐き出す。

「ああ 確かに貴女の言う通りだろう。俺もそう思っていたからな。だが、遙は自分の口でやってみないと…そう言ったんだ。俺と一緒にいるんだから仕事を覚える為だとも言っていた。俺としては他の子の様に…もつと、色んな所に遊びへ行ったりとか、友達と過ごしたりとか普通の生活を送って欲しいし、送らせてやりたい。だけど、あいつはそんな事には目を向けず、いつも俺の事を優先させてばかりだからな」

桐生の気持ちを知り、理事長はかける言葉が無かった。彼も自分の無力さを痛感している。それは同じ娘を持つ理事長も共感出来る部分があるからだ。

「…そう 桐生さんも色々悩みがあるのね。そうとは知らず、きつい言い方をして悪かったわ。ごめんなさい」

「いや いいんだ。そういうえば、貴女の学校にいるμ、sはどんな子達なんだ？以前、街で会った花陽と希がやっていたと言っていたが、他の子については知らないからな。良かったら、教えてくれないか？」

今度は桐生が暗くなった雰囲気を変える為 以前、道案内をした二人から聞いたμ、sの事を尋ねた。

「実は言うとなね。一年前 うちの音ノ木坂学院は少子化の問題で廃校寸前まで追いやられていたのよ。そんな時にある子達が学校を救おうと立ち上がったのが始まりよ。それがμ、sなの。メンバーはリーダーの高坂穂乃果 作詞を担当していた園田海未 皆の衣装を作っていた南ことり 作曲担当の西木野真姫 メンバーであり、アイドル研究部の部長をしていた矢澤にこ そして、振り付け担当の絢瀬

絵里と星空凜。桐生さんが知らない人はこの7人よね？」

理事長の説明で残りのメンバー達の事を桐生は知った。その中の一人が気になり、桐生は理事長に問いかける。

「ああ、これで9人の名前が分かった。そういえば、メンバーの中に聞き覚えがある苗字があったな。もしや、貴女の娘さんか？」

「正解。桐生さんの言う通り、南ことりは私の一人娘よ」

「そうか。貴女も娘さんがいたんだな。その子は今、スクールアイドルをやっているのか？衣装を担当しているみたいだからな」

「いいえ、今はやっていないわ。もう、高校三年で進路の問題がありませんからね」

「そうか。そういや、遥も今年で高校三年だな」

「あら、そうなのね。それだったら、孤児院の手伝いはいい機会じゃないの。遥ちゃんが高校三年だと、初めから言ってくれたらいいのに。桐生さんも人が悪いわね」

肝心な事を話さなかった桐生に向かって、理事長は若干膨れた様子でぼやく。何故、膨れているのか解らないまま、桐生は会話を続けた

「それは悪かった。俺の説明が足りてなかったな。それと貴方の娘さんはどんな進路を歩もうとしてるんだ？遥と同じ学年なら、もう決めている頃だろう？」

「そうね。娘のことりは服飾関連の仕事に就く夢を持っているわ。まあ、以前にそのチャンスがあったけど…ある事情でふいにしてしまつたのよ。だけど、今はそれを叶える為に一所懸命努力をしているわよ」

「そうか。夢を叶えるのは一筋縄ではいかないが、諦めなければ叶う筈だ」

「ええ、私もそう信じているわ。だって、自慢の私の娘ですもの」

明るい顔でそう言う理事長の言葉には、ことりへの深い愛情を込められている。それを桐生も感じ取っていた。

「お互い、娘の事で苦勞するなあ。それじゃあ、改めて乾杯といくか」
「そうね。それじゃあ、乾杯」

お互いのグラスを軽くぶつけ合うと、二人は楽しく酒を飲み交わした。

2時間後 二人は約束の場所であるミレニアムタワー前にいた。
「今日は楽しかったわ。桐生さんのおかげでいい店も見つかったし、感謝してますわ」

「こちらこそ、楽しかったぜ。良かったら、また酒を飲みながら話したいものだな」

「それもいいわね。それなら、私の携帯の番号とメールアドレスを教えてくださいよ。桐生さんの携帯を貸してもらっていいかしら？」

「ああ、いいぜ」

桐生は携帯を取り出すと、理事長に手渡した。携帯を受け取ると、手慣れた様子で自身の情報を桐生の携帯に入力していく。

「これで良しと。桐生さんの携帯に私の連絡先を追加しておいたわ。昼間は忙しいからメールなら平気だけど、電話は無理だから覚えておいて頂戴ね」

「分かった。それじゃあ、また会える日を楽しみにしてるぜ」

「それでは、これで失礼するわね。また今度会いましょうね」

理事長は頭を下げて、そう言うど雑踏の中へ消えていった。

桐生はその姿が見えなくなっても、理事長が去っていた方を静かに見つめていた。

(まさか、初対面の女性を酒の席に誘うとはなあ。俺も柄じゃない事をしたもんだ。それにしても、あの人が音ノ木坂の理事長とはな：世間は狭いな。さて、今日は俺もホテルに戻るとするか)

神室町では思わぬ出会いをもたらす事がある。それを桐生は改めて実感し、軽い足取りでホテルへと戻っていった。

サブストーリー1007 パーティに隠された秘密

のどかな住宅街にある一軒の家の前に真島の姿があった。

平凡な家が建ち並ぶ中でもその家が醸し出す存在感は見る者を圧倒する事だろう。表札には西木野と刻まれている。そう、真島が訪れた家は西木野真姫の家であった。

彼が何故、此処にいるのか。それは彼の元に届いた一通の招待状から始まった。

一昨日の午後 いつも通りに真島組事務所で書類の整理をしていた時、部屋をノックする音と共に組員の声が聞こえてきた。

「親父！今、宜しいでしょうか？親父宛てに郵便物が届いています」

「おう 入れや」

「失礼します。今日、届いた郵便物はこれです」

「そうか。ほなら、そのテーブルに置いておけや」

「解りました。それでは、失礼いたしやす」

真島の言った場所に郵便物を置くと、組員はそそくさと退室する。

書類整理をしている時の真島は普段よりピリピリしている為、要件は簡潔に伝えて素早く退室するのが、組員の間では暗黙の了解となっていた。

30分後 大量の書類整理を終わらせた真島は深い溜息を吐き、椅子に凭れかかる。

この時期になると、増える書類を憎らしそうに眺めていると…テーブルに置かれた郵便物に気付く。それを手に取り確認すると、封筒にはハロウィンパーティー開催のお知らせという文字が記されていた。

(そういえば、組の奴が置いていったのう。何々、ハロウィンパーティーの招待状？こないな下らんもんを送ってくる暇人は誰やねん？どうせ、お菓子メーカー辺りが金目当てに主催する催しやろ。せやけど、この手紙は手書きの様やな。企業やったら、こないな事せえへんから

な。どれ、気になるし中身を見てみるかの)

封筒に記されている名前に真島は驚きの表情を浮かべる。送り主は何と西木野真姫からであった。

そして、真島は手紙の内容を読み始めた。

「まさか、真姫ちゃんから招待状が届くとはのう。何々： 本日 西木野家でささやかなパーティを開催する事になりました。それで以前、お世話になった真島さんにも招待状を送った次第です。宜しければ、ぜひご参加下さい。詳しい日時 場所等は下記に記しておきます。こないな子から招待されたなら、行かないといかんの」

そう呟きながら、真島は日時を確認した。

(日時は10月31日 パーティ開始時刻は11時からか。場所は真姫ちゃんの家で行うんやな。それと注意事項もあるようや。ええと：参加者は仮装をして、お菓子を持参との事か。まあ、ハロウィンパーティやからなあゝ 今日には28日やから： アカン！パーティまで時間が無いやないか。何とか、31日までに準備をせんといかんな)

善は急げと神室町に繰り出そうとした真島だったが、追加の書類を持って組員が部屋に來た為、その日以降から街に出る事が出来なかった。ちなみに書類を持って來た組員に真島の制裁が行われたのはお約束である。

そんな経緯もあり、真島が神室街へ繰り出したのはパーティを翌日に控えた時の事である。仮装用の衣装をかう為にコスプレ専門店に來た真島は店の大きさに圧倒されていた。

「ごっつ…でかい店やのう。ワシはこないな事は聞いとらんで。さてはあのアホ、面倒だからと説明を省きおつたな。帰ったらお仕置き決定やな」

事前に調べさせていた組員から専門店の場所を聞いてはいたが、店の事を何一つ教えなかつた組員に真島は怒りを抱いた。勿論、組員は店の事も説明していたが、真島がその話を聞いて無いだけである。

「よし、此処で突っ立っても埒がアカンな！さっさと買って帰るとするかいのう」

自身の頬を両手で叩き気合を入れて、真島は店の中に入って行く。だが、店内にある様々な衣装が真島をさらに悩ませる事になるとは、この時は想像もしていなかった。

「大きい店だけあって、品数も豊富やなあ。まさか、海外のヒーローの衣装まであるとは驚きや。しかし、店に来たんはいいが…どの衣装にするか迷うな」

ハロウィン用の衣装がある場所で真島は悩んでいた。自分の候補として衣装はあったが、どちらにするか迷って決められないでいた。候補としてある衣装の一つがホットケーマスクに黒のコートというホラーでお馴染みの衣装であり、もう一つは襟が立った黒のマントとタキシードがセットのドラキュラを模した衣装であった。

「うーん どっちもワシ好みの衣装で迷うのうー そうや！いつそ、両方とも買えばええんや。そうすれば、どっちにするかで迷う必要あらへんしなあ。いざとなったら、組の奴にこれを着せて宴会で芸をやらせるのもええな。よし、買う物をは決まったな。ほな、会計を済ませて帰るとするか」

散々、悩んだ真島だったが思い切って二つの衣装を手にとるとレジに向かって歩いて行く。

「いらっしやいませ！お客様 こちらの衣装ですが、これはハロウィンの期間限定商品となっておりますので、会員割引が出来ませんが宜しいでしょうか？」

「ああ 構わんで。それと会員割引って、何や？普段はそれが出来るんか？」

「ええ 本来の商品ではお客様の懐の負担を少しでも減らすべく、当店ですういうサービスを行っております。ただ、お客様がお求めの衣

装は特注品という事もありまして、割引の対象外とさせて頂いており
ます」

「ほう これは特注品なんか。そんでいくらになるんや?」

「はい 二点で10万円となります」

「10万!?嘘やろ…いくら、出来が良いというても、そない高い筈あら
へんやろ。何も知らんと思うて、足元を見てんのとちやうやろうな
?」

衣装の値段を聞いた真島は眉間に皺を寄せて、睨み付けながら店員
を問いたです。だが、店員もこういった客の対応に慣れている様で表
情を変えず、丁寧な口調で説明をした。

「いいえ そのような事は当店では、一切しません。こういった高額
の商品を仕入れたのは、コスプレという趣味に力を入れてる方達の要
望でもあるんです。当初はお断りをしていたのですが、コスプレに熱
い情熱を持つてる姿を見ている内にそういった人達が求める物を提
供したいと思うようになりましてね。それでツテを頼って、海外の大
手メーカーと契約して海外のヒーローや期間限定イベントで使用さ
れる衣装を扱うようになったわけです」

「ほう そういう理由からやったんか。せやけど、10万の品を買う
人はおるんか?」

「そう思うでしょう?ですが、高額でも購入されるお客様は沢山いる
んですよ。最近では、スクールアイドルというものが流行ってまして
ね。そういった方達も衣装を求めて来られるんですよ。それでお客
様 こちらの衣装はどうなさいます?今手持ちが無くても、お客様が
お望みならこの2点の衣装は取り置きとしておきますよ」

真島の様子から提示された額の手持ちが無いのではと思つた店員
は、お金が工面出来るまで取り置きすると提案を投げ掛けてきた。

「いや、ええよ。値段には驚いたが、手持ちはあるからのう。ええと、

ひい、ふう、みいと…ほら、これで頼むわ」

客への気遣いを忘れない店員に内心感心しながら、真島は店員の提案をやりわりと断った。そして、懐から出した財布から10万円を取り出すと店員に手渡す。

「お買い上げありがとうございます！10万円 丁度のお預かりいたします。それでは、この衣装を包装しますので少々お待ちください。終わりましたら、店内放送でお呼びしますので宜しかったら店内を見て回って、時間を潰して下さい」

そう言って真島に3と書かれた番号札を渡すと店員は衣装を包装する為、奥へと引つ込んでいく。その間、真島は店員に言われた通りに店内を見て回ることにした。

「それにしても、ホンマに色んな衣装があるんやな。まさか、海外のキャラの衣装まであるとは。この店の拘りは凄いわ」

真島は陳列されている衣装を見ながら、感嘆の声を上げる。その時、『3番の番号札をお持ちのお客様。商品の放送が完了しましたので、レジまでお越し下さい』と店内放送が聞こえて、真島はレジへと向かった。レジへやって来た真島の姿を確認した店員は丁寧なお辞儀をして、綺麗に包装された商品を真島に差し出した。

「お客様！ 大変お待たせいたしました」

「おおきに。機会があつたら、また来るで」

「はい。またのご来店をお待ちしています」

商品を受け取った真島は穏やかな笑みを浮かべて店員に言葉をかける。店員も柔らかい笑顔で真島に言葉を返した。そして、真島は衣装が入った袋を手にして店をあとにした。

真島は翌日のパーティの事を考えながら歩いていた。そして角を曲がった瞬間、道の先から勢いよく走ってきたボブカットの少女と衝突してしまう。かなりの衝撃だったのか、ぶつかった少女は尻もちを

つく。

「にゃ!?!」

「うお!?!」

「あ、大丈夫?」

それを見て、遠くからその少女の友達と思われるおっとり系の少女が心配そうに駆け寄って来る。

ぼーっとしていた自分の不注意もあり、また相手を転ばせてしまった事に真島も心配して声をかけた。

「すまん、嬢ちゃん。ワシ、ぼーっとして上ばかり見とったわ。何処か、怪我とかしてないか?」

「何処も怪我はしてないから、大丈夫だよ。私こそ、周りの事を考えずに走っていたからぶつかっちゃったね。ごめんなさい」

「いや、気にせんでええ。連れの嬢ちゃんも悪かったのう」

真島は謝罪の言葉を言っ手て手を差し伸べる。その少女も真島の手を取り立ち上がるとシユンとした顔で素直に謝った。

そして駆け寄って来た少女にも詫びの言葉をかける。

「いえ、そちらも怪我とは無いですか?」

「ああ ワシは平気やで」

「それならよかったです」

真島の言葉を笑顔で受け止めた少女は、逆に真島を心配するような言葉を返す。ほんわかした様子の少女に真島も自然と笑顔を浮かべていた。

「そういや、そこのお嬢ちゃんはどないしたんや?あないに勢いよく走るくらいやし、大事な用があつたんとちゃうか?」

「ううん 別にそういう訳じゃないよ。今日はいいい天気だし、明日の事を考えたら嬉しくなって、つい…」

「それで走り出してしまった訳か…見た目通り、お転婆な嬢ちゃんやな。そういや、まだ名前を言ってなかったのう。ワシは真島吾郎や、

見た目は怖いが優しいおじさんやで」

少女との会話をしてる最中、まだ名前を言っていない事に気付いた真島は自身の名前を二人の少女に教えた。

そして、少女達も真島へ自己紹介をする。

「あ、私は小泉花陽と言います」

「私は星空凜です」

「凜ちゃんに花陽ちゃんやな。二人共、今日は神室町に何しに来たんや?」

お互いの自己紹介も終わり、真島は気になって凜と花陽に街へ来た理由を尋ねた。

「私達、明日のパーティで着る衣装を買いに来たんです。この街に品揃えのいい店があると、ことりちゃんから教えてもらったんですけど…見つからなくて」

「そうだにや。ことりちゃんの話だと、海外の衣装もあると聞いたよ。真島さんは知ってますか」

「ああ、それならこの路地を真つ直ぐ進んだ先にあるで」

「店はすぐ近くなんですね。真島さん 教えてくれて、どうもありがとうございます」

「場所が分かって良かったよ。それじゃあ、早く行こうよ。かよちん」

「そうだね。それでは私たちはこれで失礼します」

そう言っつて凜と花陽は立ち去ろうとするが…花陽の言葉に引っ掛かりを覚えた真島は二人を呼び止める。

真島の言葉に二人は足を止めると振り返って要件を尋ねた。

「ちよい待ち。一つだけ、聞きたい事があるんやけど…ええかな? 知らない時間はとらせへんから」

「さつきも言っただけど、急いでる訳じゃないから別に大丈夫だよ」

「うん。それで聞きたい事って、何ですか?」

「さつき、花陽ちゃんはことりちゃんの名前を出しとったが…もしかして、南ことりと言うんやないか？」

真島が口にした名前を聞いた二人は驚きの表情を見せる。その様子から真島と花陽が知っていることりは同一人物だと確信した。また、花陽の名前にある事も気付いていたが質問は一つと言った手前、その事を口にはしなかった。

「ええ!? 真島さん、ことりちゃんの事を知っているんですか？」

「凜も驚いたにや。いつ、何処で知り合ったの？」

「二人共、少し落ち着きや。その前に買い物を買ったらどうや？ ワシは近くの公園で待つとるから、詳しい事はそこで話したるわ。公園の場所を二人の携帯に送るから出してくれんか」

ことりの本名を知っている真島に興奮した二人が詰め寄って質問する。だが、真島は花陽達に用事を済ませる様に言い聞かせ、詳しい話は付近の公園でする事を伝えると二人は承諾した。二人の携帯に公園までの地図を転送すると真島は二人と別れた。

件の公園で待つ事 30分程が経った時、紙袋を手にして息をきらせながら二人が公園にやってきた。そんな二人を真島はベンチに座らせ、二人の呼吸が落ち着いた頃にことりと出会った経緯を二人に教えた。

「へえ〜 真島さんはことりちゃんだけじゃなくて、穂乃果ちゃんと海未ちゃんにも会ってたんだね。そっちの方も凜は驚きだよ」

「それはワシも同じやで。まさか、ことりちゃんの知りあいにこないな形で会うとは思っておらんかったしのう。それと今日、買った衣装はスクールアイドルの活動で使用するんやろ」

「え? どうして…その事を知ってるんですか? 私、真島さんに言っていないのに…」

「もしかして、凜とかよちんの尾行をしてたんじゃないの?」

まるで自分達の行動を見ていたかの様な真島の発言に花陽と凜は警戒心を抱いた。そんな二人を見て、真島の中にあつたもう一つの疑問も解消した。だが、それを説明する為には二人の警戒心を解かなく

てはいけない。真島は二人に向かって静かに口を開いた。

「二人がスクールアイドルをやってる事を知ってるのは、ある子から聞いたからや。別に二人の後をつけたりはしとらんで」

真島は二人の目をしっかりと見つめてそう言葉を述べる。花陽と凜も真島が嘘を言っているわけではない事を悟り、表情を和らげると言葉を返す。

「そうだったんですね。真島さんが言ったある子とは誰なんです？もしかして、真島さんの子供とかですか？」

「凜もそれが気になるよ」

「お生憎様やが、ワシは独身や。せやから、子供はおらへん。ワシにその事を教えてくれた子は西木野真姫という子や」

「ええええ!!真島さん 穂乃果ちゃん達だけじゃなくて、真姫ちゃんの事も知ってるの?」

「ああ。以前、真姫ちゃんから相談を受けたんや。その時、花陽ちゃんのを言っとったからな」

「そつか。真姫ちゃんが相談した人って、真島さんの事だったんですね。その後、真姫ちゃんからスクールアイドルと一緒にやると返事が来たのは、真島さんが真姫ちゃんの背中を押してくれたからだったんだ」

「凜もそれを聞いた時はとても嬉しかったにや。真姫ちゃんを悩みから解放してくれてどうもありがとう。真島さんは凄い人だね」

「別にお礼を言われる事じゃあらへん。それにワシは話を聞いただけや。ホンマに凄いのは、自分で決断した真姫ちゃん自身やで」

花陽と凜は真姫の背中を押してくれた真島へお礼の言葉を言った。お礼を言われる程の事はしてないと言葉を返す真島に二人は柔らかな微笑みを見せて、さらに言葉を続ける。

「そうだね。でも、真島さんがいなかったら今の私達はいなかったよ。さっきのはそのお礼だよ」

「うん。私も凜ちゃんと同じ気持ちだよ。私たちの大切な友達を救ってくれたのは、まぎれもなく真島さんの後押しがあったからだよ」

「さよか。そこまで言われると少し照れるのう。そや、真姫ちゃんの

話で思い出したわ。ワシは明日、真姫ちゃんからハロウィンパーティーに招待されてるねん」

それを聞き、花陽と凜はクスクスと笑いを溢す。その事に真島は怪訝な顔を見ると、二人に問いかけた。

「あ、ごめんなさい。実は私と凜ちゃんもそのパーティーに招待されてるんですよ」

「真姫ちゃんの話では、ゲストも呼ぶと言っててね。当日まで秘密と教えてくれなかったんだ。だけど、そのゲストに会うとは思って無かったんだよ。そうしたら、笑いが抑えきれなくて…ごめんなさい」

「そういう事やったんか。せやけど、謝る必要はあらへん。まあ、この事は真姫ちゃんに内緒にしといた方がええやろうなあ。二人も知らなかった事にしといてや」

「そうだね。真姫ちゃんも私達を驚かせようとしてるみたいだし…」

「うん。それに真姫ちゃんがへそを曲げると、少し面倒だからね」

自分が招待されたパーティーの裏に隠された真相を知り、その事を真姫には内緒にするように真島が言うと、二人も真姫の為に領いて真島の頼みを受け入れた。その後 明日のパーティーでまた会おうと約束して、真島は二人と別れた。

翌日 ハロウィンパーティーの為にドラキュラの仮装をした真島が西木野家のドアベルを鳴らす。

その数十秒後 ドタドタと足音共にドアが開くと魔女の仮装をした真姫が姿を見せる。お決まりの文句を真島に向かって投げ掛けた。

「真島さん いらっしやい。トリックオアトリート」

「おう 招待ありがとさん。お菓子は此処や、好きなものを持っていき」

真島からお菓子を貰った真姫は、明るい笑顔を浮かべた。そんな真姫を真島は優しい目で見つめている。

そして真姫に促されて真島は家の中に入っていった。

ちなみに真島が口を滑らせて花陽達と会っていた事を言っただけで、三人揃って真姫のご機嫌取りをする事になる。

サブストーリー008 強さに必要なもの

季節も冬に近づいて肌寒い日が増えてきた頃、桐生は冬着を買う為に神室町の服屋を目指していた。

普段は人で溢れる神室町も寒い所為か、往來を歩く人の数が少ない様に桐生は感じていた。

見る人が見れば十分人が多いと感じるのだが、桐生がそう感じるのはすっかり神室町に馴染んでいるからだと本人は気づいていない。

時折、吹く寒風に身を震わせて桐生はポツリと不満を溢す。

「…はあ、まったく。最近はずいぶん寒い日が多くて嫌になるぜ。沖縄にいた時は冬でもあまり寒くはないが東京だと酷いものだな。おまけに周りがビルばかりだから、陽の光が遮られるから尚更だな」

桐生は高くそびえ立つビルを恨めしげに睨み付けた時、桐生の目にある光景が映った。それは屋上から吊り下げられた籠に乗り、ビルの窓を吹く清掃員の姿だった。高い場所では地上と比べ物にならない程の強風が吹いている。当然、寒さも地上より厳しく肌を突き刺さる。

それだけではなく。風で揺れる籠での作業は清掃員に恐怖を植え付ける。だが、それでも不満を漏らさず勇気を振り絞ってテキパキと作業をする姿が眩しく、些細な事で不満を感じる自分が小さく見えた。

(あんな所で寒く怖い思いをしても、一所懸命頑張っている人もいるんだな。それに比べて俺は小さな事で不満を漏らすとは情けない。知らない内に少し、気が抜けていたようだな。俺もシャキツとしないとな)

桐生は自らの頬をパンと叩き、気合を入れると目的地へ向かい力強く歩き出した。

劇場広場を歩いていると、桐生の目にある女の子と男の子の姿が映

る。少女が男の子の手を引き歩く姿は誰が見ても仲睦まじい姉弟と感ずるだろう。桐生もその姉弟を微笑ましそうに見つめていた。

そんな二人を眺めている桐生はある過去を思い出し出していた。

それはまだ自分が幼く孤児院のヒマワリで過ごしてた時の事だった。当時、同じく孤児院で世話になっていた錦と由美と自分の三人で学校の校庭で遊んでいた。親がいないという境遇以外に歳も近かった事もあり、よくその三人で遊ぶ事が多かった。他の子の様に欲しいものを買ったりしてもらえる事は無かったが、それでも毎日が楽しかった事を覚えている。

だが、ある日 由美が泣きながらヒマワリに帰って来た。普段は明るく笑顔を絶やさない由美が泣く姿を見せるのはタダ事ではない。二人が事情を聞くと、最初は口を噤んでいたが桐生と錦に隠し事は出来ないと言ふ由美は口を開いて訳を話し始めた。

「実は…今日、学校で飼育委員の仕事をしていたら上級生に絡まれたの」

「上級生の奴らに？ 一体、何をされたんだ。まさか、そいつにぶたれたのか？」

由美の言葉に出てきた上級生が由美に手を上げたのかと、桐生が心配して尋ねるが由美は首を横に振る。それを見て、ホッと安堵したのもつかの間…その由美は肩を震わせてボロボロと大粒の涙を流していた。

「ど、どうした？ まさか、俺の言葉で嫌な事を思い出させたのか？」

「おい 桐生！ 折角、泣き止んだのにまた泣かせてどうするんだよ。まったく、そういう所に気が回らないのがお前の悪いところだぞ」

「何だよ 錦。そんな言い方は無いだろ？ 別に俺だって、泣かせるつもりは無かったんだぞ。第一、お前だって」

「違うの!! ヒツ…私が泣いたのは、一馬の所為じゃないの。今日あいつに言われた事を思い出したら、ヒツク…とても悔しくって」

まさか、自分の言葉で嫌な事を思い出させてしまったのかと慌てた桐生が言葉をかける。そんな桐生を責める様な口調で言葉をぶつける錦に流石の桐生も堪らず言い返そうとした時、由美が大声で二人を止めると震えた声で自分が泣き出した理由を話した。

それを聞いた桐生と錦は泣きじやくる由美に優しく問いかける。

「その上級生に何を言われたのか、俺たちにも教えてくれないか?」
「そうだな。由美がここまで泣く程だから、相当嫌な事を言われたんだろう? だけど、嫌な事でも話せばスッキリするだろうしな」

二人の優しい言葉に慰められ、由美は意を決してその時の事を二人に話した。

「あの時 飼育員の仕事の小屋掃除をしてたら、上級生がやって来て…親無しって私に言ったの」

「そんな事を言ったのか。酷い奴だな」

「本当だぜ。それで由美が泣いて帰って来たのか」

「ううん。それだけじゃないの。その言葉に腹が立ったけど、私は無視をしていたら…今度は一馬と彰の事を馬鹿にするような事を言い出したの。あいつらもお前と同じ、惨めな親無しだって…自分の事だけだったら、まだ我慢出来る。だけど、二人の事を散々言われているのに何も言い返せない自分がとても悔しかった」

「そうだったのか。俺達の為に嫌な思いをさせてごめん」

「どうして一馬が謝るの? 悪いのはそれを言った上級生だよ」

「そうだな。それにしても、酷い事を言う奴もいるんだな」

「もうこの話はお終い。二人に話したら、スッキリしたものだ。ありがとう二人共」

お礼の言葉を言い、由美は二人に微笑んだ。普段の明るさを取り戻した由美に桐生と錦も安堵の息を漏らす。

その後 三人は何も無かった様に仲良く遊んでその日は過ぎていった。

(…そーういや、次の日に由美を泣かせた上級生を錦と俺で仕返しをしたら、その日の夜にそいつの親が乗り込んで来て大変だったな。それで園長にすごく怒られて、俺と錦はそいつに謝る事になったんだよな。当時は園長の言ってる事が納得出来なかったけど、今思い返すとあの人が言った言葉の意味が理解出来る。だが、あの人の教えとは真逆の道を歩んでしまったな)

ふと、桐生が視線を前にやると先程の姉弟の姿は既に無かった。時計を見ると、3を指していた長針は6を指している。思いの外、時間が経っている事に驚いた桐生は、若干急ぎ足で目的地の服屋へ向かった。

劇場広場からさらに15分程歩くと、桐生は中道通り裏にある一軒の服屋に辿り着いた。

路地裏にある店故、中は狭いが男女用の服や子供服等といった品を置いてあるだけではなく、購入した服を個人に合ったサイズに調整するサービスを無料でしてくれる。その噂が人伝に伝わり、この店を利用する客は多い。自分が愛用しているスーツ等もこの店で買った物であり、桐生もこの店を利用して客の一人である。

店の中に入った桐生は冬服の棚の前で商品を眺めていた。棚にはマフラーやセーター以外にも厚い生地 of 長袖の服やズボン類も置かれている。無地の物からキャラクターや文字が刺繍された物等、様々な人に合わせた品揃えになっている。

「…昔は上に羽織る物が主流だったが、最近は冬服にも色んな物があ
るんだなあ。上着は今着てる物で十分だから、手袋でも買っていくと
するか。最近、手が冷える事が多いからな」

そう呟いて、桐生は一つの手袋を手に取るとレジへ向かっていっ
た。

桐生が会計を済ませて店を出ると、一人の男の子がぽつんと立っ
ている姿が目に入る。その子は先程、劇場広場で目撃した男の子である
と桐生は気付いた。姉の姿が見えない事を不思議に感じたが、大方近
くの店で買い物をするから此処で待つように言われたのだろう。そ
う結論付けて立ち去ろうとした時、桐生は今朝のニュースでやってい
た事件を思い出した。

その事件とは母親が子供を待たせて買い物をしてる間に連れ去ら
れるというものであった。幸いな事に事件を起こした犯人は既に逮
捕され、連れ去られた子供も無事に親の元へと帰された。もし、此処
で男の子を放置したら同じ事件が再び起きるかもしれない。そんな
不安を抱いた桐生は男の子に歩み寄って話しかけた。

「なあ 坊主。此処で一体何をしているんだ？一人でいるが、お母さ
んはどうしたんだ？」

「おかあさんはしごとく だから、はおねえちゃんといつしよにき
たあ〜 おじさんもおかあさんといつしよなお〜？」

「そうか。お姉ちゃんと一緒になんだな。それとおじさんにお母さんは
いない」

「おじさんはひとりできびしくないので？」

「ああ。今は一人だが、寂しくはない。家に帰れば一人じゃないから
な。それと…おじさんはやめてくれないか？呼ぶなら…そうだ
なあ、桐生のお兄さんと呼んでくれ」

「おじさんじゃなくて、おにいさんとよぶのお？わかったあ〜」

間延びした言葉遣いに気が抜けそうになるが、とりあえず話が出る事にホツと息を吐く。内心、大声を出されたり泣かれたりするのではないかと冷や冷やしていたからだ。そして、冗談で言った事を素直に聞く子供に何とも言えない気持ちを抱きながら、桐生は男の子に名前を尋ねた。

「そういえば、まだ名前を聞いていなかったな。坊主の名前は何て言うんだ？」

「ぼくのなまえく？ここに書いてあるく」

そう言つて、男の子は自分の名前が書いてある名札を桐生に見せた。その名札には矢澤《やざわ》虎太郎《こたろう》と書かれていた。平仮名を振っているのは、迷子になった時に本人が自分の名前を言えるようにする為だろう。

「成程。坊主の名前は虎太郎と言うんだな。それで虎太郎のお姉ちゃんは何処にいるんだ？」

「わからないく。だけど、おねえちゃんはここでまっててと行ってたく」

虎太郎の話を聞く限りでは迷子ではない様だが、この場所に一人にしておけないと思つた桐生は虎太郎を交番に連れて行く事にした。虎太郎の肩に手を置き、穏やかな口調で桐生は話しかけた。

「なあ、虎太郎。お前のお姉ちゃんは此処で待つてろと言つた様だが、ある所まで一緒に来てくれないか？」

「あるところおく。でも、おねえちゃんはここでまっててと行ったよく」

「それは分つてる。これから行く場所に後でお姉ちゃんも来るから心配はしなくてもいい。だから、一緒に行こう」

「ホントにおねえちゃんくるく？なら、ゆびきりげんまんく」

「いいぜ。男と男の約束だ。それじゃ、行くとするか」

「わかったあ〜」

そう言つて小指を差し出す虎太郎と桐生は指切りをして約束を交わす。その事で虎太郎も安心したのか、微かに笑みを浮かべていた。そして桐生は虎太郎の手を取ると交番に向かって歩き出した。

交番へ向かう道中、二人は無言で歩き続けていた。最初こそ、静か
でいいと思つていた桐生だったが、次第にその空気に耐え切れなくなつた桐生は虎太郎に話しかける。

「なあ 虎太郎。お前の姉ちゃんはどんな人なんだ？」

「ぼくのおねえちゃん〜？おねえちゃんはうちゆうなんばーわんあい
どる〜」

「そ、そうか。お姉ちゃんは宇宙ナンバーワンアイドルかあ。：それは凄いな」

「おねえちゃんすごいよ〜」

沈黙の雰囲気破る為に話題を振るが、予想外の返答に桐生は返す言葉が浮ばない。会話をしても話が続き、どうしたものかと桐生は頭を悩ませた。だが、無言でいるよりはいいと桐生が口を開いたその時：

「待ちなさい!! ハアハア： やつと見つけたわよ。この人攫い。
ハア： 私の弟を一体、どうするつもりなのよ」

二人の後ろから甲高い少女の怒号が飛んできた。裏路地という事もあり、少女の声は辺りによく響く。それに驚いて桐生が振り向くとそこにいたのは、やはり劇場広場で見た少女だった。その少女は激しく息をきらせながら桐生を睨みつけている。

少女の言葉を聞く限り、どうやら、自分は誘拐犯と思われているようだった。善意からとはいえ、無断で連れ出した事は事実であるからそう思われても仕方がない。とりあえず、誤解を解く為に桐生は少女へ言葉をかけた。

「勝手に連れ出してすまなかつた。だが、俺はこの子を誘拐するつもりはないぜ。ただ、交番へ連れて行こうと思っただけだ」

「はあ!? 何を言ってるのよ。そんなの信じられる訳ないじゃない。つい最近だって、似たような事件が起きたばかりなのに… もういいわ。今から警察に電話するから覚悟なさい」

少女は携帯を鞆から取り出すと警察に電話をしようとした時、少女が呟きを聞いた桐生が待ったをかける。

「それだ。俺もそれが気になったから、この子を交番へ連れて行こうとしたんだ」

「え?」

桐生の言葉に戸惑いの表情を浮かべる少女に桐生は事情を説明した。

「そうだったの。それじゃあ、あんたもあのニュースを見て、虎太郎が心配になったから交番に連れて行こうとしたのね」

「ああ そうだ。虎太郎の話だと姉に待ってるって言われたと聞いた時はそのまま帰ろうと思ったが、俺もあの事件を思い出してな。まあ、それよりもお姉ちゃんに来て良かったなあ 虎太郎…ん? そういえば、あいつは何処へ行った?」

「え? ああ… 本当だ。さっきまでそこにいたのに」

気が付くと、虎太郎の姿が忽然と消えていた。どうやら、二人が話をしてる間に飽きて何処かへ行ってしまったようだ。

「もう… 目を放すところなんだから。いなくなった原因はあんたにもあるんだから、探すのを手伝ってよね。嫌とは言わせないわよ」

「ああ 元よりそのつもりだ。そういや、まだ名乗っていなかったな。俺は桐生一馬という者だが、そちらの名前を覚えてくれないか?」

「あ、そうだったわね。私は矢澤にこよ。それじゃあ、探しに行きましょ」

お互いの自己紹介を済ませて、二人は虎太郎の行方を探す為に行動を開始した。

虎太郎が姿を消してから数分しか経ってないが、小さい子供といえ

足は意外に早く興味を持った方にズンズン行く為、探すのは思っているより困難である。

「案の定、もう影も形もないな。とりあえず、見た人がいないか聞いてみよう」

「そうね。だけど、見た人はいるのかしら？こんな人が多い街で一人の人間を気に掛けるとは思えないし…」

「そんな事はない。確かに素通りする人も多いが、この街には優しい人も大勢いる。とりあえず、近くの店の人に見てないか聞いてみるでしょう。それに見つかるまで俺も協力するから心配するな」

人が多い街で一人の人間を探す事は難しく、大抵は見ても知らん顔で通り過ぎる人がほとんどである。その事を想像して、落ち込むにこへ桐生は優しい言葉をかけた。桐生の力強い言葉はこの心に沁み込んでいった。そんな桐生の姿を見て、まるで父親の様だとこは感じていた。

ハッと、我に返ったにこは自分の気持ちを誤魔化すように強い口調で言葉を発した。

「ふ、ふん。そんなの当然でしょ。さあ、そうと決まったら、聞き込みに行くわよ」

「ふっ そうだな。じゃあ、行くとするか」

「…ありがとう」

「ん？どうした？早く行くぞ」

「分かってるわよ。今、行くわ」

素直になれないにこが小さく呟く。だが、その言葉は桐生には聞こえていなかった。そうとは知らず、桐生はこの様子に首を傾げていた。

それから10分程、付近の店で虎太郎の事を聞いて回るが誰も見えないと同じ答えが返ってくるばかりであった。その事に桐生とに

こも流石に焦りを感じていた。神室町は広く人が多いだけではない、中にはよからぬ事を考える者もいる。そういう連中には虎太郎の様な子供は格好の獲物であるからだ。

「ああ どうしよう。どれだけ、聞いても皆は知らないとしか言わない。まさか、本当に誰かに連れて行かれたんじゃない？」

「落ち着け。冷静さを欠いたら、見つかるものも見つからないぜ」「そう言ったって、10軒も聞いて回ったのに誰も見てないのよ。それにまだあの子は小さいし、一人でいるのよ。何か、あったらどうするのよ」

桐生の言葉を聞いたにこは目に涙を浮かべて、桐生に詰め寄って不満をぶつける。にこも自分の行動が八つ当たりだと、解っているが一度溢れてしまった不満は止める事が出来なかった。

平静を装っているが、桐生も不安を感じていた。姉であるにこの不安は相当なものだろう。だが、このままで埒が明かない為、桐生はにこを宥める事にした。

「にこ、不安になる気持ちも解る。だからこそ、今は冷静にならないといけない。お前がそんな顔をしていたら、虎太郎を心配させてしまう。お前はお姉ちゃんなんだからな。さっきも言ったが、見つかるまで俺も協力する。だから心配するな」

桐生はにこの目を見つめそう言葉をかける。その言葉で落ち着きを取り戻し、にこは無言で頷いた。

だが、虎太郎の手掛かりが無いのも事実である。桐生は焦る気持ちを抑えて周りを見渡すと、一軒の焼き鳥屋が目に入った。もしかしたら、焼き鳥屋の主人が虎太郎を見ているかもしれない。藁をも掴む思いで桐生はにこを連れて、店の主人に尋ねた。

「ちよつと、いいか？少し、尋ねたい事があるんだが…」

「へい いらつしやい！ 一体、何の用です？生憎だけどね、うちはみかじめなんて払いませんよ。例え、何をされてもね」

「何か、勘違いしてる様だな。言つておくが、俺は堅気だ。用件もあんたが考えてる様な事じゃない」

「へ？…そ、そうでしたか。それは申し訳ありませんでした。それでご用件は何ですか？」

「ああ その事なんだが、実はこの子の弟が迷子になってしまつてな。それで探しているんだ。4歳くらいの男の子を見なかつたか？」

「…4歳くらいの男の子ですか？ああ、その子なら見たよ」

主人の言葉に二人は驚きの表情を見せる。その言葉を聞いたにこは主人に勢いよく掴み掛かり問い詰める。

「それはいつ見たの？弟は、虎太郎は何処へ行ったの？早くいいなさい」

「ぐ、ぐええつ く、苦しいく 言う。言うから手を放してくれえ」

「おい、にこ。それじゃあ、何も言えないだろう。落ち着け」

「あ… そ、そうね。ごめんなさい」

「ゲホゲホツ い、いや、大丈夫だよ。それでその子だけど、あの路地に入つて行くのを見たよ。声をかけようと思つた時に客が来てね。そうこうしてる間にいなくなつちまつてなあ。すまんね」

「その子を見たのは何分くらい前なの？」

「確か、5分くらい前だよ。急いで行けば、追いつける筈だよ」

「分かつた。主人もありがとうな」

「いいんだよ。それなら、その子が見つかったら焼き鳥を買いに来ておくれ」

「ああ そうするぜ。主人の作る焼き鳥は美味そうだからな」

「私も虎太郎と一緒に来るわ」

お礼を言う桐生達に主人は優しい笑みを見せて、そう言った。二人も笑顔で言葉を返すとその場をあとにした。

焼き鳥屋の主人から聞いた路地へ来た二人は虎太郎の姿を探していた。その路地はビルが隣接してる為、明るくても薄暗く人氣も少ない。ここを通るのはビルの関係者が人目を忍んでたむろするチンピラくらいだろう。そんな場所に子供がいるのは好ましくない。一刻も早く虎太郎を見つけるべく、二人は路地の奥へと進んで行く。

だが、大人ですら通らない様な道を子供が通るのかと：疑問を感じたにこは不満を漏らしていた。

「薄暗い上に、不気味な道ねえ。こんな所に虎太郎はいるのかしら？もしかして、あの人が間違えたとか…」

そんなにこを見かねてなのか、桐生は静かな口調でにこへ話しかけた。

「いや、ああいう人は常に往来を見ているから、そういう事は無い筈だ」

「どうして、そう言いきれるのよ」

「にこが虎太郎をいつ見たか聞いた時、主人はしつかりと答えただろう？もし、覚えていなかったらはつきりと答える事はないからな」

「そんなので解るのね。いまいち、ピンと来ないけど…」

「うーむ これを口で説明するのは難しいな。ん？あれは…」

「どうしたのよ？何か在了ったの？あ、あれは虎太郎じゃないの。そんな所にいたのね。だけど、一緒にいる人達は誰かしら？」

会話の最中、桐生は何かに気付いて驚いた表情を見せる。その様子を不思議に思ったにこが桐生の見ている方へ視線をやると、そこには探していた虎太郎の姿があった。だが、傍には知らない男4人が虎太郎を囲むように立っていた。その風体から誰が見ても、チンピラと答えるだろう。虎太郎もチンピラ達の威圧感に圧倒されて震えている。「さあな。だが、明らかに穏やかな連中じゃない。にこ、お前は此処で待っている。虎太郎の事は俺に任せておけ」

「はあ!?何言ってるのよ。そんな事出来る訳ないじゃない。虎太郎は私の大事な弟よ。私が守らないといけないのよ」

荒事になると予想して桐生はにこを巻き込まない為に待つように

言い聞かせるが、にこは聞く耳を持たず飛び出してしまった。咄嗟の事で茫然としていた桐生だったが、我に返って慌ててにこの後を追いかける。

だが、にこの足は思ったより早く、桐生が追い付く前にチンピラの元へたどり着いてしまう。

「ちよつと、あんた達！私の弟に何してるのよ。今すぐ、虎太郎の傍から離れなさい」

「ああん!?何、君いゝ このガキの姉なの?だったら、丁度いいや。悪いけど、慰謝料と迷惑料を払ってくれない?」

「そうそう。このガキがよゝ 俺にぶつかって来やがってな。それに俺達のたまり場に無断で立ち入るとか許せないよね。これは姉である君に責任を取ってもらわないとなあゝ ねえ?皆もそう思うよな?」

「ふざけるんじゃないわよ。そんな事する訳ないでしょう。虎太郎こんなバカな奴らは放っておいて、帰るわよ」

にこの言葉を聞いたチンピラ達は薄笑いを浮かべて、滅茶苦茶な事を述べる。周りもニヤニヤと笑いながら、にこを見ている。だが、にこはそんなチンピラ達に臆する事無く、無理な要求を突っぱねると虎太郎を連れて帰ろうとする。しかし、そんなにこの行動はチンピラ達を怒らせる事に一役買ってしまった。

「おいこら 待て、このクソアマア! 人が大人しくしてりや、いい気になりやがって調子乗ってんじやねえぞ」

「そうだぜえ。それに俺達にたまり場に入った事に対する謝罪がまだだろうがよおお」

「きやあ」

一人のチンピラがそう怒鳴りつけて、にこの頬をはたいた。思いの外、強い衝撃だったのか、にこは悲鳴を上げて勢いよく地面に倒れてしまう。

自分の大好きな姉が酷い目にあわされている。それを見た虎太郎は、自分の中にこみ上げる怒りを感じていた。

虎太郎はその感情に突き動かされるまま、姉を叩いたチンピラの脛を蹴飛ばした。ここは虎太郎がした予想外の行動に驚いていた。

だが、小さい子の蹴りが大人に通用する訳はない。その行為が火に油を注ぎ、チンピラの怒りの矛先が虎太郎に向けられる。

「このクソガキヤアアア！ 姉弟揃って、舐めやがってよ。そんなに痛い目見てえのかよ。だったら、その望みを叶えてやらあああ」

逆上したチンピラが拳を振り上げると、虎太郎へ振り下ろした。

そんな理不尽な暴力から守る為、ここは虎太郎を抱きしめて自身へ降りかかる痛みを堪えるべく、強く目を閉じる。だが、数十秒経っても痛みは襲ってこない。その事を不思議に感じたにこが振り返ると目に入ってきたのは、怒りに満ちた形相を浮かべた桐生と倒れているチンピラの姿だった。

「どういう事なの？い、一体何が起きたの？何故、あのチンピラが倒れてるのよ」

「全く、勝手に突っ走りやがって、間に合ったから良かったが危ない所だったぞ」

「わ、悪かったわよ。って、あんた 何してるのよ。あんな危ない奴らに手を出すなんて…あんたも危ないわよ。早く逃げて…」

状況の変化について行けず、混乱するにこへ桐生は呆れた顔で言葉をかける。一方、殴られたチンピラやその仲間達は突然現れた桐生に戸惑うが、仲間を殴られた事に怒りを露わにして詰め寄ってくる。

「そのアマの言う通りだよ。おい おっさんよおっ 俺らの仲間を殴るなんて、何してくれてんの？話の答えによっちや骨を折る程度じゃ、済まねえぞ。おお ころあ」

「ああ、痛つてえ。いきなり、殴りやがってこのクソ野郎があ。答えなんざ、聞く気はねえよ。こちとら、ブチキレてるんだよ。今更、誤っても許さねえ、三人纏めて病院送りにしてやるよ。相手が女だろうが、ガキだろうが容赦しねえぜ。覚悟しろや」

「ピーチクパーチクとうるさい連中だな。それに許さねえと言った

が、許さないのは俺も同じだ。子供や女に手を出す奴を見逃すつもりはねえ」

物騒なチンピラの言葉を聞いて、振り向いた桐生は鋭い目でチンピラを睨み付け相手を一喝する。その眼光と迫力にチンピラは怖気づくが相手は一人、いざとなれば全員でかかればいい： チンピラはそう自分に言い聞かせて桐生に殴りかかった。

「ここは桐生に向かって、『危ない。逃げて』と叫ぶが桐生は微動だにしない。チンピラの拳が桐生の顔に当たると思われた時、桐生は半身を逸らして交わすと同時にチンピラの腹へ膝蹴りを食らわせる。

予想外の反撃をもろに受け、体がくの字に折れたチンピラのうなじに容赦ない肘鉄の一撃が振り下ろされ、チンピラの体は糸が切れたかのように崩れ落ちた。

「てめえ、よくもやりやがった。調子乗ってんじゃねえぞ」

それを見ていた仲間の一人がいきり立って殴りかかってくるが、さつきと同じく拳を交わすと相手の腕を掴んで倒れてるチンピラに向かつて勢いよく投げ飛ばし、あっさりと撃退してしまう。

そして、桐生は残っているチンピラ達を睨み、「お前たちはかかってこないのか？」と挑発するがチンピラ達は完全に怖気づいている。どうやら、先程倒した二人は自分達より強いのだろう。それがあっさりと倒す相手に敵う訳が無いと悟ったようだ。

無論、桐生自身も戦意の無い相手を痛め付けるつもりは無い。深い息を吐き、昂った気持ちを落ち着かせると静かな口調でチンピラ達に一言だけ告げる。

「このまま引き下がるなら、何もしない。解ったら、倒れてる奴を連れてとつとと失せろ」

「は、はい 解りました。どうもすみませんでした」

チンピラ達は渡りに船と素直に桐生の言葉を受け入れて、倒れた仲間を抱えるとそそくさと退散していった。

その姿が見えなくなると、桐生はにここと虎太郎の元へと近づき心配して言葉をかけた。

「何とか、一件落着だな。にこ、お前も大丈夫か？そいえば、顔を殴られてたな。まあ、腫れてはいないようだが」

「こ、来ないでよ。あんた、一体何者なのよ。さっきの動きだって、普通じゃない。明らかに慣れてる様だったし、私たちをどうするつもり？」

そんな桐生に対して警戒心を抱き、にこは虎太郎を抱き寄せて睨み付ける。当たり前だが、ああいった荒事に慣れてないにこが自分を警戒するのは当然の事である。その事について、どう説明したらいいかと桐生は頭を悩ませた。

「助けて貰った事は感謝してる。だけど、暴力を振るう人にこれ以上、関わりたくないの。あ、虎太郎!?何処へ行くのよ」

だが、虎太郎はこの腕を振り解き桐生の元へ駆け寄って行く。自分をじっと見上げる虎太郎に桐生は首を傾げて尋ねた。

「…どうした？虎太郎。言いたい事があるなら、言ってくれないと解らないぞ」

「ぼくよわいゝ ぼくは…どうしたらつよくなれるゝ?」

「その前に聞かせてくれ。どうして、強くなりたいと思っただんだ?」

強くなりたい。そんな気持ちを虎太郎は俯き、ポツリと呟いた。そんな虎太郎に思う事があるのか、桐生は質問に答えずに何故、強くなりたいのかと聞き返す。

虎太郎は俯いていた顔を上げて、桐生の目を見てしつかりと自分の気持ちを答えた。

「さっき、おねえちゃんひどいことをされてたゝ ぼく、おねえちゃんをまもろうとしたけど…まもれなかつたゝぼくがよわいから…だからきりゆうのおにいさん ぼくをつよくしてゝ」

「…」

「虎太郎…」

虎太郎の気持ちを桐生とにこは静かに聞いていた。そして、重い空気の中…桐生は答えを出した。

「…虎太郎 残念だが、俺はお前を強くする事は出来ない」
「どうして〜？ ぼくがよわいからなの〜？ だか：らつよくなれないの〜」

桐生の返事を聞いて、目に涙を溜めて虎太郎は震えた声で言葉を吐く。にこも悲しげな顔で虎太郎を見つめていた。

「それは違うぜ 虎太郎。俺がお前を強く出来ないのは、お前が既に強いからだ」

「え？」

「は？あんた何を言ってる…」

桐生が発した言葉は意外なものであり、二人は目を丸くする。桐生は虎太郎の前で屈むと目を合わせ、言葉を続ける。

「虎太郎 お前はお姉ちゃんを守りたいから強くなりたいと言ったな。だがな、お前はお姉ちゃんが叩かれた時、あいつらに立ち向かったじゃないか。それは強くないと出来ない事なんだ」

「？…どういふこと〜？でも、ぼくあいつらにかてないよ〜」

「確かに虎太郎はあいつらに勝てなかったかもしれない。だけどな、自分より大きい相手に立ち向かう事は誰でも出来る事じゃない。お前はそれが出来る。それは何よりも勇気があるからなんだ」

「ゆうき〜？」

「そう 勇気だ。これが無い人はどんなに鍛えても強くは慣れない。そんな奴が鍛えてもあいつらみたいに誰かを傷つける事しか出来ないんだ。虎太郎はそうなりたくはないだろ？」

桐生の言葉を聞いて、虎太郎は力強く頷いた。二人のやり取りを見ている間にこが虎太郎を優しく抱きしめると虎太郎は嬉しそうな表情を見せた。

そんな二人を穏やかに見つめる中、桐生が昔に由美を泣かせた上級生へ仕返しをした夜に園長から言われた事を思い出していた。

「一馬 彰 お前たちはどうして、仕返しなんてしたんだ？」

「あいつが由美を泣かせたからだ。そんなの決まってるだろ」

「そうだ。悪いのは由美を泣かせたあいつじゃないか。何で、俺達が

悪い事になるんだよ」

理由を尋ねられた桐生と錦は揃って、泣かせた上級生が悪いと答えた。そんな二人に園長は眉間に皺を寄せて、一喝する。

「馬鹿者!! いくら相手が悪いとはいえ、暴力を振るっては意味がないんだ。それをしてしまつては、泣く程悔しい想いをして耐えた由美の行動が無駄になつてしまう。それ所か、悪くない由美までも悪いとみられてしまうんだぞ。いいか? どんな時でも安易に相手を傷つける事はしてはならん。むしろ、何を言われても耐えた由美の勇気を見習いなさい。勇気が無い強さ等、誰かを傷つけるだけで無意味なものから」

あの時、まだ幼い自分は言葉の意味が解らなかつた。

だけど、今は解る。そして、それを教えるべき者に伝える事が出来た。

今はまだ、幼い虎太郎は言葉の意味が解らないだろう。だけど、いつかはそれを知る時が来る。その時は自分と同じようにその事を誰かに教えていくと信じていた。

「そうだ。虎太郎も見つかった事だし、さっきの焼き鳥屋に行きましようよ。も、勿論 桐生さんも一緒に：助けてくれたお礼もしたいからね」

「やきとり〜 ぼくもたべたい〜」

「ふっ そうだな。見つかったら寄ると言つたし、行くとするか」

不思議な縁で出会つた三人のドタバタ騒動はこうして幕を閉じた。そんな三人の姿を夕日が照らしている。

その三人が立ち去つた後、一人の男が路地の奥から歩いて来た。その男は蛇柄のジャケットを着用し、眼帯を付けて異様な雰囲気醸し出している。

「はあ〜 近道といえ、この道を通るのは憂鬱やのう。太陽も当たらんから寒くて敵わんで。ハ、ハックション」

龍を背負う男がいた場所に遅れて般若を背負う男も現れた。
それはちよつとした天の悪戯なのか。この日 二人が出会う事は
無かった。

サブストーリー 009 街がもたらす奇妙な縁 桐生編

日曜日の午後 桐生はある店に向かって歩いていった。その日の彼はいつもと違い、何処か浮ついてる様子で妙にそわそわしている。

普段は落ち着いている彼が何故、ここまで浮かれているのか。それは今朝の朝刊について来た一枚のチラシから始まった。

朝の7時 いつもと同じ時間に起床した桐生は部屋に届けられた朝刊を読んでいた。

最初こそ、ニュースでやらない出来事の記事があり、また世間が目しているものを知る事が出来る情報収集の一環として読んでいたが、今では楽しい日課の一つとなっている。

次に桐生は朝刊を読み終わると朝刊に挿められていた広告のチラシを手に取り見始めた。それらのチラシはスーパーのタイムセールや求人広告がほとんどであるが、ある広告が目止まる。

(何々・トマト料理専門店 “ トマト☆キング ” 本日 新装開店
かあ。肉料理や魚料理専門の店なら知ってるが、トマト料理専門とは珍しいな。場所は千両通りで開店日は今日なのか。とくに予定もないし、興味もあるから行ってみるとするかな)

一風変わった料理を出す店に興味を抱いた桐生はその店に行ってみる事にした。

目的地を目指す道中、桐生の目の前を歩いていた中年男性のポケットから財布が落ちるのを目撃する。普通だったら、無視するかその財布を猫ババするだろう。だが、馬鹿と人から言われる程：お人好しな

桐生が取る行動は決まっていた。

誰かに拾われる前にその財布を拾いあげると中年男性に向かって桐生は声をかける。

「おい 親父さん。ちよつと、止まってくれないか」

桐生の声に反応して、前を歩いていた中年男性が振り向くと桐生の姿を確認すると怯えた様子で言葉を返して来た。

「は、はい 何でしょうか？私が何か粗相をしましたか？」

その様子からして、桐生の事をその筋の人と思っている事は明らかだった。悲しい事だが、桐生もそういう誤解を受けるのは慣れているので落ち着いて対応する。

「そうじゃない。俺はあんたがこれを落としたのを見たから、声をかけたんだ。あんたには危害を加えたりはしないから安心してくれ」

その言葉と共に桐生は拾った財布を中年男性に手渡した。その事に怯えていた中年男性は驚きの表情を見せる。そして、財布を落とした事を親切に教えてくれた桐生に怯えていた自分が途端に恥ずかしくなり、中年男性はお礼の言葉を口にする。

「ど、どうもありがとうございます。そして、申し訳ありませんでした。親切にも財布を落とした事を教えてくれた貴方に不躰な事を言ってしまった」

「気にしないでくれ。俺は当たり前の事をしただけだ。礼を言われる程じゃない。それより、今度は落とさない様に気を付けてくれ。それじゃあ、俺はこれで失礼する」

中年男性にそう言うと、桐生はその場を後にした。その後ろ姿を見ている中年男性は静かに頭を下げると自身もその場を後にする。

後にこの二人の出会いが奇妙な縁をもたらす事になるとは知らずに……

そして、千両通りを訪れた桐生はトマト料理専門店を探して歩いていると件の店はすぐに見つかった。何故なら、ある場所で大勢の人だ

かりを発見したからである。おそらく、オープンする店を訪れてきた人達だろう。

「今日、オープンした店はあるか。思ったより、大勢の人が来ているようだ。午後なら人が少ないと思ったが見通しが甘かったみたいだな」

その為か、本来は休日であっても人が少ない千両通りも今日だけは人で溢れている。桐生が人だかりに近づくと店の前である光景が目に入った

「いらつしやいませ〜 トマト料理専門店 トマト☆キングは本日オープンしました。新鮮なトマトを使った様々な料理をぜひ、その舌でご賞味下さい」

制服を着た男性が大きい声で店の宣伝をする横でトマトの着ぐるみを着た人が右へ左へと体を揺らしながら踊っている。単調だが、リズムカルな動きは見るものを楽しみ気持ちにさせる。

この人ばかりは店を訪ねてきた人だけではなく、珍しい光景に通行人が足を止めて見物している人もいるのだろう。

そんな時、一人の店員が桐生に近寄って来ると声をかけてきた。

「あの、お客様。いきなりで申し訳ありません。お客様も当店にご来店の方でしょうか？」

「ああ 今朝、広告を見て店の事を知ってな。それで食べに来たんだ」
「そうでしたか。それはありがとうございます。ですが、少々問題があります…」

桐生も店を訪ねてきた客と知ると、店員は申し訳なさそうな表情を

浮かべて言葉を濁す。

その様子を見て、桐生の脳裏に嫌な予感を感じていた。そして、その想像が外れている事を祈りながら店員に尋ねる。

「その問題と言うのは何だ？ ……まさか、食材が切れて今日は営業終了とかじゃないだろうな？」

「いえ、そちらの方は問題ありません。ですが、予想以上の反響で店内が大変混雑してしまっています。それ故、ご来店のお客様には他の方との相席してもらう様に尋ねております。それで、お客様は相席でも宜しいでしょうか？」

「ああ 別に相席でも構わないぜ。それに知らない人と食べるのも面白そうだからな」

桐生は首を縦に振り、店員の言葉を受け入れると店員もホツとしたのか安堵の表情を浮かべる。

「理解して頂き、ありがとうございます。それと、こちらの番号札をお持ちください」

店員はそう言って、桐生に4の数字が記された番号札を手渡した。桐生はその札をまじまじと見つめながら、店員に言葉を返す。

「解った。これを中で見せるという事は相席する人はもう店の中にいるのか？」

「はい 相席する方達はもうご来店なさっています。それでは中へどうぞ。当店のトマト料理をご堪能下さい」

「ああ ありがとうございます。あんたも頑張ってください」

桐生は店員に労いの言葉をかけると店の中へ足を踏み入れる。店の中は店員が言っていたように沢山の客で混雑していた。予想以上の混雑ぶりに桐生は言葉も無く、茫然としてしていると桐生に気付いた店員が営業スマイルを見せて話しかけてきた。

「いらっしやいませ！ お客様は1名様ですか？それと番号札はお持ちでしょうか」

「あ、ああ 俺は一人だ。あと、番号札はこれだ」

「1名様ですね。かしこまりました。ええと：番号は4番ですから4

番テーブルですね。そちらのお客様の席へ案内します」

店員の問いに答えると、桐生は先程渡された番号札を店員に見せた。それを確認した後、席に案内しようとする店員を桐生は呼び止める。

「ちよつと待つてくれ。俺は相席するのは構わないが、もし相手が相席を拒否したらどうするんだ？まさか、その時は帰れと言わないだろうな」

「その時は当方が別の席へ案内いたします。といつても、店内はご覧の通り混雑していますから同じく相席となりますが…」

「そうか。とりあえず、相席する人の所に案内してくれ」

「かしこりまりました。それではこちらにどうぞ」

桐生の言葉に店員は笑顔を見せると件のテーブルへ案内する為、桐生を連れて歩き出した。

そして、店員に連れられて案内された席には高校と思われる3人の女の子が談笑しているのだろう。姿は見えないが楽しそうな声は桐生の耳にも届いていた。その中に一人の声に聞き覚えがあると桐生は感じたが、店内は大勢の客でざわついている事もあり、気のせいだと思ふ事にした。

「それでは今から相席の合意を確認してまいりますので、お客様は此処でお待ちください」

「ああ 解った。よろしく頼む」

桐生に待つように伝えたと店員はその席に向かっていく。

「お客様 お楽しみの所を申し訳ありませんが、少々お話を聞いて貰つて宜しいですか？」

楽しく談笑する3人に店員は声をかけると3人は会話を止めて、店員の方へ顔を向けると要件を尋ねた。

「はい 大丈夫ですよ。それで何の用ですか？」

「もしかして…まだ、料理を注文せず話をしてたから注意に来たのかもね」

「あつ… そういえば、まだ料理を注文してないね」

「いえ 話というのはその事ではありません。ただいま 店が大変混雑しております、席が満席の状態なんです。それ故、お客様にはこちらのお客様と相席をしてもらう形になるのですが…構わないでしょうか？」

「相席ですか？私は構わないけど、二人はどうするの？」

店員の言葉を聞いて、一人の女の子が他の二人に顔を向けるとその二人は首を縦に振った。

「私もいいわよ。席が無いんじゃないもの」

「私も大丈夫だよ。それに知らない人と食べるのも面白そうだしね」

「二人もこう言ってますし、私達は相席してもいいとその方にお伝え下さい」

「ご理解頂き、ありがとうございます。それでは失礼致します」

相席する事を了承した3人に深々と頭を下げて店員はその場を後にすると、足早に桐生の元へ向かった。

桐生も向かってくる店員に気付いて、近づいていく。

「大変 お待たせしました。先のお客様も相席しても構わないとの事です。それではこちらへ」

店員は桐生にそう伝えるところの席へと連れて行く。自分を案内する店員の後ろ姿を見て、桐生は漸く食事が出来ると一息吐く。この店で食事する為、昼を抜いていた桐生の腹も空腹を訴えていた。

案内していた店員が立ち止り、桐生へ向き直るとある席を手で指し示した。

「相席してもらうのはあちらの席に座っているお三方です。それと私は別のお客様を案内する仕事ありますので…これで失礼します。それではごゆっくりどうぞ」

その言葉を言った後、慌ただしく店員は去って行った。そして桐生は席に座っている三人に挨拶をする為に席へと向かって静かに歩いて行く。

「どうも 初めまして！ 今日、一緒に相席をさせてもらう桐生という者だ」

「あ、こちらこそ。困っている時はお互い様ですからお気になさらず……え？あ、貴方はあの時の……その節はお世話になりました」

「お前は……花陽か？こんな所で会うとは奇遇だな」

桐生は三人に挨拶を言うと、三人は顔を上げて桐生に視線を向けた。その内の一人が桐生の顔を見て、驚いた表情を浮かべると立ち上がり桐生へ深く頭を下げてお礼を言った。桐生の方も花陽に気付き、穏やかな表情で言葉を返した。

一方、事情を知らない残りの二人は花陽と桐生の事を不思議に思い、キョトンしてお互いの顔を見合わせると二人は一斉に口を開くと、気になっていいる事を訪ねてきた。

「あの～二人は知り合いみたいだけど、どういう関係なの？私達にも説明してくれないかしら……」

「そうだよ。それにかよちゃんがお世話になったってどういう事なの？しっかりと説明してよ」

赤毛でツリ目の少女は桐生を問い詰め、もう一人の爽やかな感じの少女は花陽を問い詰める。

「ああ そうだな。だが、立って話をするのも何だ。座ってから事情を話すでしょう」

「ええ 解ったわ。それと二人共、これ以上騒ぐと周りや店の迷惑になるわよ。落ち着きなさい」

桐生の言う通り、立って話す事ではない。そう判断して、桐生の意見に同意するとその少女は傍で押し問答を繰り返す二人に注意をした。

少女のおかげで落ち着きを取り戻した二人が席に着き、赤毛の少女が改まって口を開く。

「今すぐ、貴方と花陽の関係を聞きたい所だけど……まずは自己紹介をさせてもらおうわね。私は西木野真姫よ。ほら、貴女も自己紹介しなさい」

「私の名前は星空凜です。それとおじさんの名前は何て言うのかにや？」

「星空凜に西木野真姫だな。改めて言うが、俺の名前は桐生一馬だ。よろしく頼む」

「花陽の事は知ってるようだから、紹介はいらないわよね？」

「ああ 名前は知ってるからな」

「それなら、早速本題に入らせてもらおうけど…貴方と花陽はどういう関係なの？」

名前を名乗る二人に倣い、桐生も自分の名を告げる。お互いの自己紹介が終わると真姫が本題を切り出した。

自分の友達が心配なのだろう 真剣な表情の真姫からは不安の色が見て取れる。

「俺と花陽の関係と言っても別に大したものじゃないぜ。以前、神室町で迷ってる所に声をかけて道案内と悩みを聞いたくらいだな」

桐生はその時の事を思い返して、真姫の質問に答えた。だが、真姫は桐生の言葉が信用出来ないのか、視線を花陽に向けて真意を問いたです。

「この人の話は本当なの？こう言うっては失礼だけど、弱みを握られるとかじゃないわよね？」

「桐生さんの話は全部、本当の事だよ。それに桐生さんは見た目は怖いけど、そんな事をする人じゃないよ」

疑いの視線で花陽を見つめる真姫だったが、花陽の表情から嘘ではないと悟った真姫は安堵の溜息を吐く。

そして、桐生の方を向くと頭を下げた自分の非礼を詫びた。

「どうやら、桐生さんの話は本当だったようですね。先程は失礼な事を言っでごめんなさい」

「いいんだ。俺は別に気にしてないからな。それより、何か注文しないか？」

「そうだにやゝ おじさんとかよちんの関係も解った事だし、安心し

たらお腹空いたよ」

「フフ そうね。私もお腹空いてるし、思う存分にトマト料理を堪能するわよ」

「真姫ちゃんはトマト好きだもんね。今日だって、この店に来るのを楽しみにしてたもん」

「ほう そうなのか？ だったら、今日は俺が奢るから遠慮なく食べるといい。」

花陽の言葉を聞いて、桐生はそう発言する。桐生の唐突な発言に三人は驚いた顔を見せる中、ハツと我に返った真姫が訝しげな様子で言葉を投げ掛けた。

「いいんですか？ 今日、会ったばかりの人に奢るなんて…ご機嫌取りのつもりなら悪いけど遠慮させて貰います」

「そんなつもりはない。今回、奢ると言った理由は相席をさせてくれたお礼と花陽達に会えた事の感謝といった所だな」

「意味わかんない。相席はともかく私達に会えた事の感謝って、どういう事なのよ？」

真姫は桐生の言葉の意味が理解出来ず、眉を寄せていた。そんな真姫に桐生は静かに語りかける。

「この街は見ての通り、大勢の人が集まる。だから、以前会った人とは二度と会う事はない。だけど、花陽達はこうやって再開する事が出来たのが嬉しくてな。ただ、それだけだよ。やましい気持ちは何も無いから安心してくれ」

「そうですか。…解りました。それでは、今日はご馳走になりますね」

桐生の話を聞いて、真姫は素直にご馳走になる事にした。本来だったら、断固として断るのだが、何故か桐生の言葉には人を信用させる力がある事も真姫は感じていた。

（不思議な人 初めて会ったのに何処かで会った様な気がする。…一体、何処かしら？ こんな存在感が強い人を忘れる事は無いものね。あ…そうだ、真島さんだわ。この人は真島さんに雰囲気似てるんだ。

思えば、この人の言葉にも真島さんと同じ重みがあるもの。もしかしたら、花陽もこの人に背中を押してもらったのかしらね。私みたいに…… そう考えればお世話になったという言葉にも納得がいくわ）
（何だ？ さっきから真姫という子は俺の顔をじーつと見てるが何かあるんだらうか？ 俺を見て目を細めたり、笑みを浮かべたりと掴めない子だなあ。まるで猫みたいだ。うん？ あ、そうか。彼女が見てたのは俺じゃなくて、傍にあるメニューを見て食べる料理の事を考えていたんだな。それなら、早く言ってくれたいのに）

桐生は自分を見つめてくる真姫を不思議に思っていたが、傍にあるメニューに気付くとそれを真姫へ手渡した。

「ほら、これを見て、注文する料理を決めてくれ。他の二人はもう見るし、真姫も見るといい」

「へ？ え、ええ そうね。そうするわ。貴方は見なくていいの？」

「まあ、まだメニューはあるからな。それを見るさ」

「そう、解ったわ」

そう言っつて、真姫は桐生からメニューを受け取ると注文する料理の選別を開始した。そして桐生も自分の食べる料理を決めるべく、メニューに目を通す。

メニューを覗くと載っている品はトマトシチューやトマトフライ等の変わった料理もあれば、トマトのサラダやトマトソースの Pasta といった見慣れた品もありトマト一色でメニューは埋められている。まあ、桐生がいる店はトマト料理専門店なのだから当然の事であるが、桐生は戸惑いを隠せないでいた。

他の三人はどう思っつてるんだらうと、メニューから顔を上げて視線をやると花陽と凜は話しながら選んでいる。次に真姫に視線をやると、彼女は先程以上に真剣な表情でメニューを見つめている。そういえば、花陽は真姫がトマト好きだと言っつていた事を思い出すと桐生は

ある提案を思い付いた。

そうだ 彼女に聞けばお薦めのトマト料理を教えてくださいませんかもしれないと桐生は真姫に話しかけた。

「一つ、聞いてもいいか?」

「何?今、料理を決めるので忙しいんだけど。 あっ… ご、ごめんなさい。聞きたい事は何かしら?」

「あ、ああ 実はだな。メニューを見たんだが、中々決められなくてな。さつき、花陽が真姫はトマト好きと言っていたし、良かったらお薦めを教えてくださいませんかと思ってな」

真姫の物を言わせぬ迫力に圧倒された桐生だが、素に戻った真姫に言われて気流は気を取り直して質問をした。

まさか、お薦めを聞かれると思ってなかった真姫は桐生の言葉を聞くや否や、満面の笑みで答え始める。

「そうね。私としては…お薦めするのはトマトソースの Pasta かしらね。色んな料理があるから、変わった物を食べようと思うだろうけど、それは辞めるべきね。まずはシンプルにトマトそのものを味わえる料理を選ぶのがベストの選択よ。だから、私はトマトソースの Pasta を選ぶつもりだけど、桐生さんも同じものを頼んで見たらどうかしら?」

「成程な。トマトそのものを味わうか…それは考えてなかったな。よし、それなら俺もトマトソースの Pasta を注文するでしょう。ありがとうございます 真姫」

「どういたしました。所で二人はもう決まったの?そろそろ、頼もうと思ってるけど」

真姫は照れた様子でお礼を言う桐生に言葉を返すと未だにメニューを見ている二人に声をかけると二人は真姫の方を向き、それぞれが注文する料理を伝えた。

「あ、ごめんね。私は熱々チーズとフレッシュトマトのサンドイッチ

とオレンジジュースにするよ」

「凜は特製トマトケチャップのチキンライスとかよちんと同じくオレンジジュースにするにゃ」

「どうやら、皆決まったようだな。それじゃあ、注文するぞ」

桐生がテーブルに置いてあるボタンを押すと店員が足早にやって来ると、メモを片手に注文を聞いてきた。

「お待たせ致しました。ご注文をお伺いします」

「俺はトマトソースのパスタを頼む」

「私も同じく、トマトソースのパスタで」

「私は熱々チーズとフレッシュトマトのサンドイッチとオレンジジュースをお願いします」

「凜は特製トマトケチャップのチキンライスとオレンジジュース」

「かしこまりました。ご注文は以上で宜しいでしょうか？」

「ああ 以上だ」

店員は桐生の言葉を聞くと、一礼して去って行った。

注文した料理が届くまで時間がある為、桐生は気になっていた事を花陽に尋ねた。

「そういえば、以前に花陽をスクールアイドルを結成すると言っていたが：あれからどうなったんだ？」

「ああ あの事ですね。あの後、私はμ'sに変わるスクールアイドルを結成しました。メンバーは私とここにいる真姫ちゃんと凜ちゃんです」

「どうやら、悩みを吹っ切れたようだな。あの時と違って楽しそうで何よりだ」

「はい あの時、桐生さんに相談してなかったら、今の私は無かったと思います。μ'sを超えるスクールアイドルを作るなんて事は考えもしなかったですからね」

花陽は満面の笑顔で二人の肩に手をやって、そう答える。今の花陽は充実してる毎日を送っている事に桐生も嬉しく感じていた。

そんな二人を見て、凜と真姫も口を開く。

「へー かよちんと桐生さんの間にそんな事があつたんだね。悩んでいたと思つたら、すつきりした顔でスクールアイドルをもう一度やろうと言われた時は吃驚したよ」

「そうね。私もいきなり言われた時は驚いたわよ」

「アハハ ごめんね。思い立ったら、居ても立つても居られなくなっちゃって…だけど、一緒にやると言ってくれた時は嬉しかったよ。ありがとう 二人共」

花陽はそう言つて、真姫と凜に微笑んだ。二人も花陽に応えるかの様に微笑みを浮かべていた。そんな三人を見て、桐生は心が温かくなるのを感じていた。

そんな会話してる間に時間が経っていたのか、丁度よく、出来立ての料理が運ばれてきた。

テーブルに置かれた料理はどれも美味しそうであり、空腹だった四人は『いたたきます』と一言告げて、それぞれが頼んだ料理を食べ始める。余程、お腹が空いていたのか黙々と食べる三人を見て、話をしようと思つて真姫の方を向くと彼女は目をキラキラさせながらパスを咀嚼している様を見て、桐生は会話を諦めると自分の料理を食べる事に専念する事にした。

それから10分程してからだろうか。ドタドタと走る足音が店内に響き、桐生達がいる席の傍で接客している店員の元に駆け寄ると、慌てた様子で話しかける。その様子に桐生達は何事だと、そちらの方へ視線を向ける。

「チーフ 大変です。店の前で宣伝していたスタッフが急に体調を崩してしまいました」

「何だつて!?! それは本当かね?」

「はい 本当です。チーフ それでいかがしましょう。宣伝役の人がいなくなつては客足も減つてしまいます」

「ううむ 参つたなあ。店内は未だに混雑してるし、人員を割いてしまふとオーダーを取る者や料理を運ぶ人が減つてしまふ。どうしたものやら・・・」

店員の報告を聞いたチーフは発生した問題に頭を抱えてしまふ。

どうやら、話を聞く限りでは店前で呼び込みをしていたスタッフが体調を崩してしまったようだ。その話は当然、桐生達の耳にも届いていたが客である自分には関係ない事だと思っていた。

「そう、ある一人を除いては……、そして、その一人が唐突にある提案を口にする。」

「ねえ、花陽、凜。少し、私の話を聞いてくれない？」

「……それはいいけど、話って、一体何かな？」

「まさか、トマト料理をおかわりしたいだったりするのかにや」

「違うわよ。話というのはこの店の宣伝を私達でやらないかという事よ」

『えええええ!!?』

「ちよ、大声出さないで！周りに迷惑になるでしょ」

真姫の提案に驚いた花陽と凜が叫び声を上げる。そんな二人に真姫は周りを気にして、静かにするよう促した。

その事で冷静さを取り戻した二人は改めて真姫に尋ねる。

「だ、だけどさ……宣伝と言っても何をやるの？」

「かよちんの言う通りだにや。第一、私達はこの店の店員じゃないんだよ。お店の人に言った所で相手にしてもらえないよ」

「そ、そんなの解ってるわよ。だけど、ここで私達がお店の宣伝をする事で私達のグループの宣伝が出来ればと思ったのよ」

「言いたい事は解ったけど、凜達はラブライブに出場しないんだよ。それなのに宣伝する意味があるの？」

「私も今回は凜ちゃんに賛成かな……、真姫ちゃんが私達のグループを想ってくれるのは嬉しいよ。だけど、ちよつと無理があるよ」

「それも解ってるわよ。私だって、自分が無茶を言ってる事くらい……でも」

真姫も自分が言ってる事が無理難題だとは理解している。自分達はスクールアイドルをやっているが、ラブライブに出場する事は無い以上、宣伝しても意味が無い。だけど、真姫には引くに引けない理由があった。その理由を言うべきか迷っている真姫に向かって、今まで傍観していた桐生は口を開いて喋り出す。

「でも、何だ？言いたい事があるなら、はっきりと言った方がいいぜ。仲間を気遣う気持ちが逆に溝を作ったり、関係に亀裂が入る事になるからな」

相手を想って言わない事は優しさであるが、時には相手との関係を壊す事になる。桐生の言っている事は尤もであり、真姫は自分の本心を語り出した。

「…確かにそうね。私がこの提案をした理由はもう一つあるわ。それは…」

「それは？」

真姫の言葉に桐生が相槌を打ち、次の言葉を待った。そして、次の瞬間……真姫は顔を上げると目を爛々と輝かせながら本音をぶちまける。

「もし、このまま宣伝が出来なくなったら、この店が潰れるかもしれないじゃない。この店は今日開店したばかりなのよ？今は珍しさとお昼時だから、満席になってるけど…明日、明後日はどうなるか解らないじゃないの。さつき食べたトマトソースの Pasta はとても美味しかったし、最高だったわ。きつと他のトマト料理も頬が落ちる程、美味しいに決まってる。だけど、潰れたら…それらの料理はもう食べれないのよ。そんなのは耐えられない。だから、花陽 凜！一生のお願いよ 私に協力して頂戴」

怒涛の勢いで言葉を発する真姫に桐生達は啞然とする。まさか、本当の理由がトマト料理を食べたいからとは誰も予想だにしていなかった。

「…本当の理由が、それとはなあ」

「ま、真姫ちゃんはトマトが好きなのは知っていたけど…ここまでとは知らなかったよ」

「凜も驚いたよ。だけど、凜はこの真姫ちゃんも好きだにや」

桐生は呆れ、花陽は驚きの様子を見せる中、凜はずれた言葉を口に

する。三者三様の様子に真姫は小さい声で呟いた。

「いいじゃない。好きな物を守る為に行動するのは駄目なの？」

「まあ、駄目とは言わない。だが、実際にどうするんだ？さっき、凧が言っていたように俺達は客であつて、店員じゃない。手伝うと言つた所で一蹴されると思うが…好きにしてみるといい」

「え？貴方は反対しないの？凧と花陽はしたのに…」

「反対した所で真姫はやるんだろ？会つてから、そう時間は経つてないがお前が突つ走る性格なのは解つたぜ」

「そう。それじゃあ、私は行つてくる」

「こうなつたら、真姫ちゃんも止まらないよ。仕方ないから、凧達も行くよ。かよちゃん」

「そうだね。それも私達らしいからね」

桐生の言葉を聞いて、真姫は立ち上がると店員に向かつて歩いて行つた。その後を凧と花陽も追いかけていく。

バタバタと突き進んでいく三人の後を、桐生も追いかけていく。

自分達の知らぬ所でそんな事が起きてるとは知らないチーフは未だに頭を抱えて悩んでいた。その様子をじれったく思った店員がチーフに向かつて指示を催促する。

「チーフ 一体、どうするんです？そろそろ、何か指示を下さい。このままでは時間だけが過ぎるだけです。何らかの手を打たないと…」

「解っているけど…どういう采配するべきか、決まらなくてね。うーん こんな時に参つたなあ」

そう言つて、悩むチーフに店員が痺れを切らして口を開いた時、自分達に話しかけてくる者がいた。

「ちよつと、いいかしら？」

いきなりの事で内心、吃驚しながらも声の方に振り向くと一人の少女が立っていた。もしかして、オーダーをしている事を気付かない自分達に不満を言いに来たのかもしれない。そう思った店員は少女へ丁寧な態度で言葉を返す。

「はい 何でしょう？お客様 オーダーでしたら、今すぐ承りますので「そうじゃないわ」え？」

真姫は店員の言葉を遮るように呟いたあとに言葉を続けた。

「実はね…貴方達の話の話を聞こえてきてね。そして、私…いえ 私達に出来る事があると思つて声をかけたのよ。そこで何だけど、お店の宣伝を私達に任せてもらえないかしら？」

真姫は微笑んで店員にそう告げた。自分には、力を貸してくれる人達がいる。その内の一人は会ったばかりだけど、きつと手助けしてくれるだろうと真姫は確信していた。途中で言葉を言い直したのは自分の後ろにいる人の存在を感じ取ったからでもある。

「そうでしたか。しかし…お言葉は有難いのですが、お客様の手を煩わせる訳にはいきません」

真姫の真つ直ぐな言葉に飛びつきそうになるが、今回の事は店側の問題でもある。それ故、誘惑を断ち切るように店員はスツパリと断つた。

店員の言葉を聞き、やはり駄目かと真姫が目を閉じて諦めた。それを見て、後ろにいた桐生が店員を説得する為に口を開いた。

「確かにそうかもしれない。だけど、手が足りないのも事実だろう？それに手伝いをする事はこつちから申し出たんだ。別に働いた分の金を払えなんて事は言わない。あんたにも店員としての意地やプライドがあるんだろうが、此処は真姫の提案に乗ってみたらどうだ？」

「そうだよ。困った時はお客とかなんて関係ないよ」

「私も桐生さんの言つた様にお金なんていりません。手伝いたいと思つたのは真姫ちゃんの為でもあるから」

「桐生さん 凜 花陽… 三人共 どうもありがとう」

自分を後押しする三人に真姫は小さい声で感謝の気持ちを呟いた。一方、店員の方は困つた様子でチーフに意見を求める。内心では、こうなつたのは早く決断しないこの人の所為だと呪詛を吐いていた。

「チーフ どうしますか？お客様はこう仰っておりますし、手を借りるといのは…チーフ？話を聞いてますか？」

「一体。何かね？今、問題を解決する案を考えているのだから静かに

…!?! あ、貴方様はあの親切な人ではありませんか。いやゝ こんな所で会えるなんて思っておりませんでしたよ」

「ああ あの時の親父さんか。あんたはこの店のお偉いさんだったんだな」

考え事をしてる時に店員に話しかけられ、チーフは苛立ちを露わにする。だが、桐生の姿が視界に入り驚きながら言葉をかけると桐生も言葉を返した。

そんな二人の関係を不思議に思った店員が小声でチーフに話しかける。

「チーフ この方とお知り合いなんですか？ 何だか目つきが怖いし、人相も悪くてまともな人に見えないのですが…」

「何を言つとるのかね。人を見た目で判断してならんよ。彼は親切にも私が落とした財布を拾って届けてくれたんだ。そういえば、君はさつき何かを言おうとしていなかったか？」

「ああ そうでした。実はこちらのお客様がですね」

失礼な言動を言う店員をやんわりと注意するとチーフは店員に問いかけると店員はハツとして、先程の事をチーフに報告する。すると。その報告を聞いたチーフは満面の笑顔で真姫達に言葉をかけた。

「店の宣伝を手伝ってくれるというのは本当かね？ それなら、ぜひともお願いしよう」

「はい 一所懸命やらせて頂きます」

「何だか、凜も燃えてきたよ。それに楽しそうだよ」

「うん 私も精一杯頑張ります」

「いやゝ そう言ってくれて、助かるよ。それじゃあ、その君。この4人をスタッフルームに案内してあげなさい」

「…解りました。それではお客様方 こちらにどうぞ」

店員は諦めた表情を浮かべると真姫達の案内を始めた。店員に連れられてスタッフルームにやってくると4人は店員から指示が言い渡される。

「お嬢さん達はこちらの服に着替えて下さい。そして、一人が店の前で宣伝をしながらご来店のお客様にこの番号札を渡して店内で店員

に見せるようにお伝えしてください。他のお二人は通りで宣伝をしてこのチラシの配布をお願いします」

店員は三人に着替えをするように言って真姫に番号札を渡し、花陽と凛にはチラシを手渡す。すると、今度は桐生の方に向くと別の指示を出した。

「貴方にはこの着ぐるみのキングとマトーン君を着て、店前で宣伝をお願いします。私からの指示は以上です。それでは私は仕事があるのでこれで失礼します。皆さんも準備が出来次第よろしくお願いします」

そうして、店員はバタバタと足音を立てスタッフルームを後にした。その最中、準備を黙々と行う三人の傍で桐生は茫然として着ぐるみを見つめていた。そう、桐生が着るように指示されたのは店前で踊っていたトマトの着ぐるみである。協力するつもりだったが、自分に課せられた役目がこれだとは予想だにしていなかった。

そんな桐生に準備を終えた真姫が声をかける。他の二人も既に準備を終えていて、残るは桐生のみであった

「私達の準備は終わったわよ。桐生さんも早く準備して頂戴」

「ああ そうだな…それじゃあ、着替えるから部屋の外で待っていてくれ」

「解ったわ。早くしてね」

桐生の方もこれ以上待たせる訳に行かないと覚悟を決めて着ぐるみを手にとると着替え始めた。

数分後 スタッフルームから準備を終えた桐生が出てきて、外で待っている真姫達に声をかける。

「待たせたな。準備は終わったぜ」

準備に手間取る桐生に一言だけ不満を言ってやろうと真姫が振り向くと、そこにはキラキラと丸い目を輝かせ、愛嬌溢れる笑顔を浮か

べる着ぐるみを着た桐生がいた。

「もう、遅いわよ。急がないとお客さんが減ってしまうじゃないの……ブフウ」

「き、桐生さん……ですよ？プツ フフフ」

「アハハハハハ！ はあくおかしくて堪らないにや。だけど、桐生さん そ、その姿は……すごく似合ってるよ」

可愛らしい見た目から発せられる渋い声のギャップに三人は笑いを堪える事が出来なかった。未だに肩を震わせて笑う三人へ桐生はムスツとしながら言葉をかける。

「……まったく、いつまで笑ってるんだ。早く宣伝に行くぞ」

「そ、そうね。それじゃあ、行きましようか」

「うん」

「張り切って、行くよ」

桐生の言葉で気持ちを切り替えた真姫達は宣伝を開始する。

指示通りに凜は左の通りへ、花陽は右の通りにチラシを持って向かって行くのを見届ける。そして、真姫は大きな声で千両通りを歩く通行人に向けて呼びかけた。

「いらっしやいませ！ トマト料理専門店 トマト☆キングは本日オープンしました。様々な美味しいトマト料理をぜひ、ご賞味下さい」

真姫の呼び掛けに合わせて着ぐるみを着た桐生が手を振ったり、店の中へ誘う様な仕草を見せる。だが、時間はお昼を過ぎていく。その後も数通行人は足を止める事も無く無情にも通り過ぎていく。その後も数十分に渡って、宣伝を続けるが状況は変わらずだった。

その間にチラシを配りに行っていた花陽達も戻って来るが、彼女達の方も宣伝は上手く行っていない様だった。

「こっちは全然駄目だにや。チラシを配ろうにも受け取る所か、凜の方を見向きもしないよ」

「私の方も同じだよ。受け取る人もいたけど、目の前でチラシを捨てる人がほとんどだよ。真姫ちゃんの方はどう？店の前だし、入ってくれたお客はいたの？」

状況を尋ねる花陽に真姫は無言で首を横に降る。その様子から花陽と凜も状況を理解したのだろう。三人は言葉をも無く立ち尽くし、暗い雰囲気を漂わせていた。

だが、そんな暗い雰囲気を撥ね退けるかの様に桐生は道の真ん中に立つと、いきなり踊り始めた。

そんな桐生に真姫達は呆気に取られていたが、通行人が桐生の踊りに足を止めている事に気が付くと三人は再び宣伝を開始した。私達の為にチャンスを作ってくれた桐生の行動を無駄にはしない。この時 三人の気持ちは一つになっていた。

その後 先程とは打って変わって、店に入る客が次々と訪れていた。おそらく、花陽達が配ったチラシやコミカルに踊る桐生を見た人から大勢の人に伝わったのだろう。

その後、体調を崩していたスタッフも回復して現場復帰をする事になり、真姫達の仕事は無事終わりを迎えた。

「いや〜 今回は本当に助かりました。貴方達がいなかったら、今日の営業は失敗に終わっていた事でしょう。店の危機を救って頂きありがとうございます」

チーフは真姫達に深く頭を下げてお礼の言葉を述べる。

「いいえ お礼を言うのはこっちの方です。今回の事は私達にとって、いい経験になりました」

真姫はチーフに微笑みを見せて、そう告げる。そんな真姫を優しい目で見つめるとチーフは封筒を懐から取り出すと真姫達に手渡した。まさかと思つた真姫達だったが、中には意外な物が入っていた。そう 中身はお金ではなく、この店の割引券50枚セットだった。

その中身に花陽と凜はがっかりした様子を見せるが、真姫だけはキラキラとした目で割引券を見つめていた。他の人は微妙な贈り物でもトマトが好きな真姫には何よりの褒美だろう。それは誰が見ても

一目瞭然である。

「こんな素晴らしい物をありがとうございます」

「いやいや、喜んでくれて何よりだよ。これからもこの店をよろしくね」

「はい！また、食べに来ますね」

喜びはしゃぐ真姫を桐生達は生暖かい目で見つめていた。

こうして、奇妙な縁が結んだドタバタ騒動は幕を閉じたのである。

その後 店をあとにして桐生達はタクシー乗り場にいた。

「それじゃあ、此処でお別れだな。今日は楽しかったぜ」

「前回に続いて、今回もお世話になりました。私も楽しかったですよ」

「うん 可愛い服を着て、宣伝するのは面白かったにや」

「そうね。確かにいい経験だったわね。桐生さん 今回はありがとうございました。あれが無ければ、きつと 私は何も出来ずに終わってたから」

「いいんだ。それに勇氣があるのは真姫も同じだぜ。結局、何かを思ったり、言ったりしても自分が行動しなければ意味が無い。お前があの時、動いてなければ俺達は何もなかったぜ。お前の行動が俺達を動かしたのさ」

「桐生さん…」

「そう しけた顔をするな。笑顔でいる事を忘れるな」

「ええ そうね」

「真姫ちゃん 早くして、そろそろ行くよ」

「解ったわ。それじゃあ、私はこれで」

桐生の言葉で真姫は笑顔で挨拶を交わしてタクシーに乗り込むと車は出発すると、あっという間に見えなくなってしまった。

それを見送った桐生が中道通りを歩いていると蛇の眼帯を付け、スーツを着た男と鉢合わせする。

「!!… あんたは…真島の兄さん」

「き、桐生ちゃん!?!どうして、此処に…」

そう その男は真島吾郎その人である。
今日この日 龍と般若がついに邂逅した。

サブストーリー010 街がもたらす奇妙な縁 真島編

日曜日の午前中 今日には珍しく何の予定もなく、暇を持って余していた真島は神室町をぶらぶらと歩いていった。休日という事もあり、どこもかしこも大勢の人で溢れかえっている。

路上の隅で立ち止りながら話に夢中になる若者もいれば、ベンチに座って酒を飲む老人もいる。そんな様々な人の姿を見て、真島はポツリと呟いた。

「今日も神室町は変わらずやなあ。それにしても、今日は普段より人ごみが多いのう」

毎日、神室町を見ている彼は今日の人ごみの多さに驚いていた。神室町が人で溢れるのは注目されている店が出来たとか、有名な人が来ている時くらいである。真島は大勢の人ごみを見ながら、その理由が気になっていた。

（うーむ ここまで人が多いのは久しぶりやな。店に関しては何も情報が入つとらんし、有名人が来るという話も聞いてへんからなあ。何や、すぐく気になるのう。丁度、暇を持って余していた所や。ほなら、人ごみの理由を調べて見るとするか）

真島は暇つぶしに持ってこいと人ごみの原因を調べる事にした。

「さて、調べるにしても情報がないと始まらへんな。街を歩いて情報収集をせんとな」

真島は情報を集めるべく歩き出した時、路肩で立ち話をしている若者の会話が耳に入ってくる。

「おい 知ってるか？さつき、アイドルスクープの掲示板を見たけど、劇場広場でA—RISEらしき人を見たらしいぜ」

「それは本当か？だけど、ネットの掲示板なんだろう？ガセ情報じゃないのか」

「まあ、そうかもしれないけどさ…行ってみるだけいいじゃないか。どうせ、当てもなく街をぶらついてるだけなんだからさ。折角だし、行ってみようぜ」

「解ったよ。確かに暇だからな。それじゃあ、行くとしようぜ」

一人の若者を言葉に押し切られて、もう一人の若者は首を縦に振る。そうして、二人の若者は劇場広場へ歩いて行った。真島はその姿を見ながら、ポツリと呟く。

「成程のうゝ 何や、知らんが有名人が来てるそうやの。そういえば、見ると劇場広場に向かつてる人が多いな。よし、それならワシも劇場広場に行ってみよか」

真島も若者と同じく、劇場広場へと足を進める。A—RISEがどういった者なのかは知らないが、先程の若者を見る限りでは人を惹きつける魅力を持っているのだろう。

それを考えると会うのが楽しみで仕方なかった。無論、掴んだ情報は若者の会話からで、その若者も掲示板からの情報である事も思えば信憑性は無いのだが、それでも真島は噂の人物に会える予感を感じていた。

間もなくして、劇場広場に辿り着いた真島は目を見開く。

「…何やねん この人の多さは。広場の何処を見ても人だらけや」

真島はその光景に驚きを隠せないでいた。広場は歩くスペースが無いほどに人で埋め尽くされている。劇場広場にはパチンコ店やゲームセンターだけではなく、映画館やボーリング場も存在している。そういった理由から人が集まりやすい場所である事は真島も知っている。だが、これ程の人が集まるのは初めての事だった。

この中から噂の人物をどう探そうか考えた始めた時、真島は肝心な事に気が付いた。

そう 噂の現場にやって来たが、真島は肝心のA—RISEがどんな容姿なのか知らない。その事を真島は失念していた。

「あ、そういや、ワシはA—RISEの見た目を知らんわ。これじゃ

あ、探しても見つけれへん。何や…アホらしくなってきたわ。それに腹も減ったし飯でも食いにいくかのう」

所詮は噂だと、真島は興味を失くしてA—R—I—S—Eを探す事に見切りを付けた。そして広場の時計を見ると時刻は11時半を過ぎている。丁度いい頃合いだと、真島は昼食を食べる為に劇場広場を立ち去って行った。

数十分後 行きつけのラーメン屋 九州一番星に足を運んで昼食を済ませた真島は鼻歌を歌いながら中道通り裏を歩いていった。店の隠れメニューである50食限定の角煮豚骨ラーメンを運よく食べられた事が真島がご機嫌の理由である。

「ふう〜 あそここのラーメンはやっぱり最高やなあ。おまけに隠れメニューを食べるとは今日のワシは運がええなあ。せや、今からバツテイングセンターに行つて食後の運動と行くか。あの人ごみも無くなつてる事やろうしな」

真島は腹ごしらえをしようと、バツテイングセンターで一汗掻く為に再び劇場広場へ向かう事にした。意気揚々とバツテイングセンターに向かう道中、路地の片隅に視線をやるとある3人組が目映つた。その三人組はサンングラスを付けて、マスクで口を隠していて明らかに不審者という出で立ちだった。触らぬ神に祟りなしと真島は無視を決め込んで足早に立ち去ろうとした。だが、耳に入ってきたある言葉で真島は足を止める。

「参ったわね。まさか、私達が神室町にいるという情報が洩れるなんて…」

「本当よねえ〜 ばれない様に変装までしたのにね」

「…むしろ、この変装のおかげでばれたと思うのだがな」

「そう？ だけど、A—R—I—S—Eがこんな怪しい変装をしてるとは誰も思わないでしょ」

「まあ、逆に目立ってるという感じもするけどねえ〜」

(何やと?今、あのおかしな三人組はA—RISEと口にひとつたな。まさか、本当に来ていたとは……ネットの情報も馬鹿に出来へんな。そうや、此処で会ったのも何かの縁やし、声をかけてみるか)

此処で会ったのも何かの縁。そう思った真島はA—RISEに声をかけるべく、路地で話をしている三人組に近寄っていった。

「すまん ちよつと、ええか?少し、話したい事があるんや」

いきなり声をかけられ、三人は驚いて肩を揺らすとゆつくりと振り向くと三人はさらに驚きの表情を浮かべた。何故なら、視線の先にいたのは蛇柄の眼帯を身に付け、素肌パイソン柄のジャケットを着た男が立っていた。しかも、ジャケットの下にある素肌からは入れ墨も丸見えだった。普通なら驚くのも無理もない事である。

唐突の事で固まっていた三人の内、一人が一步前に出ると口を開いて真島に言葉を返した。

「え、ええ それは構わないけど、貴方は誰かしら?まずは名前を教えてください頂戴」

「おお そうやったな。ワシは真島吾郎というもんや」

「真島さんね。私は綺羅ツバサよ。ほら、二人も自己紹介しなきや」

ツバサは振り向いて後ろに立っている二人に声をかけた。声をかけられた二人も一步前に出ると、ツバサに並んで自己紹介を始めた。

「失礼 紹介が遅れてしまった。私は藤堂英玲奈だ」

「私は優木あんじゅといえます。よろしくね」

「さよか、ツバサちゃんに英玲奈ちゃんにあんじゅちゃんやな。覚えただ」

「私の事は呼び捨てで構わない。ちゃん付けに慣れてないからな」

「私は好きな風に呼んでいいよ」

「そうね。私も英玲奈同様に呼び捨てにして頂戴。それで真島さんの話は何かしら?」

「さよか。だけど、あえてちゃん付けで呼ばせてもらうで。男ならま

だしも女の子を呼び捨てにするのはワシも慣れてないからのう」

真島の言葉を聞き、三人は溜まらず笑みを浮かべた。

そして、自己紹介が終わるとツバサは真島に本題を尋ねた。先程までは驚いていたが、今では三人は平然として真島と対面している。その変わり様に若干、戸惑いながらも真島は言葉を切り出した。

「そうや。さつき、A―R I S Eという言葉が聞こえたんやが…もしかして、あんたらがそうなんか？」

「あら、私達の話盗み聞きしてたのかしら？確かに私達がA―R I S Eよ。だけど、秘密にしておいてくれないかしら。今日は久しぶりに三人で買い物に来ただけど、ふとした事で情報が洩れてしまつて困つてるのよ」

「そうやったんか。まあ、英玲奈ちゃんも言うつつたけど、そないな変装じゃ無理もあらへんで。明らかに目立つとるしの」

「うーん やつぱり、この変装じゃ駄目なのね。行けると思ったんだけどなあ」

真島はツバサ達を見ながら、そう言葉を洩らす。真島の言葉を聞いて、ぽつりと呟くツバサに英玲奈とあんじゅは顔を見合わせて、苦笑いを浮かべていた。

「見た所、三人は存在感があるからのう。下手に変装するより、堂々としてた方が目立たないとちやうんか？それか、普段と違った格好をするのもええかもしれん」

「ほう、普段と違う格好か。それはどういったものかな？」

「そうやなあゝ 溢れ出す存在感を消す服装は…」

真島の言葉に興味を抱いた英玲奈が食い付いて来た。他の二人も言葉には出さずとも英玲奈と同じ様に興味津々である。まさか、思い付きで言った提案に興味を示すとは思っていなかった。真島は言葉に詰まり、考え込んだ。

そして、ある提案を思いついた真島は手を叩くとその提案を三人に

告げた。

「そうや。いつその事、何も飾らずに普通の服装でおつたらええ」

「えっと、それは変装はしないで普段の格好をするという事？」

「そや。まさか、有名な人が何も変装せんと堂々と歩くななんて想像できへんやろ？割と効果はあると思うで」

真島の言葉が理解出来ずに聞きかえすツバサに対して、真島はそう説明した。その会話を聞いていたあんじゅと英玲奈は驚いた表情を浮かべていた。

「成程。下手に顔を隠すより、堂々としてた方がばれないか。それは盲点だったな」

「確かにね。変に意識せず、自然体でいるのがいいのかもしれないわねえ」

「せやろく 丁度、近くに小さいが品揃えがいい服屋があるんや。良かったら、案内したるわ」

「あら、それはいいわね。私は賛成よ。それとあんじゅと英玲奈はどうする？」

ツバサは真島の意見に賛成して、同行する事を決めるとツバサは振り返って、二人はどうしたいのか意見を尋ねた。ツバサに尋ねられた英玲奈とあんじゅは柔らかい笑みを見せると言葉を返した。

「勿論、私もいくぞ。何やら、面白い事になりそうだしな」

「ええ 私も英玲奈と同じよ。楽しい事を独り占めしちや駄目よ」

「決まった様やな。それじゃあ、行くとするかの」

三人の意見を聞き、話が纏った所で真島は件の店に向かって歩き出した。ツバサ達も真島の後を歩いて行く。

服屋への道中で気になった事があったて、真島は三人に尋ねた。

「そうや、気になってる事があるんやが…どうして、ワシと一緒に行動しようなんて思ったんや？自分で言うのも何やが、見た目は怪しいおっさんやろ？普通なら警戒する筈やで」

そう言葉を吐く真島の目を見つめて、ツバサが答える。

「まあ、最初は驚いたよ。場所が場所だったから、ヤバい人と遭遇した

なああってね。だけど、すぐ見た目通りの人じゃないと解ったの」

「ほう、それはどないしてやっ？」

「それは目だよ。失礼な言い方だが、貴方は怖い見た目をしている。だけど、貴方の目は澄んでいたからな」

ツバサの返答に真島は食い付き、続きを催促するかのよう問いかける。そんな真島の質問に答えたのはツバサではなく、傍にいた英玲奈だった。そんな英玲奈に続いて、あんじゅも口を開くと真島に言葉をかけた。

「まあ、こう言うとお惚れになるけど：以前はスクールアイドルとして、日本一になった事もあるからね。その過程で人を見る目は鍛えられたのよ。だから、真島さんは信用出来ると私達は判断したの。それが真島さんについて行く理由よ」

「そうやったんか。それにしても、A—R I S Eもスクールアイドルやったんやな。μ s以外のスクールアイドルに会えると思ってなかったで」

真島が二人の話を聞いて、驚きながら言ったある言葉にツバサは反応して顔を真島に向けて口を開いた。

「ねえ…今、μ sって言ったよね？真島さんはμ sの子達に会った事があるの？」

「あるで。確か、穂乃果ちゃんに海未ちゃんにことりちゃんに真姫ちゃんに凜ちゃんに花陽ちゃんやな。それがどないしたんや？」

「…驚いた 意外とμ sの子と会っているのね」

「まあ、思わぬ所で縁があつてのうう それでツバサちゃん達はμ sとどういう間柄なんや？」

「…実は一年前にA—R I S Eとμ sはラブライブの地区予選で争った事があるのよ。だけど、その時は惜しくも負けてしまったけどね」

「ほく そなら、ツバサちゃん達にとっては因縁のある相手ちゆうことやな」

「まあね。だけど、穂乃果さん達はスクールアイドルを辞めたと聞いたわ。残念だけど、私達がμ sと競う事はもうないのよ」

ツバサは寂しそうな顔をして、真島にそう言った。見ると、あんじゅと英玲奈も寂しそうな表情を浮かべている。しかし、真島はそんなツバサ達に明るく、こう言葉をかけた。

「本当にそうやるか？ ワシはやりたいと思えば、ツバサちゃん達がμ'sの皆と競い合う事は出来ると思うで」

「そうかもしれない。だけど、私達はあの舞台で勝負したいと思っているの。そういう意味では私達の願いは叶わないのよ」

そう呟くツバサに真島は二の句が告げなかった。確かに競う事は出来るが、彼女達が求める場所でなければ意味がない。それはアマチュアであっても、アイドルとしての意地や誇りがある。真島はツバサの表情からそれを感じ取っていた。

故にそれ以上、口を挟むのは野暮だと真島は悟った。そして4人の間に漂う空気を何とかしようとして、真島が前に視線をやると件の服屋が目映る。どうやら、会話をしている内に到着したようで真島はこれ幸いと店の方を指さし、ツバサ達に話しかける。

「ほれ、前を見てみい。あれがその店や。一見、古臭いが品揃えはええで」

「あら、中々いい店ね。新しい店より、こういう店の方がいい物があるし、私は好きだわ」

「そうか。目利きが鋭いあんじゅが言うなら、そうなんだろうな」

「それにサービスも充実してるみたい。裏路地に構えてる割に客が多いのはそれが理由のようね」

「まあ、ここで突っ立つとらんで中に入るとしよか」

真島はそう言つて、店の中に入って行くと三人も続いて中へ足を踏み入れた。中に入ると三人は真つ先に女性服が置いてある場所に向かって行つた。それを見ていた真島は自分が着る男性服を選ぶ為に男性服がある場所に向かおうとした時、自分の腕が誰かに捕まれる。いきなりの事で吃驚した真島がそちらに視線をやると、にこやかに微笑むツバサがいた。その後ろには同じく微笑むあんじゅと英玲奈も立っている。

三人の微笑みに背筋が寒くなる感じを覚えながら、真島がおずおずと尋ねた。

「な、何や？ワシの腕をガツツリと掴んで：服を選ぶんに時間が掛かる事を気にしとるんやったら、心配無用やで。遠慮せんと選んで来いや」

「ええ、洋服はじっくりと選ぶつもりよ。だけど、どうせだから服を選んで貰おうと思ってるね。真島さんはそういうの得意そうだし」

「そうだな。こんな良い店を知ってるくらいだ。きつと、着る服も素晴らしいものを選んでくれそうだし」

「確かにそうね。自分で選ぶの楽しいけど、選んで貰うのも楽しそうねえ〜」

「ち、ちよい待ちや。何でワシがそないな事をせなあかんのや」

何故か、ツバサ達の服を選ぶ方向に話が進んでる事に焦った真島が待ったをかける。

「何故って、普通の格好をしろと言ったのは真島さんじゃない」

「ああ それに普段からアイドル活動してる私達は目立たないように変装してるからな。普通の格好と言われても解らなくなっているんだよ」

「そうそう。それに服を選んで貰う事は私達が真島さんを信用してるからよ。きつと、似合う服をチョイスしてくれるってね」

まるで口裏を合わせたかのように言葉を発する三人に真島はタジタジとするばかりである。そんな真島にツバサが止めの一言を口にした。

「もしかして、真島さん：自分のセンスに自信が無いの？」

「何やと。そないな訳あるかい。ええやろ、そこまで言うならワシがツバサちゃん達の服を選んだる」

ツバサの言葉にムキになった真島が食い付き、言葉を返す。自分が乗せられている事を理解していたが、センスが無いという言葉だけは受け入れられなかった。

「そう来なくつちやね。真島さんのセンスの良さを見せてもらおうよ」

「ええで。男 真島吾郎 一丁やったろうやないか」

三人の服を選ぶ為、ツバサ達と真島は女性服売り場へやって来た。そこで真島はツバサ達に向き合うとこう言葉をかける。

「服を選ぶんはええけど、ワシはツバサちゃん達の好みは知らへんよ。それでもええんか？」

「それは大丈夫。無理を言ってるのはこちらだもの。選んで貰った服は大事にするわ」

「ええ それに普通の格好するのに私達の好みを教えたら、自分で選ぶ事になるものね」

「さよか。それじゃあ、ワシのセンスの良さを見せたる。まずはツバサちゃんの服やな。そや、これなんかどうや？」

そう言うと、真島は陳列されている品物からある服を手にとるとツバサに手渡した。真島が選んだのはテイベアがプリントされた長袖の服だった。一見、子供っぽいかと真島は思ったが、ツバサは嬉しそうな顔をしてその服を見つめていた。そして、顔を上げると真島にお礼の言葉を言った。

「真島さん ありがとう。テイベアがとても可愛いくて気に入ったわ」

「そりや、良かった。最初は子供っぽいかと思うてたが、喜んでくれて何よりや」

「フフ 実はこういう可愛い物が私は好きなのよ。私はこの服を買うわ」

「そうか。ツバサちゃんは意外に女の子らしいんやな」

「あら、酷い。だけど、私の好みを良く解ったわね。もしかして、初めから知ってたとか？」

「そんな訳あらへんやろ。今日、初めて会ったんやで。ツバサちゃんやったら、この服が似合うやろと思うてな」

「そ、そうなの。さて、私の番は終わったから次は英玲奈の番ね」

「おお 次は私か。真島さんはどんな服を選ぶのかな？楽しみだな」

「よし、今度は英玲奈ちゃんの番やな。次も気合入れて選ぶでえ」

照れ隠しの為か、ツバサは話題を逸らそうと次は英玲奈の服を選ぶよう真島に言った。英玲奈と真島は照れて頬を赤く染めるツバサに気付いていないが、あんじゆはそんなツバサを可愛いと感じてクスクスと笑みを溢す。ツバサもあんじゆの笑みを見て、恥ずかしそうに顔を背ける。そんな二人を真島と英玲奈は不思議そうに見ていた。

流石にこれ以上、ツバサを弄るのも可哀想だと思ったあんじゆはツバサから注意を逸らす為、真島に声をかけた。

声をかける時、あんじゆは英玲奈に視線を向けてウインクをした。それを見た英玲奈は何かを理解した様子で静かに首を縦に振る。

「それよりも真島さん。私とツバサが可愛くて見惚れるのも解るけど、英玲奈の服を選んであげなきや。ほら、英玲奈も膨れながら待ってるわよ」

あんじゆの言葉でハツとした真島は英玲奈の方を向くと、そこにはムスつとした表情をした英玲奈がいた。凜とした顔立ちをしている事もあって、膨れた表情をした英玲奈は妙に迫力があつた。

「す、すまんかった。英玲奈ちゃんに似合う服を選ぶから堪忍してや」
「本当だな？それなら許すよ。というよりも初めから怒ってはいない。あんじゆの悪戯に乗っただけさ」

「へ？あんじゆちゃんの悪戯やと？」

鳩が豆鉄砲を食ったような表情をして、真島があんじゆを見ると彼女は口を手で押さえながら笑っていた。それを見て、真島はしてやられたと肩を落とすとあんじゆに言葉をかける。

「はあく、何や、あんじゆちゃんの悪戯やったんか。一瞬、本気にしてもうたわ」

「ごめんなさい。ちよつとした悪戯だったけど、ちよつと度が過ぎたわね」

「私も反省しているよ。ごめんなさい」

自分達の悪戯で真島を怒らせてしまったかもしれない。そう思った二人は真島に頭を下げると素直に謝った。真島としても驚きはし

だが、別に怒っている訳ではない。それよりも気になる事があり、真島は二人に尋ねた。

「別に気にしてへん。せやけど、いつ悪戯を思い付いて英玲奈ちゃんに伝えたんや？」

「ああ それはあんじゆのウインクだよ。私達はライブの最中でも意思疎通が出来る様、ジェスチャーで会話をする練習もしていたからな」

「そうなの。そのおかげで日常でもそれが出来るようになったという訳」

「ほく そういう芸当も出来るんか。そら、たまげたわ」

真島はあんじゆと英玲奈の説明を聞いて、驚嘆の声を上げた。二人はさらっと言っているが、言葉を介さない会話は思っているよりも難しい。それを日常でも扱える程、訓練している事を素直にすごいと真島は感じていた。

「結構、このやり取りは便利なのよ。学校でもノートを見せて欲しい時とか、良く使ってるもの」

「まあ、秘密の共有するにも持ってこいだからな。さて、真島さん。説明も済んだ事だし…そろそろ、私の服を選んで欲しいのだが…」

「あ、ああ そうやな。ほな、英玲奈ちゃんの服を選ぶとするかの」

悪戯のからくりの説明も済んだ所で英玲奈が真島に服を選んでほしいと話しかけてきた。その事に再びハツとした真島は急いで商品棚に振り返る。モタモタしていたら、また悪戯を仕掛けられると思ったからである。その予想は当たっていた。背を向けた真島を見ていたツバサが口を尖らせていた事に真島は気づいていなかった。案の定、ツバサも悪戯を考えていたが、一步出遅れたようだ。

「さて、英玲奈ちゃんに似合いそうな服は…これやな」

真島が商品棚から取り出したのは白と青のストライプ模様の服だった。三人の中で何処か存在感がある英玲奈には地味だが、シンプルな服が似合うと真島は思った。

「おおく 中々、いい服だな。私自身は派手な服は苦手だから嬉しく

思う」

「そういえば、英玲奈はライブで着る衣装も派手な感じにしないでと言ってたわね」

「ほう、それなら丁度良かったわ。それと、どうして派手な格好が苦手なんや？ワシはそっちの方も似合いそうやけどな」

真島は派手な服装が苦手と言う理由を英玲奈に尋ねた。真島としても、英玲奈が派手な格好をしても似合うと感じていたからだ。

「ああ それはだな。以前、曲に合わせて派手な衣装を着た時があったんだ。そのライブが終わった後に待ち伏せしたファンから告白されたんだよ。その…付き合ってくれないかってな」

「そんな事もあったわね。確か、その後もラブレターとか届いてたわね。時にはその衣装の英玲奈と送り主が一緒に写ってる合成写真とかもね」

「そうだった事もあって、派手な服が苦手になってしまったんだよ」
「成程のう。そら、災難やったな。ファンにも色んな人がおるもんやな」

「ああ。自分達を応援してくれる気持ちは嬉しいけど、流石に告白は勘弁してほしいな」

「英玲奈は女の子にモテるよね。私もカッコいいと思う時があるから、その子達の気持ち解る時もあるよ」

「おいおい、私はそういう趣味は無いぞ」

「解ってるわよ。それと英玲奈を選んで貰った服もいいわね。この猫ちゃん、とっても可愛い〜」

これ以上、この会話を続けると英玲奈が不機嫌になると悟ったあんじゅは真島が英玲奈に選んだ服を見て、そう呟いた。その言葉に英玲奈も猫の写真を見て、柔らかい笑みを浮かべると真島にお礼を言った。

「ああ 確かにこの猫を見ると癒されるな。それに動物の写真がプリントされた服というもの珍しい。ありがとう 真島さん」

「せやろ？…こういう服を着てる人は中々おらんからな。まあ、喜んでくれて何よりや。さて、最後はあんじゅちゃんの番やな」

「あら〜 やつと、私の番が来たわね」

そう言つて、真島はあんじゆに視線を向ける。あんじゆも待つてましたとばかりに笑顔を浮かべて、真島に声をかけた。

「待たせてすまんのう。せやけど、二人同様にワシがあんじゆちゃんに似合う服を選んだるで。期待しててや」

「本当に？それは楽しみね。一体、どんな服を選ぶのかしら？」

真島の言葉にあんじゆは目を輝かせて真島を見つめる。真島もそこまで喜んでくれる事を嬉しいと思う反面、プレッシャーを感じていた。

（あんじゆちゃんにああ言ったが、どないしよう。二人はをパツと見で決めた服を気に行つてくれたけど、流石にそんな幸運は続かへんやろしなあ。こう言うのも失礼やが、あんじゆちゃんは二人と違つてファッションにも詳しくそうやからな。参つたのう〜 うん？この服は…… そうや！この服や、この服に決めたる。これならセンスもええし、あんじゆちゃんにも似合いそうやからな）

あんじゆの服を選ぶのに悩んでいた真島の目にある服が映つた。そして、この服ならあんじゆにも似合うと確信した真島は迷わず、その服を手にとつた。

「決まつたで。あんじゆちゃんの服はズバリ、これや」

そう言つて、真島があんじゆに選んだ服を手渡した。その服は白地の長袖で前には銀色に輝く狼の顔がプリントされており、背中には Monster Slayer の文字と二本の剣がプリントされている。見た目のデザインとしては男物に見えるが、これはれっきとした女性物である。

あんじゆは真島の選んだ服を無言で見ていた。その様子からこの服を選んだのは失敗だったかと思つていると、あんじゆは満面の笑みを見せると、真島に抱きついた。

「ありがとう 真島さん。貴方は最高よ」

「な、何や？いきなり抱きついてきて。一体、どうしたんや？」

いきなりの出来事に慌てる真島はあんじゆに理由を尋ねるが、本人

は何も言わず真島に抱きつくだけである。本来なら可愛い子に抱きつかれたら、男なら誰でも役得と感じるだろう。だが、狭い店の中の出来事である故、他の客の視線が二人へと向けられる。当然、真島も自分達に向けられている視線をひしひしと感じていた。

流星にこの空気に耐え切れなくなった真島が助けを求めて、ツバサと英玲奈に目を向けた。二人も面白がって眺めていたが、周りの目もある為、ツバサと英玲奈は真島に助け船を出した。

「ほら、いつまで抱きついてるのよ。周りの目もあるし、そろそろ離れなさい」

「ツバサの言う通りだ。自分の探していた物が見つかって、喜ぶ気持ちも解る。だけど、少し落ち着こう」

「あつ、つ、ごめんなさい。私、つい嬉しくて我を見失ってたわ」

「あ、ああ。まあ、気にせんでええ。それにええ匂いで柔らかかったしの」

「真島さん…それはセクハラよ。それに顔が緩んでる」

二人に窘められて我に返ったあんじゅは謝りながら離れると、真島は小声で本音を漏らす。偶々、その呟きが聞こえたのだろう。ツバサは真島に近寄ると小声でそう告げた。

まさか、本音だけでなく自分の気持ちまで表情に現れていた事を指摘されるとは思っていなかった。その事に焦りを感じながらも真島は誤魔化すようにあんじゅに話しかけた。

「そ、そういや…さつきは何で抱きついてきたんや？」

「ああ 実は前からこの服を探していたのよ。この服はあるゲームが発売決定した時の記念として作られた物なのよ。私も欲しくて購入しようとしたけど、あつという間に売り切れになったのよ。それで取り扱ってる店に連絡しても入荷がいつになるのか解らないと言われて、暫くは手に入らないと思ってた矢先に見つけたから」

「あんじゅは嵌まったゲームのグッズを集める趣味があるからな。以前もグッズの買い物に付き合わされた事もあったしな」

「ええ 普段はおっとりとしてるんだけど、その時だけは別人になるものね。まあ、私もそれで面白いゲームを見つかるから楽しいけど

さ」

「成程なあ。だから、抱きつく程に喜んでいたつちゆう訳やな」

「もう〜 それは忘れてよ〜」

顔を真っ赤にして、恥ずかしそうに言葉を吐くあんじゅを三人は優しい目で見つめていた。

「まあ、これで三人の服を選び終わったな。それで三人はこの服を買うんか？」

真島はツバサ達に選んだ服をどうするのかを尋ねた。当初はノリで始めた事とはいえ、服は安い買い物ではない。三人に選んだ服のデザインも凝っており、値段もそれなりにするだろうと思っただからである。

だが、三人の心は既に決まっていた。三人は揃えて同じ言葉を真島に言った。

「『勿論、買うわよ』」

「そうか。ほなら、ワシは外で待ってるで。少し、空気を吸いたくなつたからの」

「解ったわ。それじゃあ、会計を済ませてくるわね」

真島の言葉に返事をして、三人は服を手レジへ向かって行った。

数分後 真島が店の前で待っているとツバサ達が慌てた様子で店から出てきた。その様子に訝しげな表情を浮かべ、真島が声をかけようとした時：ツバサが先に口を開いた。

「真島さん どうしよう。…どうやら、私達が此処にいる事がばれたみたい。10分もしない内にファンがやって来るわ」

「急いで移動するにしても、私達は道を知らないからな。ファンに合わないで移動するのは無理だろう」

「うーん 困ったわね。会ったら、サインやら握手を要求されて暫くは帰れないでしょうね。それに神室町に気軽に来れなくなるかも」

「何や、大変そうやの。それなら心配あらへん。誰にも遭遇せんようにワシがタクシー乗り場まで送ったる」

「本当!? 是非とも、道案内をお願いするわ」

「おう ほな、いくで。通る場所は薄暗い道やから足元に注意するんやで」

そう言つて、ビルのある道へ向かつて足を進めて行く真島の後をツバサ達はついて行く。真島が言っていたようにその道には陽ざしがビルに遮られて、薄暗かった。それに室外機の汚れやら、窓から捨てられたゴミ等が散乱している。確かに注意しないとゴミに躓く事になるだろう。三人は足元や汚れた壁に注意しながら進む事にした。

その道中、真島は歩きながら後ろにいる三人へ話しかけた。

「そういや、ファンに場所がばれた事を焦っておったけど、そんなに大変な事なんか?」

「ええ そうなのよ。だから、普段は目立たないように変装したりしてやり過ごしてるの」

「あの変装でばれずに行動出来たのが不思議だったがな」

「確かにね。運が良かったけど、流石に幸運は続かないよね」

「そら、大変やったのう。せやけど、嫌なら嫌と言うた方がええんやないか?」

三人の話を聞いて、真島はそう発言した。無論、ツバサ達はプロではなくともアイドルである。それ故、ファンを大切に作る気持ちもあるだろう。だが、その結果として自分達の行動が制限されるとなれば話は別である。

そして、真島の話を聞いていた三人はそれぞれが思っている事を言葉にする。

「確かにファンの存在が重く感じる時はあるわ。だけど、私…いえ、私達がA—RISEを結成しての初ライブをやった時は見に来た人は10人くらいだったのよ。今は大勢の人が見に来てくれるけどね」

「確かにそうだったな。それに私達のダンスや歌を楽しんでくれる観客の表情を見るのも好きだな」

「そうね。ライブが終わって、客席から響く歓声や大きい拍手を聞いて思う時がある。ああ、私達はそれが在ったから頑張って来れたんだなってね」

自分の気持ちを吐き出した事で三人は、自分達が忘れていた事を思い出しているのだろう。皆、一様に懐かしさを感じさせる表情を浮かべている。真島はそれを見て、ある事を思い出した。服屋に案内する時、ツバサが言っていたμ、sと競い合いたいという言葉を…

そんな三人に真島はある言葉を投げかける。

「どうやら、今のツバサちゃん達が忘れてたもんを思い出したようだな。それを踏まえて言うんやけど、μ、sと競い合いを試してみたらどうや？」

「え？だけど、彼女達は今はスクールアイドルを辞めてるのよ。どうやって、勝負するの？」

「それは知つとる。それにするのは勝負やない。競う事や。穂乃果ちゃん達は時折、近くの神社でダンスの練習をしとるんや。スクールアイドルを辞めたけど、自分達が楽しくてやりたいからやってるんだと言っておったで」

「楽しくてやりたいからやる…か。そう、そうね。大きい舞台でしか、競う意味は無いと思っていた。だけど、そうじゃないのよね。やろうと思えば、いつでもどこでも出来るんだよね。こんな簡単な事に気付かないなんて私は馬鹿だなあ。ホントにバカ…だ」

「ツバサ」

「ツバサちゃん」

ツバサは真島の言葉を反芻している内に自分の気持ちに気付いたのだろう。ツバサは大粒の涙を流していた。それを見て、英玲奈とあんじゅはツバサに駆け寄ると慰めるようにツバサを優しく抱きしめた。

静かに泣くツバサを何も言わずに抱きしめる英玲奈とあんじゅを見て、真島は三人の絆の強さを知った。

μ、sとは違う絆が彼女達にはあるのだろう。ファンもそんな魅力を知っているからこそ、彼女達を応援して来たのだろう。まあ、行く先で現れるという事が玉にキズである。

それから数分後 真島達は中道通りのタクシー乗り場にいた。あの後、泣いた事でスッキリしたのか：ツバサの顔には活力に満ちていた。これが本来の綺羅ツバサなのだ、知りあって間もない真島にも解った。

「今日はどうもありがとう。色々とお世話になったわね」

「ああ そうだな。解っていたつもりだったが、私達に足りない事も知る事が出来たよ」

「そうね。それにやる事に理由もいらぬという事もね」

三人は自分達に足りないものを教えてくれた真島に笑顔を見せて、感謝の言葉を伝える。三人の笑顔に見惚れながらも真島も言葉を返す。

「いや ワシは何もしとらんで。やったと言えば服を選んだ事だけや」

「あら、謙遜しなくてもいいのに。そういう所は可愛いわね。見た目は怖いけど」

「な、男が可愛いと言われても嬉しくないで。それに最後は余計や」

「フフ ごめんなさい。それじゃあ、私達はもう行くわね。真島さんが教えてくれた事は絶対に忘れない」

「ああ これからも頑張りや」

「ありがとう。それと最後に一つだけ：近い内にμ、s：いえ 穂乃果さん達に会いに行こうと思う。お互い、楽しく競う合う為に」

「そうか。一線を引いても手強いからな。きつと、いい刺激になるで」

「ええ そうでしょうね。それじゃあ、私達はこれで失礼するわね。機会があればまた会える事を願ってるわ」

そう言って、ツバサはタクシーに乗り込んだ。それに続いて、あんどじゅと英玲奈は頭を下げるとツバサ同様にタクシーに乗ると目的地

に向けて発車していった。三人が乗ったタクシーを見送りながら、真島は人の縁はつくづく不思議だと感じていた。μsに出会い、そしてライバルと言えるA-RISEとも出会うとは思っていなかったからである。神室町には人を引き寄せて、引き合わせる何かがあるのだろう。その様な事を考えていたが、そんなのは自分らしくないと頭を振って、その考えを振り払った。

そして、日が暮れ始めた頃 中道通りを歩いているとある男が姿を現した。その男はワインレッドのシャツにグレーのスーツを着ている。

「!!… あんたは…真島の兄さん」

「き、桐生ちゃん!?!どうして、此処に…」

そう 堂島の龍と呼ばれ、神室町の伝説と謡われた男 桐生一馬
その人であった。

神室町には人を引き寄せ、人を引き合わせる何かがある。
それは間違いでない事を真島は知る事になる。

サブストーリー1011 静かな夜に男達は語り合う

神室町の中道通り そこに二人の男の姿があった。

一人は堂島の龍の異名を持ち、伝説の男と呼ばれた桐生一馬 もう一人は嶋野の狂犬と恐れられた真島吾郎である。

思わぬ人物の再会に二人は言葉も無く、お互いを見つめていた。二人が醸し出す雰囲気は圧倒されたのだろうか：中道通りの通行人は触らぬ神に祟りなしと二人を避けて通り過ぎていく。

東城会の極道達が収める神室町では極道同士の諍いは日常茶飯事である。それ故、こういう場面に出くわした時の対応方法を神室町で生きる住民達は熟知している。だが、近くで店を営業している者は不安で堪らなかつた。

もし、店前で喧嘩が起きれば、当然の事だが通行人達は厄介事に巻き込まれない様にその場所を避けるだろう。そうなれば、客足が減ってしまう事になる。それ以外にも喧嘩の最中、店の看板や棚が壊されてしまうかもしれない。

この二つの出来事が重なってしまったえば、店は大赤字である。損害を請求しようにも相手が相手である為、それも出来ない。しかも、最悪な事に現在、一触即発寸前の二人は神室町で名を轟かせる男達である。

そんな二人が衝突すれば、辺りは滅茶苦茶になってしまう。どうか、穏便に済んでくれと付近の店の店員達は祈っていた。だが、そんな店員達の祈りを無視するかのように真島は獰猛な猛獣を連想させる笑みを浮かべ、桐生に向かって静かに歩き出した。それを見ていた周りの通行人達も緊張感から唾をのみ込む。いよいよ、戦いが始まるのかと誰もが思っていたが、真島が取った行動は予想外の事だった。

じりじりと近寄って真島は両手を広げると、そのまま桐生に抱きついたので。その行動に見物人は驚いていた。そして、抱きつかれた桐生本人も困惑の表情を浮かべている。攻撃を仕掛けてくるかと思っていたが、抱きついてくるとは想像していなかったからだ。だが、そ

んな事は何処吹く風で真島は嬉しそうな顔を見せ、桐生に話しかけてきた。

「久しぶりやの〜 桐生ちゃん。元気にしとったかあ〜」

「あ、ああ。俺は元気にしている。真島の兄さんも元気そうだな。それより…いい加減に離れてくれないか？その、周りの目もあるしな」いきなりの事に混乱しつつも桐生は挨拶の言葉を返すと、未だに抱きついている真島にそう言った。最初こそ、驚いていた通行人達も落ち着きを取り戻し、怪訝な顔をしてこちらを見ていた。中にはひそひそと会話をしている者もいる。

その言葉で周りの視線に漸く気が付いたのか、桐生から離れると真島は何処かの店で飲もうと誘いの言葉をかける。

「…すまん。ちよつと、浮かれ取ったわ。折角、会えた事やし…何処か店に行つて、楽しく酒でも飲もうや」

「いや 別に構わない。それと飲みに行くならニューセレナはどうだ？久しぶりにママさんや伊達さんに会いたいしな」

「ニューセレナか。そういや、桐生ちゃんの行きつけの店やったなあ。まあ、桐生ちゃんと酒が飲めるならワシは別に構わへんで」
「それじゃあ、決まりだな。早速、行くとするか」

真島から飲みの誘いを受けた桐生は馴染みの店であるニューセレナに行こうと提案した。真島自身も久しぶりに会えた桐生と酒が飲めるならいいと特に反対する事なく、首を縦に振った。そして、話が纏り二人はニューセレナに向かって行った。

楽しげに去りゆく二人を見て、何事も無くて良かったと近くの店の店員達はホッと胸を撫で下ろしていた。

数分後 天下一通りにやってきた二人はニューセレナがあるビルの前にいた。二人はエレベーターに乗り込み、2階で降りると店のド

アを開けて中へ入ると店を営業しているママが笑顔で言葉をかけてきた。

「いらつしやい。あら、桐生さんじゃない。顔を見せるのは久しぶりね」

「ああ そうだな。前に来たのは数年前だったからな」

「そうね。それと今日は真島さんと一緒なのね」

「おう さつき、中道通りでぼったりと再会してのう。それで酒を飲もうと此処へ来たんや」

「そうだったの。それじゃあ、今日は楽しんでいってね。それと二人は何を飲むの？」

「ワシはウイスキーを頼む」

「俺も真島の兄さんと同じでいい」

「解ったわ。すぐに用意するわ」

ママは二人から注文を聞くと、酒の用意をする為に店の奥へ引つ込んでいく。その姿を見ながら、カウンターの席に腰を下ろす。そんな時、後ろから二人に声をかけてくる者がいた。

「いや、お久しぶりですね。まさか、此処でお二人に会うとは思ってませんでしたよ」

唐突に声をかけられて驚いた二人が振り向くと、そこには赤いスーツを着た男が笑みを浮かべて座っていた。

その男の名は秋山駿。神室町と大阪で『スカイファイナンス』という金融会社を経営しており、桐生達とも協力した事もある。

「お前は…秋山じゃないか。どうして、此処にいるんだ？」

「どうしてって、理由は一つしかないじゃないですか。二人と同じように酒を飲む為ですよ」

「さよか。せやけど、お前さんは自分の店を持つとったよな？そっちには顔を出さんでええんか？」

「ああ そちらの方には既に顔を出して、スタッフに指示を与えてますからね。店のスタッフで手に負えないトラブルが起きない限りは大丈夫ですよ」

秋山は二人の質問に答えた後、今度は秋山が二人に質問をした。

「それはそうとして、二人はどうして此処に？まさか、また東城会絡みの厄介事ですか？」

そう尋ねた秋山はまたもや、神室町が揺れる騒動が起きるのではと不安を感じていた。

本人が望んで起こしてる訳ではないが、桐生が神室町に来るときは総じて厄介事が起きているからである。

「いや、今回はただの旅行で来たんだ。だが、その言い方だと、俺が厄介事を持ち込んでる様に聞こえるな」

「あ、いや、その・別にそういうつもりで言った訳じゃ・」

秋山の言葉に引つ掛かりを覚えた桐生に突っ込まれて、どう言葉を返そうかと秋山が頭を悩ませていると注文されたお酒を持ってやって来た。

「お待ちどうさま。あら、どうしたの？まさか、二人共 秋山さんに絡んでいたんじゃないでしょうね？」

困った様子の秋山を見て、絡まれていると思ったママは二人を問い詰める。

無論、それはママの誤解だが、ママは桐生と真島が秋山と知り合いだとは知らない。

「いや、違いますよ。ママさん。実は桐生さんと真島さんとは知り合いでしてね。偶然、会ったから話をしていたんですよ」

「まあ、そうだったの。てつきり、二人に絡まれていると思ってたわ。二人共 ごめんなさいね」

秋山の言葉で自分が誤解をしていた事に気付いたママは二人に謝った。

「いや いいんだ。気にしないでくれ」

「そうやで。まあ、桐生ちゃんの人相はおつかないからのう。ママさんが誤解するのも無理ないで」

「何だど？そういう意味では真島の兄さんも同じだろう」

「それはどういう意味やねん？ワシの方が人相悪いと言ってるんか」

「まあまあ、二人共。折角、こうして会えた訳ですし、楽しくやりましょうよ。ね？ママさん」

「そうね。折角、こうして知り合いと会えたんですもの。喧嘩するなんて駄目よ」

「確かにそうだな。すまない」

「せやな、酒は楽しく飲んでなんぼやからな」

二人を宥める秋山にママも協力をして、二人を諫めるように言葉を投げ掛ける。桐生と真島もママの言葉を受け入れて素直に頷いた。

場が落ち着いた時、そのタイミングを計っていたかのように店のドアが開き、二人の来客が訪れた。ママは店にやって来た客にお決まりの挨拶をする。三人もそちらの方に目をやると、入って来た人物を見て三人は驚きの表情を浮かべる。店にやって来た二人の人物も三人と同じように驚きの表情を浮かべていた。

一人は伊達真。昔、桐生と一緒に行動をした刑事である。100億を廻る騒動の後、刑事を辞めることになったが：その後 警視監が起こした事件を暴き、刑事として復職している。

もう一人は谷村正義。伊達と同じく刑事である。以前は勤務中に麻雀をしたり、違法な営業をしている店から賄賂を受け取ったりして神室町のダニと呼ばれていたが、伊達同様に警視監が起こした事件解決を解決した事で現在は、伊達と同じ捜査一課で仕事をしている。

真島や秋山に続いて、思わぬ者達との再会を嬉しく思い桐生が言葉をかける。

「久しぶりだな 伊達さん。それに谷村も」

「お前、桐生じゃねえか!? どうして此処にいるんだ? まさか、また厄介事でも起きたのか?」

「いや、ちよつとした旅行で来てるんだ。それにしても秋山といい、伊達さんといい どうして俺を疫病神みたいに言うんだ?」

「桐生さんが神室町に来た時はいつも騒動が起きてますからね。ま、今回はそういう訳じゃないですけどね。そうだ。折角ですから、皆で飲みましょうよ。面白い話もありますし」

「そうだな。久しぶりに再会したんだ。こんな話するより、今日はとことん飲もうぜ」

「いいですねえ。こういう風に集まる事はそうそう無いですし、今日

はパーツとやりましょう」

「おつ 自分、ノリがええやんか。気に入ったでえ」

「ああ そうだな。今日はとことん付き合うぜ」

谷村の提案に乗る形で伊達がその場にいる桐生達に呼びかける。それに真島と秋山が賛同し、場の空気が盛り上がっていく。そんな雰囲気充てられたのか、桐生も楽しそうな表情を浮かべると皆が座っているカウンター席に歩み寄って行った。

「そういや、何や：面白い話があると、その兄ちゃんが言うと思ったな？それは一体何なんや？」

カウンターに腰かけて、注文したウイスキーを飲みながら真島は先程の話を谷村に尋ねる。声をかけられた谷村は待つてましたと言わんばかりの表情で喜々として、その事を話し始める。

「ああ その話ですか。実は今日、千両通りに仕事で行った時の事なんですけどね。その店の前で凄いダンスを踊るトマトの着ぐるみを見たんですよ」

「ほく そうなんか。せやけど、その何処が面白いや？」

「まあ、最後まで聞いて下さいよ。それだけじゃなくて、その店ではね。あの有名なスクールアイドル“μ、s”のメンバーである西木野真姫という子が宣伝をしていたんです」

「何やと：真姫ちゃんが宣伝？それはほんまか？」

「ええ 本当ですよ。それよりも真姫ちゃんって、真島さんはその子の事を知ってるんですか？」

「ああ 知つとるで。以前、花粉症の事で行った病院で会つての。そこで悩みを相談されたんや。それが切欠になってな。時々、メールでやり取りもするし、ハロウィンパーティーに呼ばれた事もあるで」

真島の反応を見て、真姫の事を知っているのかと聞いてきた谷村に真島はそう答えた。隣で話を聞いていた桐生は二人の会話に出てきたμ、sと真姫という二つの言葉に聞き覚えがあった。もしかした

らと思った桐生は真姫という子の事を真島に尋ねる。

「所で真島の兄さんが言ってる真姫という子だが、その子は赤い髪をした女の子の事じゃないのか？」

「ん？ああ そうや。せやけど、どうして真姫ちゃんの容姿を知ってるんや？」

「確かにそうですね。こう言っただけですけど、桐生さんはアイドルとかに興味無さそうですね」

桐生の疑問に答えると今度は真島が真姫の容姿を知っている桐生に質問を返す。その会話に興味を示した谷村が便乗してきた。まさか、アイドル等に興味が無さそうな桐生がスクールアイドルである真姫を知っているとは思っていなかったからだ。

「…実は今日、さつき谷村が言っていた千両通りの店で偶然、会ったんだ。その店は開店したばかりだが、満席だな。それで相席する場所にいたのが真姫達だったんだ」

「え？真姫達という事は他に、sのメンバーがいたという事ですよ？それは誰だったんです？」

その話を聞いて、興奮した様に聞いてくる谷村に戸惑いながらも桐生は答えた。

「あ、ああ。他にいたのは凜と花陽だ。花陽とは以前にも会った事があってな。まさか、その店で再会するとは思って無かった」

「何や、桐生ちゃんは真姫ちゃんだけでなく、花陽ちゃんと凜ちゃんとも会ったんか。しかも、花陽ちゃんと以前も会ってたとは驚いたで」

「確かに桐生さんがその子達と会っていた事も意外ですけど、俺としては真島さんがその子達とどうやって、知り合ったのかが気になりますけどね」

「言われてみると、そうだな。二人共、アイドルとかそういうものに縁が無さそうだしよ」

三人の会話を静かに聞いていた秋山と伊達も口を挟む。お互い、縁の無さそうなアイドルをやっている子に出会った経緯が気になっていた。その事を聞かれた真島とその時の事を思い返しながら話します。

「ワシがμ、sの子達と出会った経緯かあ。確か、初めは秋葉原の住宅街に美味しいと評判の和菓子屋があると組の奴から聞いてのう。そんで買いに行ったんや。それで道に迷った時にある三人組に出会って、その子達に道を聞いたらその中の一人が和菓子屋の娘さんでな。和菓子屋の場所を教えてくれたんや。ついでにお勧めの和菓子もな」
「へ〜 そうなんですか。ちなみにその三人組って、高坂穂乃果 園田海未 南ことりと言うんじゃないですか？」

「そや、良く解ったな。てか、自分 妙に詳しいのう。もしかして、μ、sのファンなんか？」

「ええ 実はそうなんですよ。非番の時、暇つぶしに秋葉原をぶらついていたら…μ、sが路上ライブをやってるのを見ましてね。彼女達の歌や踊りにすっかり魅了されて、それでファンになったんです」
興奮して話に食い付く様子からもしやと思い、真島が尋ねると谷村は自分がμ、sのファンである事をすんなりと認めた。そんな谷村に伊達が言葉を投げ掛ける。

「ほう。芸能人とかに興味がねえと言ってたお前がそこまで褒めるとはなあ。その…ミューならたらかいうアイドルは相当凄いな」
「そうなんです！彼女達は凄いですよ。アイドルと名乗ってますけど、彼女達はプロではない。だけど、歌も踊りもプロ顔負けですからね。それと、名前はミューならじゃなくてμ、sですよ」
「そ、そうか。μ、sってのは凄いな」

話に混ざって来た伊達にμ、sの魅力を熱弁する谷村に伊達は若干、引いていた。勿論、人の趣味にとやかく言うつもりはない。だが、普段と違う彼の姿を見て、そこまで人を夢中にさせるμ、sに伊達も興味を抱いていた。

「それで桐生 お前の方はどういう経緯でその子達と会ったんだ？」
「ああ さつきも言ったが俺が初めて会ったのは花陽だ。偶々、神室町を歩いていたら道に迷ってる花陽がいてな。何やら、困っているみたいだったし、放っておけずに俺が道案内をしてやったんだ」
「フツ お人好しなのは相変わらずの様だな。そんなお前の事だ。さつき、話に出た子以外にも会った事があるんじゃないのか？」

何年経っても変わらない桐生にお人好しぶりを伊達は感心していた。そして、何かしらと騒動に巻き込まれやすいのが桐生である。伊達は他にも会った子がいるのではと桐生に尋ねた。

「伊達さんには敵わないな。確かに他にも会った事がある子がいるぜ。名前は東條希という子で街の案内を頼まれた事があるんだ」

「成程な。しかし、道に迷っていた花陽という子はまだしもだがよ。その子はお前に街を案内してくれだなんて変わってるな。こういう言っでは何だが、お前は人相が悪いからな」

桐生話を聞いて、伊達は思っていた事を口に出す。弱い者には手を出さず、寧ろ自分から弱い人の為に進んで助けに行く男だと伊達は知っている。だが、知らない人からしたら人相の悪い桐生はそのつもりが無くとも相手を威圧してしまう。だからこそ、自分から進んで案内を頼んで来た希が変わり者だと伊達は感じていた。

そう言った伊達に桐生がこう言葉を返す。

「ああ 最初は俺もそう思っていたんだ。大抵の人は俺を見て、怯える事が多いからな。実を言うと希は俺が花陽を脅けると勘違いしていたらしい。だが、花陽が事情を説明してくれたようで俺を恐れる事なく話しかけてきたというわけだ」

「そういう事か。お前の人望の凄さには驚かされてばかりだな」

「フツ そんな伊達さんだって、色んな人に慕われてるじゃないか」

「そうだな。まだまだ、ケツの青いひよっ子だがよ。まあ、慕われるのは悪い気はしねえな」

「ひよっ子なのは認めますけど、ケツが青いつてのは余計ですよ」

伊達の言葉で不貞腐れた顔をする谷村を見て、桐生と伊達は笑みを溢す。

そんな時、今まで黙って話を聞いていたママが楽しそうな雰囲気にな釣られてか会話に混ざり込んで来た。

「ちよつと聞きたいのだけれど、そのμ sには背が小さくて髪を左右に束ねてる子はいるかしら?」

「あ、いますよ。それは矢澤にことという子です。それにしてもママさんμ sの事を知っていたんですね」

ママの質問に答えた谷村はママが、sを知っていた事を驚いていた。そんな谷村にママは街で起きたある事を話し始めた。

「いえ、私は、sの事はよく知らないわ。ただ、つい先日、買い出しで街を歩いていたらその子が私に声をかけてきたの」

「それが矢澤にこだったという訳ですか。一体、どんな話をしたんです?」

自分の話に食い付いてくる谷村に苦笑い浮かべながら、ママは話を続ける。

「それで話を聞くとね。買い物を終えて店から出てきたら、外で待ってる筈の弟さんがいなくなったらしいわ。それでその子を見てないかと聞いてきたのだけど、私は見てないと答えたら落ち込んだ様子でお礼を言っただけで走り去っていったの。あの後、どうなったのかは解らないけれど」

ママの話を聞いていた秋山は秘書である花から聞いた事件を思い出して、ママに教えた。

「そんな事があったのか。それと以前に神室町で店の外で待つてる子供が誘拐される事件があったと花ちゃんから聞いたよ」

「そういえば、そんな事件が起きたとテレビでやってたわね。まさか、その子の弟さんも誘拐されたとか」

「心配しなくても大丈夫ですよ。その犯人はすぐに捕まったし、その子が誘拐されたという通報は来てませんからね」

「そうなの。それならよかったわ」

秋山の話聞き、不安な表情を浮かべてそう呟くママに谷村は明るい様子でそう言った。その言葉を聞いて、ママもホッとした様子を見せる中、一人だけ浮かない顔をしている男がいた。その様子に気付いた秋山が声をかける。

「おや? 桐生さん 浮かない顔してどうしたんですか?もしかして、具合でも悪いんですか?」

「え?あ、いや 何でもない。所で秋山の方は何か、変わった話は無いのか?」

話しかけてきた秋山に桐生は誤魔化すように話題を逸らした。その事を不審に思いながらも秋山は身近にあつた事を話し出す。

「うーん 変わった事ですかあ。何か、あつたかな…あ、そういえば、ついこの間にすごく綺麗な女性がスカイファイナンスに来たんですよ」

「お、そうなんか？あんたの所に金を借りに来るとは、物好きな人もおるもんやな」

「物好きって…確かに変わってるけど、うちはまともな会社ですよ」

「ま、そないな事はどうでもええ。それより、続きをほしいや」

「どうでもいいって…まあ、いいか。それでその人は音ノ木坂という学校の理事長をやってましてね。娘の為に金を貸して欲しいと言って来たんですよ」

真島の痛烈なツツコミに若干、落ち込みながら秋山は続きを話す。その内容にまたもや、ある男が反応して顔を顰めていた。そうとは知らずに真島がさらに突っ込んで話を聞いていく。

「ほう、娘の為にのう。そんで、お前さんはその親にどんなテストをやらせたんや？」

「ええ、それでやらせるテストの為にその人を調べたら、娘さんがアイドル活動をしている事が解りましたね。私はその人に出したテストの内容というのが、現役アイドル又は元アイドルが身内にいる人と知り合いになるというものです」

秋山の言葉で桐生は更に顔を顰める。先程から様子がおかしい桐生に溜まらず秋山が問い詰める。

「桐生さん さっきから変ですよ。ママの時といい俺の時といい、妙に反応してますね。もしかして、何か隠している事があるんじゃないんですか」

「な、何を言ってるんだ。そんな事ある訳ないだろう」

誰が見ても秋山の言葉で桐生が動揺しているのは丸分かりだった。そして、この場にいる者達はそれを見逃す程、優しくはない。皆はそれぞれ言葉で桐生を責めたてていく。

「怪しいのう。そないに動揺してたら、自分は隠し事をしてますと言ってるようなもんやで」

「そうだぞ。それに長い付き合いの俺にも言えないのか？お前も冷たくなつたな」

「会つた時は噂以上に心が広い男と思つてましたけど、意外に桐生さんも心が狭いんですね」

「その通りですね。伝説と言われた男も蓋を開けば、こんな感じなんだなあ」

「ええ 折角、楽しく盛り上がってるのに水を差す様な真似をしちや駄目よ」

「ぐっ…皆、揃いも揃つてそこまで言う事はないだろう。いくら何でもあんまりじゃないか」

それぞれが言い放つ言葉は桐生の心を容赦なく抉つていく。流石に我慢が出来なくなつたのか、ムツとした表情で言い返した。桐生と付き合いが浅い者はやり過ぎたかなと思ひ反省をするが、桐生と付き合いが長い真島と伊達は何処吹く風でさらに桐生を迫及する。

「ほなら、素直に白状しいや。下手に隠すからこういう事になるんやで」

「全くだ。恩着せがましい言い方になるけど、危ない橋を渡つて手に入れた情報を隠さずに教えたじゃねえか。それなのにお前は隠し事をするたあ見損なつたぞ桐生く」

酒が入っているがシラフを保っている真島と違って、伊達の方は完全に酔っぱらっている。こうなつた人間に逆らうのは場を拗らせるだけである。そうなれば、面倒な事になると思つた真島が小声で桐生に囁く。

「伊達のおっさんは完全に酔つとるで。こうなると後が面倒や。散々、好き勝手言つてたワシが言えた事やないけど、素直に言つた方がええ」

「ああ そうだな。解つたよ。全部、話すぜ」

酔っ払いに逆らうのは得策ではない事を桐生も知っている。それ故、真島の提案を受け入れて桐生は隠している事を話すと決めた。だ

が、桐生は大事な事を忘れていた。

この場にいる者は皆、一癖も二癖もある連中である事を…

その言葉を聞いた真島はニヤリと笑って、その場にいる皆に向かって言葉を発した。

「皆、聞いてったか？桐生ちゃんは素直に白状するそうやで」

「おっ やつと、腹を決めたか。全く、余計な手間を取らせやがる」

「な、これはどういう事だ？まさか、さつきのは伊達さんと真島の兄さんの演技だったのか」

「やつと、気付いたんか。あつさり引つかかる桐生ちゃんを見て、笑いを堪えるのが大変やつたで」

「まあ、悪く思うなよ。頑固なお前はこうでもしないと話さないだろ。下手な抵抗してないでさつきと吐いて、楽になれよ」

先程と違いすっかりとした口調で伊達は話している姿を見て、自分が一杯食わされた事を知る。言い逃れをしようにも全部話すと言った以上、あとの祭りである。深い溜息を一つ吐き、観念した桐生は洗いざらい話す事にした。

「解った。じゃあ、まずはにこの事から話すでしょう。あの日、俺は寒くなってきた事もあって、防寒着を買いに街へ繰り出したんだ。その道中に小さい男の子を連れだした女の子に会ったんだ」

「あ、それが矢澤にこだったんですね」

「ああ そうだ」

「そうなんか。それで、話に出てきた小さい男の子は誰なんや？」

「ああ、その子は虎太郎という。小さくとも大人に負けない勇気を持っててる子だ」

桐生は姉の為に立ち向かう虎太郎の姿を思い浮かべて、そう言った。珍しく嬉しそうに話す桐生を見て、真島が尋ねる。

「ほう。桐生ちゃんがそこまで言うとは珍しいのう。その子は一体、

何をしたんや？はよ、続きを教えてや」

「ああ そうだな。その後、防寒具を買って帰ろうとしたら：店先に一人で立っている虎太郎を見かけてな。俺は交番に連れて行く事にしたんだ。その朝にテレビのニュースで神室町の誘拐事件を知っていたからな」

「ああ あの時、あの子が探していたのはその男の子だったのね。てつきり、誘拐事件が起きたと思ったもの」

「これは驚いた。奇妙な偶然もあるんだなあ。道理でその通報が無かったわけだよ」

桐生の話を聞いてママと谷村は驚いていた。まさか、こんな所で話が繋がるとは思っていなかったからだ。

「それで交番に連れて行く途中で姉であるにこが追い付いてな。本人も俺が虎太郎を誘拐したと思っていたよ。きちんと説明して誤解は解く事が出来たが、その話をしてる最中に虎太郎が姿を消してしまつてな。今度はにこと一緒に探す羽目になったんだ」

「あらま、それは一大事ですね。それで虎太郎くんは見つかったんです？」

桐生の話にはハラハラしながらも続きを促すママに桐生は話を続ける。

「ああ 付近の店や行人に聞いて回っていたら、路地に入つて行くの見たと教えてくれた人がいたんだ。それでその路地で虎太郎を見つけたが、あろうことかチンピラに絡まれていてな。それを見たにこが間に入つていつてな。虎太郎を連れて行こうとしたにこをチンピラが平手打ちしたんだ」

「そうやったんか。そないな事するとは、そいつらは男の風上にも置けんの。それで桐生ちゃんが助けに入ったつちゆう訳やな」

「まあな。だけど、俺より先に虎太郎がにこを殴った奴に蹴りを入れたんだ。自分の姉に酷い事をする奴らを虎太郎は許せなかったんだろう」

「ほう。そないな事をしたんか。その坊主は度胸あるのう」

「本当ね。だけど、その子はそんな事して大丈夫だったの？」

虎太郎の行動に感心する真島の横でママは心配そうに桐生へ尋ねた。

「案の定、チンピラは逆上して虎太郎を殴ろうとした。だが、間一髪の間で間に合って虎太郎に怪我はなかった。にこの方も頬が少し腫れていたが、幸いにも大事はなかった」

「それはよかった。それにしても酷い奴らだな。そいつらの特徴を覚えてくれますか？おれがしょっ引いてやりますよ」

「バカ！警察が私情を挟むんじゃない。そんな事したら、承知しねえぞ」

「じよ、冗談ですよ。本気でやるわけないじゃないですか」

「フツ まあ、そいつらにはお灸を据えておいたからな。心配はいらねえさ」

憤慨して逮捕してやると息巻く谷村に伊達は注意をする。そんな二人を見て、桐生は笑いながらそう言うと言うと伊達は頭を抱えてこう呟いた。

「全く、お前ら二人して血の気が多いんだよ。まあ、女や小さい子供に手を上げるような奴は俺も許せねえけどよ」

「俺が隠していた事はこれだけだ。この話はもう終わりでいいだろう？」

「いや、まだあるでしょう。ママの話に反応した理由は解りましたけどね。俺の話に反応した理由を聞くまでは終わりませんよ」

自分が隠していた出来事を話し終わり、一息吐く桐生に秋山はそう告げた。一つの疑問は解けたが、もう一つの疑問が残っている。その事は秋山の中でモヤモヤとして残っていた。

「そーいや、お前さんの話を聞いた時も妙な反応しとったな。桐生ちゃんはまだ、隠してる事があるんとかやうか？」

秋山の言葉でその事を思い出した真島も桐生にそう言うと言おうと桐生は動揺して言葉を詰まらせる。他の三人もそんな桐生に視線を送っていた。

自分に向けられる視線とその場の空気に耐え切れず、桐生は再び深

い溜息を吐くと口を開いた。

「…解った。話せばいいんだろう。だから、皆もそんな風に俺を見ないでくれ」

「漸く、話す気になりましたか」

「そういう状況に追い込んでおいてよく言うぜ」

「まあ、そう言われるとそうなんですけどね。だけど、桐生さんも勿体ぶって隠すからこうなるんですよ」

秋山の言葉は尤もである。そう思った桐生は隠していたもう一つの出来事を話し出す。

「…それもそうだな。それで秋山が言っていた女性だが、実はその人とも会った事がある」

「そいつは驚いた。会った事があるならその人の名前を知ってますよね?」

「何だ、疑っているのか。名前は知らないが、苗字は知ってる。確か、南と言ってたな」

「うん?南やと。もしかして、その人はことりちゃんのオカンやったりしてな」

桐生と秋山の会話の中で出てきた南という言葉に真島は反応して口を挟む。そんな真島に秋山はこう返した。

「ええ 真島さんの言う通り、その方は南ことりちゃんという娘さんがいます。アイドルをやっている娘の親なら、アイドルに詳しいだろうと思ってアイドルが知り合いになるというテストを出したんですよ」

「そうやったんか。それにしても随分とキツイ課題を出すんやな」

「確かにキツイですけどね。それでも出来ると思ったからこのテストを出したんです。そして、見事にその日の内にテストをクリアしましたよ。だけど、その報告に来た時…その人は酒の匂いがしたんですよ。その事も桐生さんが関係してるんじゃないんですか?」

「ああ 確かにその人と酒を飲んだ事はあるぜ。あの日は喫茶アルプスに行ったら、遙の事を口にする人がいてな。思わず、声をかけたんだ。それで意気投合して、その日の夜に酒を飲む約束したんだ」

「桐生ちゃんもやるのう。初対面の人に声をかけるだけやなくて、一緒に飲むまでの仲になるとはな。まさか、その後は一線を超えてヤツてもうたんか？」

桐生の話を聞いていた真島は厭らしい笑みを浮かべてそう言った。だが、桐生はそんな真島を受け流すところ答えた。

「いや、そんな事はしていない。俺もそういうつもりで誘った訳じゃないからな。お互い、自分の娘の事を話していただけた。その後はそのまま別れたよ」

それを聞いた真島はつまらんとぼやくと興味を失くしたのか、カウンターに腰かけて酒を飲み始めた。

それを見ながら、秋山は納得した様子で桐生に言葉をかける。

「成程。だから、酒の匂いしたのか。漸く、合点がきましたよ」

「まあ、話してみれば何てこともないんだがな。ただ、それを言うのが少し恥ずかしくてな」

「そういや、狭山がアメリカに行つて以来、お前に女つ気は無かったからな。まあ、偶にはそういうのもいいじゃないか」

「そうですね。さて、俺の疑問も解消出来た事だし、気を取りなして飲みましよう」

「フツ そうだな。それじゃあ、再会を祝して改めて乾杯するとしよう」

そうして、三人はカウンターに向かつていく。

この夜 ニューセレナでは男達の笑い声が絶える事は無かった。

その後 楽しい酒盛りは朝まで続き、全員二日酔いに悩まされる事になる。

サブストーリー012 神室町はハラショーな人で
いっぱいです

大晦日の翌日 元旦の神室町に桐生の姿があった。

今日は元旦という事もあり、街には大勢の人が訪れていた。桐生が
辺りを見回すとその場には着物を着た女性や紋付袴を着た男性もい
れば、カジュアルな服装の若者の姿がいたりと様々な人が目に映る。
今年は劇場広場で行われる催しを一目見ようとやって来た人達に
よって、劇場広場へ続く道は隙間もなく埋め尽くされている。

そんな人ごみの中で桐生は溜息を吐きながら、自分が人ごみに揉ま
れる原因を作った真島に心の中で愚痴を溢していた。早朝 真島か
ら電話がかかって来て、劇場広場に来いと呼び出されたのだった。

(全く、今日は寒いからホテルでゆっくりしようと思っていたのに。
元旦から人ごみの中を歩く羽目になるとはな・・・ 恨むぜ 真島の
兄さん。しかも、早朝から遠慮なしに電話してくるんだから堪ったも
んじゃないな。それにしてもアサガオの皆はどうしてるだろうか？
はあ、本当なら今頃はアサガオの子供達と遥が作った雑煮やお汁粉を
食べている頃なのに。まあ、今は先を急ごう。約束の時間に遅れたら
真島の兄さんがうるさいからな)

こんな事を考えても仕方がない。桐生はそう気持ちを切り替え、約
束の場所へ向かう事にした。

そして人ごみの中を歩いていた桐生が、ふと路地に目をやると三人
組の少女達の姿が視界に入った。一人目は片方のみ髪を結んだ明る
い印象の少女。二人目は短い髪が特徴の大人しい印象を感じさせる
少女。三人目は金髪を後ろで纏めた大人っぽい印象を与える少女で
ある。

金髪の少女は何やら、焦った様子で二人の少女に何かを言ってい
る。見ると二人の少女も焦っている様子であった。何か、問題が起き

たのだろうか？その三人の少女達が気になった桐生は人ごみから抜け出ると、路地にいる三人へ声をかけた。

「すまない。少し、いいだろうか？」

「え？は、はい。私は大丈夫ですけど…貴方は一体、どちら様ですか？」

「俺は桐生という者だ。道を歩いていたら、三人を見かけてな。何やら、困っている様子だったから気になって、声をかけたんだ。良かったら話してくれないか？何か、力に慣れるかもしれないからな」

「それは助かります。ですけど、どうして見ず知らずの私達に手を貸してくれるんですか？失礼ですけど、裏があるんじゃないんですか？」

「ちよつと、雪穂。本当に失礼だよ」

「そうね。でも、雪穂ちゃんの言ってる事も一理あるわね」

「そんな!?絵里ちゃんまで… この人が親切にも協力してくれると言ってくれてるのに…」

「ええ。それは分ってるわ。だけど、雪穂ちゃんの言ってる事も尤もだと思うの」

親切心には裏があるのではないか？髪の毛の短い少女 雪穂は疑いの視線を向けて桐生にそう言葉をぶつける。その言葉を髪を結んだ少女が諫めた。そして、もう一人の金髪の少女 絵里も雪穂の言葉に賛同する。その事に髪を結んだ少女は反論するが、絵里は慣れた様子で落ち着かせると桐生に向き直って口を開いた。

「私も初対面の貴方が何故、協力をしてくれるのかが気になります。だから、正直に答えて下さい。どうして…私達に協力をしようと思っただんですか？」

絵里は桐生の目をまっすぐ見つめて尋ねてきた。桐生自身、何も裏なんて無いのだが…確かに初対面の人間が協力を申し出てきたら、警戒されるのは無理もないだろう。このままでは話も進まない為、桐生は絵里の問い掛けに対して、素直な気持ちを吐き出した。

「確かに初対面なのに手を貸すと言ってくる人が怪しいと思う。それは当然の事だ。だが、俺はあんたらを騙したり、危害を加えようなんて思っていない。俺が手を貸すと言ったのは、困ってる人間を放っておけない性分だな。それにこの街で嫌な思いをして、あんた達に神室町を嫌いになって欲しくないというのが一番の理由だ」

桐生も同じく絵里の目をまっすぐ見つめて、そう言った。その言葉に嘘は無いと判断したのか、絵里は頭を下げると自分の非礼を詫びる言葉を口にする。それに続いて、雪穂も頭を下げて謝罪した。

「それが手を貸してくれる理由だったんですね。それなのに桐生さんの親切心を疑ってごめんなさい」

「私もごめんなさい。先程は失礼な事を言ってしまいました」

「いいんだ。それより、何があつたのか教えてくれないか？」

桐生は頭を下げる二人にそう言葉をかけて、三人に何があつたのか事情を尋ねた。絵里は頭を上げると事情を話し出す。

「ええ。実は…今日、私達は街で行われる催しを見に来たんですが、人ごみを移動してる時に妹と逸れてしまったんです。それで私が妹を探しに行こうとしたら、二人に止められてしまって…」

「だって、こんな人が多いんだよ。それに私達、この街に来たのは初めてだし、土地勘が無いから逆に迷子になっちゃうよ」

「そこは私もお姉ちゃんに賛成だよ。ミイラ取りがミイラになってしまったら、本末転倒ですよ」

「…確かに二人の言う通りだな。下手に動いて、探す側が迷ったら元も子もない。妹さんとは何処で逸れたんだ？それも教えてくれないか」

大体の事情を知った桐生は絵里が妹と逸れた場所について聞いた。広い神室町を闇雲に探すより、逸れた場所を中心に探す方がいいと思っただけである。妹と逸れた場所を尋ねられて、その問いに答えようと口を開いた時、絵里はある事に気が付いた。

絵里は申し訳なさそうな表情でその事を桐生に告げる。

「そういうえば、私達は自己紹介してませんでしたね。桐生さんに名前

を聞いておいて自分達だけ自己紹介しないのは失礼ですし、先に自己紹介をさせて下さい」

「ん？ああ、言われてみれば三人の名前も逸れた妹の名前も知らないな。それに名前も知らずに逸れた妹を探すのは無理だからな。解った 三人の名前を聞かせてくれ」

絵里に言われて、桐生もまだ三人の名前を知らない事に気が付いた。今までの会話の中で二人の名前が出てきたが、此処は自己紹介をしてもらった方がいいだろう。桐生は絵里の発言に首を縦に振って名前を尋ねた。

最初に自己紹介を始めたのは、髪を片方だけ結んだ子だった。

「それじゃあ、まずは私から。私は高坂穂乃果と言います。よろしく桐生さん」

「ああ よろしくな。それで隣の子は穂乃果の妹なのか？」

そう呟き、桐生は穂乃果の横にいる雪穂に目を向けた。桐生の言葉に雪穂は頷くと穂乃果に続いて、自己紹介をした。

「ええ そうですよ。私は高坂雪穂です。桐生さんの言う通り、私の姉です。姉としては頼り無いですけど…」

「むゝ それはどういう意味？これでも最近はしっかりしてると言われる様になったんだよ」

「最近はでしょ？結局、頼りないのは事実じゃん」

「もう！ああ言えばこう言うんだから、雪穂つてば可愛くない」

「余計なお世話だよ。お姉ちゃんがそんな事だから、海未さんやことりさんに苦労かけるんだよ」

「ほらほら、二人共。そこまでよ。まだ自己紹介は終わってないのよ」
「うっ 確かにそうだね。ごめんなさい」

「私もごめんなさい。見苦しい所をお見せしました」

自己紹介の途中、雪穂の言葉に反応した穂乃果が食ってかかる。売り言葉に買い言葉でお互いが言い合っていると、見かねた絵里が間に入って二人を止める。諫められた二人も反省した様子で言葉を紡い

だ。そして気を取り直し、絵里は自己紹介をする。

「最後は私ね。私は絢瀬絵里と言います。それと逸れた妹は亜里沙です」

「逸れたのは亜里沙という子か。さつきも聞いたが、その子とは何処で逸れたんだ？」

三人の自己紹介も終わり、桐生は本題である逸れた亜里沙の事を絵里に聞いた。絵里も記憶を辿りながら桐生の質問に答える。

「確か、私達はバスを降りてから中道通りという道を通っていたんです。それで気が付いたら、もう亜里沙がいなくなってます」

「成程。それなら、まずは中道通りから探してみよう。もしかしたら、その子を見た人がいるかもしれないからな」

「解りました。二人もそれでいい？」

「うん。穂乃果は特に意見は無いよ。早く、見つけるなら桐生さんの提案がいいと思う」

「そうだね。街全体を探す訳に行かないですから」

「善は急げだ。早速、行くとしよう」

絵里の話聞いて、桐生は中道通りを探そうと提案した。三人も桐生の提案に賛成した事で話が纏り、4人は亜里沙を探す為に中道通りへ向かっていった。

一方、その頃 真島は桐生との待ち合わせ場所である劇場広場へ向かう為、泰平通りを歩いていた。その道も人ごみで溢れていたが、真島の姿を見た通行人が避けていく。素肌にパイソン柄のジャケット、黒革のズボンに蛇の模様が入った眼帯。そんな格好をしてる人を見れば、通行人の行動は当然といえる。最も、通行人を恐れさせているのは素肌から覗く入れ墨が一番の原因だろう。

そんな通行人の事など、何処吹く風といった様子で進む彼の目にある少女が目映る。その少女は困った顔で辺りをキョロキョロと見回している。そして、不意に少女と目が合うとその子はこちらへ駆け

寄り声をかけてきた。

「あの、すみません。ちょっと聞きたいんですけど、いいですか？」

「ええで。せやから、少し落ち着きや。早口過ぎて聞き取り辛いで」

焦っている為か、やや早口で言葉を紡ぐ少女に真島はそう言葉を返す。

「は、はい。そうですね。ごめんなさい」

「別に怒つとるわけやないから謝る必要は無いで。そこで、聞きたい事って何なんや？」

「あ、実は人と逸れてしまったんです。それで探していたら、余計に迷ってしまって…」

「そうやったんか。その逸れた人達とは何処に行くつもりやったんや？」

話を聞くと逸れてしまった連れを探していたら、完全に迷子になったようだ。そんな少女に真島は何処に行くのかを聞いた。それが分かれば、街を把握してる自分が案内する事が出来るからだ。

「行く予定の場所ですか？ええと、確か…劇場広場って、お姉ちゃんが言っていました。そこでやる催しを見に行こうと皆でこの街に来たんです」

「ほう 劇場広場か。それは奇遇やのう。ワシもそこに行く所やで。そや、どうせなら一緒に行かへんか？もしかしたら、嬢ちゃんの連れもそこにいるかもしれんしの」

「いいんですか？それでしたら、道案内をよろしくお願いします」

偶然にも目的地が一緒という事もあり、真島は少女にそう提案した。少女も渡りに船ばかりに真島の提案を受け入れて一緒に行動する事を決めた。

「さよか。ほな、行くとするかの。そうや、まだ名前を言っとらんかったな。ワシは真島吾郎や。嬢ちゃんの名前は？」

「私の名前ですか？私は絢瀬亜里沙と言います。今日は私の姉と友達のお姉さんと来たんです」

「そうやったんか。それで亜里沙ちゃん、そのお姉さんや姉妹はどういう子達なんや？」

お互いの紹介が終わり、会話の中に出てきた姉妹や姉の事を尋ねると亜里沙は満面の笑顔で語り出す。

「今日、一緒に来た姉妹は姉の高坂穂乃果さんとその妹で友達の雪穂。あとは私のお姉ちゃんのお瀬絵里です。それと私の姉と穂乃果さんはスクールアイドルもやっていましたんですよ」

「何や？今日、一緒に来た人の中に穂乃果ちゃんと雪穂ちゃんもいるんかいな」

「え？真島さん。穂乃果さんと雪穂を知ってるんですか？一体、何処で会ったんです？」

真島の言葉に亜里沙は目を見開き、驚いていた。まさか、二人の事を知ってる人に会うとは予想もしていなかったからである。そして自分が好きな人を知ってる事が嬉しかったのか、亜里沙は興奮した様子で質問を真島に質問を投げかけた。

そんな亜里沙に真島も驚き、心の中である事をぼやいていた。

（しかし、最初は大人しそうに見えたが…この子はグイグイと来るのう。まるで穂乃果ちゃんみたいやな。まあ、本人も穂乃果ちゃんの事が好きそうやし、知らない所でいい具合に影響もあるんやろうな。せやけど、あの2人を知つとるだけやなく、亜里沙ちゃんのお姉さんもスクールアイドルをやっていたとは世間は狭いで）

「真島さん？ぼーつとしてますけど、どうかしました？」

心の中でぼやく事に気を取られていた真島に亜里沙が声をかけられ、ハツとすると亜里沙に言葉を返した。

「あ、ああ すまんの。ちよつと、ぼーつとしたりしたわ。ワシが二人に会ったのは、ある住宅街に美味しい和菓子屋があると耳にして…買いに行った日に会ったんや。そこで少しばかり騒動が起きたんやけど…それが切欠で穂乃果ちゃんのお家族とも仲ようなつてな。それ以降、穂むらの常連ちゆうわけや」

「ハラショー そんな事があつたんですね。それじゃあ、海未さんやことりさんにも会った事があるんですか？」

「おう、その二人も知つとるで。ワシが穂乃果ちゃん達と初めて会った時も三人一緒やったしな。仲がええのがよう分かるわ」

「三人は小さい頃から一緒だったと雪穂から聞きました。だからこそ、三人の絆も強く結ばれてるんだと思います」

「そうかもしれへんな。お、話してる内に劇場広場に着いたようやな。それにしても、すごい人ごみや。この中に亜里沙ちゃんの連れがおるかもしれないが、見つけるのは容易やないで」

会話をしている内に二人は劇場広場へ到着するが、大勢の人でごつた返している。当然、その中から特定の人を見つける事は不可能だろうと思ひ、真島はある提案を亜里沙にする。

「そうや。ワシと一緒に見たらどないや？折角、それを見る為に来たんやからな。それに催しが終われば、人も散らばるだろうから連れも見つかりやすくなるしの。亜里沙ちゃんはどうしたい？」

「うーん 私は…催しが見たいです。今日やる獅子舞がとても楽しみでしたから。だけど、他の皆が自分を探してるのに一人だけ楽しんでいいのかな？」

真島の提案に賛成した亜里沙だったが、逸れた自分を探してる皆を差し置いて一人だけ楽しむ事に亜里沙は抵抗を感じていた。本来なら皆で見る筈だったのだから、亜里沙がそう思うは無理もない。そんな亜里沙に真島は優しく言葉をかける。

「亜里沙ちゃんは優しいのう。せやけど、ワシは一人で楽しんでもええと思うで。それに亜里沙ちゃんの好きな人達はそないな事で怒ったりしない。それは亜里沙ちゃんも分かっつとる筈や。まあ、連れが見つかった時はワシも口一緒に謝つたる」

「…真島さん。はい そうですね。確かに此処まで来て、楽しまないのは勿体無いでもんね。皆にはあとで謝る事にします」

真島の言葉で踏ん切りが付いたのか、亜里沙は笑顔でそう言った。

「決まりやな。ほな、良く見える場所に行くで」

「はい 行きましよう」

「あ、そうや。今日、ワシの連れが一人来る予定やったが来てへんようやな。ちと、歩きながら電話してもええか？」

「真島さんの友達ですか？はい 良いですよ。一人でも多く一緒に見れたら、楽しそうです」

「おおきにな。ほな、電話させてもらうわ」

そうして二人は獅子舞が見やすい場所を探して、人ごみの中へ進んでいく。その最中、未だに來ていない桐生が気になった真島は亜里沙に断りを入れて、電話をかけた。

場所は変わり、桐生達は亜里沙を探して中道通りに訪れていた。大方、來ていた人は劇場広場へ移動が済んだのか、先程よりも通行人数が減っていた。道を歩く通行人を見渡して、桐生が口を開く。

「亜里沙と逸れたのは此処だったな。どうだ？ 亜里沙の姿はあるか？」

「いえ、残念ながらありません。人ごみに流されて別の道へ行ったのかも」

「成程。それなら亜里沙は泰平通りにいるかもしれないな」

「それじゃあ、泰平通りに行ってみましょう」

街に足を運んだ人達の目的地は劇場広場である。もし、人ごみに流されて別の道へ行ったなら亜里沙は泰平通りにいるだろう。桐生の言葉を聞いて、絵里は泰平通りに行こうと進言した。その時、桐生の胸ポケットにある携帯が震え出す。それを手に取って見ると、液晶には真島と表示されていた。そこで桐生は真島と会う約束をしていた事を思い出した。恐らく、到着が遅い自分への不満を感じての電話だろう。

「どうやら、知り合いから電話が來たようだ。少しばかり、時間を貰っていいだろうか？」

「ええ どうぞ。私達の事は気にしないで下さい」

「すまない。すぐに済ませる」

真島からの電話を無視をする訳にもいかず、桐生は絵里達に断りを入れて通話ボタンを押した。電話が繋がると不満気な真島の声が電話先から聞こえてきた。

「遅いでえ 桐生ちゃん。今、何しとんのや？ そろそろ、催しものが始まるで。早よ、来いや」

「すまない 真島の兄さん。連絡するのを忘れていた。ちよつと、あの事をしていてな。そつちに行くのはもう少し掛かりそうなんだ」
「何や？そのある事ちゆうのは？桐生ちゃんのことだから、放っておけないかと思うて厄介事に首を突っ込んだんやろ？全く、相変わらずお人好しやのう」

真島の言葉に桐生はぐうの音も出なかった。真島の言っている事はほぼ当たっていたから…

「無言という事は凶星のようやな。はあ、そんで一体、どないな厄介事なんや？言うてみい」

「しかし…」

「しかしもかかしもあらへん。その厄介事が片付かんと桐生ちゃんはこつちに來られへんのやろ？せやから、ワシも協力したる。一人で抱え込まんと素直に言えや」

真島の言ってる事も尤もである。確かに問題が解決しない限り、桐生は約束の場所に行く事が出来ない。桐生自身もそれは分っているので、素直に真島の手を借りる事にした。

「恩に着るぜ 真島の兄さん。実は…今日、真島の兄さんと見る予定の催しを見に來た人達と会ってな。話を聞くと連れの人一人が逸れたらしいんだ」

「ほう そうやったんか。まあ、今日は人が仰山おるからの。で、その逸れた人の名前は？」

「ああ。逸れたのはその人の妹で名前は…絢瀬亜里沙という子だ。名前は日本人のそれだが、見た目は金髪で外国人みたいな感じだ。真島の兄さんは見てないか？」

さつきと打って変わり、今度は真島が無言になった。桐生の会話に出た名前に憶えがあるから…その人物は真島の後ろで笑顔を見せて辺りを楽しそうに眺めている。真島が茫然としてみると、会話が途切れた事を不思議に思った桐生の声が聞こえた。

「どうしたんだ？真島の兄さん。さつきから黙っているが、何かあったのか？」

「あ、ああ。いや、何でもあらへん」

「…そうか。それで真島の兄さんはその子を見ていないのか？」

慌てて返事を返す真島に桐生は訝しげに思いながら、改めて尋ねた。それを尋ねられた真島は後ろにいる亜里沙を一瞥すると、意を決してあるがままを話し出す。

「その亜里沙という子なんやが…」

「ん？どうしたんだ？真島の兄さん。知っているなら勿体ぶらないで教えてくれ」

「今、ワシと一緒に劇場広場におるで。名前も同じやし、見た目も一致するから間違いあらへん」

「何!?それは本当か？その子は一体、何処で会ったんだ？」

「泰平通りや。そこを歩いていたら、その子が話しかけてきての。事情を聞くと、その子も連れと逸れたと言うとった」

「そうか。それなら今から俺も連れと一緒に劇場広場へ向かうぜ。そこで落ち合おう」

「解った。ほな、ワシはゲームセンターの前におるわ」

「ゲームセンター前だな。解った。それじゃあ、また後で」

桐生はそう言って電話を切ると、離れて待っている絵里達に電話の内容を伝える。

「待たせたな。いい報せが入ったぞ。どうやら、探してる子は俺の連れと一緒に劇場広場にいるそうだ」

「本当ですか!?良かったあ。それじゃあ、今すぐ行きましょう」

「亜里沙ちゃんが見つかって良かったね。絵里ちゃん」

「それと桐生さんの知りあいはどうな人なんですか？」

亜里沙が見つかった事で喜ぶ絵里と穂乃果を見ながら、雪穂は亜里沙を見つけたという知り合いの事を尋ねた。その知り合いの事を言ってもいいのかと迷った桐生だが、すぐ会うのだと思って知り合いの名前を三人に教える事にした。

「ああ その知り合いは真島吾郎という人だ。見た目は怖いが、根は優しい人だから安心してくれ」

「ええ、知り合いつて、真島さんだったの」

「どういう事だ？二人は真島の兄さんの事を知っているのか？」

「ええ 知ってますよ。大分、前から家の和菓子屋に買いにくるんですよ。今ではうちの常連です」

「そうなんだよね。それに他の客とも仲がいいし、いつも面白い話を聞かせてくれるからね」

「背景にはそんな事があつたのか。何とも奇妙な話だが、誰とも仲良くなれるのは真島の兄さんらしいな」

真島の名前を聞いて、大声を上げる二人に桐生は目を丸くして驚いていた。その事を桐生が聞くと、穂乃果と雪穂は笑みを浮かべて答えた。そして話が終わった頃を見計らって、絵里が声をかける。

「そろそろ劇場広場へ行きましょう。相手の方や亜里沙をあまり待たせる訳にいかないもの」

「そうだな。それじゃあ、行くとするか。そこまで案内するぜ」

桐生は絵里の言葉に頷くと二人が待つ場所へ三人を案内する。

数分後、劇場広場へ到着した4人は人ごみを避けて進んでいくと、ゲームセンター前で待つ真島と亜里沙の姿が目映る。それを確認した絵里が真っ先に駆けだすと亜里沙を抱きしめた。

「見つかって良かった。もう、すごい心配したのよ」

「うん 心配させてごめんね」

「それと真島さんでしたよね？亜里沙を保護してくれてありがとうございます」

「おう 別に大した事はしてへん。まあ、ワシの方も見つかった良かったと思ってるで。それにしても逸れた連れが穂乃果ちゃん達とは驚きやで」

「それを言うならこっちもですよ。まさか、桐生さんと真島さんが知り合いだとは思いませんでした」

「本当だよ。世間は狭いよね。そうだ、折角だから今日の催しを皆で見ようよ。まだ、始まってないみたいだし」

亜里沙が逸れた皆と再会出来て喜ぶ姿を見ていた真島だったが、今度は穂乃果と雪穂に顔を向けてそう言った。そんな真島に雪穂も桐生と知り合いだった事を驚いたと言葉を返した。そんな中、穂乃果が

皆で催しを見ようと彼女らしい提案を持ちかける。その提案を絵里と亜里沙は快く受け入れた。

「そうね。それがいいわね。桐生さんと真島さんにお礼もしたいからね」

「うん そうだね。やっぱり、皆と見る方が楽しいもん」

「せやな。楽しい思い出は皆で作った方がええからな」

「フツ 確かにそうだな」

「おい 皆、こつち こつち。ここならよく見えるよ」

「全く、お姉ちゃんたら落ち着きが無いんだから」

「そうね。でも、そこが穂乃果らしくていいと思うわ」

「うん 亜里沙もそう思う」

三人はそれぞれの言葉を残して、穂乃果の所へ走っていく。その三人を見つめながら、真島は桐生に言葉をかける

「どうや？穂乃果ちゃんはいええ子やろ？あの子の笑顔は人を明るくする魅力を秘めとるからの。まあ、他の子も負けなくらいええ子やけどな」

「そうだな。確かに他にはない魅力を俺も感じるぜ。真島の兄さんがあの子の家がやってる和菓子屋に通う理由も解るような気がする」

「せやろ？まあ、穂むらの菓子が美味しいのもあるんやけど、あの子の笑顔が見たいからと言うのもあるんや。それはワシ以外の客も思ってる筈やで」

「フツ そうなんだろうな。真島の兄さんの言う事も解るぜ」

「桐生さくん 真島さくん。二人も早く、そろそろ始まるよ」

「本人もああいうとるし、行くとするか」

「ああ そうだな。待たせるのも忍びない」

桐生と真島が話していると、遠くから二人を呼ぶ穂乃果の声が聞こえてきた。そんな穂乃果に二人は優しい笑みを浮かべると自分達を呼ぶ穂乃果に方へ歩いていった。

サブストーリー1013 仲良き事は素晴らしい

その日 桐生は秋葉原の住宅街を歩いていて、目的の場所である穂むらを目指しているが、変わらぬ風景と道で自分がいる場所が解らず迷っていた。

(何処を見ても似たような家しかないな。本当にこんな場所に和菓子屋なんてあるのか?この前に会った穂乃果という子から地図を書いてもらったが、ちっとも役に立たないしなあ。それに自分が何処にいるのかすら解らないからな。誰か人がいれば、道を聞けるんだがな) そんな愚痴を内心でぼやいていると目の前から一人の少女が歩いて来るのが目に映った。渡りに船だと桐生はその少女に声をかけた。

「すまない。少しいいだろうか?ちよつとばかり、迷ってしまつてな。道を教えて欲しいんだ」

「え?道ですか?それは構いませんが、何処へ行くんですか?」

「ああ 和菓子屋の穂むらという所に向かっているんだが、一向に辿り着けなくてな。この辺にあるのは確かなんだ。あんたは知ってるか?」

「ええ 知ってますよ。だったら、私が案内しましょうか?丁度、私も穂むらに行く予定でしたから」

「そうだったのか。此処で会つたのも何かの縁だ。それじゃあ、道案内をお願いするぜ」

「いえ、お気になさらず。それでは行きましょう」

桐生から穂むらの名前を聞くと少女は自ら道案内を買って出た。どうやら少女も同じ場所に行く予定だったらしい。目的が同じ場所ならと桐生は少女と一緒に穂むらへ向かう事にした。

「あ、私は園田海末と言います。貴方のお名前は何て言うんですか?」
「そういえば、まだ名前を名乗っていなかったな。俺は桐生一馬という。よろしく頼む」

「桐生さんですね。はい よろしくお願ひします」

「ああ。所で園田は穂むらという店にはよく行くのか？」

お互いの自己紹介を済ませると桐生は海未に尋ねた。その質問に答えるべく、海未は微笑んで口を開く。

「ええ よく足を運んでますよ。私とことりは穂乃果と友達であり幼馴染ですからね。そういう縁もありまして」

「成程。小さい頃からの付き合いなのか。それと園田が言っていたことりという子はどういう子なんだ？」

「ことりですか？一言で言うならほんわかとした雰囲気の子でしょうか。だけど、芯の強くて皆から便りにされています。そうそう 私の事は海未でいいですよ。周りからも名前で呼ばれているので苗字に慣れてないですから」

「解った。それじゃあ、海未と名前で呼ばせてもらうぜ」

桐生の言葉に海未は優しく笑って首を縦に振る。そして海未はあ
る事が気になり、その事を桐生に尋ねる。

「気になったのですが、桐生さんは穂むらの事を何処で聞いたんです
？」

「ああ 実は先日、神室町で高坂姉妹と絢瀬姉妹に会ってな。その4
人と別れる時に穂乃果からは是非来てくれと穂むらの地図を渡された
んだ」

「そんな事があったんですか。さり気なく、自分の店を宣伝するのも
穂乃果らしいですね。でも、地図を貰ったのなら迷う事は無いと思う
のですが・・・」

「それが普通の地図ならな」

そう言つて、桐生は海未に地図を手渡した。怪訝な表情で渡された
地図を海未が見ると、一転して呆れた表情へと変わった。

その地図には家と思しき四角の図形が上下に10個並んでおり、そ
の中の一つに矢印と一緒に“穂むらは此処”と書かれていた。最早、
それは地図ではなく子供の落書きと呼ぶべきだろう。確かにこれ
は目的地に辿り着くのは不可能だと思つて海未は溜息を吐く。

「成程。これでは道に迷うのは仕方ないですね。穂乃果は肝心な所でいい加減なんですから。穂乃果には私から後で言っておきます」

「いや、別にいいさ。こうして道を知ってる人と会えたわけだしな。それにあの子の事だ。店に来て和菓子を食べて欲しいという気持ちに嘘は無いだろうからな」

「…そうですね。確かに穂乃果は嘘が吐ける様な人じゃないですから」

「そうだな。素直という言葉があれ程、似合う子もないからな」

「ええ 穂乃果とことりは私の自慢の友達です。勿論、μ×Sの皆もそうです」

桐生の言葉に海未はそう返した。とても優しいその表情を見る限り彼女達の絆は相当強いのだろう。そんな事を思いながら、桐生はある事をぼつりと呟く。

「μ×Sか。そういや、以前にもμ×Sのメンバーに会った事があるな」

「え？桐生さんは他の子と会った事があるんですね。一体、誰と会ったんです？」

「確か、会った事があるのは花陽と真姫と凜と希と絵里とにこの6人だな」

「殆どのメンバーと会っていたとは驚きです。それじゃあ、私とことりを入れたら全員と会った事になりますね。それと桐生さんはμ×Sの事を誰から聞いたんですか？こう言っては失礼ですが、桐生さんはアイドルとかに興味を抱くような感じではないですからね」

「μ×Sの事を初めて知ったのは花陽と会った時だ。それとは別にμ×Sの事を教えてくれたのは・・・そう、南という女性からだ。聞いた話では音ノ木坂とかいう学校の理事長をしてみると言ってたな」

「ええ!.. 桐生さんは理事長ともお会いした事もあるんですか。それが一番の驚きですよ。世間って、狭いものなんですね」

さり気なく言った桐生の言葉に海未は驚きを隠せずにした。μ×Sのメンバーと会っていただけでなく、自分が通う学校の理事長とも会っていたとは予想もしていなかったからだ。

「そうだな。だが、人の縁つてのそんなものなんだろう。人と人の巡り合わせというのはな」

「意外とそうなのかもしれませんね。私も真島さんに会って、特訓を付けてもらったりとかしましたから」

「そういうや、以前に真島の兄さんは会った事があると聞いていたな。しかし、真島の兄さんと特訓とはな・・・一体、どんな特訓をしたんだ？」

海未の口から特訓という言葉聞いた桐生は見た目とは裏腹に武闘派なのか？と思ひ、海未にそう尋ねた。

「真島さんとやったのはババ抜きの特訓です。まあ、特訓の内容はババ抜きと関係ないものでしたけどね」

「そうか。まあ、何にしても真島の兄さんは慕われているようだな」

「ええ。見た目は怖いですけど、人の事を考えてくれる人ですからね。そういう意味では桐生さんも何処となく、真島さんと雰囲気がつくりです」

「フツ そうか。真島の兄さんはああ見えて、面倒見がいいからなあ。厳しくとも組や周りの連中からも好かれてるのはそれも理由なのかもな」

「そうですね。私もそう思います。あつ、穂むらが見えましたよ」

海未が声を出して正面の方を指差した。桐生が指差した方を見ると、そこに穂むらの暖簾を掲げている一軒家が目に映る。

「あれが穂むらか。見た目は普通の家なんだなあ」

「はい それ故、初めて来る人は暖簾に気付かずに通り過ぎてしまう事が多いそうですよ。それに似たような家がありますからね」

「成程な。所謂、隠れ店って奴か。此処まで案内してくれてありがとうな」

「いいえ、お気になさらず。困った人を放っておけませんからね」

「そうか。それじゃあ、中に入るとするか」

そう言つて、桐生は穂むらの戸を開けると店の中へ入っていく。海未も桐生に続いて中へ入ると店番をしていた穂乃果の母親が笑顔で声をかけてきた。

「あら、海未ちゃんじゃない。穂乃果なら上にいるわよ」

「こんにちは おば様。ええ それでは上にながらせてもらいますね。それと今日は初めてのお客さんも来てますよ」

海未はそう言つて、奥の階段を登つていった。そして海未の言葉で桐生の存在に気づき、穂乃果の母は慌てた様子で頭を下げて謝罪する。

「ああ ごめんなさい。お客様の事に気付かず失礼しました」

「いや、別にいいんだ。俺は気にしないから頭を上げてくれ」

「ありがとうございます。それとお客様はどの和菓子をお求めでしょうか？」

「うーん この店に来るのは初めてだからな。何を選ぶか迷うな」

「お母さーん 三人で何か撮みたいから、和菓子を持つていいかな？」

桐生が陳列してる和菓子を見て悩んでいると、そう叫びながら穂乃果が2階から降りてくる。そして桐生の姿に気付くと満面の笑顔を浮かべて話しかけてきた。

「あつ、桐生さん。うちの店に来てくれたんだね」

「ああ。以前、会った時に来てくれと地図まで貰ったからな。だが、あの地図で此処まで来るのは大変だったぞ。幸い、海未という子に会つて道案内してもらつたから何とかなつたが・・・」

「あははは その事でさつき、海未ちゃんに叱られたよ。ごめんね 桐生さん」

「会話に水差すようで悪いけど、二人は顔見知りなの？いまいち話が見えないのだけれど」

穂乃果と桐生の話を聞いていた穂乃果の母は不思議そうに尋ねてきた。確かに事情を知らない穂乃果の母からしたら、気になる所である。前回の様に勘違いから変な行動を起こす訳にいかない。その様な考えもあり、穂乃果の母は思い切つて聞いたのだった。

「ああ 実は以前に神室町で会つてな。その時、逸れた連れを探す事に協力したんだ。まあ逸れた連れは何とかが見つかつてな。その後、別れる時に穂むらの地図を貰つたんだ」

「そんな事があったのね。どうやら、娘が面倒をかけたようですね」
「いいや どつちかといえば、俺が勝手に首を突っ込んだだけだ。気にしないでくれ」

「あの時は本当に助かったよ。初めて行く街であんな事が起きるんだもん。それに桐生さんが真島さんと知り合いだったのも驚いたよ」

「それは俺も同じだ。所でおすすめの和菓子があつたら、教えてくれないか。どれにしようか迷っていてな、決められそうにないんだ」

「それでしたら、穂むら饅頭なんていかがでしょう？うちの名物ですし、それ目当てに来る客も多いんですよ」

「ほう それじゃあ、穂むら饅頭を10個もらおう」

「穂むら饅頭10個ですね。お買い上げありがとうございます。10個で1000円です」

「ああ じゃあ、丁度で頼む」

桐生の言葉に穂乃果の母は自信満々に名物の穂むら饅頭を薦めた。その様子を見て、桐生は迷わずに穂むら饅頭を注文するとホクホク顔で穂乃果の母は饅頭を袋に詰めていく。和気藹々とした空気が漂う中、穂乃果は桐生をじつと見つめていた。

そして桐生が会計を済ませるのを見計らって、穂乃果はある誘いを持ちかける。

「そうだ。真島さんで思い出したけど、今はことりちゃん和海未ちゃんと私の三人で真島さんが持って来たゲームで遊んでるんだ。良かったら、桐生さんも一緒にやらない？」

「真島の兄さんが持って来たゲームか。それは一体、どんなものなんだ？」

「それなら私の部屋に来てよ。説明するより早いから」

「確かに興味はあるが、男の俺が女の子の部屋に入る訳にいかないだろ」

部屋に誘う穂乃果に桐生はやんわりと断る。いくら顔見知りでも少女の部屋へ入る事に抵抗を感じていた。無論、傍で話を聞いている穂乃果の母親も自分が穂乃果の部屋に入る事をよしとしないだろう。桐生自身はそう思っていた。

しかし、穂乃果の母から返ってきた言葉は意外なものであった。

「あら 別に構わないわよ。真島さんは何回も穂乃果の部屋に行つてるもの」

「うん。この前もゲームを持って来た時も部屋に来たもん」

「…そうなのか。なら、お邪魔させてもらうよ」

「じゃあ、部屋に案内するね。こっちだよ」

本人だけでなく、母親まで立ち入る事を許してるなら問題ないのだろう。桐生は首を縦に振ると穂乃果の部屋へ向かう事にした。何だかんだ言つて、桐生も真島が持って来たゲームに興味がある事も事実である。

そして穂乃果の後を付いて階段を上り、廊下を少しばかり歩くと穂乃果が足を止めて桐生に振り返る。

「此処が私の部屋だよ。中に私の友達が来てるけど、遠慮しないでね」

「ああ。来てる友達は一人か？」

「ううん。二人だよ。海未ちゃんことりちゃんと言つてね。小さい頃からの友達なんだ」

そう言つて穂乃果は部屋へ入つて行く。続いて入つてきた桐生を見て、中にいたことりが穂乃果に話しかける。

「ねえ 穂乃果ちゃん。その人は誰なの？初めて見る人だけど…」

「この人は真島さんの知り合いの桐生さんと言つてね。今日、家に和菓子を買いに来てくれたんだ」

「あ、私は南ことりと言います。よろしくお願いします」

「ああ よろしくな。俺は桐生一馬と言うものだ。まあ穂乃果と海未は知ってるだろうがな」

「えっ 穂乃果ちゃんと海未ちゃんは桐生さんと会つた事があるの？」

桐生の言葉にことりは驚きの表情を見せ、二人に事情を聞く。穂乃果と海未の二人は訳も解らずに困惑してることに事情を説明する為に口を開いた。

「そっか。二人には言つてなかったけど、桐生さんとはこの前に行つ

た神室町で会ったんだ」

「そうでしたか。私は穂乃果の家に行く途中で会ったんです。それが穂乃果の知り合いと知りませんでしたか」

「へ〜 そういう事があったんだね。でも、それはそうとどうして穂乃果ちゃんの部屋に来たの？」

二人から話を聞いて事情を理解したことりだったが、ふと浮かんだもう一つの疑問を口にする。和菓子を買いに来た人が穂乃果の部屋にどうして来たのか。それはことりでなくとも気になるのは無理もない。

「ああ 実はね。桐生さんは真島さんの知り合いなんだ。それで真島さんがこの前に置いて行ったゲームと一緒にやろうと誘ったの」

「ええっ!?! 桐生さんって、真島さんと知り合いだったの？ 今日驚きの連続だよ〜」

「うん。私も知った時は驚いたよ。でも、海末ちゃんは驚いてないね。もしかして知っていたの？」

桐生と真島の関係を知って驚くことりを楽しげに穂乃果は見ているが、一人だけ反応の薄い海末を不思議に思ったのだろう。穂乃果は海末に尋ねた。

「ええ 実は桐生さんを穂むらへ案内する途中で知りました。確か、その時に理事長とも会った事があると言っていましたね」

「え、それは本当なの？ 海末ちゃん」

「はわ〜 真島さんと知り合いだった事も驚いたけど、お母さんと会った事もあるんだね」

「ああ 俺の方も正直驚いてるよ。まさか、こんな形で会うと思っていなかったからな。所で真島の兄さんが持って来たゲームとは何なんだ？ 俺を部屋に呼んだのはそれが理由だろう」

「あ、そうだった。今、用意するね」

若干、話がずれていると感じた桐生が穂乃果に本題を切り出す。どうやら、ことりと海末の話でその事を忘れていたのだろう。穂乃果は机から取り出したゲームをテーブルに置く。

「これはね。昔、流行ったゲームを振って真島さんが考えた物なんだった。その名は極道伝説 ヤクザエンペラーっていうカードゲームだよ」

「極道伝説 ヤクザエンペラー・・・ん？これは、ブフツ」

穂乃果の説明を聞き、桐生がテーブルに散らばるカードには覚えのある人物のイラストが描かれていた。その内の数枚を手に取って名前を見た途端、桐生は思わず吹き出してしまう。

『剛腕猿王 シーマノ・コング』

桐生が見たカードの名前欄にはこう記されていた。知る人が見れば、カードのキャラは真島の親分である嶋野組長である事は一目瞭然である。

「あつ、このカードを選ぶとは桐生さんの目は高いね。このキャラは面白い名前の割に強いんだよ」

「キャラカードには組長クラス、若衆クラス、堅気クラスの三種類あってね。桐生さんが持つてるのは組長クラスのカードだよ。他には技カードというのもあるんだ」

「このゲームはキャラカードと技カードの二つを使って遊ぶんです。技カードにはグー、チョキ、パーで別れていて要するにルールはじゃんけんと同じです」

隣から覗いた穂乃果が桐生に教えた。それに続くようにことりと海未も桐生にゲームの説明をする。三人の説明を聞いていた桐生は過去に遊んだあるゲームを思い出した。10年前の話だが、穂乃果達も知ってるかもしれないと桐生は穂乃果達に尋ねてみた。

「成程 じゃんけんと同じルールか・・・それと昔に流行ったゲームだが、もしかしてメスキングという名前じゃないのか？」

「メスキングですか。私は聞いた事がありませんね。穂乃果とことりは知っていますか？」

「私も知らないかな。昔も今もゲームとかやらない方だから」

「うくん 何処かで聞いた覚えはあるんだよね。ああ 思い出した。メスキングって、虫のお姉ちゃんが戦うゲームだったよね。小学生の頃にゲームセンターで遊んだ事があったよ」

海未とことりは知らないと答えるが、穂乃果は覚えがあるのか思いついて出そうと必死になっていた。暫くの間、考えているとハツとした表情を穂乃果が浮かべた。当時の事を思い出しながら、穂乃果は懐かしそうにメスキングの事を話す。

穂乃果と桐生の話を聞いていた海未は何か引つかかるものを感じて、ある質問を海未は桐生にぶつける事にした。

「ちよつと待つてください。そのメスキングというゲームは大人が遊ぶ奴じゃないんですか？」

「いや、そんな事はないぜ。最初は俺も大人向けのゲームだと思っていた。だが、意外な事にそのゲームで遊ぶのは子供が多かったぞ」

「悪いですが、信じられませんね。だって、水着の女性が出るゲームなんてどう見ても成人向けじゃないですか。どう考えても、桐生さんがその子達を悪い道へ誘っていたとしか思えません」

海未の言葉に桐生は思わず黙ってしまう。確かに水着の女性が出るゲームを子供が遊んでいたといわれても信じる人間なんて普通はいない。話を聞けば、桐生が子供を悪い方へ誘っていると捉えるのも無理はないだろう。

その何とも言えない雰囲気漂う中、ことりは困った顔でおろおろとしていた。しかし、穂乃果が発した一言がそんな雰囲気を跡形なく吹き飛ばしてしまう。

「桐生さんが言ってるのは本当だよ。私がそうだったし、ゲームセンターではメスキング博士と呼ばれる子もいたからね」

「そうだったんですか。それにしても、メスキング博士とは嫌な名前ですね」

「まあ、名前だけを聞くとな。だが、本人はそのゲームを純粋に楽しんでた。それ故、周りの子も博士を慕う子も沢山いたぞ。穂乃果もその一人だと思うぜ」

「そうだね。メスキングを始めた頃、私にルールや強いカードを貰ったもん」

「ああ あいつは皆と仲良く、そして楽しくメスキングを遊ぶ事に入力を入れていたからな」

「その博士という人は名前とは関係なく、優しい人だったんですね。それと桐生さん 先程は失礼な事を言ってごめんなさい」

二人の話から海未は自分がメスキングというゲームを誤解していた事を知った。どんな物であれ、当時の子供達は純粹に遊んでいたのだろう。そう考えると偏見の目で見えていた自分が恥ずかしいと海未は感じていた。

「いや、謝る必要はないぜ。大人である俺も遊んでいたと聞けばそう思うのは仕方ない。それじゃあ、気を取り直して真島の兄さんが持つて来たゲームで遊ぶとするか。勿論 皆仲良くな」

「そうですね。私もこのゲームを楽しみにしていたんですよ」

「私もだよ。ルールも簡単だし、ゲームが苦手な私でも楽しめそう」

「よし 今日と思う存分、ヤクザエンペラーを楽しもう。ゲームスタートオオオ」

「「おおー」」

穂乃果の号令に三人もノリノリでガッツポーズをしながら大声を上げる。

そして4人は日が暮れるまでゲームに興じていた。

結果、桐生は連敗した。だが、勝ち負け等は関係なく皆と一緒に遊ぶ事は桐生には何よりも楽しい時間であったのは確かである。

「それじゃあ、今日はお暇するぜ。三人と一緒にやったゲームはとても楽しかったよ」

「ううん。私も楽しかったよ。また家に来ることがあったら、ヤクザエンペラーと一緒にやろうね」

「ああ そうだな。今度は負けないぜ」

「望む所です。また振り返ちにしてあげますよ」

「あははく 海未ちゃんが一番張り切っていたもんね」

「こ、ことり からかうのはやめてください」

「フツ 三人は相当仲がいいんだな。その友情を大事にしろよ。じゃあな」

そう眩くと桐生は背を向けて去って行く。

「桐生さーん また遊ぼうねー 約束だよおおお」

遠ざかる桐生の背中に叫ぶように穂乃果は声をかけた。その声が聞こえた桐生は振り向き、手を振ると穂乃果達も手を振り返す。そうして三人は桐生が見えなくなるまで手を振っていた。

何気ない一日はこうして終わりを迎えたのである。

サブストーリー014 薄暗い森の中から

ある日の夕方 希は一人、境内の掃き掃除をしていた。鳥の鳴き声以外の音はせず、夕日に照らされて延びる自分の影が何とも不気味だと希は思う。このバイト自体、大好きで長くやっているのに未だに夕方の掃除だけが希は苦手だった。

「ふう〜 この時間にやる掃除は未だに慣れへんなあ。早い所、終わらせて帰ろう。ん？」

一言呟いた後、希は掃除に集中した時だった。何処からともなく、何かの音が境内の方に聞こえてきた。その音は一定のリズムで鳴っており、まるで何かを叩いているかの様だと希は感じた。

どうやら、音は社の後ろにある森からしているようだ。希は不思議そうに森を見つめていた。

「一体、何やるう？最近、物騒やしなあ。もしかしたら不審者かもしれない。よし、確かめに行こう」

音の正体を確かめるべく、希は恐る恐る森の方へ近づいていく。もし、音を出している者の正体が不審者だったら警察へ連絡をすればいい。その考えが希の中にある恐怖心を薄れさせていた。

希が音の鳴る方へ近づくと、その音が明確に聞こえてくる。その音はコーン、コーンと何かを叩く音である事が解ると希は瞬間的に顔を青くして震え出す。

そう、神社で叩く音。それが意味するのは有名な呪いの儀式 丑の刻参りしかない。

この儀式は希も話で聞いた事があるので知っていた。だが、自分がその現場に居合わせる事になるとは思ってもいなかった。

「嘘やろ… まさか、丑の刻参りを本当にやってる人がおったなんて。確か、やってる所を見た人も呪われると聞いたな。よし、一旦離れよう。まだ、バレとらへんしな」

触らぬ神に祟り無し。そう結論を出した希はこの場から立ち去る事にする。極力、足音を立てない様。ゆっくりと境内へ向かって行

く。しかし、離れる事に集中していた希は気付いていない。去りゆく彼女を森から見つめる者がいた事に…

その翌日

昨日、神社で起きた事を穂乃果達に相談する為、希は一人で穂むらへ訪れていた。希が中に入ると店番をしている穂乃果が元気な声で挨拶をしてきた。

「いらっしやいませ！ あれ？希ちゃん。今日はどうしたの？」

「久しぶりやね。実はちよつと、相談したい事があるんだけど…ええかな？」

「相談？うん、分かった。それじゃあ、先に私の部屋へ行つてよ。私もすぐに行くから」

最初、穂乃果は和菓子を買いに来たと思っていた。しかし、希の要件を聞いた穂乃果は真剣な表情を浮かべると先に部屋へ行くよう伝える。

「ありがとう。それじゃあ、お邪魔するね」

「あつ、私の部屋の場合は分かる？」

「うん 知つとるよ。階段を登って一番奥の部屋でしょ？」

「そうそう。それじゃあ、部屋で待っててね」

「ほな、先に行つとるよ」

穂乃果にそう返して、希は階段を登って行く。

そして廊下を進み、奥にある部屋の戸を開けて中に入った。穂乃果の部屋にはピンクのクッションやほの字がプリントされたTシャツがあった。部屋の中を見渡しながら、希は懐かしい日々を振り返る。その為か、希は自分の気持ち吐露していた。

「この部屋…前に来た時と変わってへんなあ。以前、来た時と全く同じじゃ」

「そうかなあ。時々、模様替えとかをしてるんだけどね。」

その眩きを聞いていた穂乃果が後ろから声をかけてきた。いきなり声をかけられて驚いたが、希はその事を隠して穂乃果に返事を返

す。

「あ、穂乃果ちゃん。もう来たんやね。店番は終わったん？」

「ああ それなら雪穂に変わって貰ったんだ。最初は嫌な顔してたけど、事情を話したら快く引き受けてくれたよ」

「そうなんや。どうやら、雪穂ちゃんにも迷惑を掛けたみたいやね。あとでうちもお礼を言っとかんとあかんね」

「ううん 雪穂も事情は知ってるから気にしないでよ。それと立ち話も何だから座ろう。希ちゃんも遠慮なく寛いでよ」

穂乃果は部屋にあるクッションに腰を下ろすと希に座る様に促す。その言葉を聞き、希も適当な場所に腰を下ろすと穂乃果は本題を切り出した。

「それで希ちゃんの相談って、何かな？」

「実はね。昨日、神社付近の森で不審な物音を聞いたんだ」

「不審な物音？もしかして、希ちゃんが相談したい事って…」

「うん その事なんだ。普通なら警察とかに言うべきなんやろうけど、うちが聞いた音の事を言っても信じてくれないと思ったんや」

自分が支離滅裂な事を言っているのは解っている。その為、話の途中で希は俯いてしまった。

やつぱり、こんな相談をするべきでは無かった。今更ながら希はくだらない事で穂乃果達に迷惑を掛けてしまったと後悔していた。

もう帰ろう。希がそう思っ立ち上がろうとした時、穂乃果は静かに言葉を発した。

「信じるよ。希ちゃんが嘘を吐いた事は一度も無いもん。それでさ、希ちゃんが聞いた音って、どんな感じだったの？」

「え？あ、ああ うちが聞いた音は…コーンコーンと物を叩く音やったよ。多分、あれは丑の刻参りを誰かがやっていたんだと思うんや」
「そ、それは怖いね。確かにその事を警察に言っても相手にしてもらえないだろうなあ。だけど、安心してよ。私達には頼りになる人がいるから」

「穂乃果ちゃん… うん ありがとう。それと穂乃果ちゃんが言う頼

りになる人は誰なん？」

穂乃果の言葉で希は心が軽くなつていくのを感じていた。この少女は人が欲しいと思う言葉をくれる。だからこそ、皆も彼女に惹かれて集まったのだと希は改めて思った。

そして穂乃果の話に出てきた頼りになる人。それが気になつた希は穂乃果に尋ねた。

「え？その人なら希ちゃんも会つた事があるよ。ほら、前に海未ちゃんに特訓を付けた真島さんという人」

「ああ あの面白い人やね。せやけど、穂乃果ちゃんは真島さんの連絡先を知つとるん？」

「うん 時々、メールや電話をしてるんだ。早速、連絡してみるよ」

そう言うや否や、穂乃果は携帯を取り出して電話を掛け始める。希はその様子を静かに見つめていた。

その頃、真島は組の事務所でぐったりとしていた。先程、溜まっていた書類仕事から解放された所である。昨日の夜から一睡もせず、書類と格闘していた真島は精も根も尽きていた。

「あゝ 漸く、終わったわあ。全く、ずーっと座りぱなっしだから疲れたわ」

ソファーに凭れかかり真島は誰もいない部屋で一人呟やいていると、真島の携帯が音を立てて震え出す。空気を読まず、電話をしてくる相手に苛立ちを覚えながら携帯を取り出した。

「あゝ？ こないな時に電話を掛けてくるのは何処のアホや」

だが、液晶に表示された名前は知り合いである高坂穂乃果であった。その事に真島は目を丸くする。普段、メールを送って来る事はあるが、電話をしてくる事が無いからである。

「ん？何や、相手は穂乃果ちゃんか。一体、何の用やろ？」

先程の苛立ちを忘れて真島は通話ボタンを押した。電話が繋がると同時に穂乃果が話しかけて来た。

『あつ 真島さん。少し相談したい事があるんですけど、今、大丈夫で

すか?』

「おう 大丈夫やで。それで相談事とは何や? 遠慮せんと言うてみい」

『ありがとう。それで相談というのはね。私の友達が働いてる神社で不審な音を聞いたみたいなの。それで真島さんに音を出す人の正体を暴いて欲しいんだ』

「ほう。せやけど、それならワシ何かよりも警察に行った方がええんとちやうか?」

穂乃果の相談内容を聞いた真島はそう言い返した。頼りにするのはいいが、自分にも出来る事は限られている。突き放すような言い方をしたのは、そう思つての事からだつた。

『うん それは解つてる。私も最初はそう言つたんだ。だけど、友達が聞いた音は警察に言つても信じてもらえないと思えない。だつて、その音は物を叩く音でね。友達は丑の刻参りじゃないかって……』

「…何やと? そうか。そら、警察に言つても無駄やろうな。よし、分かつた。ワシが力になつたる。明日、穂乃果ちゃんの家に行くわ」
「本当? ありがとう。真島さん」

「ふっ 別に礼はいらへん。その友達に伝えておきや。ワシが何とかしたる。だから、安心せいとな」

「うん しっかりと伝えておくよ。それじゃあ、明日待つてるね」
「ああ ほな、明日な」

そう言つて、真島は電話を切つた。そして再び、ソファ―に凭れかかるとニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「何や、面白い事になつて来たのう。この現代に丑の刻参りか? 一体、どんな奴やろうか? ま、人気の無い所で呪いをかけようとする奴やし、陰気な奴に決まつとるな」

一言呟いた後、真島は立ち上がつて部屋を出ていった。

数分後、ビルの隅つこで西田が一人泣いていた。そんな西田を大勢の組員が見て同情するのはまた別の話である。

次の日

真島は穂乃果から相談された厄介事を解決する為、穂むらへ向かっていた。

昨夜、穂乃果との会話の中に出てきた”丑の刻参り”

この言葉に興味を抱き、真島は二つ返事で協力を買って出たのだ。(丑の刻参りか。昨日、電話で引き受けたけど… 一体、どうしたらええんやろう？流石のわしも呪いをかける奴の相手するのは初めてやし、さっぱり解らへん。確か、この儀式をするのは大概が女性の筈やったなあ。うーん 不審者が女やったら、殴る訳にいかへん。ま、それは後で考えればええか)

そんな事を考えながら、道を歩いていると角から髪を二本に結んだ少女が姿を見せる。その少女は真島に気付くとニコリと微笑み会釈をした後、おっとりとした声で話しかけてきた。

「こんにちは。確か、真島さんでしたよね。今日は穂むらへ行く途中ですか？」

「ん？ああ そうやけど… 自分、ワシの事を知つとるんか？」

「ええ 知ってますよ。以前、神社で海未ちゃんに特訓を付けていたじゃないですか。あの時、会った巫女がウチや」

「おお そうやったんか。確か、希ちゃんと言うてたな。あの時と髪型が違うから気付かへんかったわ。うん？ちよい待ちや、ほんなら丑の刻参りらしき音を聞いたつちゆんは…」

「うん ウチや。そっか 穂乃果ちゃんが言ってた頼りになる人は真島さんだったんだね。幸いな事に昨日は聞こえへんかったけど、また聞こえるかもしれない。そう思うと怖くて堪らないんよ」

希の話から相談事に出てきた友達が希である事を真島は知る。そして希も真島が穂乃果の言う頼りになる人だと気付いた。

真島と会った事で緊張が解れたのか、希は不安な表情で自分の気持ちを吐き出した。自分の身近で呪いの儀式が行われている。この事実が希の心に影を差し、もしかしたら自分も呪われるかもしれないと希はそう感じていたからだ。

そんな話をしていると二人の間には暗い雰囲気漂い、この空気を

変えようと真島は明るい様子で希に優しく言葉をかける。

「…そら、怖かったのう。せやけど、ワシが何とかしたる。だから、そ
ないな顔をするのはやめや」

「はい 解りました」

「そや、希ちゃんは笑ってる方がええ。ほな、穂むらまで一緒に行く
するか」

「はい」

話が纏った所で真島は希にそう言った。また希自身も断る理由は
無く、真島と穂むらへ行く事にした。

歩いて数分経った頃、二人は穂むらに到着すると店の前で待ってい
た穂乃果の姿が目映る。

そして穂乃果も二人に気付いたのか、いつもの様に満面の笑顔でこ
ちらへ駆け寄って来た。

「いらっしやい 二人共。別々に来ると思ってたけど、一緒に来ると
は思ってた無かったよ。それに仲も良さそうだし、何かあったの？」

真島と希が以前に会った事があるのは知っていたが、いつの間にか
仲良くなっている二人が気になったのか、穂乃果はそう尋ねた。

「ああ さつき、そこではったりと会うての。話をしていただけやで」
「うん それで穂乃果ちゃんが言ってた人が真島さんと分かったん
よ」

「あ、そうだったんね。二人に事情を話そうと待ってたけど、手間が省
けて良かったよ」

「何や、それで待つとつたんか。ご苦労な事やの」

「あはは…実は二人に会うのもそうだけど、丑の刻参りを見るのも楽
しみだったからね」

「もう、穂乃果ちゃんってば、ウチは本当に怖い思いをしたんよ。
酷いやん」

「ご、ごめんね。希ちゃん 謝るから許して〜」

「ふふ ええよ。その代わり、あとでほむまんを奢ってね」

穂乃果の言葉に頬を膨らませる希に両手を合わせて、穂乃果は必死に謝っていた。希は猫の様な笑みを浮かべ、ちやつかりとほむまんを要求していたのは流石と言うべきだろう。

そんな二人のやり取りを傍観していた真島だったが、静かな口調で穂乃果と希に話しかける。

「ちよつと、ええか？二人に聞きたい事があるんや」

「え？聞きたい事？」

「一体、何だろう…」

二人も会話を止めて、真島に向き直った所で彼は本題を切り出した。

「聞きたいのは神社で希ちゃんが音を聞いたのは何時や？昨日の電話では聞いておらんかったしの」

「ウチが音を聞いた時間ですか？確か…夕方の16時半頃やったなあ。境内の掃除をしていたら、その音が聞こえてきたんよ」

「そういえば、私も言い忘れてたね。でも、どうしてこんな事を聞くの？」

真島がした質問の意図が解らないのか、穂乃果は首を傾げて尋ねた。それは希も同じ様で静かに真島の返答を待っていた。

「そら、待ち伏せする為に決まってるやろ。相手は誰にも見られてはいけない事をしとるんやし、いつ来るのか解らへんからなあ。だから、音を聞いた時間になるまでその付近に隠れておくんや」

「成程。思えば、昨日は来なかったなあ。それ以前にいつ来たのかも解らなかつたし」

「おお、隠れて待つなんて、何だか刑事みたいだね。私も行ってもいいかな？」

「ちよつと穂乃果ちゃん。相手は人を呪うような危険人物なんだよ。止めておいた方が「構わへんで」え？」

穂乃果を止めようとする希を遮って、言葉を発した真島に希は目を丸くする。そんな希を見ながら真島は言葉を続けた。

「確かに希ちゃんが言う様に相手は人を呪おうとする奴や。せやけ

ど、それをやるには呪う人間の名前と髪等が必要なんや。当然、相手はそれを持つとらん。だからこそ、付いて来る事を許したんや」
「あつ、そういや、その二つが揃ってへんと出来へんね。すっかり忘れてた」

真島の説明を聞き、希はハツとして様子で呟いた。二人の話が終わった頃、穂乃果が口を開くと楽しげな様子で言葉を吐く。

「へー 丑の刻参りって、そんな決まりがあるんだね。ところでそろそろ神社に行こうよ。その人が来る前に隠れる場所を見つけないといけないし」

「そうやな。ほな、行くとするか」

「はい」

穂乃果の提案に真島も賛同して神社へ向かって歩き出すと、二人も返事をして真島の後を付いて行った。

10分後 三人は目的の神社へ続く階段の前にいた。最初こそ、楽しそうにしていた穂乃果も場の雰囲気気圧されて表情を引き攣らせていた。それはこの場で恐怖の体験をした希も同じで表情を硬くしている。

「安心せい。ワシが必ず何とかしたる。ほら 行くで」

真島が二人にそう言葉をかける。その言葉で不安と恐怖が薄れたのだろう。若干、二人の表情を柔らかくして一息吐いた後、三人は階段を登り始めた。

長い階段を登り切り、三人が境内に足を踏み入れると神社には誰もいなかった。これは調べるには持つてこいの状況だと真島は思い、希にある事を聞く。

「希ちゃんか音を聞いたんは境内やったな。その音は何処から聞こえてきたんや?」

「音が聞こえてきた方向は後ろにある森からです。何の音か解った時、怖くなつて引き返したから詳しい場所まで知らへんけど…」

「さよか。ワシはちよつくら、見てくるわ。何か、証拠になる物が見つかるかもしれんしの。二人は此処で待つとつてや」

「えっ、一人で大丈夫なの？皆で行った方がいいんじゃない？」

一人で様子を見に行こうとする真島を穂乃果は心配そうに言葉を洩らす。こんな自分を心配する穂乃果に優しく微笑むと真島はこう言った。

「ありがとさん。せやけど、ここはワシ一人で平気や。それに怖い思いをした希ちゃんを連れてく訳にいかんやろ。だから、穂乃果ちゃんは希ちゃんの傍にいてやりや」

「そっか。解った。じゃあ、私と希ちゃんは此処で待つてるよ」

「ウチが変な事に巻き込んだから…ごめんなさい。わっ!？」

「そないな事を言わんでええ。それに巻き込まれたんじやなく、ワシが首を突っ込んだだけや。気にする必要はあらへん」

「わ、分かりました。だから、頭を撫でるのは止めて。何か、恥ずかしいやん」

真島は希の頭をガシガシと撫でながら、言葉を紡ぐ。希も頭を撫でられる事に慣れていないのか、顔を赤くして真島に言葉を返す。

「フツ 人は素直な方がええ。ほな 行ってくるわ」

「いつてらっしやい」

「真島さん、どうか気を付けてな」

そして真島は真剣な表情で一言呟いた後、森の方へ歩いていった。二人は真島の後ろ姿に声を掛けると真島は後ろ手を上げて答えた。

真島が森の中へ姿を消した後、二人の後ろにある者が境内に姿を見せる。その者は二人に気付くと笑みを浮かべて二人へ歩み寄っていった。

一方、真島は音が聞こえたという森を調べていた。しかし、丑の刻参りをやっていた痕跡はいくら探しても見つからない。その事に若干、真島は苛立ちを覚え始めていた。

「何やねん。探しても一向に痕跡が見当たたらへん。もしかしたら、見られた事を知って痕跡を消したんも知れへんな。ん？これは…」

諦めて穂乃果達の元へ戻ろうとした時、地面に残されている足跡に気付く。その足跡は小さく、明らかに女性の物である事が解った。そして：傍に何か落ちていたのを見つける。それは定期入れの様で拾って中を確認した真島は驚愕した。

「こ、これは…： そうか。今回の騒動はあの子の仕業やったんやな。ほな、穂乃果ちゃん達の元に戻るとするかの」

今回の丑の刻参り騒動を起こした犯人。それが解った真島は穂乃果達に説明する為、森を後にした。

真島が境内に戻ると、そこでは穂乃果と希がある少女と談笑していた。その少女は以前、神室町であった絢瀬亜里沙だった。すると真島に気付いた亜里沙が満面の笑顔を浮かべて、声をかけてきた。

「真島さん お久しぶりです。あの時はお世話になりました。でも、どうして此処に？」

「おう 久しぶりやな。まあ、今回はある騒動が起こったの。それで穂乃果ちゃん達に協力しとったんや」

「そうそう。それと何か解ったの？ 何処か自信ありそうだけど…」

「ああ そうやった。さっき、森でこれを拾ったんや。亜里沙ちゃんの学生証をな」

そう言うとき真島はポケットから学生証を取り出した。真島のその発言に穂乃果と希は今日一番の衝撃を受けていた。それも無理もない まさか、件の犯人が身近にいる少女とは誰も予想などしていなかったからだ。

「さて、亜里沙ちゃん。今回、丑の刻参りをした訳を話してくれへんか？ 何か事情があるんやろうが、あないな事をしたらあかんで」

真島は諭すように亜里沙に言葉をかけるが、当の亜里沙は首を傾げて言葉を返す。

「丑の刻参り？ それに騒動の犯人と言われても私も訳が解りませんよ」

「それなら、森に落ちてた亜里沙ちゃんの学生証はどういう事や？」

「森？ あ、もしかして…」

真島の話で何かを思い出した亜里沙は、その事を皆に説明した。

「何や、亜里沙ちゃんがやっていたのは鳩の小屋作りやったんか」

「ウチが聞いたあの音は小屋を組み立てる音やったんやね」

「ご、ごめんなさい。まさか、知らない所でそんな騒動になってるなんて」

「ええんよ。元はと言えば、ウチが早とちりしたんが悪いんやからね」

平謝りをする亜里沙に希は優しく声をかける。今回の騒動が丑の刻参りでは無かった。その事に希はホッとしていたのだ。

「そうだ。皆で家に来ない？問題も解決した事だし、ほむまんをご馳走するよ」

「おっ ええな。ワシも腹減ったし、たらふく食わせてもらうでえ〜」
そうして4人は和気藹々と話しながら神社を後にする。だが、4人は気付いていない。森の中から頭に蠟燭を差し、白装束を着た女が陰しい顔で見っていた事に…

世の中には呪いの儀式を行う者がいる。それは知らなくていい事なのかもしれない。

サブストーリー015 今日の花見だ！

肌寒い冬が過ぎて、暖かい春が訪れた頃。桐生は秋葉原の住宅街を歩いていた。普段と違うのは両手には酒瓶やビール、それにチーかまやスルメイカ等が入った袋を抱えていた。

何故、その様な物を持っているのか？その答えは単純明快である。そう、今日は神社で花見を穂乃果達と楽しむ為だ。

そして桐生が花見に参加する事になった経緯。それは一週間前まで遡る。

1週間前・・・

その日 久しぶりに穂むらの和菓子が食べたくなつた桐生は穂むらを目指して住宅街を歩いていた。

幸い、天気も雲一つない快晴でそれ故か、道中で散歩する老人や遊びに行く子供達とすれ違う。そんな日常の中、暖かい陽射しを見上げる。この時、桐生は珍しく気分が高揚していくのを感じていた。

「いい天気だな。最近、暖かくなってきたし、こんな日にする花見は最高だろうな」

桐生は暖かい陽射しに包まれ、満開の桜を見て花見をする自分を想像して笑みを浮かべた。そういうえば、沖縄や福岡にいた頃は仕事が忙しく心に余裕が無かった。それ故、桐生は花見に参加をしても心の底から楽しいと感じた事が無かった。その時、風に吹かれてバタバタと揺らめく神社の旗が目に入る。

（あの時と違って、心に余裕がある今なら花見を楽しみたいと思えるかもな。そういや、この神社には桜の木があつたな。来週には桜の花が咲くとテレビでも言っていたし、のんびりと花見と洒落込むか）

桐生が密かに花見をする事を決めた時、後ろから声をかける者がいた。

「こんにちは 桐生さん」

「ん？ああ 穂乃果じゃないか。久しぶりだな」

桐生が声がした方を振り向くと、声をかけたのは穂乃果であった。「此処で会うなんて奇遇だね。今日はお参りにでも来たの？」

そして穂乃果は桐生に駆け寄ると何をしてるのかと尋ねてくる。

「いや 今日には穂むらへ行こうと思っっていたんだ。お前の方は何をしていたんだ？かなりの荷物を持つてる様だが…」

穂乃果に訳を説明した後、今度は桐生が穂乃果に尋ねる。すると穂乃果は神社に視線をやり、訳を話し始めた。

「うん 実は今度ね。M、Sの皆で花見をするんだ。それで皆と話し合っただけの結果、それぞれが弁当やお菓子等を各自用意する事になったの。今回はその買い出しの帰りだよ。そうだ 桐生さんは穂むらへ行くんでしょ？悪いとは思うけど、荷物を運ぶの手伝ってくれないかな。少し買い過ぎちゃって…」

「ああ いいぜ。ほら、こっちに渡してくれ」

穂乃果はぼつの悪そうな顔で手を合わせ、荷物運びをお願いをした。桐生自身も特に断る理由も無く、快く引き受けると穂乃果が持っている荷物を手に取った。

「わあ あんな重い荷物を軽く持つなんて、凄いよ」

「おいおい これくらいで何を言ってるんだ。馬鹿な事を言っていないで早く行くぞ」

「あゝ もしかして…桐生さんってば、照れてるの？可愛いな」

「からかうな。いいから行くぞ」

「はい」

自分が苦勞して運んでいた荷物を軽々と持ち上げる桐生を見て、穂乃果は手を叩いて無邪気に褒め称える。

そこまで褒められると思っておらず、些か照れた様子で誤魔化した桐生をからかう穂乃果だったが、桐生に諫められ素直に従う。

「それにしても… 最近は高校生も花見をするんだな。あまり、そういう物に興味があると思っっていなかったからな」

「そんな事ないよ。確かに花見と言うとおじさんやおばさん達が騒いでるイメージがあるけどさ。花見は皆の物だよ。それに綺麗な桜を見るのは楽しいもん。特に大切な友達と一緒にならね」

「… そうだな。確かに桜を見るのに若者や年寄りもねえな」

穂乃果の話聞いて、自分の考えが狭かったと桐生は思い知る。花見といえば、大人が集まり桜を見て、酒を飲む。それ故、花見は大人がするものという勝手なイメージを抱いていた。

だけど、花見するのに年齢は関係ない。そして桐生はある事が気になった。それは女子高生がやる花見についてだった。

(花見は皆の物か。そんな簡単な事に言われるまで気付かねえとは、俺もまだまだガキだな。そういや、女子高生がする花見というのはどういふ物なんだろうな？大抵は酒を飲むのが主流だが、未成年が酒を飲む訳ねえし… ちよつと気になるな。かと言って、友達同士でやる花見に俺も参加させてくれとは言い辛い。うーむ どうしたものか)

「…さん。桐生さん!!」

「ん?ああ どうした?」

「もう〜 どうしたじゃないよ。さつきから話しかけていたのに聞いてなかったの?」

考えに夢中になっていた桐生は穂乃果の自分を呼ぶ声で我に返る。どうやら先程から話しかけていたが、反応が無い事に穂乃果は頬を膨らませていた。

「すまない。それで何の話をしていたんだ?」

話を聞いていなかった事を謝りながら、桐生は穂乃果に再度尋ねた。拗ねていた穂乃果も謝る桐生を見て、一つ溜息を吐くと改めて話を切り出した。

「うん 話というのはね。今度の花見に桐生さんも参加しようよ。人

が多い程、花見は楽しいもん」

「誘ってくれるのは嬉しいが、俺が行ってもいいのか？女子だけの中に男の俺が混ざったら、他の皆も気を遣わせるだけじゃないのか？」

誘いの言葉をかける穂乃果に桐生はそう言葉を返す。確かに特定のグループに混ざる事は場合によって、楽しい空気を壊しかねない。桐生はそれを危惧していた。

「うーん 桐生さんの事は時折、グループチャットで話してるから別に問題は無いよ。だから遠慮しないで一緒に花見をしよう」

「フツ 分かった。それなら俺も参加させてもらうぜ」

「やったー あっ 一応、言っておくけど… 飲み物と食べ物は各自持参だからね」

「ああ それはこちらで用意しておくぜ」

こうして桐生も、主催の花見に参加する事が決まった。

そして1週間後

桐生は約束の場所である神社の前にやってきた。だが、目の前に映る境内への階段を眺めて、思わず桐生は溜息を吐く。そう 久しぶりの花見という事もあり、桐生は持参した飲食物を少しばかり買い過ぎってしまった。

「参ったな。神社へ行くにはこの階段を登る必要があるのか。だが、この荷物を持って登るのは少し辛いな。ん？」

桐生が階段の前で頭を捻っていると正面から3人の少女が下りてきた。向こうも桐生に気付いて、歩みを止めてこちらを見ていた。

恐らく影になっていて、自分の姿が確認出来なかったのだろう。最初は何処か警戒していた三人組だが、相手が桐生と分かると駆け足で階段を駆け下りて声をかけてきた。

「こんにちは 桐生さん」

「お久しぶりです。今日は私達と一緒に花見をするんですけどよね」

「ああ 久しぶりだな。今日は宜しく頼むぜ」

「少し遅いから様子を见に来たんだよ。凜達はもう準備が出来てるにや」

到着が遅い桐生を心配したのか。凜、海未、花陽の三人が様子を見に来たらしい。話を聞くと既に全員が揃い、花見の準備を初めているようだ。

「すまない。俺も久しぶりに花見で浮かれていな。つつい多く買い過ぎてしまったんだ。悪いが荷物を運ぶのを手伝ってくれないか」
そんな三人に桐生は申し訳なさそうな表情を浮かべて、荷物運びをお願いをする。三人もそのつもりだったらしく、快く荷物を持つと下りてきた階段を登り始めた。

「大人だから当然ですが、飲み物はお酒ばかりですね。しかも日本酒に限っては一升瓶ですし…」

「食べ物もスルメとか、チーかまとかだよ。凜、チーかま大好きなんだ。あとで貰ってもいいかにな」

「ほら、二人共…勝手に中を覗いたら駄目だよ」

「すみません。少し不躰でした」

「凜もごめんにゃ」

中身を見て、燥ぐ海未と凜に花陽が注意をする。それでハツとした二人は桐生に謝った。無論、それくらいで桐生が怒る筈もなく、優しく笑って謝る二人に言葉を返す。

「フツ 別に気にしてない。俺としても皆に分けるつもりだったからな。まあ、酒は無理だが」

「凜は少し飲んでみたいにな」

「いけません。貴女は未成年でしょう。それに節度を守って楽しくやるのが花見です」

「むく 海未ちゃん少し頭が固すぎるよ。一口くらいなら大丈夫だって…「凜」はい ごめんなさい」

「海未。そう ムキなるな。だが、海未の言ってる事も尤もだぜ。それに大人になれば嫌でも飲む日が来るんだ。それまで我慢するんだな」

「そうなんだ。桐生さんが言うならその日まで我慢するにな」

「む 私言う事は聞かないのに桐生さんの言う事は聞くんですね」

「まあまあ 海未ちゃん。そんなに目くじらを立てないで、今日は花

見を楽しもうよ」

「それもそうですね。今日だけは見逃してあげます」

花陽の言葉にそれもそうだと海未は大人しく引き下がった。

桐生達が階段を登り切り、境内に足を踏み入れるとそこでは満開の花を咲かせた桜の木が訪れる者を優しく出迎える。

桐生は力強くも優雅に咲き乱れるその光景に目を奪われる。それは木の下で花見の準備をする彼女達の存在も理由の一つであろう。

すると桐生の視線を感じたのか、準備をしていた穂乃果が桐生の方へ顔を向けた。そして桐生の姿を目にすると笑顔でこちらに手を振り、大声で桐生達を呼んだ。

「桐生さん いらっしやくい。やっと来たんだね」

「ほんまや。皆、桐生さんを待つとんたんよ。可愛い女の子を待たせたら駄目やん」

「フツ それは悪かったな。だが、その分 摘まめる物を沢山買って来たぞ」

「へー 気が聞くんじやない。あつ これチーかまじやない。にこ、これ大好きなのよね」

「やめなさいよ にこちゃん。少しはしたないわよ」
「にこちゃん。結構、ちやつかりしてるよね」

桐生はそう言つて食べ物が入った袋をシートに置く。見ると花見の準備は既に終わつていて、どうやら自分が来るのを待つていたようだ。

そんな中、桐生が持参したおつまみの袋から抜け目なく、チーかまを確保しているにこを真姫が注意をする。

「ほらほら 皆そこまですておきなさい」

それを静観していた絵里だったが、收拾が付かなくなる前に手を叩いて場を諫めた。

「さて、これで全員揃つた訳だし、花見を始めましょう。だけど、その前に桐生さんから一言、どうぞ」

皆の視線が集まった所で絵里が口を開くと花見の開始を宣言した。それだけでなく、桐生の方を向いて挨拶を求めた。唐突に振られた事

に桐生は戸惑うが花見の開始を待つ皆を見て、これ以上待たせる訳に行かない。

「…何？いきなり挨拶と言われてもなあ。まあ言うとしたら…皆、今日は無礼講だ。花見を思う存分に楽しむぞ。それでは乾杯！」
「「「「「かんぱーい」「「「「「」」」」」」」

桐生は一呼吸おいて、花見の開始を宣言した。その言葉に反応して皆も声高々に乾杯の声を上げる。

「ねえねえ。前から気になっていたけど、桐生さんはμ、sの皆といつの間知り合ったの？」

「ん？何でそんな事を聞いてくるんだ？」

「何でって、この前に桐生さんも花見に参加してもいい？と聞いたらさ。皆、口を揃えてあの人なら良いよと返事を返して来たんだ。絵里ちゃんや海未ちゃん達は知ってるだろうけど、他の人とはいつ会ったのか気になってるんだ」

花見が始まって暫くした頃。各自がそれぞれ好きな物を掴まんで飲み食いしてる中、隣に座っていた穂乃果がメンバーと知り合ったのかを聞いてきた。

それは他のメンバーも気になるのだろう、飲み食いしながらも聞き耳を立てている。

些か穂乃果の話に引っ掛かりを感じたが、特に気に留めずに桐生はその時の事を思い出しながら話し始める。

「皆と出会った時か。そうだなあ…俺が最初に出会ったのは花陽だな。確か、あれは俺が神室町に着いた日だったか。慣れない街で迷っているのを見てな。放って置けずに声をかけたのが切欠だ」

「へえ〜 花陽ちゃんとは神室町で会ったんだね」

「うん あの時は道案内だけじゃなく、悩みを聞いてもらったりとお世話になりました」

「悩み？それは知りませんでしたね。一体、どんな悩みだったんです？」

「ああ それは私が今、真姫ちゃんと凜ちゃんでやってるユニットの

事だよ。その時は、sを意識していて、結成する事に消極的だったの。でも、桐生さんの後押しで私は新しいユニットを作る事に決めたんだ」

「そうでしたか。思えば、桐生さんの言葉は不思議と心に沁み込んで来ますからね」

「言われてみれば、確かにそうかもね」

海未の言葉に真姫も賛同する。彼女も桐生の言葉に背中を押された事があるからだ。

「それはそうとき。他にはどんな風に出会ったの？早く、続きを聞かせてよ」

話を聞いていた穂乃果は続きが気になり、続きを急がす。

「そう急かすな。俺が次に会ったのは希だな。俺が街を歩いていたら、希が声をかけて来てな。街を案内して欲しいと頼まれたんだ。まあ、それは俺と花陽が一緒にいる所を見て、俺が花陽の弱みを握っているんじゃないかと心配していたらしい」

「結局、それはウチの勘違いやったけどな。あの時は迷惑をお掛けしました」

「いや、別にいいんだ。それだけ希が花陽を心配していたからこそだろうしな」

「そうね。希は後輩思いで音ノ木坂にいた頃も後輩から人気があったのよ。まあ、おっちょこちょいな所もあるけどね」

「ム、それを言うならエリチだつてそうやん」

「おいおい 二人共、そこまでにしておけ。折角の花見に喧嘩は無粋だぜ」

「桐生さんの言う通りね」

「花見に喧嘩したらあかん」

言い争いになる前に桐生が二人へ釘を刺した。二人もハツとして、素直に引き下がる。場が収まった所で凜が興味津々で桐生に尋ねた。

「それで次に会ったのは誰なの？凜も続きが気になるにや」

「希の次に会った人はにこだ。あの時、街で一人立っている虎太郎を見つけてな。その時は子供を狙う事件もあったし、放って置けずに虎太郎を交番に連れて行こうとしたんだ。その途中でにこが追いかけて来たんだ。どうやら、にこは俺が件の誘拐犯だと思っていたようだったよ」

「それは悪かったわよく　でも、事情を知らないと思うのも無理無いでしょ」

「まあ、そうだよな。だが、虎太郎が迷子になった時やにこがチンピラに向かって行った時は驚いたぞ」

「え？にこちゃん　チンピラに向かって行ったの？何でそんな事をしたのよ」

「そうだよ。最近は怒りっぽい人が多いと聞くよ」

桐生の言葉を聞いて、真姫が心配そうな様子でにこへそう言った。凜も真姫に便乗してにこへ言葉をかけた。心配する二人に向かってにこは優しく微笑むと、穏やかな口調で言葉を返す。

「うん　普通なら避けて通るわよ。その時は迷子になった虎太郎が絡まれていたのよ。姉が弟を助けるのは当然じゃない。ま、結果として桐生さんに助けてもらったけどね。あの時はありがとう」

「気にするな。あいつらのやった事が俺も許せなかったからな」

「そう　桐生さんがにこちゃんを助けてくれたのね。良かった」

「フフ　真姫ちゃんにはこっちの事になると、必死やなあ」

「もう、からかわないで」

ホッと安堵の息を吐く真姫を希はニヤニヤと笑ってからかい始める。そんな二人を桐生は温かい目で見つめていた。そんな中、にこが口を開いて真姫と凜へ話しかける。

「それはそうと真姫ちゃんと凜は桐生さんといつ会ったのよ？私はそれが気になるのだけけれど…」

「私？私が桐生さんに会ったのは…凜と花陽と一緒にレストランへ行った時だったわね。それで桐生さんと相席する事になったのよ」

「ああ。そういや、そうだったなあ。確か、そのレストランはトマト料理専門店だったな」

「トマト料理専門店..」

「相変わらず、トマトが好きなんですわね」

桐生の話に出てきたトマト料理。この言葉に海未とことりは渋い顔でポツリと呟く。それを聞いた真姫が「別にいいでしょ。好きなんだから」と拗ねた様にぼやいた。

「でも、あの時の真姫ちゃん。珍しく積極的だったにや」

「うん、私も驚いたな。ある意味では真姫ちゃんらしかったけど」

「一体、何をしたのよ。面白そうだし、早く教えなさい」

「教えてやるから少し落ち着け。二人共、怖がってるぞ」

「うっ わ、悪かったわよ。それで何があったの？」

凜と花陽の話が気になったにこが食い付いてきた。息を荒くして迫るにこの迫力に気圧されて、何も言えずにいる二人を見た桐生がにこを諫める。桐生に言われて、にこも二人に怯える二人に気付き、素直に謝った後で改めてその出来事について尋ねた。

「ああ 俺が相席した真姫達と食事をしていて、暫くした頃だったか。呼び込みをしていたスタッフが倒れたという話が聞こえてきたんだ。それを聞いて、真姫が変わりに自分達が呼び込みをしようと言い出して、俺達が店の呼び込みをする事になったんだよ」

「成程ね。真姫ちゃんがそう言い出した理由は予想がつくわ。どうせ、美味しいトマト料理を出す店が潰れたらどうするのよ！とか言ってたんでしょ？」

「..良く解ったな。確かにその通りだ」

「にこちゃんは真姫ちゃんの事をよく知ってるにや」

「うん。まるで見てたかのように的確なものもすごいね」

「もう私の事はいいでしょ。それよりも..絵里や穂乃果達はいつ会ったのよ？」

これ以上は聞くに耐えなかったのだろう。真姫は話題を変えるべく、穂乃果と絵里達に話を振った。

「私と穂乃果は神室町で会ったわ。その日は街で開催される催しを見に行ったのだけど、街は凄い人ごみでね。その所為で亜里沙と逸れちゃったのよ。そんな時、声をかけてきたのが桐生さんだったの」

「そして桐生さんが協力してくれる事になったんだよね」

「ええ。それにしても亜里沙が桐生さんの知り合いと行動してたのにも驚いたわね」

「真島の兄さんか。偶然ってのはあるもんだな」

偶然の一致が重なった出来事を思い返ししながら、三人は楽しそうにその時の事を口にする。

「そうだよ。亜里沙ちゃんと逸れた時はどうなるかと思ったけど、何とか見つかったからね。それと海未ちゃんとかとりちゃんが桐生さんと会ったのは私の家だよ」

「いえ、私が桐生さんと会ったのは穂乃果の家へ向かう途中ですよ」

絵里との出会った経緯を話した後、続けて穂乃果がことりと海未が桐生と出会った時の事を説明した。しかし、その説明を聞いていた海未が口を開いて訂正した。

「ああ、確か、穂乃果から貰った地図を頼りに穂むらへ向かっていたんだが、道に迷ってしまったってな。その時、運よく海未と会って道案内をしてもらったんだ」

「地図があるのに迷うって、桐生さんは方向音痴なの？少し意外だよ」

「違いますよ。道に迷ったのは穂乃果の地図が原因です。地図に書いていたのは線で描いた家と道だけですからね。あれで辿り付くのは無理ですよ」

「んも〜 結局、目的の場所に着いたんだからいいじゃん」

「あれは私が案内したからでしょう!! 第一、人に渡す地図はしっかりと書いてください」

「ふ、二人共。喧嘩したら駄目だよ」

「ことりの言う通りだ。そこまですておけ」

「はい、ごめんなさい」

「ふう〜 喧嘩が止まって良かったよ」

熱くなり、周りを気にせず言い争う二人をことりと桐生が止める。それで熱が覚めた二人は喧嘩を止めて素直に謝った。そんな三人を見ていた桐生は穏やかに微笑むと静かに言葉を発した。

「フツ 相変わらず、お前達三人は仲がいいなあ。まあ、それは皆も同じ何だろうかな」

「そうね。何だかんだ言っても皆と会ったり、花陽や凜と過ごすのは楽しいもの」

「うん 私と同じだよ。μ、sが解散しても皆と会いたい。これは皆が卒業して、社会人になっても…それを変わらず続けていきたい。私はそう思ってるんだ」

「そうか。普通なら難しい事だが、お前達ならそれが出来そうだな」
「勿論。私達、μ、sの絆は絶対だもん」

桐生の言葉に穂乃果は自信満々にそう言葉を返す。そんな穂乃果の言葉には、何処か説得力がある。不可能に近い廃校阻止の背景にも彼女の言葉があったのだろう。だからこそ、廃校阻止を実現することが出来たのだと桐生は感じていた。

「ああ そうだな。俺もそう思うぜ。それと今更かもしれないが、改めて言わせてくれ。今日は皆との出会いを祝して、乾杯だ〜」

「「「「「「かんぱーい」」」」」」」」

今日は絶好の花見日和。楽しい花見はまだまだ続く。この日陽が沈むまで神社から楽しそうな笑い声が途切れることは無かった。

サブストーリー016 暴走！アイドル大好き少女

ある日の神室町。雲一つない晴天の下 真島はのんびりと街を当てもなくぶらぶらと散歩と洒落込んでいた。今日は面倒な書類仕事が無い事もあり、十八番の歌を口遊む程、真島は上機嫌であった。そんな真島が不意に道端へ目を向けると、小泉花陽の姿を見つけた。当の花陽は何やら真剣な様子で携帯を睨んでいる。

本来なら邪魔したらいけないと立ち去る所だろう。だが、普段は大人しい感じの花陽が見せないであろう顔を見せている。それが逆に真島の好奇心を掻き立て、興味を抱かせる結果となった。

そんな花陽に楽しげな様子で足早に近付くと、真島は声をかける。「よう 久しぶりやな！こんな所で何をしとるんや？しかも、そないな怖い顔をして…花陽ちゃんらしくないで」

「すみません。私は今忙しいんです。要件なら後で… あれ？真島さんじゃないですか。こんな所で何をしてるんですか？」

「何って…それはこちらの台詞やで。何や、怖い顔して携帯を見とったから何か厄介事かと思おうての。それで声をかけたんや」

普段と違う花陽の言葉に一瞬、気圧された真島だったが… すぐにいつもの花陽に戻った後、真島は訳を説明した。

「あつ、そうだったんですね。そうとは知らず、失礼しました」

「別にええ。せやけど、花陽ちゃんは何をしとったんや？えらい真剣な顔してたが…」

「ええ。実はこの街であるアイドルを探していたんです。だけど、広いこの街で一人探すのは厳しくて…何とか、情報を集めようと携帯を見れていたんですよ」

花陽は困った顔をして、自分がやっていた事を真島に教えた。その後、花陽はある提案を思い付く。そして頭を下げると花陽は真島へ自身の想いを正面からぶつける事にした。

「そうだ。真島さんはこの街に詳しいですよ？無理を言って申し訳ないですけど、どうか私に協力して下さい。お願いします」

「…ええで。何を探してるのか知らんけど、花陽ちゃんにそこまでされたら断れへんからな。それで、探してるのは何や？それを教えてくれや」

（大人しいだけの子かと思っていたが、自分の気持ちをしっかりとと言える子やったんやな。正直な所もええ。そんな子にここまでされたら断るなんて出来へんな）

「本当ですか。ありがとうございます」

真つ直ぐ言葉をぶつけてくる花陽を見て、真島は心の中でそう考えていた。そして真島の返事を聞いた花陽は明るい表情で再び頭を下げて、お礼を言う。

「礼を言うんはまだ早いで。それでさつきも言うたが、花陽ちゃんが探してる物を教えてくれや」

「あつ、そ、そうでした。私が探してるのはT―SETです。噂ではこの街でT―SETのイベントがあるらしいんです。それで神室町へやって来たんですが、探しても一人じゃどうにもならなくて…」

「それで街に詳しい俺にお願いしたっちゆう訳か。話は分かった。そういう事やったら、朝飯前や」

「はい。頼りにしています。一応、天下一通りは一通り探して見たので、次は泰平通を探してみます」

「それじゃあ…俺は中道通りを探してみるかのう」

「そうだ。その前にお互いの携帯番号を交換しませんか？何か分かったら、すぐ連絡出来ますから」

「そうやな。確かに見つけても知らせる術が無いと意味ないからのう」

「これでよしと。じゃあ、私は泰平通りに行つてきます」

「おう。あそこは酔っ払いも多いから気を付けるんやで」

話し合いの結果、花陽は泰平通り。真島は中道通りを探す事に決まった。そして花陽の提案でお互いの携帯番号を教えた後、二人は目的の物を探す為に別行動を開始する。

しかし、花陽はこの時… 真島がある勘違いをしている事に気付いてはいなかった。

花陽と別れた後、その足で真島は中道通りへ訪れていた。普段は人で混雑している場所だが、幸いにもお昼前という事もあり、人の数は少ない。

「今日は空いてるようやな。これなら探すのも幾分楽そうやな。ん？」

そして通りを見渡すと喫茶アルプスの前で店長が声を張り上げ、何やら宣伝をしている姿が目に入った。それを見た真島は渡りに船だと、軽快な足取りでマスターの元へ向かうと声をかける。

「おう。マスター。今日はえらい景気が良さそうやんか。何の宣伝をしとったんや？」

「おや？真島さんじゃないですか。今、やっていたのは本日のお得メニューの宣伝ですよ」

自分に話しかけてきた真島に気付くと、店長は人の良さそうな笑顔でやっていた事を教えた。店長がやっていた事を知った真島だが、新たに浮かんできた疑問を投げかける。

「ほー そうやったんか。せやけど… そういった仕事は普通、バイトとかがやるもんなんちゃうんか？何で店長がやってんねん」

「その事ですか？まあ、本来はバイト等の仕事ですけどね。最近は店長も表に出てくる事が多いです。それに以外と楽しいんですよ。バ

イトの若い子達とコミュニケーションを取る機会も出来ますからね」
「そうか。まあ、バイトも同じ店で働く仲間やからなく、そういうのも大事なんかもしれへん。ところで宣伝してたメニューは何なんや？」

「ああ、それですか？それは時間限定のティーセットメニューですよ。朝は6時から8時。昼は12時から14時に行っています。今は丁度お昼ですし、真島さんもどうですか？美味しいフードとアルプス自慢の紅茶やコーヒーを同時に楽しめるセットですよ」

店長と会話の中、真島は宣伝してたメニューが気になって尋ねた。聞かれた店長も待つてましたと言わんばかりの様子で真島に答える。しかし、真島は店長が言ったある言葉に注目する。

（∴ ティーセットやと？そーういや、花陽ちゃんが探していたのもティーセットやったな。もしかして、これの事かともしれへん。探し物は意外な所にあるもんやからな。花陽ちゃんに連絡してみよか）
「妙に腹が減ると思ったら、もうお昼やったんやな。折角だし、食っていくとするか」

「ありがとうございます。それでは中へどうぞ」

「おう。せやけど、その前に電話しないとあかん人がおるんや。それを済ませてからやな。それまでやってるとええけど…」

「そうでしたか。まあ、時間はまだありますから大丈夫ですよ」

「さよか。ほな、ちよつと電話してくるわ」

真島は電話を取り出すと、花陽に電話をかけた。かけて数コールもしない内に花陽が電話に出た。

「もしもし、真島さん。連絡をしてきたという事はT—S—E—Tが見つかったんですか？」

「おう。一応、ティーセットは見つけたで。場所は喫茶アルプスという店や」

「喫茶アルプスですね？分かりました。今からそちらへ向かいます」

こう言い残して花陽は電話を切った。そして数分後、駆け足で花陽がやってきた。

「…ハア、ハア、お待たせして…すみません。それでT—S E Tは何処ですか？」

「ああ それなら… あそこや。まさか、こないな所にティーセットがあるとはもう」

息を切らして尋ねる花陽に真島はある場所を指さして答える。それを聞いて、自分が探していた者がすぐ傍にいる。その事に花陽は目を輝かせ、指差す方を見た瞬間。喜びの表情は落胆の表情へ変わった。

「…あれ、何ですか？」

「うん？何って、ティーセットやないか」

「あゝ 申し訳ないですが、私が探してるのは別のT—S E Tなんです」

「何や。これや無かったんか。そら すまなかったの」

「い、いえ 私の方も協力してもらってるのにごめんなさい」

すまんと謝る真島を見て、花陽は慌てた様子で言葉を返す。コロコロと表情を変える花陽の様子がおかしかったのか。真島は溜まらず、笑いを溢した。

「フツ、別に気にしてへん。それより、探し物の続きと行こうやないか」

「そうですね。私も泰平通りを見て回りましたが、これといった情報はありませんでした」

「ほうか。なら、他の場所を探して見るかの。見て回ったのは天下一通り、泰平通り、中道通りやから… そうや 次は劇場通りと公園通りを探してみよか」

「はい じゃあ、私は劇場通りを当たってみます。あそこはよく通るので土地勘がありますから」

「分かった。ほな、俺は公園通りを探してみるわ。それと花陽ちゃん。

折角やし、飯でも食わへんか？丁度、アルプスでお得なセットをやつとるようやで」

二人で話し合い、次に探す場所を決めた後、真島は花陽を食事に誘う。昼時でもあり、周りでも昼食を取ろうとする通行人が増えて来ていた。

「ごめんなさい 真島さん。実を言うと、お昼はさつき食べたばかりなんです」

「そりや、タイミングが悪かったの。それと花陽ちゃんはもう行くんか？」

「ええ 出来るだけ、早い方がいいですからね。真島さんはお昼を食べてからでも良いですよ。空腹で街を歩かせるのは悪いですし」

「さよか。せやけど、飯はいつでも食えるからの。ま、今は花陽ちゃんの探し物が優先や」

「ありがとうございます。それじゃあ、私は劇場通りへ行ってみますね」

満面の笑顔で花陽は真島にお礼を言うや否や、さつき同様に駆け足で劇場通りへ向かって行つた。

「やれやれ。思っていたより、花陽ちゃんはお転婆な子やのう」

「そうみたいです。にしても真島さんが花陽ちゃんと知り合いとは意外でしたよ」

颯爽と立ち去る花陽の後ろ姿を見て、真島はポツリと一言呟いた。そんな真島達の様子を眺めていたアルプスの店長が近づいて話しかけてきた。

「ん？店長も花陽ちゃんの事を知つとるんか？」

「ええ うちの店でバイトをしてる子がμ、sのファンでしてね。最近、店でもμ、sの曲を流しているんですよ」

「そうやったんか。そうだ 店長。今、花陽ちゃんの探し物を手伝つてる最中でな。ティーセットを探しとるんや。最初、この店のティーセットやと思っていたんやけど、どうやら違う様でな。店長は何か、

ティーセットに関する話を聞いておらんか？」

真島は店長に自分がやっている事を説明して、ティーセットに関する情報を知らないかと尋ねた。年齢層が違う客が来る喫茶店で働く店長なら、何かしらの噂を聞いてるかもしれない。そう考えたからである。

「うーん ティーセットに関する話ですか・・・ ああ そういえば公園通りの方で露天商が食器類を売っていたのは見ましたよ」

「ほんまか？それはいつ頃の話や？」

「今日の朝ですよ。私が出勤する際、通った時です。結構、多くの食器があったからティーセットの類もある筈です」

「そうか。恩に切るで店長。ほな、俺は今から公園通りに行ってみるわ。せやから、時間限定のお得メニューを食べるのはまた今度になりそうや」

「いえいえ 時間限定のセットメニューは毎日やっておりますからね。いつでもいらしてください」

「フツ さり気なく宣伝とはちやつかりしとるのう」

「ハハハ これでも商売人ですからね。そこは抜かり無しですよ。それでは私は仕事に戻るのでこれで失礼致します」

「おう 情報ありがとうございます」

お礼の言葉を言う真島に店長は静かに一礼して去っていく。それを見送り、真島も目的の公園通りへ向かって歩き出す。

真島が立ち去った後、中道通りではある二人の少女が姿を現した。するとその場は大勢の人でごった返す。そんな人達を二人の付き人が拡声器を手に制した。

「皆さん 押さないで下さい。T—SET握手会、ご参加の方は一列にお並び下さるようお願い致します」

不幸な事に真島が立ち去った後、中道通りでは有名アイドル T—

SETの握手会が始まった。

それを知らない真島は公園通りへ来ていた。アルプスの店長から聞いた通り、道には複数の露天商の姿を見かける。

「ほう〜 見た所、色んな出店があるようやの。お？どうやら、あれがそうみたいやな」

公園通りの道を歩きながら、真島は目的の露天商を探しているとそれはすぐ見つかった。

「ちよつとええか？ 此処で食器を売つとるようやが、ティーセットの類は置いてるかの？」

「いらつしやい。お探しの物はティーセットですか？ それなら丁度、ワンセットありますよ。お客さん 運がいいですね。ティーセットは今あるので最後ですからね」

「そうなんか。実は俺の知り合いがティーセットを探してるんや。今、連絡して呼ぶさかい。だから、そのティーセットを取って置いて欲しいんや」

「そうでしたか。事情は解りました。この商品は売らずに取って置きましょう」

「おおきに。ほな、連絡してくるわ」

頼みを聞き入れてくれた店主にお礼を述べた後、真島は再び花陽へ電話をかけた。案の定、数コールもしない内に花陽は電話に出た。

「もしもし。電話をかけて来たという事は見つけたんですか？」

「ああ 見つけたで。とりあえず、急いで公園通りまで来てや。道は解るやろ？」

「大丈夫です！ それでは今から行きますので待ってて下さいね」

そう言うと花陽は電話を切った。それから数分後 遠くから駆け足でやってくる花陽が姿を現した。

「ハア、ハア、お待たせしました。それでT―SETは何処ですか？」

「そないに慌てなくてもティーセットなら…ほら、そこにあるで」

「え？ ある？ もしかして、見つけたのはこれですか？」

真島が指し示す方向にあった紅茶用の“ティーセット”を見て、花陽は戸惑いの表情で言葉を洩らす。

「何って、ティーセットやないか。もしや、これも探してるのと違うんか？」

「言いにくい事ですが、これも私が探してるのと違います。そもそも… 私が探しているのはアイドルの“T—SET”です」

「何や、花陽ちゃんが探していたのはアイドルの方やったんか。それなら先に言ってくれたらええのに」

「あつ、ごめんなさい。そういえば、肝心な事を伝え忘れていました」

2度に渡る食い違いから、何か妙だと感じた真島が花陽に尋ねる。花陽も真島との食い違いに気付いたのだろう。自身が探しているのはアイドルのT—SETだと真島に教えた。

「横から口を挟んで悪いのですが、取り置きをしてるティーセットはどうなさいますか？」

二人の会話を聞いていた店主だったが、頃合いを見計らって二人に話しかけてきた。その事で自分が取り置きするよう頼んでいた事を真島は思い出した。

「ああ すまん。すっかり忘れとった。まあ迷惑をかけてもうたし、そのティーセットはワシが買うからもう暫く取り置いてや」

「解りました。それでしたらこのティーセットは取って置きますね」
「ついでに聞くが、この街でアイドルに関する情報を知らんか？知っていたら教えて欲しいんや」

店主とティーセットを買う約束をした後、真島は別のティーセットの情報を尋ねた。尋ねられた店主は暫くの間、考え込んでいるとハツと何かを思い出してある事を口にする。

「ああ 私が聞いた話ですがね。今日、中道通りで有名人の握手会が開催されるようですよ。確か、名前はT—SETとかいう名前でしたね」

「それは本当ですか？ 一体、そのイベントは何時頃ですか？ 詳しく教えて下さい」

店主がT—SETの名を出すと、それを聞いた花陽は凄まじい剣幕で店主に詰め寄って問い詰める。

「え？ あ、ああ 開始する時間は知らないけど、お昼頃にやると聞いたような」「こうしてはいられません」って、お客様!？」

「はあく 人は見かけによらんもんやのう。すまん 店主。俺はあの子の後を追わなあかん。とりあえず、ティーセットの取り置きは頼んだで」

「は、はい 解りました。二人揃って、嵐みたいな人だ。やっぱり、神室町は変わってるなあ」

放たれた矢の如く、中道通りへ全速力で向かう花陽を見て真島は溜息混じりでぼやいた。そして店主に一言だけ告げて、真島も花陽の跡を追っていった。

二人が立ち去った後、店主は一人 そう呟いてた。

あの後、中道通りに向かった花陽を追いかけていた真島だったが、意外にも花陽の足が速く中々追い付く処か、その姿を見失っていた。「ハアハア：： ひ、人はほんまに見かけに寄らんの。あの小さい体の何処に体力があるんやか。一向に距離が縮まらへんわ」

全速力で走っている所為か、掠れた声で真島は愚痴を吐く。そんな追いかけてっことをしている間に真島は中道通りへ到着した。アイドルが訪れていると聞いた為、大勢の人がいるのを予想していたが、既にアイドルは退散したのだろう。思っていたよりも人は少なかった。「何や、思っと思ったよりも人がおらへん。これなら花陽ちゃんもすぐ

見つかりそうやな」

その言葉通り、道路に面した道で花陽の姿を見つけた。目的のアイドルと会えなかった故か、花陽の後ろ姿は言いようのない哀愁が漂っていた。花陽がアイドルに会えなかったのは勘違いをしていた自分にも非がある。そう考えた真島はおずおずと花陽に声をかけるべく、口を開いた。

「なあ、花陽ちゃん。その、何と言つて良いか俺には分からん。せやけど、元気出し「真島さん 私、T—S—E—Tと握手しちゃいました!!」それに応援ありがとうつて、笑顔でそう言つてくれたんですよ。私、もう嬉しくて嬉しくて溜まりません。今日は最高の一日です」ほ、ほう。それは良かったのう」

落ち込んでいると思い、真島が慰めの言葉をかけようとした時、興奮した花陽が怒涛の勢いで言葉を発する。その勢いとテンションの高さに二の句が告げないでいる真島を見て、花陽は照れた様子で言葉を紡ぐ。

「あつ、ごめんなさい。私、アイドルの事になるといつもこうなんです」

「まあ驚きはしたけど、別に謝る事はあらへん。それと探していたアイドルと握手出来て良かったやないか」

「はい！真島さんも協力してくれてありがとうございます」

「おう 俺も花陽ちゃんの力になれて良かったで。そうや、今から喫茶アルプスに行かへんか？腹も減ってきたしの」

「そうですね。私もお腹空きましたし、行きましよう」

「ほな、お洒落なランチと行こうか」

「はい」

そうして二人は喫茶アルプスへ向かって行った。妙な勘違いもあったが、ティーセットを廻る騒動はこうして幕を閉じた。

サブストーリー017 お酒は程々に

ある日の夜 神室町のミレニアムタワー前に桐生の姿があった。仕事帰りのサラリーマンに声をかけるキャッチ達。そんな普段と変わらない光景を眺めて、桐生はそわそわとした様子でベンチに座っていた。

そう 今日はある女性と会う事になっている。その女性とは以前、神室町で知り合い、一緒に酒を飲み交わした南理事長、その人である。

本来なら女性と酒を飲むだけで緊張などしない筈だが、あの女性と会う事に緊張しているのには理由がある。

それは遡る事数時間前。

その時、桐生は喫茶店で沖縄の養護施設『アサガオ』の書類仕事をしていた。

諸事情で施設の運営を遥に任せていたが、提出する一部の書類は桐生本人がやる必要があるからだった。

「ふう これで一段落付いたな。あとはファックスで遥に送るだけだな」

送られてきた書類を一通り片付け、桐生が一息吐くと同時に机へ置いてあった携帯が震えて着信を知らせる。いきなり掛かってきた電話に驚き、ディスプレイに表示された名前を見て、桐生は更に驚いた表情を浮かべる。桐生に電話をかけて来た相手は南理事長であった。

暫しの間、茫然としていた桐生だったが、ハッと我に返ると慌てて携帯を手にとると着信ボタンを押した。

「もしもし 南です。久しぶりに電話をしましたが、今はお時間大丈夫でしょうか？」

「こちらこそ 久しぶりです。ええ 今、仕事が終わった所ですから大丈夫ですよ」

「それは良かった。あの日以来、連絡が無かったのでこちらから電話しました。いきなりで驚くでしょうが、今夜一緒にお酒でも飲みませんか？」

南理事長から発せられた言葉を聞いて、桐生は今日一番の驚きを感じた。まさか、相手から酒を飲もうと誘われるとは思っていなかったのだ。しかし、特に断る理由も無いと桐生は二つ返事で南理事長の誘いを受ける事にした。

「勿論、構いませんよ。待ち合わせ場所と行く店は以前と同じでいいですか？」

「ええ、それでいいですわ。それで時間は19時半頃に会いましょう。それでは失礼しますね」

「ではまた。俺の方こそ、楽しみにしている」
「はい。また後で」

二人で会う約束をした後、相手は静かに電話を切った。切れた電話を机に置いた途端、先程と同じく電話が震えて新たな着信を知らせる。

今度は誰だ？と桐生がディスプレイに目をやると掛けて来た相手は南理事長の娘 南ことりだった。

母娘揃って電話を掛けて来た事に内心、嫌な予感を感じていた。理事長同様に無視する訳にいかないと桐生は再度、着信ボタンを押す。

「もしもし いきなりごめんさい。今、お時間は大丈夫ですか？」

「それは大丈夫だ。それで一体、何があったんだ。穂乃果ならまだしも・・・ことりが電話してくるとは珍しいな」

「ええ 実は桐生さんに聞きたい事があるんです。さつきお母さんが言ってたんですけど、今日一緒にお酒を飲むって本当ですか？」

「ああ 本当だ。だが、お酒と言ってもそんなに飲ませたりしない。少し飲んで帰すさ」

ことりの口から出た言葉に内心、驚きながらも桐生はことりにその言葉を返した。恐らく酒を飲むと聞いて、酔った母親が遅く帰る事を心配しての事だろう。電話してきたのはその事を伝える為だと思っていたが、次にことりから発せられた言葉は意外なものであった。

「そうじゃないんです。私が心配してるのは桐生さんの事なんですよ。うちのお母さん、酒癖が凄く悪いから…」

「何？それは本当なのか？以前、一緒に飲んだ時はそんな素振りは無かったぞ」

「あの時は何か用事があったから、飲む量を抑えていたからだと思います。だけど、今日は何も用事が無いから思いつき飲みと言っていました」

「…そうなのか。ちなみに酔うとあの人はどうなるんだ？」

何処か緊張感を感じさせることりの口調から、相手は相当酒癖が悪いのだろう。しかし、未だに信じられない桐生は思い切ったことりに尋ねた。

「どうなるかと聞かれましたも…これは口で説明するのは難しいですね。ただ、本当に面倒な事になるのは確実です。だから、あまり酒を飲ませない様に見張っていて下さいね。帰って来た後、大変な思いするのは私ですから。是非ともお願いしますね」

「あ、ああ 解った。そこまで言うならしつかりと見張っておくぜ」

「よろしくお願いします。それではこれで失礼しますね」
「ああ それじゃあな」

酔わない様に見張つてと告げる言葉には妙な迫力が込められており、気圧された桐生は首を縦に振るしかなかった。桐生の言葉に安心したのか、幾分柔らかい口調に戻るとことりは挨拶を言い電話を切った。

通話が終わり、電話を机に置くと桐生は深く息を吐いた。まさか、軽い気持ちで受けた飲み会が面倒な事になったと若干後悔していた。とりあえず、軽く引つ掛けてすぐに終わらせて帰ろう。そう考えていたが、いつもと同じく災難に巻き込まれる未来が待っている事を彼は

知らない。

時間を戻して現在。

誘われたのは自分だが、遅れてはいけないと約束の15分前に到着していた。そして日も完全に沈んだ頃、「こんばんは 待たせてしまったかしら？」と自分の後ろから件の人物が声をかけてきた。桐生は遂に来たと心を決めて、静かに振り返って言葉を返す。

「こんばんは 南さん」

「そう？それなら良かった。今回も以前と同じ服装で来たけど、変かしら？」

「いや、そんな事はない。それと今ならあの店も空いてるでしょうから静かに飲めますよ」

「フフ どうもありがとう。あら？先程から私の顔を見ているけど、何か付いてるのかしら？」

桐生が言ったその言葉で南理事長は頬を染めていた。その表情に思わず見惚れて、南理事長の顔を見続けていると頬を染めたまま、桐生に揶揄う様に言葉をかける。

「い、いや。何でもない。それじゃあ、そろそろ行くでしょう」

「ええ そうね」

そんな風に南理事長と一言、二言交わした後で二人は酒場へ向かって行った。

待ち合わせ場所から数分程して、二人は目的の店であるバンタムへ辿り着く。桐生が店の扉を開けるとグラスを磨いていたマスターが優しい笑顔で迎えてくれた。

「いらっしやいませ！ おや、桐生さん。こんな早い時間に来るなんて珍しいですね。しかもあの時の美人さんと一緒とは…桐生さんも中々、隅に置けませんね」

「おいおい 椰揄わないでくれ。マスターが思ってる様な間柄じゃないぞ」

「あら？桐生さんは私と一緒にお酒を飲むのは嫌なのかしら？悲しいわ」

「あーあ 駄目ですよ。桐生さん そんな事を言っっては…美人を泣かせると碌な事が起きませんよ」

「ぐっ 俺が悪かった。だから、椰揄うのは勘弁してくれ」

息が合わせて椰揄う二人に桐生は手も足も出さず、素直に引き下がるしか無かった。その頃合いを見計らい、マスターは姿勢を正して接客を開始する。

「まあ茶番はこれくらいにして、お二人とも静かに飲みたいでしょうし、以前と同じ席でよろしいですか？」

「そうだな。俺はそれでいいが、南さんはどうする？」

「私も以前と同じで構いませんわ」

「お決まりですね。それではご案内致します」

二人の言葉を聞き、マスターは二人を連れて奥の席へ案内を開始した。二人が席に着くのを見て、マスターが注文を尋ねる。

「それで今夜は何にいたします？」

「そうだな。俺はウイスキーのストレートを頼む」

「畏まりました。それで南さんはいかがなさいます？」

「そうねえ じゃあ、私はウォッカのストレートで」

「ウォッカストレートですね。畏まりました」

「ちよつと待った。いきなりウォッカストレートは強すぎないか？もう少し軽めの奴を頼んだ方が…」

南理事長の注文に桐生は待ったをかけた。人に寄るのだろうが、一杯目から度数の高い酒を頼むとは思っていなかったからだ。

「そうかしら？私は大丈夫よ。こう見えてもお酒には強い方ですか」

「ほう そうなんですか。確かに前も強いお酒を飲んでましたから平気でしょう。それに酔い潰れたとしても桐生さんがしつかりと送っ

てくれますよ。ね？桐生さん」

「あ、ああ そうだな。その時は家まで送るぜ」

「まあ、それは頼もしい。その時はお願いしますね」

「それでは私はこれで」

「お、おい マスター」

注文を受けて去ろうとするマスターを呼び止めようとするが、桐生の声は届かずマスターは立ち去ってしまった。

「あのマスターさん とても愉快な人ね。それに来た客の名前と顔を覚えてる事に驚いたわ」

「ああ 来た客の事は忘れない。それがマスターの凄い所なんだ。だからこそ、店に来る客は大勢いるのさ」

「それは分かる気もするわね。この店の雰囲気は落ち着いていて、居心地が良いもの」

「お待たせ致しました！おや？もしかして私はお邪魔でしたかな」

穏やかに呟く桐生に南理事長も楽しそうに言葉を返す。和やかな雰囲気の中、注文の品を手にマスターがやってきた。二人の間に漂う空気を感じてマスターは笑いながらそう言った。

「おいおい もう揶揄うのは勘弁してくれよ」

「ハハハ 二人の良い空気を壊す程、無粋ではありませんよ。さて、私はこちらで失礼しますね。ご注文の時はいつでもお呼び下さい」

「分かった。その時は呼ばせてもらうぜ」

注文の酒をテーブルに置いた後、マスターは礼をして立ち去っていった。それを見送ってから、桐生と南理事長はお互いのグラスを手にとると乾杯をした。

「こういう席でこんな事を聞くのは野暮かもしれないが、どうして俺を誘ったりしたんだ？」

「そうね。敷いて言うなら興味が湧いたからよ。私も失礼な事を言うけど、貴方の様な人を娘や穂乃果ちゃん達が慕う理由が気になったからでもあるの」

乾杯をした後、酒で喉を潤すと桐生はある事を南理事長に尋ねた。当の本人もこの質問が来ることを予想していたのだろう。酒を一口飲んで質問に答える。

「そうか。確かに考えてみれば、俺もあの子達と仲良くしているのが不思議に思えてくるな。だけど、何というのか……上手く言葉に出来ないがあの子達といると何処か落ち着くんだ」

「成程。言われてみれば、貴方の言う通りね。穂乃果ちゃん達には不思議な魅力があるものね。大人の私にも出来なかった廃校阻止もやってみせたもの」

「子供といえど、時には大人でも出来ない事をやるからな。そういう所は凄いと素直に思うぜ」

「そうね。それに彼女達は音ノ木坂が誇る自慢の生徒ですもの。勿論、他の子達もね」

南理事長は笑顔を浮かべて、桐生にそう言った。まるで子供の様な表情の南理事長に桐生も釣られて笑みを浮かべる。

「フツ そうか。確かに廃校阻止にはμ、sや他の生徒達の頑張りのおかげだろう。だが、背景には貴女の頑張りもあつたからじゃないのか」

「私の頑張りね。廃校阻止の為に尽力したのだけど、結局は駄目だったのよ」

「結果としてはそうかもしれない。けど、μ、sの活動に反対意見を言う人も中にいたはずだ。」

それでも彼女達を信じて、スクールアイドルとして活動出来たのは貴女がいたからだろう。だからこそ、彼女達は思う存分に歌って踊る事が出来たんだ。そういう意味では南さんも廃校を阻止した一人なんだよ」

「そう……私の行動も廃校阻止の力になっていたのね。言われるまで気付かなかったわ。ありがとう桐生さん」

桐生の言葉に涙を滲ませながらも、南理事長は笑ってお礼を述べ

た。

「どういたしまして。それより、今日は折角の飲み会だ。湿っぽい話は此処までにして飲むとしよう」

「ええ」

南理事長は桐生の言葉に頷くと、ウオツカのグラスをグイッと仰いだ。そんな南理事長に負けじと桐生もウイスキーをグツと飲み干した。この時、彼はことりから言われた事をすっかり忘れていた。

「すみませくん マスタアさああん ウオツカーストレクトオ おかわりおねがいしまーす」

「お、おい 南さん。いくら何でも飲み過ぎだぜ。此処で止めておいた方がいいんじゃないか」

2時間後 早いペースで酒を飲んでいた事もあつてか、南理事長は誰の目から見ても解る程に泥酔していた。流石に不味いと思つた桐生が止めに入るが、本人は聞く耳を持たない。

（はあ 参つたな。事前にことりから酔うと厄介だと聞いていたが、此処までとは……てつきり、絡んだり泣いたりすると思つていたが、こうなるとは予想外だつたぜ。何とか宥めて、家に帰さないとな。そうと決まったら行動開始だ）

「なあ 南さん。今日は夜も遅い事だし、飲み会はお開きにして帰ろう。家では娘が待つてるんだらう？」

「んく？ そうねえ。確かに家ではことりが待つてるわく だけど、もう高校三年生だから平気よ。高校生だけに孝行娘く なんちやつてね」

桐生はことりの名前を話題に出して、南理事長を帰る気にさせようとする。しかし、泥酔している南理事長には効果は無かつた。

このままでは埒が明かないと桐生は頭を悩ませる。最後の手段、娘のことりに電話して来てもらい、タクシーで一緒に帰すしかない。

そうと決めたら即行動だ。桐生は顔を上げて南理事長に声をかけ

ようとした時、本人はテーブルに突っ伏して静かな寝息を立てていた。

「おや、南さん。寝てしまいましたか。まあ、ウオツカを何杯も飲めば無理もないですね」

「ああ そうだな。すまんが俺はある人に電話してくる。その間、この人を見ててくれないか？」

「ええ 構いませんよ」

「ありがとう。それでは電話してくる」

南理事長の面倒を見てくれるマスターに礼を言った後、桐生はことに電話する為に席を立った。桐生が電話を掛けると、幸いにも相手はすぐに電話へ出た。

「もしもし 桐生だ。今、大丈夫か？」

「あつ 桐生さん。大丈夫だけど、どうかしたの？」

「実はだな…南さん。相当、泥酔して今眠ってるんだ。とりあえず、中道通りのタクシー乗り場まで連れて行く。だが、俺は南さんの家を知らないからな。悪いが今から神室町まで来てくれないか。運転手には中道通りのタクシー乗り場までと言えば問題は無いから」

「そうですか。ハアゝ やっぱり、こうなりましたね。それじゃあ、今からそちらに向かいますね」

「すまない。神室町に着いたら電話してくれ。その間、俺は会計を済ましておく」

「解りました。母の事、よろしくお願いします。それでは」

桐生は電話先から尋ねてきたことに事情を説明した。事情を知ったことは最初こそ、呆れていた。だが、こうなる事を予想していたのか。溜息を一つ吐き、こちらに向かうと言うと電話を切った。

「マスター 南さんの様子はどうだ？」

「ええ 暫く様子を見てましたが、顔色も普通ですし、問題は無いで

しよう」

ことりとの電話を終えて、桐生は南理事長の面倒を見ていたマスターへ話しかける。声をかけられたマスターは振り向き、返事を返す。

「そうか。強い酒を飲んだからな。まさかと思っていたが、杞憂で良かった。今日はこれでお暇するぜ。とりあえず、勘定を頼む」

「ああ それは後で宜しいですよ。これから南さんをタクシー乗り場まで連れていくんでしょう？先程の会話が聞こえましたからね」

「恩に切る。こっちの用が片付いたら、払いに来るよ」

「分かりました」

勘定は後で良い。優しい顔でそう言ってくれるマスターの好意に桐生は素直に甘える事にした。そして気持ち良く寝ている南理事長を背負うと店を後にした。

店を出て、中道通りに向かう道中。背負っている南理事長が寝言をぼつりと呟く。

「皆、ありがとう。廃校を阻止してくれて」

「フツ 夢で見る程、嬉しかったんだな」

小さい声だったが、桐生の耳に聞こえていた。眠っているながらも嬉しそうに笑う南理事長を見て、桐生も笑みを溢した。

数十分後、中道通りに到着した桐生がタクシー乗り場で待っていた。改めて、電話をかけようと思いついた時、やってきた一台のタクシーから降りてくることりを見て、桐生は近寄っていった。

「悪いな。こんな時間に呼び出してしまった」

「ううん 迷惑を掛けたのはお母さんだもん。こちらこそ、ごめんな
やん」

「いいんだ。俺もことりに言われた事を忘れていたのが原因だから

な。それと交通費は俺が出そう。今日はこのまま帰った方がいい」

母が面倒を掛けたと謝ることりを制して、桐生は財布から取り出した数万円を差し出した。

「え？流石にこんな大金は受け取れませんよ」

「いや、もう夜も遅くタクシー代も高くなってるだろう。それに呼び出したのは俺の方だからな。遠慮せず、受け取ってくれ」

「…解りました。そういう事ならご好意に甘えさせてもらいますね。余った分は今度会った時に返します」

当初は額が額だけに遠慮していたことりだったが、桐生の言う通り、タクシー代は高く。懐が寂しくなったのは事実である。それ故、ことりは桐生の好意に甘える事にした。

「それじゃあ、気を付けてな。それと南理事長、寝言でことりやμ、sの皆にお礼を言ってたぞ。廃校を阻止してくれてありがとうってな」
先程、ことりが乗ってきたタクシーに南理事長を乗せる。そして同じくタクシーに乗り込むことりに桐生はある事を伝えた。

「そう お母さん。そんな事を言ってたんだね」

「ああ きつと、今日飲み過ぎた理由はそれかもしれないな」

「フフ あれから大分、時間が経ってるのに」

「嬉しい事はどれだけ時間が過ぎても変わらないものさ。ちよつと話過ぎたな。そろそろ帰った方がいい」

「はい それではまた」

そうして二人を乗せたタクシーは出発していった

「さて、マスターに勘定を払いに行くか。まだ飲み足りないし、もう少しだけ飲んでから帰ろう。それに気分が良いから酒が美味しく飲みそうだ」

二人が乗っているタクシーが見えなくなるまで見送った後、桐生は

再びバンナムへ向かっていった。今日飲む酒はいつもより美味しい。
そう確信しながら。

サブストーリー018 希の神室町不思議探訪 路
地の幽霊

梅雨に入り、夏が近づいて来たある日の事。冷房が効いた事務所で真島は寛いでいた。

「はく 最近、蒸し暑い日が多くなってきたのう。夏だから暑いんは当然やけど、こうも暑いと外を歩く気がせえへんな」

梅雨だというのに真夏と思わせるような陽射しが部屋を照らす。真島組の事務所はミレニアムタワーの一角にある為に太陽の光を諸に浴びる。それ故、夏季は室内の温度が高くなる。当初は電気代を節約しようと冷房の使用を禁止していたが、そこは組員も人間。夏の暑さにやられる者が次々と出た為に現在は使用を許可している。

何か、面白い番組が無いかと真島がテレビを付けると丁度、怪奇特集の宣伝が流れていた。驚かせようと大きな言葉を並べているが、真島は興味が無いとテレビの電源を切ってしまった。

「はあく 昔ならまだしも、今の時代。あの手の奴は嘘くさいからのう。あんなもんより、お化け屋敷の方が百倍怖いわ」

ソファーに寝そべり、そうぼやいた時だった。机に置いていた真島の携帯が震え出した。いきなりの事で内心、吃驚していたが落ち着きを取り戻すと体を起こした。一体、誰からだと携帯を確認すると一件のメールが届いていた。送り主を見ると珍しい事に相手は以前、自分が力を貸した東條希からである。

(最初は穂乃果ちゃんやと思っただけど、希ちゃんからのメールとは違う。せやけど、ワシは希ちゃんにメールアドレスを教えとらんかった様な・・・まあ、ええか。それにしても何の用やろか？まさか、あの時みたいなの介事や無いやろか？ま、それは見てみれば解る事やな)

一体、何かかと真島は頭を捻らせていたが、当然ながら答えが出る筈がない。真島はメールボックスを開いて届いたメールに目を通す。

『突然、メールを送つてごめんなさい。実は真島さんにある話が有りまして、穂乃果ちゃんに無理を言い真島さんのメールアドレスを教えてもらいました。今、神室町に来ていますので良ければ会ってお話を聞いては貰えませんか？いる場所は中道通りの喫茶店前です。お返事待つてます』

希から届いたメールにはその様に書かれていた。どうやら本人は神室町に足を運んでいるらしく、今の所は特に予定もなく、暇を持って余していた真島は希に会う事を決めると了承の返事を返した。

身支度を終えて、事務所を出ようとした時、一人の組員が声をかけて来た。

「あれ？親父、今から外出ですか？」

「おう。少しばかり野暮用があつてのう」

「用事ですか…今の時間はかなり暑いですし、何だったら俺が変わりに行つてきましようか？」

「いや、別にええ。この用事はワシが行かな意味があらへんからな。気持ちだけ受け取つておくわ」

外の暑さを気にしてだろう。組員は真島の変わりに用を請け負うと申し出た。いつもなら任せる所だが、今回の用事は自分でないと意味が無い。それ故、真島はその申し出を断った。

「…そうですか。親父なら平気でしょうけど、熱中症には気を付けて下さいね。最近、それで運ばれる奴が増えてますから」

「そうか。ま、こないに暑かったら、そうなるやろな」

「おまけに吹く風も生温かいし、夜は幽霊が出そうです」

太陽は雲に隠れているが、梅雨特有の湿気の所為で風が吹いても暑く感じさせる。その状況はまるで幽霊が現れる時に似ていたのか、組

員はほつりとそう呟いた。

「ハッ 幽霊なんぞ、いる訳あらへんやろ。アホな事を言うなや」

「それが出るみたいですよ。近頃、神室町で幽霊が徘徊してるという噂があるんです。うちの組員も見た奴がいるそうですからね」

幽霊なんていないと一蹴する真島に組員はある噂話を教えた。その話の中で組員も見たという事を聞いて、真島は興味が湧いたのか組員に詳しい事を尋ねる。

「それはホンマか？一体、何処で見たんや？」

「場所ですか？確か、天下一通りと中道通りを繋ぐ路地で見たらいいですよ。組の連中が見たのは其処ですが、他の人はピンク通りの路地で幽霊を見たという話もあります」

「ほう。違う場所でも目撃されてるんか。せやけど、路地に出るんは同じようやな」

「親父…まさか、その幽霊を探しに行くんですか？眉唾な話ですけど、方が一もあるから止めておいた方が…」

楽しい表情で呟く真島を見て、嫌な予感を感じながらも組員は止める様に進言した。

「あ？アホ抜かせえ〜 ワシが幽霊如きに遅れを取ると思うんか？それに本物の幽霊に会える機会やしのうち」

「そうですね。まあ親父なら相手が幽霊でも大丈夫でしょうが、気を付けて下さいね」

「おう。ほな、ワシは用事を済ませてくるさかい。あとは頼んだで」
「はい」

そう言つて真島は神室町へ繰り出していった。

「メールでは中道通りの喫茶店前にいると書いてあったのう。「真島さん」ん？」

待ち合わせの場所である中道通りへやってきた真島は辺りを見回して希を姿を探していた。すると後ろから自分を呼ぶ声が聞こえ、声

の方へ振り向くとそこには笑顔を浮かべる希の姿があった。

「何やく いきなり声をかけるなんて、吃驚するやないか。それとメール見たでえ。何や、ワシに話したい事がある様やけど、一体どうしたんや？」

「ふふ 驚かせてごめんなさい。それと呼び出した理由ですが、実はある噂を検証したくて来たんです」

「噂？その噂って、何やねん？」

「ええ それは最近、この神室町で幽霊が出るという噂です。うちが通う大学でも話題になっていて、少し興味があるから来たんです。でも、その場所が路地と聞くから一人だと不安で誰か一緒について来てくれる人を探していたんですが、誰も首を縦に振ってくれなくて…そこで思い付いたのが」

「ワシっちゆう事か。そんなら奇遇やな。実を言うとワシもその幽霊に会って見たくて探すつもりやったんや」

希の話聞いて、真島は内心驚いていた。まさか、用事を済ませた後でやろうとしていた事が全く同じだとは予想していなかったから。それは希も同様で暫く、茫然としていたが真島の目的が自分と同じだと知ると希は嬉しそうな様子で言葉をかける。

「それなら噂の検証を手伝ってくれるん？い、いえ くれるんですか？」

「ん？別にワシは構わへんで。それと言い直さんでもええ。下手に飾らんと。それが希ちゃん個性なんやからな」

「はい でも、慣れるまでは今の口調で話します。あと、真島さんは目上ですから敬語も許して下さいね」

「おう。ほな、幽霊探しと行くか。話じゃ幽霊は路地に出るそうやけど、どこの路地から当たるんや？」

幽霊探しをする前に探す場所を決める為、真島はそう切り出した。何せ、神室町には沢山の路地がある。それを一つずつ探してもキリが無いと思ったからだ。

「そうですね。うちが聞いた話やと、天下一通り付近の路地で目撃し

の」

「ええ だけでもこの街じゃ、そんな見た目の女の子は大勢いますからね。姿形が解つても探すのは難しいと思いますよ。流石に見つける度に貴女、幽霊ですか？と聞く訳に行かないですし」

「それもそうやな。まあ、考えても仕方あらへんな。とりあえず、目撃情報がピンク通りと天下一通り。この二つの路地を当たるとしよか」
「はい」

幽霊探しの最終打ち合わせも終わり、この後、二人は他愛ない話で盛り上がった。そうしてる内に陽も沈み、空は暗くなっていった。

「さて暗くなってきたし、そろそろ行くとしよか」

「そうですね。最初はピンク通りの路地から当たりましょう。此処から近いですから」

「それもそうやな。一応、言つとくがピンク通りを歩く時はワシから逸れんようにな」

「はい 解りました」

目撃場所の一つであるピンク通りへやって来た二人。此処の路地はビルの間にある為、昼間でも薄暗く、夜は更に暗い。煌びやかなネオンの光がある表とは違い、ビルの窓から差し込む光以外は無い。その事が何とも言えない不気味さを醸し出している。

「…この路地。ワシは何度も通つてるが、今回は何とも不気味に感じるのう」

「ええ 確かに。こんな場所なら幽霊が現れるのも解ります」

「ま、怖がつてもしやーない。いくで」
「はい」

希にそう言葉をかけて、真島は暗い路地へと進んでいった。希を勇気付ける為に言った言葉であるが、まるで自分に言い聞かせてる様にも見える。そんな真島に希は微笑を浮かべると後を付いて行った。

「外から見た時もそうやったけど、中を進むところまた不気味やのう。せやけど、幽霊以前に人っ子一人おらんの」

「そうですね。表の道は人が大勢なのに路地は別世界みたいですね」
「ほんまやな。ん？あれは…希ちゃん、こつちや」

路地を探索していると真島は何かを見つけた。その正体にいち早く気付いた真島は希の手を取って、近くの暗がりへと引張っていった。咄嗟の事で希自身も何が何だか分かっていなかったが、真島の焦った様子から尋常じゃない事が起きているのは察知した。

暗がりに隠れてから数秒後、コツコツと足音を立てて何者かが通り過ぎて行った。幸いにもその人物は二人に気付く事なく、路地を後にした。謎の人物が完全に立ち去ったのを確認した真島がホツと一息を吐いて、「ふう 危なかったわあ」と一言呟いた。

「一体、きつきの人は誰やったん？何か、すごい焦ってたけど…」

頃合いを見て、希は真島に尋ねた。驚きの為か、本人も知らずといつもの口調に戻っていた。

「ああ 実はいつ、この界限で幅利かせとる密売人や。組の奴の話では結構、物騒な奴と聞いとる」

「そうやった…そうだったんですね。でも、見つからずに済んで良かったわ」

「せやな。また戻ってくるかもしれへん。残念やが、此処での探索は中止して切り上げよう」

「はっ」

真島の提案に希は首を縦に振る。基本、怖い物が無さそうな真島が物騒と言わせた相手に希は密かに恐怖を感じていたからだ。二人は急いで路地を後にした。

「さて、残ってる路地は天下一通りやな。人通りが多いあそこで幽霊に会えるんかのう」

「どうでしょう？でも、幽霊に時間と場所は無関係ないみたいやし、多分会えるかもしれないですね」

「ほう。昔やと、幽霊が出るんは暗い時と人がいない場所がお決まりやったけど、今は違うんやな」

「とりあえず、駄目元で行ってみましょう」

「そうやな。まずは行動あるのみや」

出る出ないと話していても結論は出ない。二人はもう一つの日撃場所である天下一通りへ向かう事にした。

「やって来たけど、やはり人が多いのう」

「ええ この人の多さだと探索以前の問題ですね」

天下一通りでは仕事を終えたサラリーマンや塾帰りの学生で溢れていた。路地でも人を待つてる者や飲み会の集まりとおぼしき集団が目映る。先程までいた路地とは全く雰囲気異なり、この場所に幽霊が現れるとは思えなかった。

「はあ、この様子で探すのは無理やな」

「そうですね。今回は諦めましょう」

「せやな。そうや、折角やし、今から夕飯を食いに行こうで」

「いいですね。丁度、お腹も空きましたし、行きましょう」あの…」ん？」

幽霊探しを断念した後、真島が夕飯に誘った。希自身もお腹が空いていた事もあり、真島の誘いに返事を返した時、声をかけられた。振り向いた先にいたのは中学生くらいだろうか、制服を着た女の子が立っていた。何かあったのか、少女は困った様な表情を浮かべている。

「どうしたん？ウチ等に何かご用かな？」

最初に声をかけてから、何の言葉を発しない少女に希は優しく問いかける。すると暫しの間、俯いていた少女は顔を上げて、事情を話し始めた。

「実は…ある店を探しているんですけど、場所が解らず迷ってしまつて」

「何や、嬢ちゃんは迷子なんか。それで探してる店は何ていう名前なんや？」

「その店は神室庵という蕎麦屋さんです。今日、家族と食べに行くんですけど、店の場所が変わっていたんです。街を探していたけど、その店が見つからなくて途方に暮れてた所、お二人を見賭けまして、それで道を聞こうと声をかけたんです」

少女の話では家族と一緒に食事をする予定だったが、店は別の場所へ移動していた。その後、探していたが、結局見つける事が出来なかったとの事だった。

「そういう事やったんか。そういえば組の奴から神室庵の場所が変わったと聞いたな。確か：昭和通りの方にあるようやで」

少女が言った店の名前に真島は覚えがあった。以前、組員の一人から店の場所が変わったと話していたのを聞いていたのだ。

「昭和通りにあるんですね!!教えてくれて、どうもありがとうございます」

「ちよい待ちや。行く前に嬢ちゃんの名前を教えてくださいへんか?」

「あつ ごめんなさい。私、神城夕子です。今更ですけど、お二人のお名前は?」

真島の言葉で自己紹介をしてなかった事に気付き、少女は自身の名前を告げた。そして今度は夕子が二人に名前を尋ねる。

「おお そうやったな。ワシは真島吾郎や」

「ウチは東條希。よろしゅうな」

「真島さんに希さんですね。よろしくお願いします。それとお二人は親子ですか?」

「え?」

夕子の発言に驚きの余り、言葉を失っていた。そんな二人の様子など、お構いなしに夕子は更に言葉を続ける。

「フフツ だって、仲が良さそうですし、それに息もピッタリだったから」

「さよか。せやけど、ワシと希ちゃんは血の繋がりの無い他人やで。まあ、言うなら友達やな」

「へ?真島さんと希さんは友達なんですか。それはごめんなさい」

「別に謝らんでええよ。それにさん付けしなくていいよ。堅苦しいの

は苦手やからね」

「そうやな。それとワシもさん付けはいらへんで。それはそうと、家族の所に行かんでええんか？今日、一緒に飯を食うんやろ？もう20時近いで」

和やかな雰囲気では話が続き中、夕子の目的を思い出した真島は夕子に告げる。すると、夕子は途端に慌てた表情を浮かべた。

「あつ そういえば、もうこんな時間だ、急いで行かないと」

「おう。行くななら中道通りから道路沿いに行きや。そっちなら真つ直ぐ行くだけやし、何しろ安全やからね」

「はい ありがとうございます。また縁があれば、会えるといいですね」

「大丈夫や。きつと、また会える。ウチの感はよく当たるんよ」

「そうですね。また街へ来た時は今度は私が二人を探しますね。それでは失礼します」

そう言い残して夕子は目的の店へ向かっていった。その姿を見送った後、真島がぼつりと呟く。

「何や、もう幽霊を探す気は起きへんな。また今度にしようか」

「はい 私も今日は帰ろうと思います」

希も真島の意見に反対する事はなく、解散する事にした。

「そうか。じゃあ、夜も遅いしタクシー乗り場まで送るで」

「ありがとうございます。今日は振り回してしまつてごめんなさい」

「別にええ。何だかんだでワシの方も楽しかったからのう」

「そうですね。また、機会を見つけて神室町を探索しましょう」

「おう。それは楽しみやな」

楽しく談笑しながら二人は去って行った時、生暖かい風が道に捨てられていた新聞を捲る。そのページにはある事故の記事が綴られていた。

『悲劇!!女子学生、轢き逃げされる。19日、道端で倒れている少女を通りすがりの通行人が発見。早急に警察、救急車を呼ぶものの少女は即死の状態であった。後に学生証から身元は地元の中学校に通う神城夕子さん(15)である事が判明。警察の必死の捜査で犯人は20

代の大学生を逮捕した。犯人は飲酒をして運転しており、夕子さんを轢いた事に気付かず、そのまま走り去ったと述べている』

後日、二人はニュースでこの事故を知り、顔を青くしたのは言うまでもない。そう 二人は件の幽霊と会っていたのだから……

その後、暫くの間二人は夕子が残した「今度は私が二人を探しますね」この言葉に震える夜を過ごした。

サブストーリー019 宝探せばアイドルに当たる

真夏の真っ只中 この時期は遥を含めたアサガオの子供達は夏休みに突入している。遊びを満喫する中で子供達も遥の仕事を手伝っているだろう。

そんな事情も重なり、今の所は養護施設の仕事は無い。暇でやる事が無い桐生は当てもなく、神室町をぶらついてた。しかし、容赦なく陽射しが降り注ぐ外は予想以上に暑く。10分も歩かない内に桐生の顔に大量の汗が浮んでいた。

「はあ。凄まじい暑さだな。これじゃあ、倒れそうだな。何処か涼める所に入らねえと体が参ってしまうな」

最強と呼ばれた男も夏の暑さに勝てず、何処かに涼める店は無いかと見回していると奇妙な集団を見つける。その集団は携帯を見ていたと思いきや、顔を上げて周りをキョロキョロと見回し始める。暫くの間、集団は周りを見回した後、また携帯に視線を落とすとそのまま何処かへと去っていった。

（一体、あいつらは何をしてるんだ？何にしろ、下手に関わらねえ方が良さそうだ。暑くなると変な奴も出てくるのはいつの時代でも変わらねえな。そんな事より、早く涼める場所を探すとするか）

触らぬ神に祟りなし。桐生はそう結論を出すと、いつも利用している喫茶アルプスへ向かう事にした。

茹だる暑さの中、喫茶アルプスがある中道通りに辿り付くと桐生は目の前の光景に唾然とした。そう 中道通りの到る所に先程、目撃した奇妙な集団によって埋め尽くされていた。

笑顔でガッツポーズをする者がいれば、落胆の表情で項垂れたる者もいたりと反応は様々である。普段から色んな出来事が起きる神室町だが、今回の様な事は初めてだ。気味の悪い集団を前に桐生は戸惑うばかりであった。

「何てこった。まさか、あの集団を此処でも見るとはな。この暑さに加えて、この人の数では何処の店も満席だろうな」

涼を取る為に来たが、不気味な集団がいるのではそれも叶わない。一刻も早くこの場を去ろう。桐生がホテルに戻ろうと踵を返した時だった。「あれ？もしかして桐生さん？」と背後から自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

「ん？お前は…穂乃果じゃないか。それに海未とことりも。三人揃って、此处で何をしてるんだ？」

名前を呼ばれ、桐生が振り向くと声を掛けて来た相手は高坂穂乃果だった。

すぐ傍には海未とことりの姿もあり、いつもの三人組が揃っていた。桐生はそんな三人へ歩み寄り話しかけた。

「うん。実は今日は買い物物の為に来たの。そのついでに流行りの遊びをしようと思ってるね」

「流行りの遊び？それは周りで一喜一憂してる奴らと関係があるのか？」

「うーん まあ、関係すると言ったらするけど…私達はそこまで躍起になってないよ」

「ええ あくまで私達はのんびりと楽しむ派ですからね」
「そうか。ところでそれはどんな遊びなんだ？」

穂乃果達の会話に出てきたある遊び。何気なしに話を聞いている内に気になり、桐生は穂乃果へ尋ねた。

「フッフッフツ よくぞ聞いてくれました。今、流行ってるこの遊び。それは「アイドルへGOですよ」って、海未ちゃん!! 何で先に言っちゃうの〜」

「穂乃果が無駄に伸ばすからです。人が聞いているのに勿体ぶる必要は無いでしょう」

「そ、それはそうだけどさ。こういうのは雰囲気も大事でしょ。全く、海未ちゃんは空気が読めないんだから」

「な、それは穂乃果だって同じでしょう！ それに今日だって、いきなり家にやって来て、碌に説明もせずに神室町まで引っ張って来たのは貴女じゃないですか」

「うっ それは私も悪かったと思ってるよ。だから後で説明したじやん」

「道中の電車の中でしたけどね。そういう説明は行く前にするものでしょう。大体、穂乃果は昔から」

「おいおい こんな所で喧嘩をするな。周りに迷惑だろう」

「そうだよ。二人共。折角、遊びに来たんだから仲良くしようよ」

「うっ ご、ごめんなさい」

桐生とことりに注意されると二人は素直に喧嘩を止めて謝った。

同じタイミングで同じ行動をする二人は似た者同士だと、仲裁に入ったことりと桐生は同じ事を考えていた。

「それでアイドルへGOというのは何だ？」

「言葉通り、アイドルを探してアイドルへ向かうスマホアプリだよ」

「そうか。だが、どうして神室町で探してるんだ？今日はアイドルの催しがあるとは聞いてないぜ」

穂乃果の話聞き、桐生の中に更なる疑問が浮んだ。神室町は広い街だが、何かのイベントがある時はポスター等で大々的に宣伝される。しかし、自分はそれらの広告を一度も目にしていない。

「いえ、アイドルを探すと言いましたが、探すのは実際のアイドルではありませんよ。」

「うん 私達が見つめてるのはスマートフォン画面に表示された手掛かりを元にして、アイドルの画像を手に入れるのが目的なんだ」

そんな桐生の疑問は海未とことりの言葉で解消された。探しているのがアイドルでも空想のアイドルでは、宣伝がされてないのも理解出来る。

「ほう。そういう事だったのか。つまりは一種の宝探しみたいなもんか」

「ちよつと違うけど、まあ似たようなものかな。そうだ！ 折角だから桐生さんもやってみない？街に詳しい人がいれば、私達も有利にゲームを進める事が出来るもん」

「確かにそうですね…無理を言っただけです。駄目ですよ。穂乃果。桐生さんにも用事があるでしょうからね」

「いや、俺は別に構わない。だが、俺はスマートホンやスマホも持ってないぞ」

「そうだったんだ。だけど大丈夫。このアプリはね。何とガラケーでも遊ぶ事が出来るからね。それとスマートホンじゃなくてスマートフォンだよ」

「ええ 一人でも多くの人に遊んでほしい。その思いから制作者は二つの機器に対応したバージョンを配信してますからね。あとスマホではなく、スマホです」

「ほう。これを作った制作者は立派だな。大抵の運営はそこまで考える事はしないからね」

所々入るツツコミは無視して桐生は二人の話聞き、人の事を考えてアプリを作った制作者を感心していた。

「うん 本当に良い人だね。真島さんは」

しかし、ことりの言葉でその想いはすぐに遠く彼方へ吹き飛ぶ事になる。ことりの一言はそれ程、衝撃的だった。

「すまん。もう一度聞くんが、これは真島の兄さんが作ったのか？」

「そうだよ。この前、真島さんからのメールが送られて来て、新しいゲームを作ったから是非、遊んでくれて」

「本人曰く、同時期に配信されたアプリに対抗しての事らしいですよ」
「確か、ドラゴンDEゴーというタイトルだったかな。現実とリンクした斬新なシステムが売りのゲームだよ」

「色んな場所にいるドラゴンを捕まえて、他のユーザーと競う事も出来るように人気があるとも聞いてます」

穂乃果と海末の説明で経緯を知り、桐生は思わず溜息を吐く。相変わらず、あの人は読めない心の中で呆れていた。

「つまり…真島の兄さんはそれに対抗した訳か。聞く限りは名前以外、システムもそのゲームとそっくりだが、その事で揉めたりしなかったのか？」

「んん 私も最初はそう思ってたんだけど、特にそういう事は無かつ

たみたい。それに相手が相手だからね」

「言われて見れば、確かにそうですね。普段は優しいから忘れがちですが、真島さんはその筋の人ですから」

「……。とりあえず、そのアイドルへGOをやってみるとしよう。すまないが遊ぶ方法を教えてくれないか？」

四人の間に妙な空気が漂い、それを変える為に桐生が別の話題を振るとことりが渡りに船だと食い付いた。

「いいよ。じゃあ、アプリを落としてあげるよ。桐生さんの携帯をちよつと貸して」

「ああ」

ことりは桐生から携帯を受け取ると、手慣れた手付きで操作していく。桐生の携帯はことり達が使ってるものより、幾分古い型で扱いもスマホとは異なる。

だが、それでも問題なく使いこなす姿に桐生は世代の差をひしひしと感じていた。

桐生がしんみりと耽っている間に準備が終わったのか、準備を終えたことりが笑顔で話しかけてくる。

「桐生さん アプリのダウンロードが終わったよ。今からやり方を説明するね」

「ああ よろしく頼む」

「まあ、さつきも言った様にやり方は簡単だよ。携帯の画面に表示される手掛かりに従ってアイドルがいる場所へ向かうの。」

「確かに簡単だな。だけどその分、飽きるのも早そうな気がするけどな」

「やる事は単純だからね。そう思うだろうけど、実はそうでもないよ。実装されてるアイドルはプロのアイドルだけでなく、スクールアイドルといったアマチュアアイドルも実装されてるんだ。恥ずかしいけど、中に私達のユニットもあるよ」

「そうなのか。だが、それが本当なら三人は此処にいて平気なのか？」

元とはいえ、1年前まで、sもスクールアイドルとして活動していた。そのメンバーである三人がいると周りに知られたら、騒ぎになると桐生は心配していた。

神室町は賑やかな街だが、物騒な街でもある。騒ぎに乗じて良からぬ事を企む輩が現れるかもしれない。そう思つての言葉だった。

「ああ。それなら心配ないよ。解散直後は私達を見て、騒ぎになつたけど。今はそういう事も無くなつたから」

「テレビに出た事もありますが、蓋を開けばただの高校生ですからね」「うん。だから今は周りを気にする必要なく、街を歩けるんだよ」

「そうか。ん？それと画面に何か反応が出ているぞ」

穂乃果達の言葉を聞く限り、自分の心配は杞憂だった様だ。そして携帯に目をやると画面のレーダーが何かに反応している。それに気付いて、桐生は三人へ話しかけた。

「ええ!?もう反応が出たの。レーダーの反応を見る限り、アイドルの場所は近くだね」

「しかも、いきなりレアの様ですね。これは凄いですよ」

「そうか。だが、どうして二人はそれが解るんだ?」

「それはね。レーダーに表示される点の位置と右上の♪の数で把握してるんだ。今は♪が三つあるでしょう?これがレアの証なの」

「ふむ。つまりはそれを目安にしてやる訳か。レーダーの位置を見ると、場所はピンク通り付近みたいだな。ちよつと行ってみるとするか」

「いつてらつしやい。レア画像を手に入れたら後で見せてね」

「ああ いいぜ。それと三人はどうするんだ?」

レーダーの表示から目的の場所がピンク通りにある事が判明した。その場所へ向かう前に桐生は三人にこの後の予定を聞く。

「私達は神室町の散策を兼ねて、別の場所を回るつもりです」

「うん。ミレニアムタワーや神室町ヒルズとか行きたいし」

「私は可愛い服がある店に行きたいかな。この前、花陽ちゃんから良い店があると教えてもらったから」

「わかった。それなら此処で解散だな。神室町を楽しむのはいいが、物騒だから気を付けろよ。それと夜になる前には帰るようにな」

「「はっ」」

桐生の忠告に三人は首を縦に振った。神室町に詳しい人ならではの説得力がその言葉にあつたからだ。

穂乃果達と別れた後、桐生はアイドルを見つける為に行動を開始した。

「ふむ。レーダーを見ると場所は此処の様だな。あとは画像を手に入れるだけだが、どうしたら入手出来るんだ」

レーダーの反応を手掛かりにピンク通りへやってきた桐生。そこで目的の場所を見つける事に成功したが、肝心の画像を手に入れる方法を聞いて無かったと途方に暮れる。

本来ならヘルプを見れば解決する事だが、それを見る術も桐生は解らなかつた。

そんな彼が数年前、人気のあるブロガーだと言つても誰も信じないだろう。

その後、あれこれと桐生は試行錯誤を繰り返してみるのが物事は好転せず、仕方無く諦めて立ち去ろうとした時。「もし、そこのお方。ちよつといいかな？」とまたもや自分に声をかける者がいた。

今度は誰だ？ 聞き覚えない声の主に振り向いた先にいたのは栗色の髪と広いおでこが特徴の少女であつた。

「いきなり声をかけて悪いわね。何か困ってるようだったけど、よかつたら話してくれないかな？」

「その前に言うべき事があるんじゃないか？確かに困っているが、名前も言わない礼儀知らずの手は借りたいとは思わねえな」

唐突に現れ上から物を言う少女の態度に些か腹を立て、厳しい言葉をぶつける。相手の少女もその言葉で自分が失礼な態度を取つていた事に気付く。

「ごめんなさい。私は綺羅ツバサと言います。偶然、此処を通ったら貴方が難しい顔をして携帯を覗んでいたから…もしかして、道に迷っているかとも思ってたのか。俺は桐生だ。こっちこそ、きつい言い方をして悪かった」

非礼を詫び、声を掛けた理由を説明するツバサに桐生も怒りを収めて謝った。言い方や態度はともあれ、ツバサが困っている自分に手を貸そうという気持ちに嘘偽りは無かったから。

「桐生さんね。こちらこそよろしく。それで話を戻すけど、一体どうしたの?」

「ああ 実は知り合いから薦められたアプリゲームをやっている。それで手掛かりを元に此処へ来たはいいが、その…宝である画像の入手の仕方が解らないんだ」

「そう。桐生さんが良ければだけど、ちよつと携帯を見せてもらっていい?」

「ああ…いいぜ」

普通なら知らない人間に携帯を見せる事はしない。しかし、このツバサという少女は何故か信用出来る。桐生はそれを直感で感じていた。

「それでは失礼して。ああ、これかあ。これは左上にある宝箱をクリックするんだよ」

「成程。見つけた画像はそうやって入手するのか。意外と簡単だったんだな」

「そうなのよ。複雑に見えるけど、実はシンプルだから。それにしてもどんな画像が出るのかしら。気になるし、私にも見せてよ」

画像の取り方を説明した後、ツバサが興味津々の様子で聞いて来た。無論、断る理由も無く桐生は首を縦に振る。

「そうだな。よし、早速見てみるとしよう」

「ありがとう。それと私はツバサでいいよ。さて、何が出るのかな」
ゲームの宝箱をクリックする。それだけの事だが、妙な緊張感に包

まれて二人は固唾を飲む。そして意を決して桐生は決定ボタンを押すと、開いた宝箱から出てきたのは何とツバサの画像だった。

「……。これはツバサだよな。一体、どういう事なんだ？」

「あ、あははは。まさか、これを引くとはね。運がいいのか、悪いのか。ま、ばれたのは仕方ないか。実は……」

「成程。ツバサは穂乃果達と同じスクールアイドルだったのか。だから、画像が出てきたんだな」

「そういう事。それと桐生さんは、穂乃果さん達と知り合いなの？しれっと名前で呼んでるけど……」

何故、宝箱からツバサの画像が出てきたのか。本人の説明でその訳を知った桐生はツバサがスクールアイドルだった事に驚いていた。そして桐生の口から何気なく、出てきた名前に今度はツバサが驚き、桐生へ勢いよく詰め寄るとその事を尋ねる。

「お、おい。話すから落ち着け」

「あつ、ごめんなさい」

「まあいいさ。それで知り合った経緯だが、穂乃果とはこの神室町で会ったんだ。その時、連れと逸れて困ってる所を手を貸したのが切欠となつてな。それ以降、一緒に花見をしたりと交流する機会が増えたという訳だ。それとさっきのアプリゲームも穂乃果から薦められたものだ」

「へー 今やってるゲームも穂乃果さんからねえ〜 この街は不思議な縁があるのね。私もある人に会って、悩みが解決したからね」

「それは良かったな。この神室町は人との縁を齎す不思議な力がある。ツバサがその人と会えたのはそれが働いたのかもしれない」

「不思議な力ね。何となくだけど、分かる気がする。もしかしたら桐生さんと会えたのもその力のおかげかも」

「フツ 案外そうかもしれないぜ」

すっかり意気投合した二人が楽しく会話を続けていると、ツバサがハッと何かに気付いた途端、ダラダラと冷や汗を掻いて焦り始めた。いきなり顔色が変わったツバサに「おい、顔色が悪いぞ。大丈夫なの

か？」と心配して言葉をかけるが、当の本人は冷や汗を流して黙るだけである。

ツバサに声をかけても反応は無く、桐生の後ろを見つめている。後ろに何かあるのか？釣られる様に後ろを見て、桐生もツバサと同じく固まった。

そこには二人の少女が立っていた。二人共、笑顔でも目が笑っていないのを見ると怒っているのは明白である。その雰囲気には桐生も思わず唾を飲んだ。そして二人の少女は桐生達に歩み寄ると口を開いた。

「ねえツバサ。貴女、今何時だと思う？」

「うっ、今は14時30分です」

「それにツバサは今日、何処で待ち合わせと言ったかな？」

「え、ええと…中道通りのドン・キホーテ前です」

「ツバサが決めた時間。確か13時半に集合だよ」

「おまけにいたのは、中道通りじゃなくてピンク通りだから」

「も、申し訳ありませんでした」

外堀を埋める様に責める二人にツバサも観念して謝った。その言葉聞いて、二人は漸く怒りを収める。

そして、今まで傍観していた桐生の方へ向くと二人は自己紹介を始めた。

「初めまして！私、優木あんじゅと言います。挨拶が遅れて申し訳ありません」

「私は統堂英玲奈。ツバサが迷惑かけた様ですね」

「俺は桐生一馬という。いや、寧ろ迷惑を掛けたのは俺の方だ。だからツバサを責めないでやってくれ」

「そうなの？でも、貴方に失礼な事をしたんじゃないかしら？」

「多分、そうだろうな。ツバサは初対面の相手でも物怖じせずに接する奴だから」

「もう、二人して酷いじゃない。そりゃ、最初は不躰な態度を注意されたけどさ」

「フツ 三人共、とても仲がいいな。そういえば、ツバサはスクールアイドルをやつてると言つてたが、英玲奈とあんじゅもそうなのか？」
「え、ええ。そうよ。私とツバサと英玲奈の三人でユニットを組んでるの」

「あ、ああ。A—RISEを結成してから付き合いは長いからな」

いきなり名前で呼ぶ桐生に英玲奈とあんじゅは思わず、頬を染める。ライブで大勢の視線に慣れていても大人の男から名前を呼ばれる経験は無い。

二人が照れたのはそんな理由があつた。無論、そういう事に疎い桐生には、二人が何で照れているのか解らずにいた。それはツバサも同じらしく、首を傾げて二人を見つめている。

「二人共、ツバサと同じユニットだったんだな。そういえば、二人も穂乃果達がやつてたμ'sを知つてるのか？」

「勿論、知つてるわよ。何せ、一年前はラブライブ出場を廻つて、戦つた事があるもの」

「うむ、残念な事に負けてしまつたけどな。だが、あの時は今まで最高のライブだった。それは胸を張つて言えるな」

「そうだね。でも、大会で戦う事は無くとも…私達は近い内にμ'sと勝負を挑もうと思つてる」

「ライバル同士の対決か。その勝負、俺も見てみたいものだな」

μ'sとA—RISEの対決。桐生自身はスクールアイドル同士の勝負を見た事が無い。大会で争うくらいだから、きつと激しい戦いになるだろうと予想していた。

そう この時までには…数日後、桐生の予想が外れるのはまた別の話。

「勿論よ。その前に桐生さんのメアド教えてよ」

「ああ、いいぜ」

確かに連絡手段が無いと、それを伝える事は出来ない。ツバサの言葉も尤もであり、桐生は携帯を取り出すとお互いの連絡先を交換しあ

う。当然、その中にはあんじゅや英玲奈も含まれていた。

熱狂的なファンでも入手不可能と言われるアイドルの連絡先。それを桐生はあっさりと手に入れた。もしこの光景をファンが見たら間違いなく、血が流れる騒動に発展するのは確実であろう。

「これでよしと。詳しい日程が決まったら、メールするね」

「それじゃあ、私達はこれで失礼しますね」

「機会があれば、また会える事を願っている」

「ああ。俺もお前たちとまた会う日を楽しみにしてるぜ」

「私達もね。勝負の日は絶対来てよ。約束だからね」

「フツ 分かった。その日はどんな用事があっても見に行くぜ」

約束の言葉を交わして、ツバサ達と別れると桐生は来たるべき勝負の日に心を躍らせながら街の中へ消えていった。

「んふふ。ウチは見たで。まさか桐生さんがツバサちゃん達となあ

く これは面白い事になりそうやな」

陰から一部始終を見ていた者は一人呟いて、その場をあとにした。

これが後に一騒動を巻き起こす事になるとは知らずに…

サブストーリー020 クレーンゲーム 一発勝負

この日 真島は暇を持て余していた。いつも怠けてやっていた書類仕事を今日だけは真面目に取り組み、あっさりと終わらせたからである。

（何や、気付いたらもう仕事はお終いか。久しぶりに気合入れてやったのにのう。ま、これであとはのんびり出来るからええか。外の空気も吸いたいし、街へ繰り出そう。おっと、その前にメモを残しておかんとな。黙っていくと西田の奴が怒るからな）

普段は大人しく臆病な性格をしている男だが、そんな西田も仕事の事になるといつも小言を言ってくる。当然、小言を言う奴にはお仕置きという名の制裁を加えてやる所なのだが：それを言う時の西田は真島も逆らえない。

（思えば、あいつも以前より貫禄が出てきた感じがするのう。ここ最近、あいつに相談する奴も増えたと聞いとる。この調子ならあいつもそう遠くない内に自分の組を持つようになるかもしれへんな。お？噂をすれば影や。どうせやし、一声かけておくか）

「おう 西田。丁度良い所におったわ。少しの間、俺は出かけてくるで」

「え？で、出かけるって、まだ仕事があるじゃないですか」

「それやが、俺の仕事は全部終わったで」

「本当ですかあ？サボり癖がある親父が仕事を真面目にやるなんて：明日は台風が来るかも」

何かと理由を付けて、仕事をサボる真島が今日に限って終わらせている。それが信じられず、西田は小声でポツリと呟いた。

「ん？何か言うたか？」

「い、いえ 何も言ってます。それで出かけるのは分りましたけど、何処へ行くんですか？」

「：行く場所か。まあ、特に考えてへん。せやから適当にぶらつくつもりや」

「そうですか。一応、携帯の電源は入れておいて下さいよ。連絡付かないと何かあった時に大変ですから」

「言われんでも解つとるわ。ほな、行ってくるで」

「はい、いつてらっしゃい」

自分の眩きを何とか誤魔化せた。去りゆく真島の背を見送り、西田がホツと胸を撫で下ろした時だった。突如、真島は振り変えて「せや、一つ言い忘れとった。お前のお仕置きは俺が帰ってからや。逃げたら承知せえへんぞ」そう言葉を残すと、今度こそ去って行った。

去り際、項垂れている西田を目にした真島はやはり、あいつが組を背負うのはまだまだ先だと溜息を吐いた。

その後、トイレで号泣している西田の姿が目撃されたが、いつもの事だと組員は放置していた。

一月前は容赦なく、日光を照らしていた太陽も今は穏やかな顔を覗かせている。知らない内に訪れていた変化に真島は目を細めて空を見つめていた。

（久しぶりに外へ出て気付いたが、暑さは大分和らいで来たな。まあ、9月やから当然やな。思えば、今年の夏もあっさり過ぎて行ったわ。心なしか、気候からも秋の気配を感じる様になつたし。：あかん こないな事を考えてたら気分が沈む一方や。こういう時はカラオケやな。ヒトカラは好かんが、それでも思う存分歌えば、沈んだ気分も盛り上がるやろ）

過ぎ去る夏に想いを馳せている内に沈んだ気分を発散するべく、真島はカラオケ店へ向かう事にした。

街を歩く事、数十分。目的のカラオケ店へやって来て、さあ存分に歌おうと思つていた真島の目に入って来たのは『本日 休業』と書かれた一枚の札。どうやら、運が悪い事に真島が利用する店は休みだった。

「何やねん。折角、来たのに今日は休みなんか。全く、余計に気分が沈むわ」

楽しみにしていた分、それが出来ない時の衝撃は大きい。それは真島も同じで店の前でぼやいていたが、此処にいても仕方無い。そう気持ちを切り変えて真島はその場をあとにした。

次に真島が足を向けた場所。それはホテル街にあるバツテイングセンターだった。普段から利用する事もあり、休業する日も把握している。一刻も早く店で思いつき体を動かして発散したい。

ただそれだけを考えて真島は他に目をやる事無く、目的の場所へ歩みを進める。しかし、悪い事は重なるもの。バツテイングセンターに到着した真島の目に入ったのは『現在、改装中』と書かれた札。一度ならず、二度までも楽しみが潰された。その事で真島の気分は最悪であった。

「何やねんな。カラオケに続いて、此処も休みか。全く、今日はホンマについてへんわ」

二度の不運に苛立ち、顔を顰めて真島は愚痴を溢していた。この際、ボーリングに行こうかと思つたが二度ある事は三度ある。足を運んだ所で店に入れず仕舞いで終わるのがオチだろう。

こういう嫌な予感は何故か的中するからだ。

やる事が無くなつて、これから何をしようか。それを考えながら真島は時計を見ると時刻は12時を回っている。どうやら街を歩いている内に時間が経っていた。

（おっ・もう12時を過ぎてるんか。街中歩きまわって腹も減つたし、飯でも食いに行くか。此処から近い店は…確か韓来やな。肉を沢山

食えば、気分も落ち着くやろ。よし。善は急げや)

先程の苛立ちも空腹なのが理由だったのだろう。昼食を取るべく、真島は韓来へ向かっていった。

数十分後 焼肉を存分に堪能した真島が店から出てくる。どうやら思う存分に食事をした事で気分は回復したのか。誰から見ても満足した表情を浮かべている。

「ふう〜 食った食った。さて、腹も膨れた所でこれから何をしようか。しかし、カラオケもバッティングセンターも休みやったしのう。他に暇を潰せそうな場所は……。そうや、ゲームセンターでも行くとするか。あそこなら流石に休みという事は無いやろ。確か、ゲームセンターは中道通りと劇場広場やったな。此処から近いのは…中道通りやな。よし善は急げやな。早速行くとするか」

食事を済ませ、またもや出来た暇を潰そうと真島が頭を捻っていると偶然、ビルに飾られているゲームセンターの看板が目飛び込んで来た。他の店と違い、ゲームセンターが休む事は まず無い。思えば真島がゲームセンターに足を運ぶの20年振りだが、自分でも遊べるゲームは何かあるだろう。それについては行ってみないと解らない。真島は腹ごしらえの散歩も兼ねて、中道通りにあるゲームセンターへ向かう事にした。

「他の店が出来たり、街並みが変わってもこの手の店は変わらんなあ」

目的の場所に着いた真島は久しぶりに訪れたゲームセンターを懐かしい思いで見つめポツリと呟いた。およそ20年前。自分が大阪

にいた頃は良く通っていた。その時はスコアの更新や仲良くなった店員と勝負したのは今となつてはいい思い出だ。

「さて、此処で突っ立っていてもしゃーない。中に入るとするか」

懐かしい思い出を胸に真島は意気揚々とゲームセンターの中へ足を踏み入れた。ドアを潜った先で真島を出迎えたのは店特有の騒音だった。初めて入った時はこの騒音に驚いたものだが、現在は普通に受け入れている。これも時代の流れかと、またもやしんみりとした気持ちを抱いたが、真島は頭を振ってその気持ちを振り払う。

そう 此処には遊びに来たのだ。センチメンタルに浸る場合ではない。気持ちを切り変えて真島は遊ぶゲームを探して始めた。

「ほく 知らん間に色んなゲームが増えたのう。どのゲームも面白そうやし、どれをやるうか迷うな」

「もうつつ!! また失敗したく」

遊ぶゲームを決められずに店内をぶらついている最中、クレーンゲームの前で叫ぶ少女を見つけた。余程、悔しかったのか。その少女は俯き震えていた。先程の叫びといい、その様子からして景品の中に相当、欲しい物があつたのだろう。

（何や、景品が取れんで悔しがつとるようやの。確かにこの手のゲームは小学生には難しい。しかし、この光景：前に見たような気がする。……! 思い出した。そういえば、以前に大阪で人形が欲しいが子がおつたな。それで俺が変わりに景品を取ってやったっけな。せや、此処は一丁、俺が助太刀したろ）

悔しさに震える少女の力となるべく、真島は少女の元へ向かって行くと声をかける。

「なあ 嬢ちゃん。良かったら、欲しい景品は俺が取ってやろうか？」
「え？ほ、本当に……って、あんた誰よ」

「おつとすまん。名前を言うのが先やな。俺は真島吾郎というもんや。見た目は怖いけど怪しいもんちゃうで」

「そ、そう。私は矢澤にこよ。それで真島さんは私に何の用？生憎だけど、変な誘いはお断りよ」

「そんなんちゃう。実はさつき、景品が取れんで悔しがつとる所を目撃してな。それで声を掛けたつちゆう訳や」

「…事情は解ったわ。心遣いは嬉しいけど、さつきのプレイでお金を大分使っちゃったのよ。これ以上、使ったら帰れなくなるから別にいわ。流石に会って間もない人に出して貰う訳にいかないもの」

にこが言った言葉に真島は最近の小学生は随分としつかりしていると感心していた。だが、自分も手助けすると決めて声を掛けた手前、はい そうですかと去る訳にはいかない。

真島は優しい声でにこへ更に言葉をかける。

「嬢ちゃん 小学生なのに随分としつかりしてるのう。だけどな、時には人に頼る事も大事やで。せやから俺「ちよつと、誰が小学生なのよ。私はこう見えても現役の大学生よ」え？何やって？すまん もう一度、言ってくれへんか」

真島の言葉を遮り、放たれたにこの言葉に真島は耳を疑う。にこの言葉は確実に聞こえていたが衝撃の余り、思わず聞き返してしまう。そんな真島に対し、にこは怒る事無く、懐から自分が大学生である証。学生証を取り出して真島に見せた。

にこ自身、最初の方は感情的になっていたが、自分が小学生に間違われる事が何度も遭った為か今は冷静に対応している。

「はあ。だから、私は小学生じゃなくて大学生なの。ほら。これが証拠の学生証よ」

「おお ほんまや。人は見かけに寄らへんな」

「どうやら信じてくれた様ね。ま、こんな事は何度も起きてるから私も慣れたわ」

「ほうか。何やえらい苦労しとるのう。ほんで、こないな所で油を売っててええんか？今の時間やと、大学の勉強とかある筈やろ？」

神室町に大学生がいる事は別段珍しくはない。昼頃には休憩時間を利用して昼食を取りに来る者がいる。だが、今の時刻は14時を回っている。休憩時間も既に終わり、本来なら学生は授業を受けている筈である。気になった真島はにこに尋ねた。

「…まあ、他の人はね。だけど、私が専攻してる講義は午前中だけなのよ。だから、午後は暇になったから此処で遊んでたという訳」

「成程のう。そういう事やったんか。ところで嬢ちゃんは何の景品を狙っておったんや？さつきから気になってるし、教えてくれてもええやろ」

「ああ。狙ってたのは好きなアイドルのグッズよ。私はそのアイドルのファンでね。どうしても欲しかったのよ。それと私の事はにこでいいわ」

事情を把握した真島は別に気になっていた事を聞く。にこも特に隠す必要も無いと素直に教えた。

「さよか。最近のクレイゲームじゃ、ぬいぐるみだけじゃなくてそないな物も景品になつとるんやな。そんでにこちゃんはその景品を狙ってたという事か」

「そうよ。でも、何度かやってる内に取り辛い所に移動しちゃったのよ」

真島がクレイゲームへ目を向けると、確かにある景品は端の方に寄っている。あれではアームで掴むのは難しく、この状況を見れば誰もが諦めるだろう。だが、難しい方がやりがいはあると真島はこのゲームに挑戦する事を決めた。

「なあ にこちゃん。さつきも言うたが、あの景品は俺が取ったろうか?」

「へ? い、いいわよ。別に…叫んでる所を見られて言えた事じゃないけど、いい歳してみつともないから「別にええんとちゃうか」え?」

にこの言葉に被せる形で真島は軽い口調で言った。驚いた顔のニコを余所に真島は言葉を続ける。

「確かにこちゃんの歳やと、そう思うのかもしれない。せやけど、時に素直になってもいいと俺は思つとるよ。まあ、単にこれは俺のお節介やからな。それは気にせんでもええ」

「時に素直に…:か。暫く、その事を忘れてたわね。うん それじゃあ、折角だから真島さんをお願いするわ。あの景品、どうか取つて下さい」

「おう 任せとき」

時に素直になる。この言葉がにこの中へ染み込んで行くのを感じていた。そういえば、以前にも似たような言葉を言う人がいた。それを思い出したのは真島さんが何処となく、その人と雰囲気と同じなのだ。にこが真島の言葉をすんなりと受け入れたのはそれも理由である。

「ほんならいくでえ。狙つてるのは左にある物やな?」

「ええ。そうよ。だけど、あれを取るのはかなり大変よ」

にこが狙っていた物。それはA—R—I—S—Eの写真がプリントされたハンドタオルであった。本当なら別のゲームをやろうと来たにこが、偶然にもそれを見つけて手に入れるべくプレイした結果が先の通

りであった。

「よし。まずはアームを左に寄せてと…」

真島はボタンを操作してアームを左に寄せる。景品は手前にあるのが幸いだが、景品は左側に傾いている為、アームで掴むのは不可能であった。この状況を打破する策を考えていた。

「最初はこれでええ。問題は此処からやな。うーん そうや。この手で行こう」

「何か、策があるの？それって、一体何よ？」

「まあ焦らんと。次はこうや」

詰め寄るにこを宥めると真島は次のボタンを押した。真島の狙いはアームで傾いた景品の位置を戻す事であり、正確な操作で見事にそれを成功させた。

「凄い…傾いてた景品の向きがあっさりと戻った」

「せやろ？ま、これは序の口で本番はここからやけどな。次から取りに行くでえ」

次に真島が狙ったのは景品の位置を変える事であった。先程と同じくアームを左に寄せ、今度は景品の真上に移動させた。正確な操作で移動したアームは景品を掴むとゆっくりとした動作で釣り上げる。そのまま取り出し口まで行くと思われたが、目前でアームから景品が落下してしまう。それを見たにこが残念そうな表情を浮かべる傍ら、真島は自信満々の表情を浮かべている。

そう 惜しくも落ちた様に見えたそれは全て計算の内であった。

「ああゝ あと少しなのに惜しいわね」

「いや、これでええ。次で絶対取れるから大丈夫や」

「そう。だけど、プレイ出来るのはあと1回しかないわよ」

「大丈夫や。まあ見といてや」

「分かったわ。真島さんを信じてるから」

もう後が無いのに平然としてる真島を見て、にこの心に安心感が不思議と生まれる。きっと、真島さんならやつてくれる。そんな確信を抱いていた。

そして景品を取得目指して真島は最後のプレイを開始する。

残る作業は景品を取るのみ。にこが固唾を飲んで見守る中、真島は真剣な表情でボタンを静かに押した。

「ほな、行くでえ。最後はこうや」

「ええ!?、いくら何でもクレーンを左に寄せ過ぎじゃ」

「いや。大丈夫や。見てみ」

真島に言われるがまま、クレーンの方へ視線をやるとにこは目を見開き驚いた。何とアームが景品を取り出し口に押し出した。これが真島が最後に狙っていた事だったのだ。どのみち3回のプレイで景品を掴み取るのは不可能である。何度かやれば可能だろうが、それをすればにこは気を遣って、景品を受け取る事を良しとしない。

それ故、真島は3回で取得出来る方法を考え実践した結果。見事に景品を入手する事が出来た。だが、この事実が一番驚いていたのは真島本人であった。当然、いくら方法を思い付き、実行した所で成功する確率は低い。プレイしてる最中は不安で一杯だった事をにこは知らない。

「ほら。目的の景品やで」

「あ、ありがとう。まさか、あっさり取るなんて本当に凄いわね」

「せやろ。まあ、こんなの俺に掛かればこんなもんや」

「フフ、そうね。良かったら今度、クレーンゲームの指南をお願いして

もいい？私も真島さんの様なプレイをしてみたいもの」
「おう。ええで。機会が在る時に教えたる。ほれ、これが俺のアドレスや。この街に来る時に連絡してくれたらいつでも駆け付けるでえ」

真島からアドレスが書かれた紙と景品を受け取って、にこは笑顔を浮かべて言葉を返す。その笑顔に真島も嬉しさが込み上げる。

「ええ、分かったわ。遊びに来る時は連絡するわね」

「ああ。その日を楽しみにしてるで」

「あら？気付けば、もう16時を過ぎてるわね。そろそろ私は帰らないと。真島さん、今日は本当にありがとう。この景品、大事にするわ」
「フツ…。そこまで喜んでくれたのなら、俺も頑張った甲斐があったわ。大丈夫やろうが、気を付けて帰るんやで」

「心配しなくても大丈夫よ。それじゃあ、また」
「おう」

そう一言残し、にこは店を出て行く。去り際に笑顔で手を振る姿が似合っていたのはそれがにこだからだろう。去りゆくにこを見て、真島はそんな事を考えていた。

「さて、俺も帰るとするか。何だかんだで暇は潰せて、気分転換も出来たからの」

真島も帰路に着こうとした時、ポケットの中で携帯が震え出す。最初は帰りが遅い事で心配した西田からだと思っていたが、表示された名前に真島は今日一番の驚きを見せる。

何と相手はA—R—I—S—Eの一人であるツバサからだった。

一体、何だと届いたメールに目を通した瞬間。真島はニヤリと笑みを浮かべる。

「ほう。ツバサちゃんも面白い事を考えるのう。その日が来るのが今から楽しみや」

ウキウキして呟く真島が持つ携帯に表示されている内容の一文に『μ、sとの対決する準備が整いました。近い内に実行しますのでそ

の時は真島さんも立ち合って下さい』とあった。そのメールに対する真島の返事は当然決まっている。

その日が来るのを心底楽しみにしながら、足取り軽く街を歩く真島の姿がそこにあった。

サブストーリー1021 前に進む者達

9月下旬 残暑も過ぎ去りゆき、秋の気配が強くなって来たある日。桐生は一人、街中を歩いていた。

(例えば、もう秋か。時間が過ぎるのは何分早いものだな。さて、外は冷えるし、とつとつ用を済ませてホテルに戻るとするか)

現在、桐生は不動産に向かっていた。彼が街に来て、早くも1年が経っていた。今まではビジネスホテルに泊まっていた。そして今朝、ホテルの運営者から今週中にホテルを閉めると伝えられた。いきなりの事で驚いたが、運営者も高齢になり隠居を決めたとの事だった。

ホテルを利用していた桐生には住む場所はない。桐生が不動産を目指していたのはそれ故である。

暫く街中を歩いた後、桐生は目的の不動産に辿り着いた。早速、良い物件は無いかと見てみるがどの物件も家賃が高い。安いアパートでも家賃が8万もする為、中々決められないでいた。

「分かってはいたが、どの物件も家賃が高いな。一応、他の不動産も見るとしよう」

流石に一件覗いただけで優良物件が見つかるとは思っていない。桐生は次の不動産へ向かおうとした時、背後に妙な視線に気付く。そういうえば、その視線は自分がホテルから出た時から感じていた。その時は気のせいだと思っていたが、どうやら陰から自分を監視している者がいる事は確かである。

(ちっ…。自分を見ている奴を探そうにも人が多くて無理だ。此処で誘き出そうとしても周りに危害が及ぶ可能性がある。とりあえず、人気の無い場所へ移動するか。相手の狙いが俺ならあとを追ってくる

だろうからな。此処からなら天下一通りの裏路地が近いな。よし、そこへ移動しよう)

視線を送る相手を確認する為、桐生は人気の無い場所へと移動を開始した。すると案の定、桐生が移動すると視線も付いて来るのを感じる。やはり、相手の狙いは自分だと桐生は確信する。移動中にさり気なく後ろを振り向いて、視線の相手を探すが相手も然るもの。そう簡単に姿を見せたりはしない。

自分の姿は現さないで対象に視線を送る芸当が出来る。これは相当の手練れだろう。桐生は久方ぶりに身の危険を感じていた。1年余り、命を削る様な戦いはしていない事もあってか、自分の身体は大分訛っている。

(拙いな。視線はあるが、相手の姿は一向に見つからない。もし、この相手と戦うような事になったとしたら…今の俺では勝てない。一体、どうする？助けを呼ぼうにも応援が間に合うだろうか？いや、来る前に始末されてしまうだろう。なら、取るべき手段は一つ。真正面から迎え討つしかない。勝てなくても背を向けて逃げる訳にいかないからな)

悩んだ結果、桐生は謎の人物を迎え討つ事にした。そして人気がない裏路地に辿り着き、桐生が静かに相手が来るのを待っていると入り口からゆつくりと歩いてくる姿を捉えた。

「はあゝ やつと追い付いた。桐生さん、歩くの早すぎやん」

「お、お前は…。希か。一体、これはどういう事なんだ？」

暗がりから姿を現れたのは何と東條希であった。予想外の出来事に桐生は驚きを隠せずにいた。しかし、当の本人はのんびりした様子で言葉を返す。

「それはウチの台詞や。ホテルから出てくる所を見て、声をかけようとしたんよ。だけど、中々追い付けなくて見失わない様に目で追うのが精一杯やったんや」

「…そうか。姿が見えないのはその所為だったのか」

「そうなんよ。桐生さんが振り向いた時、ウチに気付いたかな？」と

思ったら、いきなり早足で歩くんやもん」

危機が迫つてると思いきや、真実は希が必死に自分を追っていただけ。この事にホツとした分、精神的な疲労を感じるのは仕方ないだろう。

桐生は深い溜息を一つ吐き、希が自分を追っていた訳を尋ねる事にした。

「事情は…分かった。それで希は何の用があつて、俺を追いかけていたんだ？」

「そうやった。実はな。この前、神室町へ来た時に桐生さんを見たんだよ。声をかけようと思つたけど…あの時、A—RISEの子達と会つてたよね。一体、どんな話をしてたん？」

桐生を追いかけていた理由を話した後、今度は希が桐生に尋ねる。

「はあ。そんな所まで見てたのか。あの時、話してたのはツバサ達がμ sに勝負を申し込む準備が出来たから近い内に挑みに行く。確か、そんな話だったよ」

「ええええっつ!! A—RISEがμ sに勝負を申し込む。ほんまにそう言ったん」

「あ、ああ。まだ、詳しい日程とかは決まって無いようだったがな。それらが整ったら連絡するとは言つてたな」

桐生の言葉に驚き、詰め寄る希の迫力に圧倒されながらも桐生は更に言葉を続ける。すると、落ち着きを取り戻した希はある事に気付いて、桐生へ思い付いた提案を持ちかける。

「決まったら、連絡するか。という事は桐生さんはA—RISEの連絡先を知つてると事やな?それなら今から連絡取れへん。ウチにある提案があるんよ」

「提案?希は一体、何をする気だ?」

「それはあとでちゃんと説明するよ。今は何も言わずに連絡を取って欲しいんや」

「…解つた。だが、掛けても相手が出るとは限らないぜ。その時は諦めろよ」

「うん。ありがとう桐生さん」

真剣な表情を浮かべる希の様子から、これは何があっても引き下がらない。そう判断した桐生は溜息を一つ吐き、A—R—I—S—Eへ連絡を取る事にした。向こうの事情も知らず、電話に出るか解らない。その事については希も理解している為、素直に首を縦に振る。

そして何度かコールが続いた後、相手が電話に出た。

『もしもし。桐生さんから電話してくるとは珍しいね。それで一体、何の用？』

「ああ。その事なんだが…。実はお前達が計画してる勝負の事で希が話をしたいそうさ」

『希？……え？ちよつと待って。その人、もしかして東條希って言うんじゃないよね？』

「ああ。確かにそうだが、それがどうしたんだ？」

桐生が出した名前に反応したツバサが何やら、慌てた様子で尋ねる。そんな慌てるツバサを余所にあつさり認めるとツバサは黙り込む。その状態が1分程、続いて業を煮やした桐生が口を開こうとしたその時。

『う、嘘でしょおおおおおっ!! 私に話があるって言ってたわね。という事は今、傍にいるの？いえ、それよりも桐生さんは希さんといつ出会ったの？』

「ぐっ、いきなり大声を出すな。全く、鼓膜が破れるかと思ったぞ」

『ご、ごめんなさい』

「まあいい。それで何から聞きたいんだ？答えるのはいいが、まずは希の話が終わってからだ」

『…そうね。じゃあ、希さんに変わって頂戴』

劈くような大声でツバサは自身の疑問を次々と桐生へぶつけた。いきなりの大声で耳鳴りを起こす耳を抑えて桐生はツバサに注意をした後、希に電話を手渡した。

「もしもし。いきなりでごめんな。桐生さんも言ってたけど、今回の勝負の事でウチから話があるんよ」

『その事は聞いてるわ。早速だけど、本題に入りましょう。希さん、貴女の提案とは何かしら?』

「そやね。ウチの提案は勝負の内容と花陽ちゃん達の事や」

『勝負の内容と花陽さん達の事?それはどういう事かしら?』

希の言葉を反芻してツバサは聞き返す。一体、希は何を言いたいのか。ツバサは気になり続きを促した。

「ウチらが^{ts}sを解散して2年。今現在、花陽ちゃん達は高校三年。つまり今年は受験なんよ。それとツバサちゃん達が申し込もうとしてる勝負はライブ対決やる?」

『…ええ。そうよ。解散しても貴女達はアイドル。だからこそ、その勝負を申し込むつもりだったわ。でも、受験を控えてる子がいるなら終わってからでも「ちよい待ち」え?』

ツバサの言葉を遮り、希は相手が黙るの待つてから言葉を続けた。「別に勝負は日を改めんでもええよ。ただ、勝負は穂乃果ちゃん達とA—R I S Eや。それとウチを含めて絵里とにこの三人で勝負に立ち合う。これを考えてたんよ」

『そう。それで勝負の内容については?』

「もう一つ。勝負の内容はボウリング、バッティング、最後はカラオケで決着。ウチの提案はこんな所や」

思い付いた提案を全て伝えて、希は一息吐いてツバサの返答を待っていた。数分が経ち、未だに沈黙を貫くツバサの様子からこの提案は駄目か?

そう希が思い始めた時だった。

電話先からツバサの返事が返ってくる。

『…分かったわ。希さん、貴女の提案を飲みましょう。まあ実際の所。どんな形であろうと勝負が出来れば良いからね』

「ありがとう。ウチの提案を飲んでくれて。それと勝負はいつやる予定なん?」

『そうねえ… 今度の日曜日はどうかしら? 勿論、それ以外の日でも良いのだけど、先延ばしにするのも何だからね』

「確かにそうやね。それで穂乃果ちゃん達にはウチから伝えてもええかな？」

『ええ。お願いするわ。希さんからの方が穂乃果さん達も変に意識させる事も無いからね。それじゃあ、桐生さんに変わってくれ。いくつか聞きたい事があるの』

「うん。はい桐生さん。ツバサちゃんが聞きたい事があるみたい」

「ああ。今変わったぜ。それで聞きたい事は俺が希と会った時の事だろう？」

ツバサとの話を終えて、希は桐生に電話を返した。希から電話を受け取ると電話先のツバサへ話しかける。

『そうそう。さつきも聞いたけど、桐生さんは何処で希さんと出会ったの？』

「希とは神室町で会ったんだ。その時は友人の為に買う物があるから道案内をしてくれとな」

『なーんだ。そんな事かあ。てつきり、もっと面白い話が聞けると思ってたのに』

「おいおい。変な事を期待するな。まあ、希との経緯はそんな所だ。それで勝負の日は何時になったんだ？」

『ああ。それなら今度の日曜だよ。勝負に参加するのは私達三人と穂乃果さん達の三人よ。それで勝負の立ち合いに希さん達三人がやってくれと言ってたわ。他の三人だけど、今年は受験だから不参加よ』

「そうか。その勝負には俺も立ち合わせてもらおうぜ」

『ええ。是非、来て頂戴ね』

兼ねてからの約束もあり、桐生は勝負に立ち合う事を伝えるとツバサも元より、そのつもりだったのだろう。本人も喜んで了承した。

『桐生さんには伝えたから... 次は真島さんね』

「うん？ツバサは真島の兄さんを知ってるのか？」

『ええ。真島さんは私達が前に進む切欠をくれた人なの。その口振りからすると、桐生さんも真島さんを知ってるのね。本当に驚かされてばかりだよ』

「ああ。俺と真島の兄さんは古くから付き合ひがあるんだ。それは置いていて、真島の兄さんには俺から伝えておくぜ。お前達は勝負の事だけを考えるといい」

『そう。それなら言葉に甘えるわ。さて、言う事と聞きたい事は済んだし、これで失礼するわ』

「分かった。じゃあ、今度の日曜に会うとしよう」

『うん。楽しみにしてるわ。それじゃあね』

この言葉を最後に電話が切れた。ツバサに言った通り、真島に連絡を入れようとした時、「俺は見たでえ。桐生ちやくん」そつと忍び寄っていた真島が背後から声をかけてきた。突然、登場した真島に希と桐生は目を見開き驚いていた。

「ま、真島の兄さん!? 一体、こんな所で何をしてるんだ?」

「そら、こつちの台詞や。桐生ちゃんの方こそ、陰で隠れて面白そうな事をしとるやないか。しかも希ちゃんと一緒にとはのう」

「まあ、別に大した事じゃないんだが、実はだな…」

真島は希と桐生の顔を見て、そう呟いた。桐生が思わぬ人と行動していた事に真島の方こそ、驚いていたのだ。そんな真島に事情を説明する事にした。

「…成程のう。そうか…。ツバサちゃん達は前に進んだやな。それで勝負する日は今度の日曜か」

桐生から話を聞いた真島は静かにそう言葉を洩らす。真島はあの日、何処か思い詰めていたツバサ達に出会った事を思い出す。あの時、自分の言葉がツバサ達の背中を押す事になり、そして前に進んだ。真島は何よりもそれが嬉しかった。しかも大事な勝負に自分を招いてくれた。この事も喜びを感じさせていた。

「ああ。ツバサ達はそう言っていた。そこで兄さんに一つお願いがあるんだが…聞いてもらえないか？」

「うん？桐生ちゃんが俺に頼み事とは珍しいのう。ほんで一体、何や？」

珍しく頼み事をしてくる桐生に目を丸くしながらも、真島は問い掛けた。

「今度の勝負。ボーリング、バッティング、カラオケの三つなんだが、真島の兄さんにはこれで利用する施設を一日だけ借りて欲しいんだ。無論、ただとは言わない。払う金は無い。その変わりと言っては何だが…俺に真島の兄さんの仕事を手伝わせてくれ」

「…何やねん。どんな頼みかと思いきや、そないな事か。勿論ええで。その程度ならお安いご用や。それに桐生ちゃんと仕事が出るのも嬉しい事やしなあ」

桐生の頼みを真島は笑って、快く受け入れる。その様子に桐生もホッとしていた。頼みを聞いてくれたのもそうだが、仕事と同時に寝泊まり出来る場所を確保出来た。公私混同はしない主義の真島の事だ。懸命に働いた分、給金も払ってくれるだろう。

桐生は密かにそう企んでいた。だが、そんな思惑を察したのだろう。眉間に皺を寄せ、真島は「仕事はやってもらうが、給料は出さずで」と牽制した。

「何!?!…。突発とは言え、労働するのに何も無しなのか？」

「そんなん当然やないか!! 桐生ちゃんが働くのは頼みを聞いた事へのお礼やろう。ほなら、俺が給料を払う必要は無いやろうに……。まだ、何か隠しとるな?この際、正直に言ってみい」

普段と違い、何処か焦った様子の桐生に違和感を覚えた真島が静かに尋ねる。雰囲気が変わった真島に誤魔化しは一切、通用しない。桐生は素直に隠していた事情を話す事を決めた。

「実はだな。俺が宿泊しているビジネスホテルが今週で閉鎖する事に

なったんだ。それで住む部屋を探して不動産を廻っていた所に希の視線を感じてな。跡を付けてくる希から逃げ回っていたんだ。だが、結局は俺の勘違いで、今に至る訳だ」

「成程のう。事情は分かったで。それとやけどな、桐生ちゃんを感じた視線…それは俺や」

「何だと?…」

「ホンマや。桐生ちゃんが視線を感じたのは泰平通り付近やろ?俺が桐生ちゃんを見たのはそこでやからな。何や、希ちゃんの姿も在って何をしとるのか気になってな。こっそりと見つからない様に尾行してたっちゆうわけや」

「姿が見つからないと思ってたら、あの視線は真島の兄さんだったのか。だが、希も俺を尾行してた様だが、姿を見つける事が出来なかつたぞ。一体、どうやって姿と気配を隠していたんだ?」

真島の話で視線の正体が分かった。しかし、真島だけでなく希の姿を発見出来なった事を桐生は気になっていた。気配を隠す術を持っている真島ならまだしも、希は普通の女子大生である。当然、姿を隠しても気配を隠すのは不可能な筈なのだ。それ故、桐生はどの様な手で気配を消していたのかと尋ねた。

「別にウチは何もしとらんよ。確かに桐生さんに用が在って街に来た所を見つけて、付いていっただけや」

「成程な。俺は真島の兄さんの視線に気を取られて気付いて無かっただけか」

「ふっ 桐生ちゃんは意外にドジやからなあ、まあ、それはええ。桐生ちゃんの事情も分かった。仕方無いから働いた分は給金を払った。せやけど、しっかりとやってもらおうで」

「ああ。分かった。恩に切るぜ真島の兄さん」

「問題が解決して良かったね。ほな、ウチは帰るよ。用事は済んだから。今度の日曜日、楽しみにしとるよ」

「フツ そうだな。気を付けて帰れよ」

「うん。それじゃあ、桐生さんと真島さんもまたね」

「おう。また会おうで〜」

用を済ませ、帰路に着く希の姿を見送りながら、二人は来たる日を心躍らせていた。

「なあ桐生ちゃん。この後、どうせ予定無いんやろ？ちっと早いが一
杯ひっかけに行かへんか？」

「いいぜ。確かに予定も無く、暇だからな」

「ほうか。なら、善は急げやな」

「慌てなくても店や酒は逃げたりしないぜ」

「そうやが、時間は逃げるやろが〜 いいから行くで」

「分かったから引つ張らないでくれ。服が伸びてしまう」

そんなやり取りをしながら二人は街へ消えていった。神室町の夜は今日も長く人は眠らない。

そして勝負の日がやってくる。

サブストーリー022 勝負の行方

日曜日。今日は穂乃果達とツバサ達が決する日。その勝負に立ち合う桐生と真島は穂乃果達との待ち合わせ場所へ向かっていた。

「ついにこの日が来たのう。一体、どんな勝負になるか楽しみやな。なあ、桐生ちゃん」

「ああ。だが、真島の兄さん。今回、俺達は立ち合うだけだ。余計な手出しは駄目だぜ」

「はっ、そないな事は言われんでも分かつとる。この勝負に水を差すなんぞする訳ないやろが」

「それもそうだな。さて、皆はもう来てるだろうか？」

「どうやろうなあ。まあ、今日は大事な日やから遅刻はせんやろ」

何気ない会話をしてる内に二人は待ち合わせ場所に到着した。しかし、早く着き過ぎたのだろう。穂乃果達はまだ来てない様であった。

「流石にまだ来てないか。待ち合わせの時間まで余裕があるな。俺は何処かでコーヒーでも買つてくるとしよう。真島の兄さんはどうする？」

「そうやな。ほな、頼むわ」

「分かった。それじゃあ、行ってくる」

待ち合わせまで時間がある為、飲み物を買いに桐生は近くの店へ向かって行った。

桐生が立ち去って数分後。煙草を吸い待っていると道の先から歩いてくる穂乃果達が目に映る。向こうも真島の姿に気付いたのか、穂乃果が手を振りながら小走りで近寄ると笑顔で声をかける。

「あつ、真島さん。もう来てたんだ。随分と早いね」

「こんにちは 真島さん。それと穂乃果っ!! 先に挨拶をするべきですよ」

「まあまあ 海未ちゃん。今日は勘弁してあげようよ」

「相変わらず、仲がええな。ほんで今日は俺と桐生ちゃん以外に希ちゃん達も勝負に立ち合うとそうやが、一緒やないんか?」

待ち合わせ場所へやって来たのは見た所、穂乃果達の三人だけである。大事な勝負の日に遅刻をする訳は無いと分かっているが、時間まであと10分を切っている。穂乃果達なら事情を知っているかもしれない。そう思って真島は事情を尋ねると、その問いに海未が反応して口を開く。

「希達も今向かってるそうです。先程、こちらに来る途中でメールが来ました。だから、時期に着くと思います」

「さよか。それなら残るはA—RISEの三人だけやな」

「ええ。その三人も時期に来ると思います。それと桐生さんはどうしました?」

「ん?桐生ちゃんなら今、飲み物を買に行つとる。俺達が先に着いてのう…待ち合わせまで時間があるからとな。そろそろ戻つて来る筈やで。お?噂をすれば影や」

真島の言葉通り、遠くから袋を手にした桐生が歩いてくる姿が見えた。真島にやった様に穂乃果が桐生に手を振ると桐生も手を振り返した。

「こんにちは 桐生さん。お久しぶりですね」

「うん。今日は1日よろしくね」

「桐生さん こんにちは。そういえば、A—RISEの皆はまだ来てないの?」

「ああ。どうやら…まだ来てないようだな。ま、約束の時間までには来るだろう。まあ、これを飲んで待つていればいいさ」

「ありがとうございます。桐生さん」

「ありがとうございます。それでは頂きます」

「桐生さん どうもありがとうございます」

会話の最中、桐生は袋からジュースを取り出すと三人へ渡した。三人もお礼を言っ、それを受け取った。貰ったジュースを飲みながら海未はある事に気付き、それを口にする。

「ふと思ったのですが、どうして私達の分があるんです？桐生さんが買い物に行ったのは私達が来る前ですよね？」

「ああ。それは買い物途中で真島の兄さんからメールが来たんだ。ついでだから人数分を買って来いとな」

「せや。穂乃果ちゃん達が来た時に俺達の分しか、無いというのもあれやからなあ。ま、ジュースを奢る事くらいやつても罰は当たらんからのう」

「フツ そういう事だ。だから遠慮はしないで飲んでくれ。と言つても穂乃果はそうしてるみたいだな」

「へ？ …穂乃果っ!! 貴女は少し遠慮しなさい。全く、そんな風にながつくなんてみつともないですよ」

「な、そこまで言う事無いじゃん。それに遠慮するなって桐生さんも言ってたよ」

「だからと言って、ガブ飲みする事は無いでしょう。本人がそう言ってたとしても多少の遠慮はするべきです」

「もう、いつも厳し過ぎだよ。海未ちゃんの鬼」

「誰が鬼ですか。大体、厳しい事をいつも言わせてるのは貴女でしょう」

「まあまあ 海未ちゃん。他の人もいる事だし、そこまでしておこうよ。それにほら…希ちゃん達とツバサさん達も来た様だよ」

もはや恒例となっている二人の言い争いを仲裁した後、ことりはある方向を指差して希達が来たと言った。皆がその方向を見ると六人

の少女達が談笑して歩いていた。そして合流と同時にツバサが笑顔で話しかけて来た。

「お待たせ！ 遅くなって悪かったわ」

「何を言ってるんだ。遅れたのはツバサが電車を間違えたからでしょ」

「そうだな。まあ、肝心な所でドジをするのがツバサらしいが……」

「うるさいわね〜 何だかんだで到着したんだからいいじゃない。ね？ 絵里さん」

「え？ え、ええ。確かに着いたけど……遅れない方が良さと思うわ」

「フフフ。そういうエリチも電車を間違えそうになったもんなあ〜」

「私がすぐに気付いて止めたからいいもの。てか、希も気付いてたなら止めなさいよ」

「皆、そこまでにしてあげ。全員揃った事だし、そろそろ移動するとしてよう」

「せやな。そんで最初の勝負は何をするんや？」

妙な方向に話が進み、このままでは收拾が付かない。一早く桐生が止めに入り、真島も言葉を続ける。二人の言葉に一同も頷くと移動を開始した。

街を移動して十数分後、一同は何故かボウリング場の裏口へ来ていた。その事を疑問に思ったのだろう。皆が思う事を穂乃果が真島と桐生に問い掛ける。

「ねえ、どうして裏口に来たの？ 普通は表から入るよね？」

「ああ。それは目立たない様にする為や。現役のスクールアイドルと元とはいえ、ツバサちゃん達と競り合ったスクールアイドルや。そないな人が表から入ったら、騒ぎになって勝負どころやないやろ。ま、

店は貸し切りやから中に入れば問題ないけどな」

「そうなんだ。店を貸し・切り…。 えええええっ!! それは本当なの？ 私は初めて聞いたわよ」

話を聞いていたにこが驚き叫ぶ。声には出していないが他の皆も同じ気持ちだろう。そんな時、希がぼつの悪い顔を浮かべ「ごめん。ウチ、その事を言い忘れてたわ」とか細かい声で呟いた。「何よ。大事な事を言い忘れるなんて、希も人の事を言えないじゃない」と希に絵里はツツコミを入れた。その中で平然としているツバサ達を見て、絵里が問い掛ける。

「それとツバサさん達も驚いてないのね。もしかして…希と同じく知っていたの？」

「ええ。前日に真島さんからメールが来たからね。まあ、それはともかく。そろそろ中に入りましょ」

「せやな。ほな、ご一行様の入店や」

真島は裏口のドアを開けて、穂乃果達に中へ入る様に促すと皆は静かな足取りで中へ入って行く。従業員用の通路を通り抜け、ホールに続くドアを開けると見慣れた場所へ出る。

そこは普段と違って賑やかではなく、自分達の息遣いが聞こえるくらい静寂に包まれていた。

「うわあゝ すごい静かだよ。こんな光景、初めてだよ」

「そうですね。どうやら、本当に貸し切りの様ですね」

「うん。だけど、こんなに静かだと…ちよつと、落ち着かないね」

「誰にも邪魔されずに勝負出来るとはいえ、流石にこれはやり過ぎの様な気がするけど…」

「まあええやん。他の人には悪いけど、真島さんと桐生さんの好意なんやし」

「そうね。それにこういうのも結構好きよ。何か有名人になった気分を味わえるからね」

貸し切り状態の店に穂乃果達は様々な反応を見せる。それとは別にA—RISEの三人はいつも通りの様子を見せていた。穂乃果達と違い、こういう雰囲気慣れてるのだろう。

穂乃果達が落ち着いたのを見計らって、英玲奈がにこ達に話しかける。

「ところで…最初の勝負はどうするんだ？まだ詳しいルール等も聞いていないしな」

「そうやった。ほな、今から説明するよ。この勝負は3本勝負。そして対決は1対1でやるんや。お互いのメンバーから一人を選ぶ形やね」

「あら、それはいい提案ねえ、それじゃあ、一番手は私が行くわ」

「最初は私が行くね。二人もそれでいいかな？」

希が提示したルールに賛同し、A—RISEからはあんじゅが一番手を打って出る。μsからはことりが一番手を申し出た。その事ににこが驚いた顔で言葉を発した。にこが驚くのも無理はない。普段は控えめなことりが進んで前に出る等、余り無いからであった。そしてにこが穂乃果達に視線を向けて、確認を取る。

「ことりが積極的になるのは珍しいわね。それで穂乃果と海未はそれでいいの？」

「ええ。私は構いません。ことりの意思を尊重します」

「うん。私も海未ちゃんに賛成だよ。ことりちゃん頑張つてね」

「ありがとう。私、頑張つてくるね」

「最初の対戦相手は決まったわね。それで希。ゲームは何セットやるのかは決めてるの？」

「勿論！今回はスプリッドゲームで対決や」

絵里の問いに希は胸を張って答えた。希自身、普通のゲームでも良かったのだが、勝負を盛り上げるにはスプリッドが持って来いだと思つての事だ。

「成程。その方が手っ取り早いからう。参加する二人もそれでええ

か?」

「私は構わないわよ」

「私もそれでいいかな」

「決まりやな。そんなじゃ、投げる順番をジャンケンで決めや」

「最初はグー、ジャンケンポン」

「あら、私の負けね。ジャンケンでは負けたけど、スプリッドでは負けないわよ」

「うん。私も負けないよ」

「ほな。勝負開始や」

勝負に参加する二人の順番を決めたのち、真島の言葉で戦いの幕が切って落とされた。

1巡目 配置は右斜めに5ピンがT字形に並らんでいる。これは最初という事もあり、二人がスプリッドに慣れてもらう為に真島が簡単な配置に設定していた。そしてボールを手にしたことりがレーンの前に立ちながら、脳内でピンを倒す算段を考える。

(ピンの配置はT字形。一投目は真ん中を投げて三つ倒すとして、問題は残りの二つをどうするか。ううん。考えても仕方無い。今はピンを倒す事に集中しなきゃ。考えるのはそれからにしよう)

意を決したことりは勢いよくボールを転がした。それは真っ直ぐに転がって行き、真ん中の3ピンを纏めて倒す。

「わあ、すごいことりちゃん。綺麗に倒したよ」

「確かに見事ですが、逆にことりが不利です。残りの2ピン…これを倒すのは難しいですよ」

海未の言う通り、真ん中のピンを全て倒す事が出来た。だが、左右に残った2ピンを次で倒せなければ、1巡目をことりは落とす事になる。そうなったら三本勝負とはいえ、きつい展開になるのは間違いありません」

「…全ては次の投球次第ってことね」

海未の話を聞いていたにこが静かに言葉を紡ぐ。皆が固唾を飲んで見つめる中、ことりは2球目を投げる為にレーンへと再び歩んでいく。

（残るピンは2本。位置は左右に一本ずつ。そしてこの一球で決める事が出来なければ…1巡目は私の負け。だけど、一体どうしたら…そうだ。この手で行こう）

初っ端から厳しい状況に追い詰められたことりだったが、ある作戦を思い付いた。ことりは左端に移動し、ボールを右斜めに転がした。ことりの予想通り、ボールは右のピンを弾き飛ばし、左に立っているピンに当たり倒れた。

「…やった。成功した」

自分の狙いが上手く行き、ことりは安堵の息を吐く。その様子を見物していた穂乃果達もまた同じであった。

「すごいです。難しい位置にあるピンをあんな方法で倒すとは」

「うん。でも、ことりちゃんはある程度の意外と得意なんだよ」

「そうなの？もしかして裁縫とかやってるからってオチ？」

「流石にそれは無いと思うわよ」

「せやね。あつ、あんじゅちゃんの番が始まるで」

ことりの番が終わり、あんじゅの番が始まった。先程と同じ位置に並べられたピンを見据えながらあんじゅがボールを手に取ると自信満々に言葉を吐く。

「さて、次は私ね。ことりちゃんのおかげで攻略法も思い付いたし、すぐ終わらせてもらおうわよ」

あんじゅはことりと同じく、左に移動すると右斜めにボールを転がす。そのボールは滑らかなスピンで真ん中を貫くと、その反動で全てのピンが綺麗に倒れた。思わぬ出来事に穂乃果達もことりも呆気に取られていた。無理も無い、まさか一球で全てのピンを倒すとは想像にしていなかったからだ。

「ほう。一発で倒すとは中々やるのう」

「ああ。あの方法もことりのやり方を見ていたからこそ、出来たんだろう」

「せやな。ま、勝負は寧ろこれからやろ。ことりちゃんの顔がそう言っとなるで」

真島の言葉通り、ことりの顔には闘争心が見て取れた。どうやら、先程のあんじゆのプレイがことりの心に火を付けた。その事に真島と桐生も勝負が盛り上がりそうだと楽しんでいた。

二巡目 ピンは4本。前列真ん中に2本、後列は左右の角に2本配置されている。このゲームを攻略するには後列のピンを倒すかである。それは二人も理解しているのか。少しばかり難しい顔をしている。

「二人共。悩むんは分かるが、そろそろ開始してや」

業を煮やしたのか真島が二人にそう声を掛けた。言われた二人も頷き、順番を決めるジャンケンの結果、順番はあんじゆが一番手に決まり、2ゲーム目が始まった。

「次はあんじゆが一番手ね。頑張れ〜」

「しかし、あの配置はきついぞ。全て倒すには真ん中のピンをどう利用するかだな」

「真ん中のピンか。まあ、あんじゆの事だから大丈夫でしょ。信じて見てましょ」

「ツバサの楽観的な性格。こういう時は安心するよ」

「そうでしょ。あ、ゲームが始まるわよ」

ツバサ達の会話が終わる頃、レーンに立ったあんじゆがボールを真ん中目掛けて勢いよく転がした。あんじゆの作戦では小細工するより、勢いに任せて吹き飛ばす方法を選んだ。

そして目論見通り、勢いに任せたボールは見事に全てのピンを倒す

事に成功した

「ほう。一発でクリアとは流石だな」

「本当ね。下手な小細工するよりも思いきった方が上手く行くのよね」

「そうだな。だが、2番手の南さんは諦めて無いみたいだぞ」

思わぬ展開にも関わらず、ことりは焦る所か笑みを浮かべていた。それはこの展開を楽しんでいるかの様にも見える。いや、寧ろ楽しんでいた。あんじゆの番が終わり、入れ替わるようにことりはレーンに歩いて行く。

「ことり。一体、どうするのかしら?」

「それは解りません。ですが、あの様子だと秘策があるのかもしれない」

「ううん。多分、そういうのは無いと思うよ」

絵里と海末の話に穂乃果が割って入る。悟った様に言葉を発する穂乃果に黙っていたにこが問い掛ける。

「どうして解るのよ?何か、根拠があるの?」

「うーん。特に根拠は無いけどね。強いて言うなら感かな。ほら、ことりちゃんの顔。とても楽しそうでしょ」

「そうやね。確かに楽しそうや。普通なら焦る所なのに」

「成程ね。案外、穂乃果の言う通りかも」

穂乃果の言葉には何処か説得力があり、聞いていたにこや希もそう感じた。

「あ、ことりが投げみたいですよ」

「ことりちゃん。ファイトだよ」

穂乃果の応援にことりは笑顔で頷くとボールを転がした。あんじゆの時と違い、ボールはゆっくりと左にカーブして前列のピンを弾き飛ばし、そのピンは後列にある左右のピンにぶつかって倒れた。ことりがやってみせたプレイに穂乃果達は歓声を上げて喜んだ。

「わあ、すごいよことりちゃん。まるでプロの選手みたい」

「ええ。本当に驚きです」

「だけど、未だに同点よ。次が最後だし、決着は付くのかしら？」

「どうやろな？まあ：真島さんに何か考えがあるようやで」

二人に近づいていく真島を見て、希はそう言った。

「次で最後やし、俺から一つ提案があるんや」

「提案ねえ。一体、どんな案なの？」

「ああ。単純な話やが、次は普通にやってもええ。ただし投げるのは一回だけで使うボールが一番重いやつや。二人の実力やと、次の勝負で決着が付きそうになさそうやしな。それで勝敗は運に任せるつちゆうわけや」

「運…ですか。確かに勝負は時の運というものね」

「せや。二人はどうなんや？」

真島の提案に二人は考え込む。真島の言う通り、確かに次で決着が付かなかつたら勝負が無駄に長引くだけである。対決はまだバツティングとカラオケが控えてる以上、此処で時間を食う訳にいかない。考えた結果、二人は真島の提案を飲む事にした。

「私はそれでいいわよ」

「私も同じく」

「分かった。この際、順番は決めんでええ。二人同時に投げてもらおうで」

「分かりました」

「良い返事や。ほな3本目開始や」

二人はレーンの前に立つと同時にボールを転がした。運に任せた勝負の結果はあんじゅが9本。ことりが5本。ボーリング対決はあんじゅに軍配が上がった。

「私の勝ちね。ことりさんとの対決、とても楽しかったわ」

「ありがとう。負けたのは残念だけど、私もあんじゅさんと勝負は楽しかったよ」

「ボーリング対決の勝者はあんじゅちゃんやな。まずはA—RISEが1点。まあ、まだ逆転もあるから、sの皆も頑張りの」

「それじゃ、次の対決場所に行くとするか」

一同はボーリング場を後にして、次の対決場所であるバッティングセンターへと向かった。劇場広場を通り、ホテル街入り口にあるバッティングセンターに到着すると真島が次の対戦相手を決める為のくじを取り出した。

「バッティング対決を始める前に四人にはこのくじを引くんや。これはカラオケ対決のくじも兼ねとる。せやから引く時は慎重に選ぶやで」

「成程。くじを引くまで誰と当たるのか分からない訳か。しかし、真島さん。私がツバサとぶつかった場合はどうするのだろうか？」

「そんなの引き直しに決まってるでしょう。私と英玲奈が対決してどうするのよ。私としてはそれも面白そうだけどね……。今回はμsとA—RISEの対決だもの」

「そうね。私達の勝負は今度やりましょ」

「話が纏ったな。ほな、くじを引きや。面倒やから全員一斉にな」

真島に差し出されたくじを四人が引いた後、それを桐生が確認する。結果はバッティング対決は海未VS英玲奈。そしてカラオケ対決の相手は穂乃果VSツバサに決まった。

「予想はしてたが、結果はやはりこうなったな。何にせよ。私は全力でやらせてもらうよ」

「望む所です。私も全力でいきますよ」

「盛り上がってきたのう。ほんじゃ、バッティング対決のルールを説明するで。ルールは5球勝負。今回、利用するコースはハードコースや」

「ハードコースって、私はバットを持つのが初めてなんですけど……」
「マジでか。ほんなら、穂乃果ちゃんと変わってもらうか？まだ対決は始まっとらんし、今なら可能やけど、どないする？」

優しくも何処か焚き付けるよう真島は海未に話しかける。負けず嫌いの気がある海未なら確実に乗ってくるだろうと予想しての事だった。案の定、真島の言葉に火が点いたのだろう。海未は食い付い

てきた。

「いいえ。私は勝負を受けて立ちます。ハードと言つても少し速いくらいでしょうし、初めてだろうと打てると思いますから」

「いや、ハードの投球はプロ……ほうか。そんなじゃ、予定通りにやるとしよか」おい、真島の兄さん」

海未に忠告しようとする桐生の言葉を遮り、真島が開始を促した。その強引なやり口に顔を顰める桐生に真島が小声で呟く。

（まあ、落ち着けや。あの二人、俺が見る限りでは運動能力高いと思うとる）

（だから黙ってるのか。もし飛んでくる球で怪我したら、どうするんだ？俺でも最初は面食らって何も出来なかつたんだぞ。一瞬でも反応が遅れたら体や顔に当たる事だつてあるんだぜ）

（大丈夫やつて。改装時にバッターへ当たらない様、入念に整備したと聞いとる）

（そうなのか。……いや、待ってくれ。整備したという事は球が当たる事故があつたんだろう。やはり言った方がいいと思うぜ）

（うーん。確かにそう言われると不安になつてきたわ。しゃーないのう）

「あく二人共。言い忘れてた事が一つあつた。ハードコースの投球はプロ並や「知ってますよ」へ？」

「扉の前に書かれてるよ。投球速度：120〜140とな。しかし、その事を敢えて黙っていたのは人が悪い」

「全くです」

「うっ すまんかった」

「もういいですよ。それより、順番はどうします？ボーリングの時みたいにジャンケンで決めるんですか？」

「それでもええけど、今回は英玲奈ちゃんが先や。最初はことりちゃんが一番手やったしな。二人の健闘を祈ってるで」

「ありがとう。それじゃあ、勝負開始といこう。よろしく園田さん」

「こちらこそ。それと私の事は名前で構いません」

「それなら私も名前でも呼んでくれ。この勝負、私が勝たせてもらおうぞ。海未さん」

「ええ、私も負けませんよ。英玲奈さん」

お互いの名前を呼び、二人は握手を交わす。隠す事なく、闘争心を露わにする二人に触発されてか傍観者の絵里や桐生達も熱いものが込み上げてくるのを感じていた。きつと、ボーリング対決以上に白熱するであろう。誰もがそれを予想していた。

一番手 藤堂英玲奈。

1球目ストリート バットを構えてボールを見据えていたが、投球速度に反応出来ずに空振り。

2球目スライダー 先程より速度に慣れたのか、ボールに反応していたが惜しくも空振り。

3球目ストリート 速度に慣れ、同じ投球という事もあり、ボールを打ち返す事に成功。

(此処でまずは1点か。しかし、解っていたがこうも速いとは驚いた。だが、タイミングは掴んだ。このままりードさせて貰おう)

「おお、あんな球を打ち返すなんてすごいわね。この調子なら勝てるかもね」

「英玲奈は運動が得意だからね。だけど、このまますすなりと行くとは思えないわね。真島さんの顔を見る限り、何か仕掛けがありそうよ」

「うん？ああ。確かに悪そうな顔してるね。一体、何を仕込んでるのやら」

おそろく勝負を盛り上げる為の仕掛けがあるのだろう。それが何かは解らないけど、楽しくなりそうだと思う辺り、この二人も真島と通じる物があるの言うまでもない。

4球目カーブ 変化球であったが、タイミングを掴んだ英玲奈には何てことも無くあっさりと打ち返して成功。

思いの外、順応力が高い英玲奈に桐生は驚きを隠せずにいた。自身がハードコースを遊んだ時は慣れるまでに相当時間を有した事もあり。

「これは驚いたな。まさか、こどもも早くタイミングを掴むとは…」

「ほんまや。元々、運動神経がええんやろうなあ。英玲奈ちゃんが男やったら、確実に甲子園に行けるレベルなんは間違いないで」

「それ程か。しかし、運動神経と言えば海未も高そうだがな。何にせよ。勝負の行方は解らないな」

「そうやな。まあ、勝負はそうすんなりとはいかへんけど」

「ん？何か言ったか？」

「何でもあらへん。それより英玲奈ちゃんのラストプレイが始まるで」

誤魔化す様に話を逸らす真島の様子は気になっていたが、桐生はそれを無視して目の前の勝負に目を向けた。

5球目 此処でヒットに成功させれば、次に控えてる海未にプレッシャーを与える事が出来る。その時、ピッチングマシンからボールが発射された。だが、そのボールは回転しながら飛んできた。予想だにしない軌道に当然、反応など出来る筈もなく、英玲奈は打ち漏らしってしまった。

「……。なあ。真島の兄さん。あれは…あんたの仕組みだろ？」

「ヒヒっ。そうや。数年前にあれを見てのう。久しぶりに復活させてみたんや」

「全く、あんたは相変わらず読めねえなあ」

「フツ。まあ、これで勝負は盛り上がるやろ」

「それにしたって、最後の最後であれば酷いと思うのだが」

自分の番を終えた英玲奈が桐生達の会話に入り込んできた。真島の悪戯に振り回され、疲れた表情を浮かべる英玲奈に桐生が労いの言葉をかける。

「最後は残念だったな。だが、初めてなのに2球も打てればいい方だと思っぞ」

「せや。桐生ちゃんも最初にやった時は全然、打てんかったと言っ

とったしの」

「そうなのか。でも、最後のあれは一体、どういう原理でやってるんだ？」

「あれか…。あれはな…俺もよう解らんのや。今回のあれは以前、置いてあったものを起動させただけやしな」

「……」

「ま、まあ。そないな事はええやろ。次は海未ちゃんの番やで」
「分かりました。それでは準備しますね」

二人の視線から逃げる様に真島は海未に声をかけた。海未は待つてましたと気合が入った返事を返す。先程のプレイを見ていたにも関わらず、余裕がある海未に桐生が尋ねる。

「随分と余裕があるんだな。何か秘策があるのか？」

「それは見てのお楽しみです。まあ、皆を驚かせて見せますよ」

一言だけ呟いて海未は部屋へ入って行った。ことりといい、海未といい。勝負になると人が変わるのかもしれない。普段と違う一面を見て、桐生はそう思った。

二番手 園田海未。

1 球目ストレート 速くても真っ直ぐに飛んできた球を海未は打ち返す。英玲奈のプレイを見ていた事もあり、タイミングを合わせるのは容易だった。

2 球目スライダー この球も海未は容易く打ち返した。速度のある変化球を打つのは難しいがこれも容易くやってのける海未に穂乃果達は驚きの余り、声もなく見つめていた。

「う、嘘でしょ。あんな速い球を何で簡単に打てるのよ」

「意外な事に海未の隠れた才能かもしれないわね」

「海未ちゃん、ああ見えても運動が得意だからね」

「うん。本人は否定するけど、体を動かすのが好きなんだよ」

「そーいや、以前も山登りした時は生き生きとしとったな」

「ハラショー 海未の知らない一面を見たわ」

穂乃果達がそんな会話をしているとは知らず、海未は3球目、4球

目とヒットさせていった。この時点でバッティング対決は海未の勝利は確定しているが、海未が一番注目しているのは最後の5球目であった。

そして5球目 英玲奈の時と同じく、球は縦にジグザク移動をしながら凄まじい速度で飛んできた。最早、物理法則を完全に無視したその投球を海未は思いつきり、バットを振り被って見事に打ち返して見せた。一方的な展開にA―R―I―S―Eのメンバー達も空いた口が塞がらなかった。

「とんでもないわね。全球ヒットって、初めてとは思えないわねえ」
「うん。でも、慣れてるといふよりもさ。球の動きが見えてる感じだよね」

「多分、ツバサの言う通りだ。聞く話じゃ、海未さんは弓道を嗜んでるそうさ。何れにしても私の完敗だな」

第2回戦 バッティング対決は海未の勝利で幕を閉じ、現在は同点。これで決着は穂乃果とツバサのカラオケ対決に委ねられる事となった。片づけを済ませ、バッティングセンターからカラオケ店に向かう道すがら、一同は誰も口を開かず歩き続けた。その雰囲気には耐えきれなくなった真島が口を開く。

「そ、そういうや…海未ちゃんのプレイは凄かったのう。一体、どうしてあの球が打てたんや？」

「ああ。あれは真島さんのおかげです。以前の特訓で見せてくれた球に比べたら、あの球の方が遅かったですからね」

「ええ、それはどういう事？」

「つまり、真島さんは事前に海未さんの特訓してたのか」

「正々堂々の勝負なのにずるいわね」

「真島の兄さん。流星に鼻根は拙いと思うぞ」

「な、何言うてんねん。そないな事はしとらんわ。第一、俺が海未ちゃんに特訓を付けたんは大分前やで。時効や、時効」

海未の発言で白い目を向けられ、焦った真島は弁明をするが皆に何処吹く風で受け流されてしまう。藪蛇を突いたと真島はそれ以降、黙る事にした。

目的のカラオケ店が見えた時、横から男が走ってくるや。ツバサの鞆を奪っていった。突然の事で一瞬、呆けていたツバサだったが我に返り「泥棒〜」と大声で叫んだ。

「あのアホ。詰まらん事しよるのう」

「あいつは俺が追う。真島の兄さんはツバサ達を頼むぞ」

それだけ言い残し、桐生は鞆を逃げた男を追いかけていく。泥棒男の逃げ足は速く、

この手の犯罪に手慣れているだろう。何処となく余裕を見せる姿に桐生は追う足に力を入れる。普通なら適当に走り回って相手を撒くのだが、今回ばかりは泥棒男も相手が悪かった。

走っても走っても、追ってくる桐生に泥棒男の体力が持たず、ついに捕まってしまう。

「…終わりだ。観念して盗んだ物を返しやがれっ!!」

「ひ、ひい。わ、悪かったよ。盗んだ物は返すから殴らないで」

泥棒男は桐生の気迫に負け、ツバサの鞆を大人しく差し出した。それを受け取り、桐生は男を警察へ連れて行く為、男の腕を取り交番に向かって行った。

男を警察に引き渡し、桐生はツバサ達の元へ戻ると姿を見つけた皆が駆け寄ってきた。

「桐生さん ツバサの鞆はどうなったの？それと怪我とかしてませんか？」

「落ち着け。俺は平気だし、ツバサの鞆も取り戻して来たぞ。ほら、これだ」

「あ、ありがとう。お手数かけました」

「いいんだ。それじゃあ、カラオケ店に行くか」

「あゝ 桐生ちゃん その事やが、今回はお流れになったで」

場の空気を変えるべく、そう発言した桐生に真島が勝負が流れてしまったと告げた。

「どういう事だ？」

「桐生ちゃんがあいつを追っていった後に西田から電話があつての。時間が過ぎても、店に来いへんからカラオケ店から貸し切りを解除してくれとな。まあ、この時期は店側も忘年会やら色々あるからもう」
「そうだったのか。すまない。俺がもつと早く泥棒を捕まえていれば」
「それは違うわ」え？

事情を知り、己を責める桐生にツバサは優しく言葉をかける。

「確かに勝負はお流れにしまった。だけど、今回は勝負の勝ち負けに拘らず、私は前に進む事を決めていたのよ」

「……」

「実を言うとね。私は穂乃果さんが変わってしまったているんじゃないかと不安だったの。ほら、私は今でもアイドル活動してるけど…穂乃果さん達は辞めてしまった。それによって、私が穂乃果さんに見た輝きも消えてしまっているんじゃないかってね。でも、今日、穂乃果さんに会ってそれは杞憂だと分かった。あの時と変わらないでくれた。私。いえ、私達が前に進む事が出来る。だから、気にしないで」

ツバサは自身の想いを隠す事無く打ち明けた。その言葉を聞いていた穂乃果がツバサに近寄ると手を差し出して言葉を紡ぐ。

「今日の勝負にはそんな想いが在ったんだね。だけど、大丈夫。穂乃果もμ'sの皆も変わる事はないよ。だって、A—R—I—S—Eとラブライブで戦った事は私の大切な思い出もん」

「…穂乃果さん。ありがとう。今回はこんな結果になったけど、決着はいつか付けましょう」

「うん。その時は負けないよ」

二人は笑顔を浮かべて握手を交わした。そんな二人を他の皆も暖かい目で見つめていた。無論、それは桐生達もそうである。

「結局、勝負をしなくてあの子らは答えを出したやろな」

「ああ。俺にもツバサ達が見た穂乃果の輝きつてのを改めて分かった

「気がするぜ」

「何や、今頃かい。俺はもつと先に気付いてたで」

「フツ あんたには敵わねえなあ」

桐生と真島も顔を見合わせて静かに笑う。災難もあったが、今日は最高の日でもあった。桐生は空を見上げてそう考えていた。

「ほな。今から焼肉でパーツとやるでえ。全部、俺の奢りやから遠慮はいらん」

「「「「「ごちそうになります!!」」」」」」

真島の宣言に皆は嬉しそうに声を上げて喜んだ。それに乗っかる様に桐生も言葉を発する。

「今日は太っ腹だな。ご馳走になるぜ」

「アホ。桐生ちゃんは自腹や」

「ちっ、やっぱりケチだな」

「何やと？何や言うたか？」

「いや、何でもない」

「そうか。まあ、今回は特別や。桐生ちゃんもご馳走したる」

「ねく 早く行こうよ」

「穂乃果ちゃんも痺れを切らしとるし、はよ行くで」

「そうだな」

遠くで二人を呼ぶ穂乃果を見て、二人は足取り軽く穂乃果達の元へ歩いていった。この後、軽くなった財布を見て、嘆く真島の姿があった事は別の話。

サブストーリー023 元旦の屋上で愛を叫ぶ

年が明けて、新年。元旦から人で溢れる中、桐生はある人と会う為、待ち合わせ場所の七福通りへ向かっていった。街を歩く事、数十分。その人の姿を見つけると桐生は歩み寄って声を掛ける。

「すまん。待たせたな」

「いえ、私も今さつき着いたばかりですわ。それにいきなり呼び出してごめんなさいね」

「いや、気にしなくてもいい。俺も暇を持て余していたからな。それで南さんは何を買いに行くんだ？」

「ええ。実は娘から洋服の福袋を頼まれましたね。それを買うのに協力して欲しいんです」

「福袋か。協力するのがいいが…どうして俺なんだ？生憎だが、俺はそういった物には詳しくないぜ」

南理事長の話を聞いて、桐生はそう返した。桐生も服に無頓着という訳では無い。しかし、それが女性物となると話は別であった。当然ながら、男と女では服の違いは勿論、好みやセンスも異なるからである。

そんな桐生に南理事長は優しく微笑み、今回の目的を話し始めた。

「ああ。それなら心配なくても、中身は決まってるので大丈夫よ。カタログを見て欲しい服が入ってる物は決まってますし、それを一緒に買って欲しいの。本当なら娘と買いに来る予定だったんですが、娘はバイトの関係で来れなくなってね。しかも福袋は一人一つと決まりがあつて、どうしても人手が必要なのよ」

「そういう事情があつたのか。分かった。俺で良ければ協力するぜ。それで福袋は何処で売ってるんだ？」

「ありがとう桐生さん。売ってる場所は公園前にある神室町ヒルズ

よ」

「神室町ヒルズだな。じゃあ、行くでしょう」

「はい」

桐生の言葉に南理事長は嬉しそうに頷いた。桐生も心から喜ぶ南理事長を見て、協力して良かったと思っていた。無論、南理事長が喜んでい理由は他にあるが、桐生がそれに気付いている様子はない。

人の心には敏感な桐生だが、やはり女心には鈍感だった。

神室ヒルズへ向かう道中、桐生は不意に疑問が浮び、それを南理事長に尋ねた。

「そういうや、気になってたんだが…その福袋は俺でも買う事は出来るのか?」

「え?ええ。それは大丈夫ですよ。でも、どうしてそんな事を?」

「いや、今回の目的は女性物の服だろう。大抵、そういう商品は女性限定が多いからな。そうだとしたら俺が買う事は出来なくなると思ってたな」

「その点に付いても抜かりはないわ。その場合、一つは桐生さんにキープしてもらって、私が会計を済ませるといふ作戦があるから」

「ほう。その手があったか。所で南さんは福袋を毎年買っているのか?」

桐生の疑問に南理事長はあっさりと答えてみせた。他にも気になった事があるが、後々解るとそれを振り払い、別の話題を切り出した。

「うーん。それは福袋の内容と気分に寄るけど、流石に毎年は買わないわ。まあ、宝くじなら毎年買ってるわね。いつも少額の当選ばかりで終わるけど」

「フツ…。少額でも当たるだけいいじゃないか。それに大金が当選し

た奴を知ってるが、そいつは毎度の事、面倒を巻き起こしてたからな」
「あら？桐生さんの身近にそんな人がいたのね。確かに大金を持つと人って、変わるものね」

「そうだな。金はあるに越した事はないが、多いと面倒も増えるからな」

「ええ。それは同感だわ。分不相応な大金があつても扱いに困るものね」

「全くだ。ん？それにしても大分、人が増えて来たな。もしかして福袋目当ての人か？」

「神室ヒルズはこの先ですし、きっとそうでしょう」

「少し急いだ方がいいな。この人の多さだと、行列が出来てるだろうし。福袋も数に限りがある」

「そうしましょう。買えなかつたら、娘がっかりするもの」

想定外の人の多さに桐生達は足を早める。案の定、神室ヒルズ前に行列が出来ており、二人もその列に加わった。

「すごい行列ね。開店したら、いの一番に行かないと買えないかもしれないわね」

「いや。それは大丈夫だろう。店員が何やら券を配っているし、順番で買えるようにしているんだろう」

「あら。本当だわ。列も店に近いし、買えそうだけど…目的の福袋が買えるのか心配ね」

「まあ、そういう事はあるかもしれない。だが、ことりだって子供じゃないんだ。訳を説明すれば解ってくれる筈だ。それにあの子の性格だと、どんな物で喜んでくれると思うぜ」

「フフ そうね。福袋を買うのに夢中で大事な事を忘れていたわ」

桐生の言葉で南理事長の焦りは自然と消えていた。恐らく、一人でいたら不安と焦りに飲まれていたに違いない。

（思えば…いつも桐生さんには世話になつてるのよね。以前も酔い潰れた時も面倒を掛けてしまったし、今回もそう。何かお礼をしないと…そうだわ）

南理事長がお礼の方法を考えていると、思い付いた案を口にする。

「そうだ。この後、宜しかったら食事でもどうかしら？」

「食事か。気持ちは有難いが、別に気を使わなくてもいい。これくらいのも事で奢って貰うのも悪いからな」

「あら。女性から食事に誘うのは勇気がいるのよ。それを断るなんて…私と食事は嫌なのね」

「うっ、別に嫌な訳じゃない。ただ、女性と食事する事は余り無いからな。少し緊張してたんだ」

「ふふふ。そんなに緊張しなくてもいいじゃない。意外とシャイな所もあるのね」

「揶揄わないでくれ。そう言われると余計に意識しちまうからな」
「ごめんなさい。あ、店が開くようね」

神室ヒルズのドア前で店員がイヤホン片手に「お客様、大変長らくお待ちせ致しました。ただいまより、神室ヒルズを開店します。福袋お求めのお客様は列に並んで引き換え券をお受け取り下さい。また、引き換え券は数に限りがございます。引き換え券が無くなり次第、福袋販売は終了となります」とお知らせの最中、別の店員が引き換え券を南理事長と桐生に手渡して来た。

「これが引き換え券か。意外と小さいんだな」
「ええ。店内は混雑するから失くさない様にしないとね」

そうしてる間に神室ヒルズが開店し、二人が中へ入ろうとしたその時…一人の男が慌てた様子でやってくる。男は桐生を見るや、駆け寄ると助けを求めてきた。

「す、すいません。そこの方。いきなりですが、私と一緒に来て下さい」

「おい。一体、何だ？来てくれと言うが、訳も知らずに行くわけないだろう」

「私は今井と申します。事情は道中で説明します。今はもう時間が無いんです。早く行かないと手遅れになってしまいます」

「ねえ。桐生さん。私はいいから行って上げて。この人、本当に困ってるようだから」

「ありがとうございます。そ、そうだ。出来れば、貴女も一緒に来て下さい」

「わ、私も?…分かったわ」

「申し訳ございません。じゃあ、急いで私について来てください」

些か強引な男に桐生は眉を顰めるが、南理事長が行くと言った手前。無視する事も出来ず、南理事長と一緒に行く事にした。

ホテル街へと続く道を走りながら、桐生は男へ事情の説明を求めると男は口を開いた。

「そ、そうでした。実は先程、ある夫婦が温泉の屋上で喧嘩をしていました。話を聞いてると金絡みの喧嘩らしく、夫の方が酷く興奮した様子で手にしたナイフで今にも相手を刺しそうなんですよ」

「ちよつと待て。何故、警察に通報しないんだ。普通はそつちが先じゃないのか?」

「それも考えました。だけど、そうしてる間に事が起きてしまったらと悩んでいた時、貴方を見まして。以前にも仲裁してもらったから今回も手を貸してくれるんじゃないかと思ひまして」

「以前にも仲裁だと?…。おい、まさかそいつは」

「ええ。そいつの名前は秋元と言ひまして、俺の友人です。あ、あそこです」

男が指を差す銭湯の屋上には果物ナイフを手に女に迫る男、秋元の姿があった。自分の予想が的中し、桐生は思わず溜息を吐く。

「はあ。新年早々、面倒な奴だな。仕方ねえ。乗り掛かった船だ。俺が仲裁してこよう」

「何か事情は解らないけど、私が呼ばれたのはどうしてかしら?」

「そうでした。言い忘れてましたが、数年前に秋元はあの女性…美月さんと夫婦なんです。金銭で揉めたみたいで」

「成程。それとお前が友人なのは分かった。しかし、詳しい事情を知ってるのはどうしてだ?」

桐生は今井と名乗る男が詳しい事情を知っている。その事に疑惑

を感じた。相手は夫婦で来ると言った手前。この男が偶然に通り掛かったとは思えなかった。

「実は今回、私の妻と秋元夫婦と一緒に湯治に来たんです。最初は楽しくやっていただけ、相手方の奥さんの一言が原因でこんな事に…」
「相手の一言？その方は何と仰ったの？」

「美月さんが身に付けてたアクセサリーの話をあいつが聞いて、いきなり怒り出したんです。宥めても聞く」

「それじゃあ、私を呼んだのは両方の言い分を聞く為ね」

「どういう事だ？」

「以前は知らないけれど。今回、仲裁するのは夫婦だもの。男と女で言い分が違うわ。だから、両方の話を聞けるように桐生さんと私を呼んだという訳よ」

いまいち事情が飲みこめていない桐生だったが、南理事長の説明によつて漸く理解した。

「そうか。確かに…俺だけでは夫の言い分しか聞けないな。分かった。それなら一緒に来て、力を貸してくれ」

「ええ。急ぎましょう」

「どうか頼みます。俺も此処からあいつを説得してみます」

男の言葉に桐生と南理事長は頷くと屋上への階段を登って行った。何度か階段を登り、屋上へ通じるドアの前に二人が来た時、「僕はどう…君を信じられないよっ!! こうなったら二人で死のう」と秋元の言葉を聞いた桐生はドアが壊れんばかりの勢いで開けると大声で相手の行動を止めに入った。

「待てっ!! 早まるんじゃないやねえ。そんな事をしたって、何も解決しねえぞ」

「な、何だよ。これは僕たちの問題なんだ。関係ない奴が首を突っ込むなよ」

「そうは行かねえ。放っておけば、お前はその女を刺しかねないからな」

「ええ。こうなったのも何か事情があるのでしょうか？良かったら、話

してちょうだい」

突然現れた二人に困惑した秋元だったが、南理事長の優しい言葉で落ち着きを取り戻したのだろう。ポツポツと秋元は訳を話し出した。「実は…僕だって、こんな事をしたくない。だって、美月ちゃんは僕を騙していたんだから」

「違うのよ。あれは…秋元くんの誤解なのよ」

「何が誤解だ。じゃあ、今美月ちゃんが指に嵌めてる指輪は何だい？以前、ブランドショップで売ってた物と同じだ。確か60万の奴だ。それは僕が二人のマイホームを建てる為に貯めた金で買った物じゃないのか？」

「違うわ。これは私の友人から貰ったのよ。私達の結婚祝いにつて」

「そんな事、信じられるもんか」

「いいえ。彼女は本当の事を言ってると思うわ。結婚祝いに高価な物を貰えるのは彼女に人望があるからよ」

「そ、そうか。確かに美月ちゃんには人望があるからな。い、いや。まだ聞きたい事はあるんだ。この間、家のポストに入っていた。ブランドジュエルの会報誌が入ってたんだ。調べたら、年会費が300万もして僕は吃驚したよ。その金はどうやって工面したんだ？」

「それは…以前、私が働いていた店の同僚から貰ったのよ。辞める前に見せてもらうつもりだったの。結婚を機に辞めてから連絡が無かったけど、この前に道でばったり会ってその話をしたら、読み終わった会報誌を送ってくれる事になったのよ。私を信じて」

更なる疑いをぶつける秋元に美月は必死に弁明をした。その姿を見て、桐生が秋元を諭すべく言葉をかける。

「彼女は本当の事を言ってると思うぜ。それに時間が経っても約束を守る友達がいるのは素晴らしいと思うがな」

「ええ。私も同感よ。女の友情つて、時間が経つと薄れるもの。貴方が疑えば、その友情は壊してしまう事になるわ。貴方はそれを望むの？」

「そんな訳ないだろう。彼女の友情を壊すなんて真似。僕がする訳が無い」

南理事長の言葉に秋元は感情を露わにして、反論する。興奮させてしまったかと思つた南理事長だったが、すぐに落ち着きを取り戻し、ホツと胸を撫で下ろした。宥めに来て、興奮させてしまつては意味が無いからだ。そして秋元は更なる追及をすべく、口を開く。

「もう満足しただろう。いい加減に刃物を捨てて、下に降りるとしよう」

「いいや。まだだ。最後に聞きたい事があるんだ。最近、やたらと株に関する通知が届くんぞ。見たら、1000万の投資を募る奴ばかり。丁度、僕達の貯金と同じ額だ。まさかと思うけど、貯金を株投資に使うつもりじゃないだろうな？どうなんだい？美月ちゃん」

「確かに貯金を投資しようと思つていたわ。だけど、それは貴方を思つてなのよ。家を買う為に必死に稼いでる貴方を見て、私も何か出来る事がしようと考えていたの」

「そ、そうだったんだね。そうとも知らずに僕は…ごめんよ。でも、それだったら相談して欲しかったな。頼りないかもしれないけど…僕は君の夫なんだから」

「秋元くん…。ううん。いいの、元はと言えば相談しなかつた私も悪いの」

「謝らないでくれ。それより、外にいてすっかり冷えてしまったよ。

折角だし、混浴で温まろうか」

「フッフ　そうね。お酒を飲みながらゆっくりとね」

秋元の気持ちを聞いて、美月もぼつが悪そうに言葉を返した。どうやら、今回の騒動はお互いの勘違いとすれ違いによるものだった。それが分かつた途端、二人は仲直りして傍観する桐生達を余所に中へと戻つていった。

「結局、俺達が出る幕は無しか。無駄な時間を過ごしたな」

「あら、いいじゃない。大事にならずに済んだ事ですもの」

「まあ…それはそうだがな。だが、おかげで福袋を買えなくなつてしまったな」

「仕方無いわ。変わりに何か買つていくしかないわね」

「そうだな。今回、俺が騒動を招いたものだから。最後まで付き合うぜ」

「ありがとう。それじゃあ、お言葉に甘えようかしらね」

「買いそびれた福袋の変わりを買うべく、桐生達もその場を後にした。下に降りると二人に気付いた今井が駆け寄って声を掛けて来た。

「桐生さん 今回はありがとうございます。毎度の事ながら、秋元が迷惑お掛けして申し訳ありません」

「ん？お前は何で俺の名を知ってるんだ？俺は名乗った覚えは無いが…」

「ああ。その事ですか。実は俺も桐生さんに一度会ってますからね。神室町で秋元が起こした騒動の時に」

「あの時か。そういや、以前も必死にあいつを止めようとしていたな」

「はい。何だかんだ言って、あいつとは腐れ縁ですからね。見捨てる訳にいきませんから」

「そうだったの。ところでその秋元さんは今何処に？」

「あいつはもう帰りましたよ。騒ぎを起こして此処に残る訳にいきませんからね」

「そうか。まあ、あんな騒動を起こした後じゃ、湯治なんてする気分じゃないからな」

「…：そういうえば、二人は買い物の真つ最中でしたね。そのお詫びですが、こんな物で良ければ…」

「そう言って、今井が手渡して来たのはル・マルシェの引き換え券だった。思わぬ送り物に二人も驚きを隠せずにはいた。

「これって、ブランド品の引き換え券よね。本当に貰って良いのかしら…」

「はい。是非、受け取って下さい。元々、妻もブランドとかに興味が無いし、使い道に困ってましたから」

「そう。そういう事なら有難く頂きますわ」

「いえ。此方こそ、お二人のデートを邪魔した訳ですよ」

「おいおい。俺達はそんな関係じゃないぜ。今日も買い物に來ただけ

だからな」

「……そうですね」

「ま、まあ。それでも一緒に買い物を楽しめるのは良いと思いますよ」
引き攣った表情でフォローを入れる今井に対し、その妻が南理事長に近寄るとそつと耳打ちをした。

（ふふ。意外と朴念仁みたいだけど、落ち込まないで。この手の人は脈が無いと、買い物とかに付き合う事もないから。それに付き合ってくれるだけ、貴女に少なからず心を開いてる証拠よ）

（え、ええ。わ、私はそんなつもりじゃ……でも、そうなのかしら？）

（そうよ。だから焦らず頑張つて）

（ありがとう）

今井の妻の言葉に南理事長は心が軽くなった。しかし、南理事長は桐生に対する気持ちをまだ認められないでいるのも事実であった。

「それでは私達はこれで。今日は本当にありがとうございました」

「二人きりの買い物を楽しんでね」

今井夫婦はそれぞれに言葉を掛けると去っていった。その姿を見送った後、桐生も傍にいる南理事長へ声を掛ける。

「俺達もそろそろ行くとしよう。遅くなると大変だから」

「あら、私はのんびりでもいいわよ。折角、二人きりの……買い物ですもの」

「フツ そうだな。それも偶にはいいか」

頬を赤らめて話す南理事長に勿論、桐生は気付いていない。その事に少しがっかりするが、今はそれでいい。ゆつくりと行けばいい。そう自身に言い聞かせると桐生の隣に並んで歩き出す。

そして二人は街中へと消えていった。

幻の河童

ある日の昼 神室町ヒルズの自室で真島は一人でテレビを視ていた。その番組は世界に存在する不思議生物特集。こういった物に普段は欠片も興味を示さない真島だが、特に面白い番組も無く仕方無くそれを観る事にした。

『衝撃スクープ。沼を泳ぐ伝説の生物。河童は実在した』

「…あほらし。どうせ、テレビのヤラセやろ。実在するんやったら今頃、世間は大騒ぎしとるわ」

画面に沼を泳ぐ河童の映像が流され、それを見た真島は鼻で笑い飛ばした。映像には確かに河童らしきものが映っているが、水中にいる影のみで信憑性は無い。これで実在するとは言われても信じる事は出来ないだろう。

「ちっ。暇つぶしになると思っておったが、つまらんう。こないなもの見てもしやーないし、街に繰り出すとするか」

そうと決めたら即行動。真島は出かける為に身支度を開始した。無論、自分がいると思わせる工作としてテレビを点けておくのは忘れない。真島が部屋を出る直後、「河童はいるよ。沼に限らず、何処にでもね」とゲストの言葉が木霊する。

「ふん。そうやったら、俺の前にも出てこいや。そうしたら信じたる」

テレビに捻くれた一言を残して真島は部屋を出て行った。

街を繰り出した後、真島は当ても無く彷徨っていた。普段から通っているバツテイングセンターは三ヶ日の為か開いておらず、馴染

みの店も昼間は閉まっている。折角、街へ来てみれば特に暇を潰す場所が見つからない。真冬という事もあり、体も冷えている。当てもなく歩くよりも何処かで暖を取ろう。

「ん？あれは…」

そう決めて真島は近くにある店に行こうとした時、目の前の道から歩いてくる希の姿を見つけた。何やら難しい顔をしていたが、希も真島に気付くとパツと、顔を明かるくして此方に駆け寄ってきた。

(どないしたんや？悩んでいたと思つたら、急に笑顔になりおつた。何やら嫌な予感するのう。逃げようにも向こうも気付いている以上、それは出来へんな。変な事に巻き込まれなきやええけど…)

「こんにちは 真島さん。良い所に来てくれて助かったわ」

「おう。良い所に来たつて、一体何があつたんや？何や、難しい顔しとつたな」

「うん。今日、噂のものを探しに来たんや。でも、一向に手掛かりが掴めなくて困つておつたんよ」

「噂やと？どんな噂や？」

「聞いたら驚くよ。それは神室町に存在するという幻の河童や」

「……！何やて!？」

希の言葉に真島は驚きを隠せずに行った。まさか此処で河童という名前を聞くと思つておらず、自分の聞き違いかもしれない。深呼吸して冷静さを取り戻し、真島は意を決して希に尋ねた。

「なあ。一つ聞きたいんやけど、それは雨の日に着る物か？」

「それは合羽やろ。ウチが言ってるのは妖怪の河童の方や」

「……。本気で言うてる？」

「勿論や」

こうなる予感はしていたが、希の返答に真島はガツクリと肩を落とした。見る限り、希は自分を揶揄ってる訳では無さそうだ。昔、桐生から自分は読めない人と言われたが、その自分は希の考えてる事が読めずにいた。

(そうか。桐生ちゃんも今の俺と同じ気分やったんやな。確かに考えが読めん人と話すのは疲れるわ。せやけど、どうするか。この流れやと、以前の幽霊探しの時みたいに協力してくれと言われるやろな。はあ、どないしよう…)

「それで本題に入るんやけど、ウチと一緒に探すの手伝って欲しいんや。街の裏側にも真島さんは詳しくそうやし」

「ちよい待ちい。いくら何でも河童の場所なんて知らんわ。第一、存在するかは別として河童がこの街にいる訳ないやろ」

「ウチも最初はそう思つとんたんよ。でも調べてみたら、目撃した人が何人もいるんよ」

「……。嘘やろ?」

「本当や」

「はあ、分かった。こうまで言い切られたら俺の負けや。河童探しに協力したる」

一切の迷いなく、河童はいると断言した希に真島はついに折れた。どの道、彼女は一人でも探しに行くだろう。物騒な街に一人で行動させて何か起きたら、後味が悪い。それなら自分と行動する方がいい。そう考えての決断だった。

「そんで。河童を探すんはええけど、目撃者つてのは誰なんや? さつきも言うたが、この街で河童が居そうな場所については俺も検討つかへんからのう」

「言うなら大勢やね。何せ目撃談が多いからウチも断定は出来へん。ただ、目撃場所は七福通りの公園らしいんよ」

「七福通りの公園か。その公園には下水に繋がるマンホールがあつた筈や」

「下水道……。それや。きっと、河童は下水に潜んでいるかも」

「……。まあ、関係あるか知らんが、行ってみない事には始まんぞ」
「そうやね。じゃあ、その公園に行ってみよう」

何はともあれ、行動しなくては真実が解らない。二人は河童が目撃

された児童公園に向かう事にした。その道中、以前から気になっていた事があつた真島はこの際に尋ねてみた。

「前もそうやったが、希ちゃんはこの手の話が好きなんか？幽霊や妖怪とか」

「うん。ウチはこういうの好きなんよ。まあ、変わってるのは自分でも理解はしとるよ」

「まあ、普通はそうやろな。せやけど、同じ趣味の人とかも大学にはいるやろ？」

「それが無いんよ。オカルト系のサークルは在ったようやけど、やっぱり人が来ないみたい」

「ほうか。ほな、希ちゃんの友達はどうなんや？こう言うたらあれやが、類は友を呼ぶで同じ趣味の子はおらへんのか？」

「残念ながないんよ。エリチは暗い場所が苦手だし、にこっちはこの手の事に興味が無いからね。だから一人で来たんよ。でも、偶然にも真島さんに会えて良かったわ」

「そういう事やったんか。余計なお世話やと思うが、程々にせんと希ちゃんも周りから孤立してまうで」

「そうやね。ウチもそれは分かってるんよ。だけど、こういうのって何処かロマンを感じへん？」

「……。ロマンか。確かに信じてる人は感じるやろな」

「ウチは初めから存在しないと思つてたら、見つからへんと思うんよ」
「まあ、そうやな」

自分が信じなければ、見つからない。希の言葉には説得力もあるが、真島はやはり信じられないでいた。幽霊はともかく、流石に河童が存在するとは思えない。これが他の人なら突っ撥ねる所だが、希にそれをやる訳にいかない。

真島も内心では信じてないが、それでも付き合うのには以前、幽霊と遭遇した事が理由であつた。希と一緒にならもしかしてが起きるのでは？そんな思いがあるのも事実である。

「ほれ。あそこが児童公園や。せやけど、どうするんや？希ちゃんか聞いた話やと、河童は下水道におるといふ事やろ。まさか、下水に降りるんか？」

「…それは決まってるやん。一応、この為に合羽を持ってきてあるんですよ。はい。これが真島さんの分や」

「ほ、ほう。えらい準備がええの。つて、ちよい待ちや。何で俺の分まであるんや」

予想を超えた行動に真島は顔を引き攣らせた。まさか、希は自分の行動を逐一把握していたのでは？と在りえない想像が脳内を過るが頭を振って打ち消し、希に説明を求めた。

「そ、それは…最後の手段として真島さんを頼るつもりやったんよ。ただ、どういう顔して会いに行けばいいのか悩んでいたら、真島さんの方から来てくれた形になったんや」

「……。妙な偶然も在ったもんやな。じゃあ、まずは俺が先に降りるから希ちゃんは後か来や」

「はい。でも、降りる最中は上を見たらあかんよ」

「勘弁してや。ほな、行くで」

希が持つて来た合羽を羽織ると真島はマンホールの梯子を下りていく。中は下水だけあつて、漂う悪臭が鼻を刺激する。本当にこんな所に河童なんぞいるのか？心中でぼやきながら真島は薄暗い通路を見回すと奥の方で動く影に気付いた。最初は此処を根城しているホームレスかと思つたが、それにしても挙動がおかしい。

もしかすると相手は不審者かもしれない。そうだとしたら、厄介だと真島はその相手に近づいていく。傍から見れば真島の格好も不審者そのものという事を棚に上げている。

「おう。さつきからそこで何しとるんや？」

「……!？」

「あ、待てや」

「どうしたん？」

「今、そこに怪しい奴がおった。俺はそいつを追う。希ちゃんは危ないから此処で待つき」

「う、うん。真島さんも気を付けて」

希に一言残し、真島は突然逃げ出した不審者の追跡を開始する。運が良い事に下水は一本道だった為、相手の姿をすぐに見つける事が出来た。相手の速さはそれ程でもないが、ぬるぬると滑る地面によって、思うように走れない。それ故、相手との距離は中々縮まらずにいた。

（ちっ、ぬるぬる滑る所為で上手く走る事が出来ん。それは相手も同じやが、このままじゃ埒があかん。何か投げる物があればええんやが…お、此処から一本道や、よっしゃ、一気に行くでえ）

相手を捕まえるにはチャンスだと、真島は全速力で相手に迫る。相手もそれに気付いたのか、走る速度を速めて距離を離す。しかし、その行為が不幸な事に真島の闘争心へ火を点ける形となってしまう。歪んだ笑みを浮かべ、舌なめずりをする様はまさに狂犬そのものである。

「ほうく　ええ度胸しとるやんか。絶対捕まえたるでえ」

狂気を孕んだその呟きは相手の耳に届いたのだろうか。些か、相手の気配に焦りが見て取れた。そして更なる不運が相手を襲った。湿った地面で足を滑らせて、勢いよく倒れ込んでしまった。

その隙を真島が見逃す筈はなく、倒れた相手に飛び掛かり抑え込んだ。

「捕まえたで。さあ、観念しておどれの面を拝ませてもらおうで…つて、お前は西田やないか。こんな所で何してんねん。しかも河童の変装までして」

「あ、いや。これは事情がありました」

「何や？言うてみい」

「は、はい。実はですね…」

眉を顰めて真島は説明を求めた。最初こそ、大人しく聞いていたものの。次第に表情が険しくなっていた。全て聞き終えた後、真島は目を向くと西田を殴り飛ばした。

「このドアホっ！いつ俺が河童に会いたいと言うたんや」

「うう。だ、だつて部屋を出る時、俺の前に出てこいと言つてたから。それに…」

「…それに何やねん？」

「街で親父を尾行してた時、偶然にも親父と希ちゃんの話が聞こえてきて。それで希ちゃんの願いも叶えられたらと下水道に先回りしてたんです」

「……。全く、詰まん事を考えるより、仕事に精出しや」

「お、親父!? い、いつものお仕置きはしないんですか？」

「何や？やって欲しいんか？」

「い、いえ。それは遠慮します」

「フン。いつまでそうしとるんや。はよ来んかい」

「は、はい」

数分後、真島達は希が待っている場所へ戻ってきた。真島の姿を見て、希はホツとした表情を浮かべた後、不思議な格好の見知らぬ人に首を傾げると真島へ問い掛けた。

「あ、やっと戻って来たんやね。それとその人は誰なん？」

「…ああ。このアホか。おう、自己紹介せいや」

「ど、どうも。初めまして。私は西田と言います」

「はあ。ウチは東條希です。ところで西田さんは何で河童の格好をしとるん？」

「このアホ。俺と希ちゃんを喜ばせたくてこの格好してたそうや」

「そうやったんやね」

「すみません。余計な事をしてしまつて」

「ううん。別にええんよ。まあ、ウチが変な事を言い出したのが始まりやしね」

「すまんのう。俺からも謝つておくわ。とりあえず、此処から出るで」
真島の言葉に二人は頷く。忘れていたが、此処は下水。正直、臭いと湿気が漂う場所に長居はしたくなかつた。地上に出た後、三人は深く息を吸う。都会の空気も下水の空気に比べたら、新鮮で綺麗だと心から感じた。

「それじゃ、自分はこれで失礼します」

「おう。今回はお仕置きは免除したるが、変わりに泊まり込みで仕事してもらうで。遊んでた分、働けや」

「はい。しっかりと働きます」

力強く返事を返し、西田は去つていった。それを見送りながら、希は口を開くと小さい声で真島に話しかけてきた。

「結局、河童はいない様やね。分かつてはいたけどね」

「いや、それは解らへんで」

「え？」

「今回、蓋を開けばあいつの変装やつた。せやけど、まだいないと決まつた訳やない。それに信じなければ、見つからない。そやろ？」

「…真島さん」

「昔、俺もツチノコを探していた時期があつたんや。今は忘れてたけど、あの頃はツチノコは存在すると信じて疑わへんかつた。そんな俺を周りの連中はいつも指差して馬鹿にしてたわ」

「そんな事が…真島さんは辛くなかつたん？」

「そりや辛かつたで。正直な所、ツチノコ探しを辞めたんはそれが理由やし。せやけど、今になって思うんや。あの時、周りを無視して続けていたら結果は変わっていたかもしれん」

「ウチには無理や。流石にそんな事をされたら逃げたくなる」

先程より、か細い声で希は真島にそう返した。真島ですら、周りの

人間がする仕打ちに逃げたのだ。本来、自分は明るく振るまつているが実際は強くはない。自分が真島と同じ境遇に晒されたら、立ち直る事は出来ないだろう。しかし、真島の次の言葉が希の暗い気持ちを吹き飛ばす。

「大丈夫や。もし100人が希ちゃんを馬鹿にして笑ったとしても俺が100人分、励まして言い返したる。きつと、絵里ちゃん達だつて同じ事をする筈やで」

「……うん。そうやね。エリチ達ならそうするやろね」

「フツ どうやら元気が出た様やな。さて、何や腹が減ったのう。折角やし、パーツと焼き肉でも食いに行こか」

「おお、それはいいアイデアやん。丁度、ウチもお腹が空いottaんよ」

「ほうか。じゃあ、善は急げや。早よ行くでえ」

「お〜」

楽しそうな雰囲気二人は公園を去って行く。この時、微かに開いたマンホールから二人を見つめる眼差しに気付いていなかった。去り際、蓋を閉めるその手には水かきがあり、緑に染まっていた事も。

事実は小説より奇なり。幻と称される生き物は意外と近くにいるのかもしれない。

サブストーリー025 友達が出来た日

毎日、大勢の人が行き交う神室町。

この日、そんな街中にある少女の姿が在った。少女は景観が変わった街を見て、微笑みと共にポツリと眩きを洩らす。

「……やっと着いたよ。此処に来るのも久しぶりだなあ。さて、おじさんとの待ち合わせ場所に行かなきゃ」

そう、桐生にとって何よりも大事な家族。澤村遥である。沖縄にいる彼女が何故、此処にいるのか。それは以前に電話で交わした桐生の話から始まる。

数日前、神室町。雲一つ無い青空の下、桐生は街を散策していた。連日続いた寒波も過ぎ、暖かくなった事もあり、久しぶりに吸う外の空気を存分に味わう。

「今日はいい天気だな。こんな日は外を歩かねえと損だな。さて、街に来たはいいが…何処へ行ったもんかな。ん？あいつは…」

何処に行こうか思案していた矢先、見知った姿を見つけた。自分からは後ろ姿しか見えないが、背格好と髪型からその人物が誰なのかはすぐに解った。

(あれは花陽か。一体、こんな所で何をしてるんだ？まあ、それは聞いてみないと解らないな。よし、声を掛けてみよう)

そう決めた桐生は花陽へ歩み寄り、肩に手を掛けて話しかける。

「おい。こんな所で何をしてるんだ？」

「ひ、ひいいいっ!? な、何ですか？ 私は何も悪い事はしてませんよお
くって、あれ？ き、桐生さん」

「ああ 俺だ。何もそう驚く事も無いだろう」

「ご、ごめんなさい。でも、いきなり声を掛けたら誰だって驚きますよ」

「そうか？ まあ、物騒な奴もいる街だ。確かにそうなのかもしれないねえな。それはそうと、花陽は此処で何をしてるんだ？」

話題を変えるべく、桐生は何気無い素振りでも花陽に尋ねた。すると先程と違い、鋭い目で桐生に迫ると力強く語り始めた。

「あ、今日は街にアイドルグッズを買いに来たんです。何でもデビュー当時から人気があったアイドルのT―SETを打ち負かした伝説のアイドル。澤村遥のグッズです」

「何？ 遥だと……。お前、あいつを知っているのか？」

「勿論です。私はアイドルの情報を欠かさずにチェックしていますからね。そのおかげで神室町に澤村遥のグッズがある事を知ったんです」

「そうだったのか。しかし、花陽はアイドルの事になると人が変わるなあ」

「うっ。す、すみません。あ、そういうえば桐生さん……さっき、あいつを知ってるのか？ と言っていましたね。もしかして遥さんの事、桐生さんも知ってるんですか？」

桐生の指摘を誤魔化す為か、花陽は話題を変える事にした。内心、桐生の言葉が気になっていたのだ。その花陽の問いに桐生は懐かしそうな顔を浮かべ、静かに口を開く。

「ああ。よく知ってるぜ。何せ、俺はあいつの親代わりだからな。今は沖繩でアサガオの仕事をしている。うん？ どうしたんだ？ そんな

に震えて…何処か具合でも悪いの「桐生さん!!」な、何だ?」

「いきなり大声出してごめんさい。でも、本当なんですか?今の話…」

「ああ。本当だ。だが、それがどうしたんだ?」

何故、興奮しているのか。その理由が解らない桐生は尋ねた。すると、花陽はまたもや同じ形相で桐生に詰め寄って来た。それには流石の桐生も気圧され、思わず冷や汗を掻く。

「どうしたんだ?ではありません。遙さんと言えば、先程も言った通り。伝説のアイドルと呼ばれた存在です。そんな遙さんと身近な存在が今、此処にいる。興奮するのは無理も無いですよ」

「そ、そうか。まさか、遙がそこまで凄いと知らなかったな。……そうだ、それだったら、お前も遙と会ってみたらどうだ?」

「え?ほ、ほほほ本当ですか?嘘じゃないですよね?そうだとしたら私は怒りますよ」

「…嘘じゃねえ。ただ、あいつも忙しいからな。すぐには無理だがな」

さらに息を荒くする花陽を宥めて、桐生は遙に会わせると約束をした。花陽も桐生が出鱈目や嘘を吐く様な人ではない。それを花陽も知っている為、素直に引き下がる事にした。

「確かに桐生さんが嘘を吐いた事って、無いですものね。分かりました。今日はこのまま帰るとします」

「そうか。うん?そういえば、お前は遙のグッズを買いに来たんじゃなかったのか?」

「初めはそのつもりでしたけどね。本物の遙さんに会えると約束しましたし、今回は我慢しようと思います」

「フツ そうか。そんなに楽しみにされたら、俺もしっかり約束を守らないとな。それにあいつも同年代の友達が出来たらうからな」

「私が遙さんと友達に……。遙さんと会えるだけでなく、友達になれるかもしれない。今日は最高の日です。あ、そろそろ私は行きますね。約束を忘れないで下さいよ」

「分かっている。お前も気を付けて帰れよ」

そう言葉をかける桐生へ、花陽は頷くとその場を去っていった。そして…この日の夜、桐生は沖縄にいる遥へ電話を掛けた。何度かコールしたのち、「はい。養護施設アサガオです」と電話に出たのは遥本人であった。

「もしもし 俺だ。少し話したい事があるんだが…今、大丈夫か？」

「あ、おじさん？うん。今は平気だけど、どうかしたの？」

「実はだな…」

桐生は電話越しにいる遥へ今起きた事を告げた。その内容に遥自身も驚いていたが、珍しく頼み事をしてきた桐生に応えるべく、その頼みを聞き入れる事にした。

「事情は分かったよ。じゃあ、私はいつ頃にそっちへ行けばいいかな？」

「…：…そうだな。お前の事情もあるし、二週間後くらいでどうだ？その間に俺も花陽に話を通す事も出来るしな」

「うん。二週間後だね。私はそれで大丈夫だよ」

「そうか。お前が神室町に着いたら教えてくれ。そうしたら、待ち合わせ場所で会おう」

「分かった。それで待ち合わせ場所は何処なの？」

「…：…そうだな。中道通りでどうだ？あそこなら人が多いから物騒な奴もいないし安全だ」

「中道通りだね。分かった。じゃあ、二週間後に会おうね」

「ああ。いきなり無理を言っただけ悪いな。またな」

「うん。またね」

この言葉を最後に遥との電話は切れた。久しぶりに遥と話して懐かしさに浸っていた桐生だが、ハッと我に返ると再び電話を取り出して掛け始めた。相手は勿論、花陽である。恐らくこの吉報を今か今か

と待っているだろう。

案の定、報告を受けた花陽は大興奮。報告よりも花陽を落ち着かせるのに時間を有したのはまた別の話…。

そして二週間後、桐生は待ち合わせ場所の中道通りで遥を待っていた。そんな桐生の横には緊張の為か、そわそわとしてる花陽の姿もあった。流石に見かねて桐生は声をかけた。

「少し落ち着け。そんな様子じゃ、遥と話す事も出来ないだろう」

「そ、そそそそう言われても…今日、あの憧れの遥さんと会おうと考えると緊張しちゃって」

「おいおい。例えそうだとしても緊張し過ぎだ」

「だって、遥さんは一年で武道館に出るような伝説のアイドルなんですよ」

「お前…いや、お前達だって一年でA—RISEを超えたアイドルじゃないか」

「私達と遥さんでは比べものにならないじゃないですか」

「本当にそう思うのか？」

後ろ向きな花陽の言葉を聞いた桐生は思わず顔を顰めた。

憧れの対象と会う。この事が本人にとっては大事なのだろう。しかし、蓋を開けば花陽も遥も普通の少女と変わらない。だからこそ、アイドルでは無く普通の少女として会って欲しい。桐生の中にはそんな気持ちがあったのだ。

「確かにこれから会う遥は花陽。お前にとって特別なのかもしれない。だが、そんな遥もそこら辺にいる少女と変わらないんだ。勿論、花陽もな。それに遥がアイドルを辞める時、あいつは相当悩んで決めた事も…。だから、アイドルとか抜きにして接してやってほしい」

「……桐生さん。そうですね。思えば、人と会うのにこれでは失礼

ですものね」

「フツ どうやら落ち着いたようだな。ん？」

会話が終わると同時に件の人物。澤村遥の姿を目に捉えた。遥も桐生に気付き、笑みを浮かべると小走りでやってきた。桐生も同様に笑みを浮かべると手を振って、迎えた。

「おじさん 久しぶりだね。元気にしてた？」

「ああ。お前の方こそな。アサガオの皆も元気にしてるか？」

「うん。皆も元気にしてるよ。それでおじさんが言ってた子は何処？」

「それならすぐ傍にいるぜ」

遥の言葉に桐生は隣にいる花陽へ視線を向けた。いきなり二人の視線を向けられ、萎縮する花陽だったが、桐生に言われた言葉を思い出して花陽は遥へ手を伸ばし自己紹介を始めた。

「初めまして。小泉花陽と言います。今日、遥さんと会うのを楽しみにしてました」

「花陽さんだね。私は澤村遥。実を言うと私も会うのを楽しみにしてたんだ。それと私は遥でいいよ。年もそう変わらない事だし」

「あ、それなら私も花陽でいいです」

「うん 分かった。それなら花陽ちゃんと呼ぶね」

「はい、なら私は遥ちゃんと呼びますね」

お互いの自己紹介を終えた後、遥は花陽の手を握り握手をする。先程の花陽の様子からどうなる事かと心配していた桐生だったが、それは杞憂だったようだ。そんな時、遥は桐生にある提案を口にする。「ねえ、おじさん。私はこれから花陽と一緒に神室ヒルズに行くけど、良いかな？」

「二人でか？まあ、それは構わねえが、変な奴には気を付けろよ」

「分かってるよ。それじゃあ、行ってくるね」

「行ってきます」

「ああ。俺は近くの喫茶店にいる。戻る時は教えてくれ」

「はーん」

息ピッタリで元気な返事を返すと、二人はゆっくりと歩いていく姿を見送った後、桐生は馴染みの喫茶店へと入っていった。

神室ヒルズへの道中、遙は花陽に話しかける。桐生からの説明では花陽は自分がアイドルだと知っている。だが、思えば自分がアイドルをやっていたのは地方での事だ。如何な都会といえど、地方で放送されてる番組を見る筈がない。それ故に遙はアイドルの自分を何処で知ったのか気になっていたのだ。

「ねえ 花陽ちゃんは何処で私の事を知ったの？やっぱ、あの武道館での中継かな？」

「遙ちゃんの事はその前から知ってましたよ。私、アイドルが好きで雑誌やネットで情報を集めていたんです」

「そうだったんだ。じゃあ、大阪のテレビに出た事も知ってる？」

「勿論です。T—S E Tとのダンス対決を観た時、思わず熱くなりましたよ。そうそう。つい先日T—S E Tの二人に会いましたよ。テレビで見たよりも可愛くてテンションが上がりましたよ。おまけにサインも貰って、握手もしてもらいました」

「へー 花陽ちゃん、あの二人に会ったんだ。どう？二人は元気そうだった？」

「はい。私が見た時は元気そうでしたよ。でも、実際は疲れてるのかも…」

「うん。アイドルって、あちこち移動とかするし、色んな人達と会ったりするから」

「それでいて、いつも笑顔で皆を楽しませる。それがすごいです」

遙の言葉にアイドルは凄いと頷く花陽に、ふと疑問が浮んだ遙は花陽にそれを尋ねた。

「あれ？でも、花陽ちゃんもアイドルだっておじさんから聞いたよ。確か、何かの大会でも優勝したともね」

「ああ。確かにアイドルはやってましたけど、それはスクールアイドルですよ。遥ちゃんやT—S—E—Tとは比べたら駄目です」

「そんな事ないよ。花陽ちゃんも十分に可愛いよ。だから、自分を否定しちや駄目だよ」

「遥ちゃん。うん、そうだね。そういえば、少し前にも同じ事を桐生さんに言われました」

「フフ そうだったんだ。あ、神室ヒルズが見えてきた。近くで見るとやっぱり大きいね」

「うん。私も此処に来るのは初めてだよ。一体、何があるのか楽しみです」

「私も。じゃあ、行こうか」

「はい」

高く聳える神室ヒルズを見上げていた二人は、ゆっくりと神室町ヒルズへ入っていく。予想通り中は広く、大勢の人で賑わっていた。その人混みをくぐり抜け、案内板の所に向うとどのフロアに行くかの相談を始めた。

「わゝ 色んなフロアがあつて、どこに行くか迷うなゝ」

「それなら女性服があるエリアに行ってみたいな。遥ちゃんの選ぶ服とか知りたいし」

「なら決まりだね。早速行こう」

花陽の提案で女性服エリアに行く事を決めた後、二人は並んでエスカレーターに乗り込んだ。程なく着いた三階では、若者向けは勿論の事。あらゆる年代の衣服が陳列していた。その品揃えの多さは二人を驚かせたのは言うまでもない。あちこちに視線をやる花陽を余所に遥は内心、真島の経営手腕に関心していた。

「す、すごいね。品が多いと分かつてはいたけど、ここまでなんて……」
「うん。それに真島のおじさんがオーナーだし、あの人は妥協はしな

いから」

「そ、そう。だけど、色んな服があるのは嬉しいな。自分に合う服つて、見つけにくいから」

「あ、それは分かるなあ。そういうのつて、探すの大変だもんね」

「うん。でも、此処なら自分の欲しい服がありそうだよね」

「よし。何か気合入ってきた。さ、今日は思う存分に買い物を楽しもう」

「おお〜」

遥の言葉で気合が入ったのだろう。花陽も手を上げてそれに答えた。その後、二人はお互いに似合う服を選びあった。その様子は誰が見ても親友だと思いう程である。

それから数十分後、吟味を重ねて漸く二人は購入する服を決めた。花陽が遥に選んだ服はアサガオが刺繍された白のシャツ。最初こそ、気に入ってくれるか不安だった。だけど、飾り気がある服よりもシンプルな服を好む遥は嬉しそうに花陽が選んでくれた服を受けとった。

そして遥が花陽の為に選んだ服。それは花陽とは対照にヒマワリが刺繍された服であった。遥がこの服を選んだ理由、それは遥にとつて花陽は大事な友達。そんな想いが心の中に生まれていた。だからこそ、自分と桐生に縁があるヒマワリを選んだ。これからも仲良くしたい。そういう気持ちも混めて…

その後、二人は会計を済ませて神室町ヒルズから出ると外は薄暗くなっており、どうやら服選びに夢中で時間が過ぎていたようだ。その事に二人が慌てて中道通りへ戻ろうとした時、「漸く出てきたか。待ちくたびれたぞ」と疲れた声で呟きながら桐生が近寄ってきた。

「あ、おじさん。遅くなつてごめんなさい」

「私の方こそ、ごめんなさい。買い物に夢中で時間を確認してませんでした」

「……そうだったのか。いや、別に怒ってる訳じゃない。それで買い物は楽しかったか？」

「うん。とても楽しかったよ。花陽ちゃんに素敵な服を選んで貰ったんだ」

「遥ちゃんが喜んでくれて良かった。私も選んで貰った服、大事にするね」

「フツ 存分に羽を伸ばせたようだな。遥、お前は今日、俺の所に泊まっけて行くんだろ？」

「……その事だけど、私は暫く此処にいるつもりだよ。ま、一週間くらいかな」

「そうか。まあ、俺もゆつくりと話がしたいからな。丁度良かった」

「あ、遥ちゃん。暫くいるならまた会いましょうよ」

「うん、勿論だよ。私も花陽ちゃんとまた遊びたいもん」

「話は纏ったな。さて、俺は花陽をタクシー乗り場まで送るとしよう」

「ありがとうございます。宜しく願います」

こうして三人は並んで歩き出す。目的地に辿り着くまでの間、仲良く会話をする二人を桐生は暖かい眼差しで見つめていた。今思えば花陽と遥を会わせて良かったと、桐生は心から感じていた。きつと、花陽は遥の良い友達となるだろう。その事は桐生にとっても一番嬉しい事実だった。

これを切欠に遥に友達が出来ます様に。桐生は空を見上げて、静かに願っていた。

サブストーリー026 健康の一步は食事から

深夜、事務所に一人残り真島は書類処理に勤しんでいた。そして最後の一枚を片づけると溜まった疲れを押し出す様に深く息を吐き出した。

「はあく やつと終わったわ。さて、街に繰り出すとするかいのう。何処かで一杯やるとしよか」

そう呟いて、時計を見て真島は啞然とした。無理も無い、体感では20時くらいと思っていたが、既に時刻は23時を回っていた。当然ながらこの時間ではバーは勿論、居酒屋も閉店しているだろう。折角の楽しみが無くなった事を悟り、真島は何とも言えない徒労感に襲われた。

「ちつ、これだから書類仕事は嫌なんや。しゃーない。今日は大人しく帰るとするか。明日、出勤したら俺に仕事を押し付けて帰った西田は：折檻決定や」

溜まった鬱憤を晴らす相手も決めた後、真島は帰路に着く為、事務所を出ていった。その前に何処かの店で何か弁当を買って行こうと歩き出した時、懐に入れていた携帯が震えた。こんな時に一体、誰や？と顔を顰めるが液晶の名前を見て、表情を変えた。

「ん？海未ちゃんからのメールや。あの真面目な子がこないな時間に送ってくるとは珍しいの、何か遭ったんやろか？」

もしかしたら緊急の用かもしれない。そう思った真島はボタンを押して中身を確認すると、そこに書かれている内容に驚き、目を瞠る。メールには『夜分遅くに申し訳ありません。実は真島さんに相談したい事があるんです。もし、宜しければ明日の夕方、穂乃果の家で会えませんか？ お返事待ってます』とあった。

明日の夕方とは早急だが、それ程までに切羽詰まっているのだろう。当然、真島の答えは決まっております、『分った。ほな、明日の夕方にそっちへ行く。大船に乗った気でおりや』と返信した。その後、海未からお礼と急な要件への謝罪を書いたメールが送られてきた。

(ふっ、相変わらず律儀な子や。しかし、ホンマに何が遭ったんやろか？ま、明日になれば分かるか。弁当を買って帰るとするか)

当初の予定通り、弁当を購入した真島は帰路についた。

翌日の夕方 真島は海未との約束通り、穂乃果の家へ向かっていった。いつも変わらぬ道を通り、穂むらへ到着すると引き戸を開けて中へ入ると店番をしていた穂乃果の母の挨拶が飛んできた。

「いらつしやい。あら？真島さんお久しぶり。此処暫く来なかったけど、忙しかったのかしら？」

「おう。そうなんや。俺も美味しい和菓子が食いたくて来たんや。まあ、今日はある用事の為でもあるんやけどな」

「用事？ ああ…あの事かしらね。海未ちゃんなら穂乃果の部屋にいるわ。それと包む和菓子は何にします？」

「ほな、いつもの10個頼む。それと少しお邪魔するけど、ええやろか？そない長居はせえへんから」

「ええ。構いませんよ」

「…おおきに。せやけど、奥さんもそうやが旦那さんは気にしてるんやないんか？」

「え？何がです？」

「そら、俺が穂乃果ちゃんの部屋へ入る事や。いくら顔見知りちゆうても年頃の娘にいい歳した男が入る事に抵抗を覚えとるんちゃうか？ 聞いた話やと、桐生ちゃんも偶に来ては部屋に入る事もある様やないか」

惚けた表情で聞き返す穂乃果の母へ真島は些か、呆れた様子で言葉を返す。そう、いくら顔見知りでも真島と穂乃果達とは年齢の差がある上に性別の差もある。それ以前に自分は極道。本来ならこんな風に会話する事がないのである。

暫く沈黙が続き、張り詰めた空気の中。穂乃果の母は優しく笑みを浮かべた後、静かに口を開き言葉を紡ぐ。

「…普通なら娘の部屋に入る事に対して抵抗は覚えるでしょうね。だけど、私は心配をしてないわ。理由になってないけど、真島さんや桐生さんだから。それが答えかしらね」

「ホンマに理由になってへん。せやけど、信用されてるのは分かった。それは嬉しい事やな」

「今日はらしくないですね。まあ、他に理由があるとしたら…邪な事を考える人はこんな事を面と向かって言わない。それもあるわね」

「成程のう。何や、そう言われると少し照れ臭いわ。まあ、本音を聞けて良かったわ。ほな、お邪魔させてもらうで」

「どうぞ。お菓子は出来たてを包んでおくわね」

「ありがとう。楽しみにしてるで」

お礼の言葉を言って、真島は穂むらの二階へ上がった。廊下に出ると奥から数人の話声が聞こえ、その中には海未とことりの声も混ざっている。どうやら、いつもの三人が揃っている様だ。部屋の前に立つと戸を軽くノックして声をかけた。万が一、着替えをしていたら洒落にならない。その可能性も考慮しての行動だった。

「おう。真島やけど。ちと部屋にお邪魔してええか？」

「あ、真島さん。どうぞ〜」

「お邪魔するで〜」

許可を得て、部屋に入るとお菓子を食べて談笑していた穂乃果達の姿があった。海未とことりは真島を見ると挨拶をしてきた。

「こんばんは。いや、こんにちは？まあ、いいよね。お久しぶり真島さん」

「夕方の五時を回ってますからこんばんはでは？」

「どっちでもええやろ。して、昨夜のメールの件やが…。一体、何があつたんや？海未ちゃん」

「そうですね。実は昨夜……」

真島に問いに海未は俯き、ゆっくりとした口調で事情を話し出した。その様子から相当、深刻な話なのかと真島も真剣な表情で話に耳を傾けた。しかし、話の内容は真島の想像とは違っていた。最初こそ、真面目に聞いていた真島だったが、次第に呆れた表情へと変わる。そして海未が全て話を終えると真島は溜息混じりに口を開く。

「何や、深刻そうやったからどんな事かと思っっていたら…：食事の好みの事やったんか。はあく心配してた俺がアホみたいやないか」

「な、何を言ってるんですか。日本人と言えば主食は米。それを食べずに毎朝、パンを食べるなんてありえません。それに昨今の日本人による日本離れは深刻でしょう。食事だけでなく、あらゆる文化も消えていってると聞きますよ」

「ま、まあ。確かにテレビでもそう言っておったな。けど、寂しい事やが、それも時代の流れとちゃうんか？残すべきものは自然と残るやろ」

「そういう事ではありません。問題は穂乃果がパンばかりを食べてる事です。何も食べるなど言いませんが、聞いた話ではここ毎日が三食ともパンだとか。それでは栄養が偏ってしまいます」

海未は真島の顔を見つめ、真剣な様子で言葉を連ねる。その勢いに圧倒されたのもあるが、海未の言葉に真島は押し黙る。ちらつと穂乃果を見ると彼女は冷や汗を浮かべばつの悪そうな顔をしていた。どうやら海未の話は真実らしい。その事に深く溜息を吐くと真島は海未に問い掛ける。

「そら、体に悪いな。流石に毎日三食ともパンはアカン。てか、穂乃果ちゃんはそんな食生活を送って飽きたりせえへんのか？」

「ううん。全然、飽きないよ。だって、私が好きで食べてるんだもん」
「せやけど、流石に同じものは駄目やと思うで。食生活の偏りは甘く見てる怖いのう」

「そうですよ。明日から穂乃果のメニューは私が考えます。良いですね」

「え？ち、ちよつと待って。何で海未ちゃんが穂乃果の食べる物を決

めるのさ！」

「何を言ってるんですか。当然でしょう？こうでもしないと貴女はパンばかり食べるに決まっています。これを機に規則正しい食生活を覚えるべきです」

海未の宣言に慌てて弁解をする穂乃果だが、海未はそれを一蹴して正論で握り潰した。言ってる事も尤も故、穂乃果も反論する事は出来なかった。暗い表情で沈黙する穂乃果を見ながら今度は真島が海未に尋ねた。

「食事メニュー考えると言うても、一体どんな風にするんや？まさか、海未ちゃんが穂乃果ちゃん家に作りに行く訳やないよな？」

「可能ならそうしたいのですが…流石に難しいですね。そうだ！折角ですし、真島さんの意見も聞かせて下さい。真島さんは普段、どんな食生活をしてるんですか？」

海未の発言に真島は藪蛇を突いたと後悔した。独り身である真島の食生活は大方、出前やコンビニ弁当等であった。もし素直に言えば海未の性格上、自分にも飛び火する事は明白だ。未だ、応えない真島に海未は訝しげな表情を浮かべる。これ以上の沈黙は不味いと真島は口を開くと咄嗟に思い付いた言い訳をする。

「お、俺は……。一応、自炊しとるで。ま、あまり料理は得意では無いけどのう」

「そうでしたか。意外ですね。てっきり、真島さんの事だから出前とかコンビニ弁当で済ませてると思ってました。見かけで判断は出来ませんね」

「そ、そうやろ。よく言われるわ」

「ええ。ですから真島さんにも穂乃果のメニュー作成に協力してもらいます。自炊しているなら健康にいいメニューも知っていますでしょうからね」

何とか誤魔化せたとほっと胸を撫で下ろす真島だが、次に出た海未

の言葉でそれは粉々に砕かれた。まさか、自分が穂乃果のメニュー作りに手を貸す羽目になってしまった。当然、真島が出来る料理は精々、おにぎりや味噌汁が良い所だろう。極道生活では自炊する機会が無い為、仕方無い事である。

「……！　ち、ちよい待ちや。自炊と言うても凝ったもんは作れへんで。出来て味噌汁やおにぎりが良い所や」

「…味噌汁とおにぎりですか。素晴らしいじゃないですか。シンプルでいて十分、健康的なメニューですよ」

「そ、そうか。まあ、人間健康が第一やからな。当然や」

「その通りです。そうだ　折角ですから今日の夜は真島さんが作ってみてはどうですか？」

「あつ　それは穂乃果も賛成く　話を聞いてたら食べたくなつたよ。ねえ、真島さん。今日の夕飯におにぎりや味噌汁を作つてよ」

「うん。私も食べたいな　真島さん　お願い」

三人から向けられる期待の眼差しに自分の逃げ場は無い事を理解した。これ以上、言い訳を重ねても却って自分を追いつめるだけである。それなら覚悟を決めて作ってしまうおう。真島はそう決意して穂乃果達の言葉に頷いた。それを見て、喜ぶ三人だったが真島は内心複雑だった。作るのがおにぎりや味噌汁とはいえ、味の良し悪しは誤魔化せない。

案の定、出来上がったおにぎりや味噌汁を食した三人は表情を曇らせた。暫しの沈黙が続いた後、海未が頬を引き攣らせて真島に問い掛ける。

「…これ、どうやって作りました？」

「ど、どうやって…そら、普通にやったに決まつとるやろ」

「私の言い方が悪かったですね。その…味付けはどの様にやりましたか？」

「そら、おにぎりには塩を鷲掴みにして握つて。味噌汁には味噌を一袋や。味が濃厚でええやろ」

「良くありません。これでは塩分過多になって、却って体に悪いじゃないですか。塩は一撮み、味噌はおたま半分以下で十分なんです。真島さん… 本当に自炊をしているんですか？この事は基本中の基本ですよ」

海末の言葉に真島は何も言えなかった。考えてみれば、海末の言う通りである。何も喋らず黙る真島の様子に海末が抱いていた疑問は確信へと変わった。

「…真島さん。正直に言ってください。自炊をしてるといのは嘘ですね」

「ああ。そうや。いつもはコンビニ弁当や」

もう隠すだけ無駄と真島は素直に嘘を認めた。まあ、料理の基本を知らない時点で隠しようが無いのもあった。そんな真島に海末は溜息を一つ吐くとゆつくりとした口調で話し始めた。

「そうでしたか。これで管理する人がまた増えましたね。今日から二人が食べるメニューは私が決めます。真島さんは忙しい故の事でしょうから仕方無いかもしれませんが、一食は実行して下さい」

「おう。ありがとうな」

「それと穂乃果」

「は、はい。何でしょう？」

「貴女には毎日三食。実行してもらいます」

「ええ!? そんなの酷いよ海末ちゃん。穂乃果からパンを奪わないでよ」

「酷くありません。これも貴女の為を思つての事です」

「ほ、穂乃果ちゃん。ことりも応援するから頑張ろうよ」

ワイワイと騒ぐ三人を真島は静かに見つめていた。時折、振り回される事もあるが何だかんだでこの子達からパワーを貰っている。それは今後も変わる事は無いだろう。願わくば、この賑やかで暖かい日常が続いて欲しい。真島は心からそう思っていた。

尤もこの先、海末の厳しい指導によって穂乃果同様に質素な食生活

を送る羽目になったのはまた別の話

サブストーリー027 スイーツ巡りも楽じゃない

梅雨に入り、蒸し暑い日が続く中 桐生は遙と神室町へ買い物に来ていた。その日の朝。季節も夏に近づき、衣替えも兼ねて夏服を買いに行こうと遙から誘われたからであった。

特に予定も無く桐生自身。そろそろ夏服を用立てようと思っており、遙の誘いを受ける事にした。

また遙に黙っていたが、連日続く暑い中を外へ出かける事を避けていたのも理由の一つであった。

「ふう 最近、滅法暑くなったなあ。まだ梅雨に入ったばかりなのにこうも暑いんじゃない、溜まったものじゃないな」

「うん、そうだね。思えば年々と夏は暑く、冬は寒い感じだもんね」

「ああ。言われてみるとそうだな。まあ、さっさと買い物を買わせて喫茶店でも行こう。冷たい物が飲みたくなったしな」

「そうだね。私も喉が渴いたよ」

その後、桐生と遙は用を手早く済ませると馴染みの喫茶店へ足を運んだ。中に入ると冷房が効いており、冷たい空気が二人に纏わりつく熱気を下げていく。店員の案内の下、手頃な席へ腰を下ろすと備えてあるメニューを手に取るとゆっくりと開いた。

「俺は…そうだな。アイスコーヒーにするか。遙は何にするんだ？」

「うーん 私は…これにしよう。イチゴミルクフロート」

「決まったな。なら注文するぞ。おい 店員さん」

「お待たせしましたお客様。ご注文をどうぞ」

桐生の呼ぶ声を聞いてやってきた店員に注文を告げた。それから数分が経った頃、先程の店員が注文の品を手にして戻ってきて、「お客様 お待たせ致しました。イチゴミルクフロートとアイスコーヒーでございます。ごゆっくりどうぞ」とお決まりの言葉を残して去っていった。

「ほう それがイチゴミルクフロートか。初めて見るが、中々美味そ

うだな」

「フフ、そうでしょ。良かったら、一口食べる？」

「いいのか？なら、一口貰うぜ」

「はい どうぞ」

遙はそう答えるとフロートのコップを桐生の方へ差し出した。それをコーヒー用のスプーンで掬うと口へ運んだ瞬間、桐生は目を見開くとポツリと「美味しい」と呟いた。

一見、イチゴミルクにバニラアイスと甘そうな品だが、見た目に戻して甘さ控えめで後味もすっきりとしていた。

「かなり甘いと思っていたが、それでも無いんだな。それに後味も良い」

「そうなんだ。人気メニューと書いてあったから決めただけ、失敗しなくて良かったあ」

「…なあ 遙。お前、もしかして俺で実験したのか？」

遙の小さな呟きは当然、桐生の耳に届いていた。眉を寄せて問う桐生に遙は舌をチラツと出して素直に謝った。そんな遙に毒気を抜かれたのか。桐生は溜息を一つ吐いた。無論、桐生は怒っている訳では無く、遙もそれは解っていた。

「でも、本当に美味しいよね。言ってた様に甘さも控えめだし、甘い物が苦手なおじさんでもいけると思うよ」

「…まあ、これなら確かに。だが、男の俺がこれを頼むのは些か度胸がいるぜ」

「それは男の人は周りの目が気になって、頼み辛いつて事？」

「ああ。確かに気にする必要は無いんだが、やっぱり気になるってのはあるかもな」

「そっか。だけど、そんな理由で美味しい物を楽しめないのは勿体無いよ。そうだ、これを機に遠慮なく頼める様に特訓してみたら？」

「甘味を頼む特訓か。それは少し面白そうだが、一体何をやるんだ？」

突発な遙の提案に迷う桐生だが、遙の言う様に美味しい物が楽しめないのは勿体無い。それは桐生も感じていた。だけど、周りを気にせず甘味を注文する特訓が気になった桐生が遙に質問した。

「そこなんだよね。うーん… そうだ！ こういうのはどうかな？ おじさん ちよつと耳を貸して」

「…何だ？別に普通に言えばいいだろう」

「いいから早く」

遥の勢いに負けた桐生は仕方なく、遥に顔を寄せた。そして遥の提案を聞いた桐生の顔が驚きに染まる。それを見て、遥は満面の笑みを浮かべていた。恐らく反対しても無駄だろう。桐生は遥の提案を実行するしか無かった。

それから店を出た二人はある人の到着を待っていた。時間にして一時間程が経過した頃、その人物がやって来た。

「ふく やつと、着いたよ。待ち合わせ場所は此処だよね？」

「おーい 花陽ちゃん。こっちだよ。此処、此処」

「え？あ、いた。良かったあ」

自分達を探して辺りを見回していた花陽に遥は手を振って声をかけた。それに気付いた花陽もホツとした様子で桐生達に駆け寄っていく。

「いきなり呼び出してごめんね。おじさんの特訓にどうしても花陽ちゃんの力が必要だったんだ」

「ううん。私も予定も無くて暇だったから気にしないでよ。今日は桐生さんの特訓をするらしいけど…それで私は何をすればいいの？」

「やる事は簡単だよ。ただ、私と花陽ちゃんの二人でおじさんとスイーツを食べるだけだよ」

「そうなんだ。でも、どうしてスイーツを食べるのが特訓なの？」

「実はね…」

未だに事情が解っていない花陽に遥は今回の特訓に至る訳の説明を始めた。話を聞いた花陽も理由を知り快く協力する事にした。内心、タダでスイーツを食べれるという打算もあったが桐生の為に一肌脱ごうという気持ちは本当である。

「それで遙ちゃん。まずはどの店から行くの？」

「うーん　まずは適当にケーキバイキングに行ってみようかな。あそこなら男の人がいても違和感無いと思うよ」

「ケーキバイキングか…。確かに俺が甘い物を食べていても目立つ事は無いな。よし行ってみるとするか」

木を隠すなら森の中。男女構わず、訪れる場所であれば気軽に甘い物を楽しめるだろう。そう結論を出した一行は早速、ケーキバイキングへ足を運ぶ事にした。しかし、甘い物に無縁の桐生や長らく街を離れていた遙達は店の場所を知らなかったが、幸いにも花陽が知っていた為に事無きを得た。

移動する事、五分後。三人は目的の店へとやって来た。子供の頃も含め、ケーキを沢山食べる機会が無かった桐生にとって、ケーキバイキングはある種の夢であった。何を食べようか？何があるのか？そんな風に期待に胸を躍らせていると視界に入った光景に桐生は愕然とした。

「……何処を見ても女だけで男はいないな。既にチラチラと俺を見る人もいて、入るのがきついぞ」

「う、うーん　まさか今日に限って、こんなに人がいるとは予想外だったよ」

「ちよつと、運が悪かったね」

その日は月に一度の女性限定食べ放題の日であり、店にはそれを目当てにした女性客が殺到していたのだ。女性限定の場に男性がいる事を不審に思ったのか、次第に女性陣から桐生に向けられる視線が強くなっていた。当然ながら遙と花陽も桐生に注がれている視線に気付いてはいる。これ以上、この場にいたらトラブルになる。そう判断した三人は急いでその場を立ち去る事にした。

「それにしても凄い数だったな。あの店は…いつもああなのか？」

「うん。私も友達と行った事があるけど、普段はあそこまで人は多くなかったよ。それに男の人もよく来てるみたいだし」

「そうなのか。今回は偶々、運が悪ったようだな。さて、次は何処へ行くんだ？」

「うん。ケーキバイキングが駄目なら、クレープ屋なんてどうかな？あれならおじさんも頼みやすいと思う」

「…クレープか。確かにケーキよりも頼みやすいだろうな。よし、次はクレープ屋へ行ってみるか。だが、クレープ屋は何処にあるんだ？」

「クレープ屋なら私知ってるよ。確か、昭和通りの道路沿いだったかな？そこに新しくオープンしたってこの間、学校で聞いたよ」

「昭和通りの道路沿いか。そこなら場所的に遠くないし、混む事も無いだろう。よし、次はそのクレープ屋に行ってみよう」

「フフ おじさんも漸く調子出てきたね。いきなりの提案だったから、実は面倒なんじゃないかと思ってたけど… 杞憂だったみたい」

「うん 私もそう思った。でも、意外と甘い物が好きなんですわね」

「…まあ、男でも甘い物が食べたいからなあ。だからこそ、男も堂々と甘い物が食べやすい時代が来たのは嬉しいな」

「そうですよね。やっぱり美味しい物は皆で楽しむのが一番です」

「おー」

桐生の言葉に二人は手を掲げて呼応した。実の所、桐生もクレープが楽しみなのか、ケーキバイキングへ向かう時よりも足取りは軽かった。花陽の案内もあり、目的の場所は割と早く到着した。一体、どんなクレープがあるのだろうか？期待で胸を躍らせる桐生の目に飛び込んで来たのは、本日休業と書かれた一枚の札であった。此処まで来て無駄足だったかと花陽と遙は溜息を吐いて桐生の姿を見て驚いた。

先程と違って、無表情でその札を見つめていた。花陽は初めて見る桐生の姿に言葉を失くしていたが、遙は慣れているのだろう。桐生の

腕を優しく叩いて声をかけた。

「ほら 次行こうよ。此処でこうしても仕方ないしさ」

「…そうだな。だが、次と言っても何処に行くんだ？もう思い付くスイーツ屋なんか無いぞ」

「うーん 確かに昔ならまだしも今の神室町には詳しく無いからなあ。そうだ 花陽ちゃん。何か別の店とか知らない？」

「え？んく 別の店となるとあとはアイスクリーム屋くらいしか、知らないよ。役に立てなくてごめんね」

「……！ そうだ それだよ。今の時期、アイスなら男の人も食べるからおじさんが行ってもおかしくない。寧ろ、自然に買って食べれる筈だよ」

「確かに暑い日にアイスを食べるのに性別は関係ないな。よし 善は急げだ。アイス屋に行くとするか」

花陽のおかげで気を持ち直した桐生は件のアイスクリーム屋へ向かう事にした。此処まで来たら、何が何でも甘い物を食べてやる。楽しみにしていたクレープが食べれなかった事で桐生の意地に火が点いたようだ。やる気が無かった桐生だが、最早スイーツを食べるまで止まる事は無いだろう。花陽は気付いていないが、遙は密かにその事に気付いて静かに息を吐くと同時に連れ回される覚悟を決めた。

「そうだ。肝心な事だが、そのアイス屋は何処にあるんだ？以前は天下一通りに在ったんだが…今は別の店になっていたぞ」

「あ、アイス屋の場所は…」

「場所は？」

「……ごめんなさい 私も知りません。神室町に何度か来てるけど、知らない場所も多くて」

「そうか。しかし、参ったな。俺も他の店は知らないからなあ」

「うーん 私も知らないし、こうなったら適当に探すしかないよね。そうだ 中道通りから見てみない？あそこは若者向けの店が多いし、

「軒くらいはある筈だよ」

「言われて見れば、あの辺りはその手の店が並んでるな。行ってみるとしよう」

話し合いの結果、三人は中道通りへ向かった。スイーツ店を探すのは次で最後になるだろう。時刻も16時を過ぎており、青空も今は夕焼け空へと変わっていた。この時間帯になると大抵の店は閉めてしまう。今の桐生には甘い物を頼む特訓の事よりも甘い物を食べる事が目的となっていて、そんな焦りから桐生達の足取りも自然と上がっていた。

それも幸いして中道通りへ来た三人は目的の店をすぐに発見した。他の店の様に混んでいる様子も無ければ、閉まっていない。街中を歩きまわった事もあり、三人の体は甘い物を心から欲していた。だが、悪い事は続くもので店に近寄った時、またもや三人の目に入ったあるものが歩みを止めた。そう、店は閉まってないし混んでもいなかった。しかし、三人が店に入る事が出来なかった理由 それは現在、改装中です。開店は明日からとなりますと書かれた札であった。

「……なあ。この街じゃ、生きるだけでなく、甘い物を食べるのにも大変なんだな」

「……。おじさん こういう日もあるよ。言い出しっぺの私が言うのも何だけど、今日は諦めようよ。外も暗くなってきたしね」

「そうですね。私も…そろそろ帰らないといけないし」

「そうだな。だが、最後に少しでも俺に付き合ってくれないか？あまり時間は取らせないから…頼む」

「私は良いけど、花陽ちゃんはどうするの？」

「うーん まあ、あと少しなら大丈夫ですよ」

「すまん。用が済んだら、安全な所まで送るぜ」

「分かりました。それで一体、何処へ行くんです？」

「ああ 行くのはすぐ其処のコンビニだ。まあ、何があるかは付いて

来れば分かるさ」

そう言つて桐生はコンビニへと歩き出す。桐生の言葉に不思議そうに首を傾げる花陽の肩を遥は笑みを浮かべて優しく叩いた。その行動にも首を傾げる花陽だったが、考えても答えは出ないと二人へ駆け寄つていった。

桐生の言葉通り、コンビニへは5分と掛からずに辿り着いた。何かを見ている桐生へ花陽は話しかけようとするが、口を開く前に店内へと入つていった。一体、中に何かがあるんだろう？花陽の心中にある疑問はすぐに解消された。

そう桐生が探していた物。それはアイスと同じく、夏季に大勢の人が食べるだろうかき氷であった。冷凍個には尤も親しみのある苺味や練乳以外に西瓜味や檸檬味まで置かれている。かき氷がこのように揃っているのは珍しいのか、花陽も遥も魅入る様にかき氷を見つめている。

「フツ どうやら、気に入つてくれた様だな。ついさつきまで忘れていたが、ふとこの事を思い出したんだ。今日一日、二人を振り回した挙句に何も食えなかったからな、俺からのお礼だ。好きな物を選んでいいぜ」

「すごいね。こんな種類のかき氷、私見た事無いよ。好きな物を選ぶかあゝ どれも美味しそうで迷つちゃうなあ」

「別に一つじゃなくてもいいぜ。それに此処には沢山買う人の為に、ドライアイスもあるからな。折角だ、穂乃果達のちよつとした土産にすれば良いさ」

「そうだね。アサガオの皆に送ろうかな。良いよね？おじさん」
「ああ 勿論だ。あいつらにも食わせてやりたいからな」

遥の申し出に桐生は快く受け入れる。元より、桐生もそのつもりだったので反対する理由が無い。それに今、自分が此処でのんびりとしているのは遥やアサガオの子供達のおかげなのだ。その事もあり、何かをしてやりたいという気持ちも強かった。

そうしている間に決めたのだろう。かき氷を手にした花陽が戻つ

て来て、桐生に差し出す。

「待たせてごめんなさい。私と皆の分はこの西瓜味にします。夏に食べる物を同時に味わうのも面白いですから」

「そうか。確かにそれも良いかもしれないな。それで遙はどうするんだ？」

「私はこの檸檬味にするよ。皆に送るのはメロン味にしようかな。向こうじゃ、高くて買えないから味だけでも楽しんで欲しいから」

「そうだな。じゃあ、会計にするぞ。選んだかき氷はかごに入れてくれ」

「はい」

二人からかき氷が入った買い物かごを受け取って、レジへ向かうと店員は既に郵送の準備を整えていた。恐らく、自分達の話が聞こえていたのだろう。丁寧な手付きでかき氷を郵送用の冷凍ボックスに入れていく。全て詰み終わった後、店員は二枚の用紙を差し出し、「こちらに送り主の宛先を記入して下さい」と告げた。

桐生と花陽は用紙にそれぞれの宛先を記入して、店員へと渡して手続きを終えると別のかき氷の精算を開始した。会計を済ませ、店をあとにした三人は近くの公園へ移動した。そこで二人にかき氷を手渡し三人は静かに食べ始める。夕日に照らされる中、三人は無言でかき氷を食べていた。仕事上がりのサラリーマン達が賑わう音の中でシャリシャリとかき氷を咀嚼する音は何とも不思議な雰囲気醸し出していった。

「そういえば、私。かき氷を食べるの、久しぶりです。子供の頃は食べていたけど、最近じゃあまり食べて無かったから懐かしい気分ですね」

「言われてみると私もそうかな。確かに子供の時よりは食べる機会が減った気がするよ」

「そうだなあ。昔は当たり前のように食っていたが、今はアイスが主流になっちまったからな。種類もアイスに比べたら少ないし、自然と

消えていくのは仕方ねえ。だが、偶に食うと良い物だろ？かき氷もスイーツとして優秀だしな」

大凡、食べ終わる頃、花陽がぽつりと呟く。その呟きに遙も自身の気持ちに呟いた。二人の言葉に桐生も口を開き、自分の想いを言葉にする。古い物は自然と消えていく。だけど、時にそれを振り変えるのも良いかもしれない。アイスやクレープに勝てなくてもかき氷も日本が誇る立派なスイーツである。その事に二人も納得して頷いた。全て食べ終わり、空となった容器をゴミ箱に捨てた後……花陽と遙は恥ずかしそうな表情である事を桐生に告げた。

「ねえ、桐生さん。今日は暑いし、もう一つ食べませんか？かき氷」

「私も賛成。ほら、甘いものは別腹だって言うしね」

「フツ　しょうがねえな。俺も食い足りねえし、もう一つ買いに行くか」

二人の言葉に桐生は笑みを浮かべて、首を縦に振る。桐生の言葉にパツと顔を明かるくさせる二人に桐生も嬉しさが自然と込み上げる。そうして三人は先程のコンビニへと再び向かっていった。

サブストーリー028 鍋の如く温かく

10月 神室町某所

残暑も過ぎて肌寒くなった頃。真島はこの日も一人で神室町を闊歩していた。

無論、サボっている訳でなく、季節の変わり目に変化する流行商品やニーズを調べる為であった。しかし、どの店も似たような物ばかりで成果は芳しく無かった。その事でイラついていた真島は道端に落ちていた空き缶を思いつき蹴り飛ばした。

空き缶は放物線を描いて飛んで行き、目の前にいた少女の頭へ落ちていく。カーンという心地良い音が響いた後、少女は頭を抑えてに座り込む。その一部始終を見ていた真島はばつの悪い顔で少女の傍へ駆け寄った。

虫の居所が悪いとはいえ、流石に無関係の人へ危害を与えて立ち去る様な事は出来ない。真島は少女へ謝る為におずおずと声をかけた。

「すまんのう。…嬢ちゃん大丈夫か？怪我とかしてへんか？」

「いたたくちよつと、あんたあ!!いきなり何をするのよ。つて、あれ？真島さん」

「うん？何や、にこちゃんやないか。こんな路地で何しとるんや？この辺は物騒な場所やし、一人でうろつくくんはあかんで」

「え？そ、そうなの？忠告ありがとう。でも此処で真島さんに会えたのはツイてるわ。ねえ…少しばかり協力して欲しい事があるのだけれど…聞いてもらっていいかしら？」

自分が缶を当ててしまった相手は矢澤にこであった。以前、ゲームセンターで会ったきりだが、特徴的な髪型と背丈で真島は思い出す事が出来た。最初こそ、にこは勢いよく振り向いて怒りを露わにしたが、相手が真島と知ると驚いた表情を見せる。真島の姿を見てにこはある提案を思い付く。今日、神室町に来た目的の為に街に詳しい人物

の協力は必要になるだろう。そうとなれば善は急げとにこは早速、話を切り出した。

反応が無い事に何処か怪我をしたんじゃないかと真島は心配するが、コロツとした表情で話を持ちかけてくる姿に杞憂だとホツと胸を撫で下ろす。八つ当たりした負い目もあり、また何か面白そうな事が起きそうな予感がすると感じた真島はこの話を聞く事に決めた。

「協力？それは…別にええけど、一体何をして欲しいんや？」

「…実はね。この間、伝説と呼ばれたアイドルが神室町にいるらしいのよ。それを探すのを手伝って欲しいの」

「ほう 伝説のアイドルなあ。それは一体、誰なんや？まさか、T—S E Tの事か？以前、神室町に来たアイドルがそんなユニットやったのう」

「そうなの？だけど、探しているのは別のアイドルよ。あつ、そのアイドルの名前は澤村遥というの。デビューした頃、人気のユニットT—S E Tをアイドル対決で倒したという偉業をやったのけたのよ」

「成程のう。遥ちゃんも可愛い顔の割にやるのう。せやけど、T—S E Tとそないな因縁があったのは驚きや」

「そうよね。普通はまず敵う相手じゃないし…。ねえ、真島さん今、遥ちゃんって言った？」

話が盛り上がる中、真島の言葉に違和感を覚えたにこがゆつくりと真島に尋ねる。突然、雰囲気が変わったにこの様子に戸惑いながらも真島は質問に答えた。

「ああ 確かに言うたで。せやけど、それがどないしたんや？」

「どうしたもないわよ。今、可愛い顔と言ったわね。もしかして見た事あるの？」

「あるで。今は桐生ちゃんと一緒に住んどるからのう。確か、家も近いし寄っていかへんか？」

「勿論と言いたいけど、いきなり尋ねて大丈夫かしら？ 迷惑になる事はしたくないし…」

「大丈夫や。にこちゃん、遙ちゃんに会いたくて神室町に来たんやろ？ それに遙ちゃんと友達になれるかもしれないしな」

「伝説のアイドルと友達かあゝ そうなれたら最高ね。…………。決めた。真島さん 桐生さんの家に案内お願いします」

「ええで。ほな、いこか」

真島の言葉に暫し、悩んでいたにこだったが、桐生の家を尋ねる事を決めて真島へ案内を申し出た。その言葉を待っていた真島もこの願いを受け入れるのは当然であった。案内の道中、気になっていた事を真島はにこへ聞いてみる事にした。

「そういや、さつきから気になってたんやが…にこちゃんはどうしてアイドルを追いかけてるんや？ やっぱ、あれか？ 自分もアイドルだから他のアイドルが気になるつちゆう事か？」

「ううん そうじゃないわ。単に私が好きでやってるのよ。それに私はスクールアイドルだったから、アマチュアよ。プロのアイドルだった澤村遥には敵いつこないわよ」

真島の問いに、にこは些か表情を曇らせ答える様子に真島は何か引つ掛かる物を覚えた。それを確かめようと真島が言葉を発するよりも先に、今度は力強い表情でにこは言葉を続けた。

「でもね。だから、私は知りたいのよ。デビューした当時、勝ち目のない相手にどんな気持ちで挑んだのか。そして勝つためにどんな努力をして来たのかをね。私も以前、A—RISEという勝ち目の無い相手に挑んで勝った。だけど、それは私だけじゃなくて、sの皆がいたからよ。しかし、澤村遥は周りのサポートがあったとはいえ、戦う時は一人だった。故に私は知りたいの。どうして頂点に行けたのか」

「…………。成程のう。まあ、会いたい理由は分かった。せやけど、にこ

「ちゃんが望んでる答えは聞けるか解らへんで」

「そうかもしれない。でも、どんな答えでも聞かないと分からないわ。それはそうと…真島さんは何をしたの？缶を蹴飛ばすくらいだったし、何か嫌な事があったんでしょ？」

「ああ 実は…流行の品を調べていた最中やったんや。季節毎に客のニーズも変わるし、流行に合わせんと客足も遠のくからのう。せや、にこちゃんは今の時期、何が流行ってるのか知らへんか？こういう物があれば良いとか、あれがあったら良いとか。そういう物や」

「うーん あれば良い物かあ。特に無いけど…。 あつ、宅配サービスはどう？距離が遠くて行けない人や時間が無くて行けない人の為にさ」

「成程。確かにそういった事情の人もおるし、宅配サービスならニーズに応えられるな。にこちゃん、ありがとさん。聞いて正解やった。それでもう一つ聞きたいんやけど…ええか？」

「いいわよ。何かしら？」

にこの提案が切っ掛けで新しいサービスが生まれる事になったが、まだ流行の品を調べるといふ課題が残っている。それが解らなければ、いくら新しいサービスをやっても売り上げは上がる事はない。

故に質問の内容を変えて真島はにこへ聞く事にした。

「今、にこちゃん達の間でどんな物が流行ってるんや？新サービスを始める以上は流行の品を知つとかないとあかんからのう。にこちゃんは何か知らへんか？」

「うーん 流行の品かあ。私が聞いた話だと鍋が流行ってるみたいよ」

「鍋か… せやけど、それは寒い時期の今は普通じゃあらへんか？」
「それもあるけど、今は女性が一人でも出来る鍋があるのよ。カローリ控えめの豆乳鍋とかね。だからそれに必要な食材一式のセット

とかを格安で販売してみるのはどう？それを宅配サービスでやれば女性の利用客を増やせるんじゃない？鍋物はこの時期、かなり売れるだろうから」

「それはええ提案やな。確かに女性の客も増やせるのう。にこちゃん、ありがとうな」

「どういたしまして。あれ？あそこにいるの桐生さんじゃない？」

「おお ホンマや。おーい 桐生ちゃん」

にこが指さす方を見ると、確かに桐生の姿があつた。それを見た真島は手を振って呼び掛けると桐生は若干、顔を引き攣らせて真島へ視線をやった。無論、それに気付いた真島はムツとした顔で桐生へ詰め寄った。

「何やねん。その顔は…。俺が声を掛けたらあかんのか？」

「い、いや。そんな事はない。ただ、少し驚いただけだ。所で真島の兄さんは何故、にこと一緒にいるんだ？言っちゃ何だが…兄さんが大好きでも見境い無いのどうかと思うぜ」

「アホ。そんなんちゃうわ。てか、お前は俺を何やと思ってるんや。いくら何でもにこちゃんに手は出せへん。大人の女と分かっているが、見た目は小学生やしな」

「悪かったわね。見た目が小学生で」

途中から小声で話していた二人だが、にこの耳には全て聞こえていた。鋭い目つきで怒りを隠そうとしないにこに二人が取った行動は謝る事だった。この場合、怒る女性に言い訳は悪手である。二人は過去の経験からそれを知っていた。

「すまん。別に馬鹿にしとる訳やないで」

「俺の方こそ…すまない。そうだ 今日は鍋をやるんだが、二人も参加していかないか。こういうのは人が多い方が楽しいからな。それに二人も何か用が在ってきたんだろ？」

「ええ。でも、本当にいいの？」

「ああ 別に構わないぜ。にこが参加してくれたら、遙も話が弾むだろうしな」

「そうだよ。私にもこさんと話がしてみたいしね。一緒に鍋パーティーやろうよ」

「うん、私も遙さんと話したいし、参加させてもらいます」

「そうこなくっちゃ。それと気を使わなくてもいいよ。あと私は遙と呼んで、さん付けされるのは慣れてないから」

「ええ 分かったわ。それじゃあ、私の事もにこでいいわ」

桐生から鍋の誘いに参加するか迷っていたにこだが、唐突に現れた遙の誘いで参加する事を決めた。そんなにこは遙とすんなり打ち解けた事に内心驚いていた。澤村遙の存在はにこにとって憧れの人物である。μ'sとして活動していた頃、同じく憧れのA-R-I-S-Eと会った時は緊張しっぱなしだった。だけど、遙と話す時は素直に慣れた。恐らくこれが澤村遙の魅力なのだろう。にこは改めて彼女が伝説のアイドルと呼ばれた訳を思い知った。

「おお にこちゃんも遙ちゃんと打ち解けた様やな。俺も桐生ちゃんと話しながら鍋を突けるのは最高やな」

「……。そうなると追加の材料を用意しないとな。遙、悪いが買い出しに行つて来てくれないか。俺は料理の準備をしておくから」

「分かった。あ、それならにこちゃんも一緒に行かない？ 一人で行くより、二人の方が楽しいから」

「そうね。ご馳走になる以上、それくらいはやらないとだものね」

「やったあ。じゃあ、ちよつと行つてくるね」

桐生から買い出し用の代金を受け取ると二人は最寄りのスーパーへ向かった。歩き出して間もなく、遙が話しかけてきた。

「お客さんなの買い物に付き合わせてごめんね。強引だけど、二人

になる方法はこれしか思い付かなくて」

「気にしなくていいわ。さつきも言ったけど、ご馳走になるんだもん。それに二人つきりになれたのは私にも好都合だったから」

「…？それはどういう事？」

「ああ 別に変な意味はないわ。ただ、聞きたい事があったからよ」

にこの言葉で困惑の表情を浮かべる遥を見て、にこは慌てた様子で弁明をした。にこが遥に聞く事はある意味では遥の傷に触れる事でもある。それ故、遥の機嫌を損ねては元も子もない。だが、それはにこの杞憂だった。遥は柔らかな笑顔を見せると快くにこの言葉に頷いた。

「聞きたい事？ 私に答えられる事なら良いけど…何が聞きたいの？」

「…：うん。それはね… 遥ちゃんが伝説のアイドルと呼ばれるに至った秘訣、それが知りたいのよ。デビュー間もない当時に人気も実力もあつたユニット T—SET を超えるなんて普通は無理なもの」
「…：。質問の答えだけど、私は何もしてないよ。レッスンは厳しかったし、自分から飛び込んだ世界から逃げようと考えた事もあつた。でもね。それでも続ける事が出来たのはおじさんやアサガオの皆がいたからかな。ファンの応援も嬉しかったのもあるけど、やっぱり楽しむ事。それが何よりの秘訣だと私は思ってる」

「…：。そう それが遥ちゃんの答えなのね」

「ごめんね。にこちゃんの参考にならなくて。だけど、にこちゃんのアイドルに対する熱意は私も好きだよ。ステージで踊ってるにこちゃん、とても輝いていたよね」

「いいのよ。って、私がアイドルだった事を知ってたの？まだ言ってる無かつたわよね」

「実は先日、街で会った花陽ちゃんから教えてもらったの。花陽ちゃんが言うにはにこちゃんは自分と同じくアイドルに目が無いからきつと、神室町に私を探しに来る筈だって。もし会えたら質問責めにするかもとも言ってたよ」

「そ、そう。花陽がそんな事を…。私の行動を花陽が予想してたのが少し癪ね。まあ、聞きたい事を聞けたからいいわ」

「質問はもういいの？他に聞きたい事があるんじゃない？……例えば、私が引退した時の事とか」

「……。気にならないと言えば嘘になるわ。でも、言いたくない事を聞くつもりはないわよ。誰でも触れて欲しくない事はあるものね」

「ありがとう。本音を言うかね。あの時の事は話したくないんだ。あの日、私がやつてしまった事は応援してくれたファンや支えてくれた色んな人達を裏切りなのは分かってる。でも、私は…家族と言えるおじさんと一緒にいたい。その想いだけは譲る事は出来なかつたんだ。最低でしょ？」

「そんな事はないわ。寧ろ、あの場で自分の意思を言つた貴女の勇気を私は尊敬する。普通は出来る事じゃないもの。だから自分を責めては駄目よ。家族を大事にする気持ちは私も解るから」

自分の気持ち吐露し、暗い面持で自分を卑下する遙へにこは手を取ると優しく慰めた。その言葉に遙は涙を堪える事が出来なかつた。周りから何を言われても自分が悪い。そうやって、内心は己を責めていたのだろう。だが、にこの言葉はそんな遥の固い心を溶かしていく。

μ sに入る前、過去の出来事が原因で頑なに心を閉ざしていた。だけど、そんな自分を優しく包み込んで受け止めてくれた子がいた。今度は私がこの子を優しく包み込んで受け止めて上げたい。にこは遙をそつと抱きしめながらそんな事を考えていた。その想いはにこを通して伝わったのか。遙もにこを抱きしめて静かに嗚咽を上げる。

それから暫くして、泣き止んだ遙の表情は先程と違いすっきりとしていた。長い間、自身が抑え込んでいた心の淀み。それを消し去る事が出来たのは…全てを受け止めてくれたにこのおかげである。そう

いえば、自分が感情のままに泣いたのは久しぶりだった。普段、誰かに甘える事が無い遙だが、素直に慣れたのはにこの雰囲気は何処となく、自分の母親と同じだった事に気が付いた。無論、口には出さないが…：こは遙の考えている事が解ったのか。少しだけ、口を尖らせて言葉を発した。

「言つとくけど、間違つても私をお母さんと呼ぶのは無しよ」

「え？そ、それは当然だよ。ても、どうして…：そう思ったの？」

「昔、妹が小さい頃に私をお母さんと呼んだ事があつたのよ。その時、妹が見せた表情を貴女もしてたわ。ま、働く母の変わりをしてたから仕方ない事だけだね。けど、言われると複雑よ」

「そうだったんだ。まあ、私もアサガオの子から言われた経験があるし、それは分かる気がするなあ」

「…：お母さんと呼ぶのは禁止だけど、お姉さんと呼ぶのはいいわよ」

自分でも恥ずかしいのか、こは顔を赤くしながら遙に向かって呟いた。遙も最初はきよんとしていたが、パツと明るい笑顔を浮かべると嬉しそうにお姉ちゃんと呼ぶとこへ抱き付いた。突発な行動に驚くにこだった。素直に甘えてくる遙とそれを受け止める二人の姿は何処から見ても仲の良い姉妹そのものだった。無論、見る人は立場を逆と見るの言うまでもない。

その後、目的である鍋の材料を買って帰ると料理を失敗して慌てる桐生と真島を見て、遙の雷が落ちた。大人の男を正座させ、説教をする遙はまるで母親の様だとこが心の中で思っていると遙はにこへ振り向くと笑顔でこ呟いた。

「ねえ、にこちゃん。今、私をお母さんと思ったでしょ？」

「そ、そんな事ないわよ。遙の気のせいよ」

「言い訳は無用。そこに正座」

必死に誤魔化すにこだが、遥には通じる事は無く桐生と真島の隣で正座させられて説教される羽目となる。結局、失敗の原因である真島が責任を取る形となり、真島が行き付けの店へ訪れて鍋を堪能した。寒い夜、四人の心と体は春の様にポカポカと温まっていた。

そんな中で会計を済ませた真島の懐だけが寒くなったのは別の話。

サブストーリー029 大晦日に咲く思い出話

12月31日 大晦日 1年の終わりを迎えるこの日、桐生は神室町を当ても無くぶらついていた。

本来なら家にいてゆつくりと寛ぐつもりであったが、掃除をするからと外に追い出されたのだ。寒い中、外に出たくない事もあり、桐生も手伝うと申し出たものの。私だけで大丈夫とやんわりと断られてしまった。

こうなると遥は頑として引かない。仕方無いと桐生は素直に外へ出かける事にした。家を出る際、桐生は掃除中の遥に声をかける。

「そうだ。何か必要な物はあるか？ あるならついでに買ってくるぜ」

「うーん 特に無いよ。寒い日に外へ出して悪いけど、掃除は1時間くらいで終わるだろうし、何処かで時間を潰しておいてよ」

「ああ 分かった。俺こそ、手伝わなくて悪いな」

「ううん 気にしないでよ。掃除が終わったら電話するからそれまでゆつくりしてね」

「わかった。それじゃ行ってくるぜ」

そういう経緯で街に来た桐生。時間を潰そうと馴染である喫茶アルプスへ向かう。

しかし喫茶店は想像以上に混雑していた。店内では大勢の客にバタバタと動く店員の様子が見て取れた。この様子ではとても長居出来そうな状況ではない。その後、行き付けの店へ何度か足を運ぶがやはり何処も混みあっていた。もう帰ろうと思い、家へ歩き出したその時。桐生の携帯が鳴り出した。画面を見ると相手は遥からであり、そういうえば掃除が終わったら連絡すると言っていたのを思い出す。電話が来たという事は知らない内に1時間が過ぎていたのだろう。

当ても無く街を彷徨う桐生には、この連絡は何よりも救いだと言え

に出た。

『もしもし 連絡が遅くなってごめんね。大掃除は終わったよ。今、おじさんは何処にいるの?』

「いや、気にするな。今いる場所か?今は…劇場通りだ。すぐ戻る」

『ううん 寧ろ都合がいいよ。今から中道通りまで来て欲しいんだけど、いいかな?』

「中道通り?別に大丈夫だが…何かあるのか?」

『それは来てからのお楽しみだよ。じゃあ、中道通りで待つてるから』

それだけを言うと遥は電話を切った。急な出来事に戸惑いを隠せない桐生だが、先程の遥の来てからのお楽しみ…この言葉が何を意味するのか?考えてみるものの検討が付かない。此処で考えていても答えは出る筈もなく、桐生は遥が待つ中道通りへ向かう事にした。

10分程歩いて桐生は中道通りへ辿り着く。何処にいるのかと目的の人物を探すが、いつもより大勢の人で賑わっており中々見つかられずにいた。埒が明かないと居場所を聞く為、電話を取り出したその時：背後から肩を掴まれた。街で自分が絡まれるのは良くある事で普段ならば、相手を諫める程度で終わらせていたが、今の桐生は待ち合わせ相手が見つからない事もあり、苛ついていた。邪魔をする無粋な奴にお灸を据えようと振り向いた桐生は肩を掴む者の正体に驚きを隠せなかった。

「ま、真島の兄さん……。今日は何か用ですか?」

「何って、俺はお前を探していたんや。遥ちゃんに頼まれてのう。見つかるか不安やったが、見慣れた後ろ姿を見つけた訳や」

「そうだったんですか」

「ああ。さて、桐生ちゃんも無事に見つかった事や。ほな、遥ちゃんの所へ行くで」

言うべき事を言うとは真島は足早に歩き出した。何かと自分に絡んで来る相手故、また無茶を言われるのかと身構えていた桐生だったが、特に何事も無くホツと胸を撫で下ろすと真島の後を追って桐生も歩き出した。

「そういや、桐生ちゃんは何をしとつたんや？今日は大晦日やし、やる事も仰山あるんと違うか？」

「ああ。最初こそ、俺も遥と大掃除をするつもりだったが、本人が一人でいいから外に出てと言われてな。一人で街をぶらついていたんだ」

「ふっ 要は厄介払いをされた訳やな。情けないの」

「……。そういう兄さんはどうなんだ？神室町ヒルズも今日は人でごった返しているだろう。肝心のオーナーが此処で油を売ってる暇はない筈だぜ？」

「何や？それは俺が役に立たんから追い出されたと言いたいんか？」

桐生の言葉に真島は不機嫌そうな顔で桐生を睨んだ。それを見て、藪蛇を突いてしまったと後悔するがあと祭りだ。素直に謝ろうとした時、「あっ 桐生さん発見！ 遥ちゃんが待ってるよ」と明るい声が聞こえてきた。声の方を見ると走って来たのか息を切らせ、頬を赤く染めた穂乃果が立っていた。

「… お前。何で此処に？」

「何でって… 今日は大晦日でしょ？だからμ、sの皆と年越しパーティーをやる事になったんだ。それで桐生さんと遥ちゃんを迎えに来たんだよ」

「そうなのか。いや、それ以前にどうしてお前が遥の事を知ってるんだ？確か、遥とお前は会った事が無いだろう」

穂乃果の言動に疑問を覚えた桐生は穂乃果に問い掛けた。μ、sのメンバーで遥と面識があるのは花陽とにこだけで他のメンバーは知らない筈なのだ。それは真島も同じらしく、穂乃果と桐生を静かに

見ていた。そんな穂乃果は何処か楽しそうに桐生の問いに答える。

「ああ。実は花陽ちゃんにこちゃんから聞いたんだ。伝説と言われるアイドルが神室町にいるって事。それを聞いたら私もそうだけど、他の皆も会いたくなつてさ。誘うのはにこちゃんにお願いして私が迎えに来たんだよ」

「そうだったのか。だから、遙は俺に中道通りへ来いと言ったんだな。だが、そんな事しなくても普通に連絡したらいいんじゃないか？」

「もう… それだと面白くないでしょ。桐生さん、サプライズって知らないの？」

「穂乃果ちゃんの言う通りや。そういう桐生ちゃんの頭が固い所、治した方がええで。これには遙ちゃんも苦勞するやろ？なあ、遙ちゃん」

「うーん 確かに話が通じない所もあるかなあ」

「……。この話はもういいだろう。それで年越しパーティは何処でやるんだ？」

穂乃果と真島に続いて遥まで二人の味方になった以上、自分が何を弁明しても勝ち目はない。一番厄介なのが真島だ。このままだと余計な事を口走りかねない。それを危惧した桐生は話題を変えようと穂乃果に本題を切り出した。

「あ、まだ言ってなかったね。場所は家の近くにある神社だよ。そこで各自で料理を持参してやるんだよ」

「成程な。遙が包みを持つてるのはそういう事か」

「うん。掃除と一緒にやってたからあまり大した物は作れなかったけど、自信はあるよ」

「ほう〜 それは楽しみやな。遙ちゃんの料理、期待しとるで」

「それで俺と真島の兄さんは何をすればいいんだ？誘ってもらって、何もしないのは悪いからな」

「せやな… そうや。良い事を思い付いた」

「良い事？」

「それは後のお楽しみや。ほな、俺と桐生ちゃんはその準備をするから二人は先に行つててくれや」

「分かった。じゃあ、行こうか遙ちゃん」

「うん」

「ところで真島の兄さん。準備とは一体、何をするんだ？」

　　楽しそうに去つていく二人を見送つた後、件の準備が何なのか検討が付かない桐生は真島に問い掛けた。桐生の言葉に真島は呆れた顔で桐生に視線をやる。元々、鈍感な男であったが此処まで察しが悪いとは思つてもいなかった。そんな気持ちを吐き出す様に深い溜息をした後、真島は説明するべく口を開いた。

「桐生ちゃんよ。今日は大晦日やで。この流れで大人が準備するつたらお年玉しか無いやろが、大体、アサガオの子供達に毎年は渡しとるやろ」

「いや、それが…去年は運営を遙に任せっぱなしでな。それに今年は遙がこつちにいるし、俺がアサガオの子供達に渡さないとな。兄さん、そういう事で俺は子供達のお年玉を送金してくる。ちよつと外していいか？」

「早よ行きや。それとあと3人分、用意しいや。ええな？」

「3人？他に誰かいたか？」

　　突然、3人分のお年玉を用意しろと言い出した真島に桐生は尋ねた。参加するのは自分と真島を除いて9人の筈。しかし当の本人は呆れた様に溜息を吐くだけで何も言わない。流石の桐生もその真島の態度に腹が立ち、眉を顰め鋭い目で真島を睨み付けた。二人の間に重い空気が立ち込める。だが、真島は何処吹く風で桐生の問いに答えるべく、口を開く。

「誰って、A—RISEの皆に決まっとるやろ。一年の終わりやし、宴は人数が多い方が盛り上がるからもう。A—RISEの連絡は俺がしておくわ。だから、三人の分は頼んだで」

「分かった。あの三人の分は俺が用意しよう。だが、いきなり連絡して来てくれるのか？大抵は家族と過ごすものだろう」

「その時はその時や。さて、俺はツバサちゃん達に連絡しておく。桐生ちゃんも早う金を用意せい。これ以上、無駄に時間を使う訳にいかんやろ」

「そうだな。では行ってくる」

そうして真島と別れた桐生は急ぎ足でコンビニへ訪れた。幸いにも店内は空いており、手早くお金を下ろすとその場を後にする。行きと同じく急いで先程の場所に戻ると、壁に寄り掛かり一服する真島を見つけると歩み寄る。向こうも桐生に気付いて手にしていた煙草を携帯灰皿へしまう。

「こつちの用は終わった。そつちはツバサ達に連絡は取れたのか？」

「おう。運が良い事に暇だからと全員参加するそうや。三人とは神社前で落ち合う予定や」

「わかった。じゃあ、俺達も行くとするか」

「そうやな。大分、時間食つてもうたし急ぐで」

これ以上、時間を無駄に出来ない二人はタクシーを捕まえて目的へ移動する事にした。その途中、どちらが代金を払うかで揉めたが割り勘で手打ちとなった。そんな二人の言い争いを間近で聞いていた運転手には最悪の日であった

車に揺られて移動する事、二十分後。支払いを済ませて二人は目的の場所である神社へ向かって歩いていった。周りには神社へ向かうであろう人達の姿があった。時刻も17時を過ぎ、陽は完全に落ちて空には暗闇が広がっていた。そんな夜空を見上げながら桐生はふと呟いた。

「そういえば穂乃果は神社で年越しと言ってたが、一体どうするんだ？ 周りを見る限り、神社には俺達以外の人だつて来るだろうし、そんな場所で大騒ぎしたら迷惑になるんじゃないのか？」

「ああ、その事なら心配無用やで。桐生ちゃんと合流する前に希ちゃんからメールが届いてな。神社の傍にある小屋で行うそうや」

「成程。それなら周りに迷惑を掛ける事は無いな。だが、その小屋は神社の物だろう。そこに部外者の俺達が入って大丈夫なのか？」

「それは問題無いそうや。気になって俺もメールで聞いたんやが、希ちゃんが神社の関係者に許可を取ってあると返事が返つて来たからう。まあ、むやみに騒いだりしなければええだけや」

「それもそうだな」

そんな話をしている内に二人は神社へ辿り着く。境内へ続く階段の前にはツバサ達の姿もあった。どうやら一足先に着いていたらしい。三人は桐生達に気付くと、パツと明るい笑顔を浮かべ話しかけて来た。

「やつと来た。もう、待ちくたびれたわよ」

「そうよく、女の子を待たせるなんて駄目じゃ無いの」

「う、それはすまんう。何せ、桐生ちゃんがもたもたしていたから遅れてもうたんや」

「そうなのか。それは酷いな」

「・・・兄さん、何でも俺の所為にするのはやめてくれ。第一、遅れたのは理由があるだろう」

「何やねん、ちよつとした冗談やないか。そないに必死にならんでもええやんか」

相変わらず、冗談が通じない男だと真島は内心、愚痴を溢す。年越しなら多少の事くらい、無礼講と受け流せば良い物を・・・そこで真島は不意にある事を思い付く。せや、今日は大晦日。一年最後の時、盛

り上がりに任せて桐生ちゃんのことを色々とぶちまけてしまおう。口が滑つても無礼講で済ませればいい。

今夜は大いに楽しめそうだと真島の気分は高揚していた。さて、どんなネタをばらしてやろうかと考え始めた時、「まあまあ、此処で言い合っていても仕方ない。そろそろ私達も上に行くとしよう」と言った英玲奈の言葉に皆も賛同し、一同は境内に向かって階段を登り始めた。

長い階段を登って境内へ入ると、沢山の人が初詣や今日の夜に備えて屋台を組み立てていた。あっちこつちと世話しなく動く人を見て、一同は邪魔にならない様に隅へ移動し穂乃果達を探すが、見つからない。探しに行こうとすれば間違いなく、作業している人達の邪魔になるだろう。

さて、どうしようかと思っていると奥から歩いてくる希が見えた。これ幸いと真島は手を振るとそれに気付いた希は小走りで行ってきた。

「皆…もう来てたんやね。グッドタイミングやったわ」

「おう 助かったわ。ほな、此処にいたら他の邪魔になるし、小屋まで案内頼むで」

「うん。それじゃウチに付いて来て」

そう言っ、歩き出す希に付いて行くと神社の裏手に一軒の小屋があった。希の話だと巫女や神主といった神社関係者の休憩場所であり、本来は部外者は立ち入りは出来ないのだが、今回は特別に使用する許可を貰えたとの事だった。「その代わり、忙しくなる夜に出るのが条件やけどね。だから、ウチは途中で抜けるし最後まで参加出来ないのが残念やけどな」と希は言った。その話から希が信頼されている事は伺いしれた。それでも無ければ、小屋の使用許可は下りないだろう。

「そうなんか。そんじゃ、今日のパーティは楽しくなる様に盛り上げ

ないとうのう」

「フフ それは楽しみやなあ。期待しとるよ」

「私も楽しみだなあ。思えば、私達も盛り上げないとね」

ツバサの言葉に傍の二人も頷いた。一見、楽しそうな雰囲気の中。桐生だけは嫌な予感を感じていた。

「皆、桐生さん達が来たよ。それにツバサさん達もね」

「「こんばんは」」

小屋の戸を開けると中では穂乃果達が準備をしていた。希の後ろにいるツバサ達の姿に皆、驚きを隠せずにはいた。その様子にサプライズが成功したと真島は密かに喜んでいた。突然の事に固まっていたμ's達だが、一早く平静を取り戻した絵里が訳を尋ねた。

「一体、どうしてツバサさん達が此処に？」

「俺が誘ったんや。どうせ、集まるなら一人でも多い方が楽しいから。う。ま、皆を驚かそうと思ってたのもあるけどな」

「確かに驚かされたわね。それと準備はもう終わるから、真島さん達も中に入ってゆっくりして頂戴」

「ほな、お邪魔するで」

事情を知り、疑問は解けたと絵里は小屋の中へ真島達を招き入れた。それから程無くして準備も終わり、絵里の乾杯音頭で年越しパーティが始まった。

年越しパーティが始まってから小一時間が過ぎた頃。それぞれが好きな食べ物や飲み物を口にし、様々な話に花を咲かせている一同を見て、そろそろ外にも人が集まる時間やな。アレを渡すんは良い頃合いと真島は手を叩いた。いきなりの行動に驚いた皆の視線が真島へ向けられる。当の本人は注がれる視線に臆する事無く、話出した。

「驚かせてすまんろう。まだ少し早いけど、今からお年玉を渡すで」「もう渡すのか？いくら何でも早すぎないか？」
「あつ、もしかしてウチの所為？仕事で途中抜けなあかんし」

二人のやり取りを聞き、思い当たる節があるのか。申し訳なさそうにしている希に桐生は慌てた様子でそんな事は無いと弁解する。余計な事をするなど、ジト目で桐生を見た後で暗くなった雰囲気を払拭するべく、明るく集まった者達にお年玉を渡していく。受け取ったポチ袋を手に皆一様に目を輝かせる。

そして中身が気になったのか。一層、キラキラした目で開けても良いかと見つめる。そんな穂乃果にはしたないと海未が叱るが、本人も気になっている様でチラチラと手にした袋に視線をやっている。

「気にせんで。皆も遠慮せんと開けてええで」
「本当!? やったあ」

真島の一言が切っ掛けで穂乃果を始めに他の皆も続いて袋の中身を見る。中身を取り出して数を数えているとある事に気付いたにこが些か困った風に呟く。

「あの…中に6万も入ってるけど、これは多すぎじゃない？ 幾ら何でもこんなに貰って良いの？」

「おう 勿論や。それはにこちゃんの兄弟分も入ってるからろう。あとでにこちゃんから渡したりや」

「あ、私も額が多いのはそれが理由なんだ。てっきり、特別サービスかと思ってた」

「流石にそれは無いでしょう。言つときますけど、貰ったお金はしっかり雪穂ちゃんに渡すのよ。穂乃果」

穂乃果の言動に突っ込みを入れながらも釘を刺す海未に対して、穂

乃果は「勿論だよ」と返した。だが、言わなければ独り占めしていただろう。

「それとお楽しみはまだあるでえ」

「お楽しみ？ 他に何かあるの？」

「おう。それは桐生ちゃんのマル秘ネタ話や」

「……!!」

「マル秘ネタ？面白そうね。一体、どんな話なの？」

真島の唐突な発言に真姫が食い付いた。他の皆も真島の話に興味を抱く中、桐生だけは渋い顔していた。それも当然でこの男は面白ければいいと理由だけど、人の秘密を笑い話にする事がある。

昔、自分が極道だった時も幾度か恥ずかしい秘密をばらされて肩身が狭い思いした事があったのだ。

「に、兄さん。今、そんな事を言わなくても良いんじゃないのか？折角、楽しい席にいるんだ。もつと楽しい話をした方がいいと思うぜ」
「何言ってるんねん。これ以上に面白い話は無いやろ。それとも都合が悪い事でもあるんか？」

「ぐつ、そ、それは無いが…兄さんの場合は変に話を捏造するじゃないか」

「捏造って、俺がそないな事をすると思うんか？第一、マル秘ネタと言っても恥ずかしネタとは限らんやろうが」

「確かにそうよね。何で桐生さん…そんなに必死になってるの？」

何気なく聞いてくるツバサに桐生は返す言葉が無かった。否定する程に己の首を絞めているのも理解している。しかし、あの真島の事だ。きつと話す内容は自分を貶める物に違いないと確信していた。その証拠に真島はニヤニヤと笑みを浮かべてこちらを見ていた。

「まあ、桐生ちゃんが嫌なら仕方無いのう。流石に嫌がる相手は無視

する訳にいかんからのう」

「そうですね。気になるけど、嫌がる事は駄目ですね」

気落ちして呟く真島の言葉にツバサも頷いた。先程と違い、楽しい空気は途端に盛り下がっていくのをひしひしと桐生は感じていた。その原因を作ったのは自分だ。この雰囲気の中、流石に桐生も折れざるをえなかった。

「いや…別に駄目という訳じゃない。只、いきなりだったから驚いただけさ」

「そうやったんか。ほな、本人の許可も下りたし話すとするかろう」

「良かった。どんな話か楽しみだよ」

「せやな。何の話をしようか」

桐生が折れた途端、真島は楽しそうに話す内容を考え始めた。その変わり身の早さにしてやられたと桐生は思うがあとの祭りだ。こうなったらどうにでもなれと桐生は傍観する事にした。

「そうや。桐生ちゃんが映画撮影に出た時の話にするかのう」

「映画撮影!?! 一体、何があったの?」

「俺が人伝に聞いた話なんやけど、街をぶらついてた所に映画に出ないかと誘われたらしくてな。本人は最初こそ、断っていたけど…桐生ちゃん、何だかんだでお人好しやからな。最後は押し切られる形で協力する事になったんや」

「へえ。確かに桐生さん。渋いし、映画俳優とか似合ってそうだよね」
「せやろ。桐生ちゃんをスカウトした人も同じ理由だったと思うで。そんでな、衣装に着替えて台本を渡されて撮影は唐突に始まったんや。当然、経験の無い素人のやる事や。上手くいかなでお払い箱になるかと思いきや、驚く事に演技も上手で一発で成功したそうや」

「え? 経験が無いのに一発OKだったの。凄いじゃない」

真島の話に黙って聞いていたにこが驚きの声を上げる。一同もそれは同じで感嘆の視線を桐生に向けていた。だが、本人は話の内容に

首を捻らせる。自分の事だ。覚えがあるが、自身に振り掛かるトラブルの多さに桐生はいつの話だったか思い出せずにいた。そうしている間にも真島の話は続いていく。

「それで撮影も終わり、着替えている最中。同じ現場にいるキャストが桐生ちゃんを見た瞬間、皆怯えだしたんや」

「ああ。あの時の話か。まあ、あれは偶然が重なった出来事だったからなあ」

「お、思い出したか。あの話を聞いた時は盛大に笑ったで」

「もう 最後は何があったの？分かる様に話してよ」

「実はもう。その映画は任侠物でな。協力を頼んだのが元極道の桐生ちゃんだったんや。知らんとはいえ、タメ口や上から目線で言ってたらしくての。正体を知って報復されると思ったやろな」

オチを聞いて、苦笑いを浮かべてそれはそうだろうと全員が思った。まさか、極道役の人が本当に極道だったなんて分かった時は誰もが恐れるのは無理も無い。それが初対面なら尚更である。話を聞いて笑えるのは桐生さんが些細な事で怒る人では無いと知ってるからである。

「結局の所、その映画はお蔵入りになったらしいがな。まあ、無理も無い事やけどな」

「そうだったんだ。桐生さんが出た映画、観ようと思ったのに残念」

「どの道、シーンは挿げ替えられたと思うぞ。映画の大事なシーンに出てるのが素人じゃ、格好が付かないからな」

「せやな。俺としてはごろつき相手に殺陣する所を見たい所やけどな」

「勘弁してくれ」

深い溜息と共にぼやいた時、戸を叩く音のあとで「希ちゃん。そろそろ仕事の時間だよ」と呼ぶ声が聞こえた。

どうやら、楽しい宴も終わりが来た様だった。

「それじゃ、私達も此処を出ましよう」

「そうですね。良い頃合いですし」

「ほな。続きは外でやるかのう。屋台巡りをした後で鐘でも付いて締めといこか」

「賛成。皆で屋台巡りも楽しいからね」

片付けを済ませ、一同は小屋を後にする。その後、屋台巡りをし、除夜の鐘を皆で鳴らして真島達の一年はこうして幕を閉じたのである。

サブストーリー030 絆はよいよい 饅頭怖い

年が明けて元旦 あの妙な宴から翌日。

桐生は店の名前が入ったエプロンを着用し、穂むらの店番をしていた。その最中、訪れた客。ヒデコ、フミコ、ミカの三人は最初こそ驚いたり、怯えたりしていた。だが、見た目と反して穏やかに接客する桐生に三人も次第に慣れていき、気付けば仲良く談笑する程に打ち解けていた。

「いやあ さつきは怯えてごめんなさい。人は見た目で判断出来ないのは分かっていたのに…」

「気にするな。俺の見た目に関しての反応は、もう慣れてるからな」

桐生は謝る少女 ヒデコにそう言った。自分が他人にどう見えるかはよく知っている。だからこそ、相手を気にさせない様にするのが一番の方法と言う事も…。

「良かった。ところで桐生さんが店番してるの？」

「そうそう。普段は穂乃果かおばさんが店番してるもんね」

「うん。偶に妹の雪穂ちゃんもやってるよね」

「そうなのか？ 確かに俺も客として来る時もその二人がやっていたな。因みに俺が店番してる理由。今日は穂乃果とおかみさんは町内主催の集まりに行っていてな。だけど、それだと店が開けないから臨時で店番出来る人に俺が選ばれたんだ」

桐生は自分が店番する理由をヒデコ達に話すと、そういう事かと納得する。それと同時に浮かんだ疑問をフミコは聞いてみた。

「でも、おばさん達はどうして桐生さんに頼んだんだろうね。失礼な言い方だけど、桐生さんも元はただのお客さんでしょ？」

「ああ。俺もそう思って、聞いたんだが…俺が信用出来るからとしか答えてくれなかったな」

「成程ね。まあ、その理由は分かる様な気もするなあ」

「え？ミカは、分かったの？」

フミコの言葉に答える桐生。二人のやり取りを見て、ミカはそう口にした。きつと、この人は嘘をつかない。いや、嘘をつけない。その類の人なんだと…。おばさん達が信用したのは間違いなく、そういう所だろうとフミコは感じていた。

「ほら、桐生さんってさ。私達みたいな今時の子でもちゃんと接してくれるでしょ？」

「それは客だから、当然なんじゃない？ 一応、店番も任せられてる訳だし…」

「うーん そうじゃなくて、何と言って良いのかなあ。大人の人は若い人を今時の若者って、一括りにするじゃない。でも、桐生さんは私達をしっかりと見てるって感じよ」

「あー なんとなく分かるよ。要はヒフミとしてではなく、一人として見てると言いたいんですよ」

「そうそう。まあ、例えば何だけどそういう事」

「そんな大袈裟に言う事じゃない。それより三人は、周りからそう呼ばれているのか？」

次第に興奮した様に自分を褒めるフミコに恥ずかしさを感じて、話題を逸らそうと振った話に反応したヒデコが食い付いてきた。

「そうなんですよ。私達に通ってる学校に以前、*μ* sってスクールアイドルが在ったんです。そのメンバーに私達の友達がいて、三人で手伝っていたらいつの間にか。その子からそう呼ばれる様になっていたんです」

「…成程。今でもそう呼ばれてるのか？」

「今は普通に名前と呼んでくれるよ。只、呼ばれていた時は少し嫌だったけど…呼ばれないと寂しいなあと思う様になったかな」

「そう感じるのは、それだけ大事な思い出になってたんだろう。どんな事も時間が経たないと気付かない物もあるからなあ」

桐生は何処か遠い目で言った言葉で、場がしんみりとした空気に包まれたその時。店の電話が音を立てて鳴り出した。全員が吃驚する中、一早く我に返った桐生が受話器を取ると電話先の相手に用件を尋ねた。

「はい 和菓子屋 穂むらです」

「あつ 桐生さん。いきなりで悪いけど、穂むら饅頭を100箱。配達をお願い出来る？」

「穂むら饅頭を100箱!? それだけの数を一体、何処へ配達するんですか？」

「配達先は、町内会の集会所よ。実はウチの和菓子の話をしたら、集まった人達が食べたいと言い出してね。年明けは売上も下がるし、これを逃したくないのよ。無理を言うようだけど、どうかお願いするわね」

電話先の相手、穂乃果の母はそう言って電話を切ってしまった。まさか、店番だけでなく配達まで頼まれるとは…。予想外の事に桐生は困惑する。それに配達先が分かっているにも、そこに行く道を彼は知らない上に、届けるのは100箱の饅頭と来た。饜めた顔で受話器を置く桐生にヒデコが問い掛ける。

「ねえ 桐生さん。電話に出てから怖い顔してるけど、どうしたの？」
「ん？ ああ。穂乃果の母親からだったんだが、饅頭の配達を頼まれてなあ。配達先は町内の集会所と聞いたものの。困った事に俺はその場所が解らないんだ。おまけにすぐ配達して欲しいと言われた」

「だったら、代わりに私達が届けようか？ 道も知ってるから」
「申し出は嬉しいが、数は100箱だぞ。俺を含めて運んでも時間が掛かってしまう」

「1、100箱も!? 穂乃果のお母さんも無茶ぶり言うなあ」

事情を知るとヒデコ達も顔を顰める。手伝うと言ったが、その数を運ぶのは確かに無理がある。どうしようかと悩んでいると奥から穂乃果の父親が姿を見せた。彼は無言で店の外へ出ていき、暫くすると外から桐生達を手招きする。

一体、何だと桐生達が外へ出るとそこに在ったのは一台の荷車だった。些か、古い感じではあるが作りもしっかりしており、多くの荷物を運ぶに打って付けの物だった。

「これを使えと言う事ですか？」

そう尋ねる桐生に穂乃果の父親は力強く頷く。どうやら、奥で話を聞いて自分達の手を貸してくれたのだろう。これならば、配達が可能となる。そして店に戻ると既に穂乃果の父が饅頭を用意していた。桐生が電話を出した時から既に拵えていたらしい。その仕事の早さにも桐生は驚きを隠せずにした。

だが、残っている問題もある。それは店番という自分が任された仕事だ。配達をする間、当然ながら店を空ける事になる。その仕事まで穂乃果の父にやらせては彼の負担となるだろう。失礼な話だが、口下手なこの人が上手く接客出来るとは思えない。そんな事を考えていると店の戸が開く音が聞こえて振り変える。

「ねえ、お父さん。表にあつた荷車、店の前に置いてたら邪魔だよ。あ、桐生さん。饅頭の用意は出来た？」

「ああ。今から配達をする所だが…。穂乃果はどうして此処に？」

「私はお母さんに言われて来たんだ。流石に一人じゃ大変だから、手伝う様について」

店に入って来たのは穂乃果だった。一斉に向けられる視線に戸惑うが、桐生に駆け寄ると饅頭の事を聞いてきた。その問いに答えた後、今度は桐生が穂乃果に尋ねた。すると彼女は母親に言われて来た

と訳を話してくれた。

お互いの事情説明が終わる頃を見計らって、ヒデコが口を挟んだ。

「あー 所で配達の良いの？ そろそろ出発しないと遅くなるんじゃない？」

「そうだった。急がないと皆、饅頭を楽しみにしてるから」

「よし。それじゃ行くとしよう」

荷車に饅頭を詰み終わると桐生は、取っ手を掴み引き始めた。その後ろからヒデコ達が押し、桐生の前に穂乃果が道案内として歩いていた。その道中、穂乃果は暇を持って余したのか。同じく手伝いをするヒデコ達に話かけた。

「そういえば、どうしてヒデコ達も一来るの？ 手伝ってくれるのは助かるけど…」

「うーん 特に理由は無いけど、桐生さんが困ってたからね。それに私達三人揃って、何かを手伝うのも久しぶりだし」

「そうそう。数年ぶりにヒフミトリオ復活って所よね。音ノ木坂に通ってた頃、いつも一緒だったし」

「うん。懐かしいよね。あの時は、これぞ青春という感じだったものね」

「そういや。三人は、sの手伝いをしてたと聞いたな。どうして手伝う事にしたんだ？」

ヒデコ達が、sの手伝いをしていた事。それは聞いてはいたが、それに至る理由は知らない桐生はこの際、聞いてみる事にした。

「昔、私達に通っていた学校。当時は生徒が少なく、廃校が決まっていたんですよ。そこで穂乃果達が始めたのがスクールアイドル、s。最初は私達もやるだけ、無駄だと思ってたんですよ」

「だけど、穂乃果ちゃん達が一所懸命、練習する姿を見て手伝おうと思っただよな」

「そうね。見てるだけじゃ、変わらない。それを穂乃果に教えてもらったよ」

「そうだったんだ。でも、それなのに最初のライブは結局失敗しちゃったよね」

「何言ってるの？ 私達が本気で手伝おうって思ったのはその時だよ。人がいないのに諦めずライブをやりきった姿に私達は惹かれたんだからさ」

穂乃果がやった最初のライブ。それは今思えば、大失敗だった。幕を開けば、ライブを見てる人が誰もいない。普通なら心が折られ何も出来ずに終わるだろう。しかし、それでもやりきった。その姿にヒデコ達の心を掴んでいたのだ。

「そうか。初めは大変だったんだな…。それでも諦めずに頑張ったからこそ、皆が支える事に繋がったんだな」

「うん。その後、一人また一人とメンバーも増えて、気付けば皆が応援してくれてたよ。世間じゃ、*μ* sが廃校を阻止したって言うけど…。私は皆のおかげだと思ってる。だって、私が頑張れたのは支えてくれる人がいたからだもん」

穂乃果は笑顔でそう言った。きつと、ヒデコ達も*μ* sのメンバー達はこの姿に魅力を感じ、勇気を与えていたのだろう。だからこそ、只の学生でしかない穂乃果達は廃校阻止という不可能を可能にしてみせた。

「そういうえば、ふと思いついたけど…昔、今見たいに一丸となって*μ* sに協力した事あったよね？」

「あったあった。確か、道が雪で塞がれた時だよ？ その時、ほぼ生徒全員で雪かきしたね」

「そうそう。呼び掛けに応じてくれる人なんていないと三人でやるつもりだったのに。皆、挙って雪かきを手伝ってくれたね。あれは嬉しかったなあ」

「それを言うなら私もだよ。実はもう最終予選に間に合わない諦めてたけど、皆のおかげで最終予選に間にあったからね。あの時は本当にありがとうね」

その時の事を思い出したのか。目に涙を滲ませて穂乃果はお礼を言った。ヒデコ達も同じく涙を滲ませて穂乃果に言葉を返した。そんな4人の姿を桐生は優しく見つめていた。

そして目的の集会所まであと僅かと迫った時、集会所へ続く道は工事中であった。一応、人が通れるスペースはあるが、荷車が通れる様な広さは無い。

「この分じゃ、荷車は通れないな。仕方無い。回り道をしていくしかないな」

「それなんだけど…。集会所へ行く道は此処しか無いんだよ。周りは住宅に続く道で行き止まりだから」

「じゃあさ。全員で運ぼうよ。皆で協力すれば、問題ないって」

「そうだな。此処で立ち止まってるより、そっちの方が早いか。じゃあ、皆の力を俺に貸してくれ」

「「「おー」」」

そうと決まれば即行動。荷車に積まれた饅頭を桐生達は手分けして運んでいく。集会所に届けると入り口に穂乃果の母が待っていた。桐生達の姿を見て、声をかける。

「やっと来たのね。流石に100箱は大変だったでしょう?」

「いや。運ぶのはそうでもないが、此処への道が工事中でな。それで穂乃果やヒデコ達と一緒に手分けして届けに来たんだ」

「あら、そうだったの。それなら私達も手伝わないとね。今、皆に話してくるわね」

桐生から話を聞いて、更に助っ人を呼ぶ為に穂乃果の母は集会所へ入っていった。そして数分も経たない内に大勢を引き連れてやってきた。

「皆、お饅頭を楽しみにしていたのよ。それで場所は何処かしら？」

「場所は此処から少し歩いた先の道です。饅頭を積んだ荷車は穂乃果が見張ってくれてます」

「あら、穂乃果ちゃんも手伝ってるのね。ならおばさんも頑張らないといけないわね」

「そうねえ。元はといえば、私達が無理を言っちゃったからだもの」

集った助っ人のおばさん達を連れて、桐生達は次々と饅頭を運んでいく。そろそろと列を作り、饅頭を運ぶ奇妙な集団を工事していた人達が怯えた様な視線を向けるが、運ぶ事に夢中のおばさん連中は気付いた様子はない。また気付いても気にも留めて無いという方が正しい。

全ての饅頭を運び終えた後、おばさん達は桐生とヒデコ達をお茶の席に向かい入れた。当初、仕事がまだであると桐生は断るが：おばさん達の勢いに押し切られて、参加する事になった。また、既に穂むらで和菓子を堪能していたヒデコ達も断るがやはり勢いに押されて、結局参加する事となる。

それから時間も経ち、お茶会が終わった頃、外は夕暮れに包まれていた。一緒にいたおばさん達やヒデコ達とは、既に別れ桐生達は穂む

らへ向かう道を歩く。結果として頼まれた仕事を放棄してしまつたと、店に残した穂乃果の父に心の中で謝っていた。項垂れていた桐生に穂乃果の母が明かるく声を掛ける。

「仕事なら大丈夫よ。桐生さん達が饅頭を運んでる間に家へ連絡しておいたから。言うのが遅くなつてごめんなさいね」

「そうなんですか？　しかし、例えそうでも頼まれた以上、やり遂げる事が出来なかつたのは申し訳なく感じるなあ」

「気にしなくていいのよ。元はといえば、私達が無理言つてお願いしたんだから」

ころころ笑つて言う穂乃果の母に、これ以上言つても野暮だと桐生は素直にその言葉を受け入れた。そして見慣れた看板が見えてきた頃。穂乃果の母は桐生に渡したい物があるからぜひ寄つてと家に招く。

渡す物とは、今日の仕事代だろうか？　特にこれといつて働いていないのに受け取る訳にいかない。もし、そうだとしたら断ろうと桐生は思っていた。しかし、奥に行つた穂乃果の母が手に持つて来た物を見て、桐生は愕然とした。そう穂乃果の母が持つて来たのは、台車に大量と積まれた穂むら饅頭だった。

「今日、仕事代としてお金を払いたいと思つてはいるけど、そうすると家も厳しいからね。その代わりと言つては何だけど、穂むら饅頭100箱で手打ちにしてちょうだい」

「……はい。有難く頂きます」

悪気もなく、そう言う穂乃果の母に文句を言える筈もなく、桐生は先程の荷車を山の様な饅頭を積んで穂むらをあとにした。その後、家に帰つた桐生は遙に怒られる事となる。遙の説教を受けながら、もう2度と仕事の安請け合いはしないと桐生は心に固く誓つた。

サブストーリー1031 南からの訪問者

神室ヒルズ内 真島組の事務所

自室にて、真島は書類仕事に追われていた。とは言っても大凡の書類は既に終わっており、今は椅子に凭れて一息吐いている所である。ずっと書類を睨んでいた所為もあり、疲れが溜まった目を指で揉んでみるが…余り効果は無い。

思えば体も訛っている事だし、久しぶりにバツティングセンターでも行こうか？と真島が考えているとドアをノックと共に「親父、西田です。いらっしやいますか？」と尋ねる声が聞こえて、真島はドアに向かつて返事を返した。

「いるで。入れや」

「…失礼します。親父、大丈夫ですか？」

「あ？ そりや、どういう意味や？」

「いや、何か…大分、疲れている様ですからね」

「ほうか？ 別に疲れてはおらんで。ただ、ずーっと座っておったから、体を動かしたいとは思つとるけどなあ」

「そうですか。思えば、3ヶ月は事務所に缶詰ですもんね。そうだ！

親父、今日から暫く休んでください。その間、俺達が仕事をやっておきますから」

いつもは仕事をして下さいと厳しい西田が、珍しく休むように言ってきた。確かに体が訛っているとはいえ、別段疲れは感じていない。だが、折角休みを貰ったのだ。此処は素直に甘える事にしよう。真島は久しぶりに繰り出す神室町に浮かれていた。だからこそ、彼は気付いていない。本来なら真島は西田から休みの許可を貰わずとも休めるのだが、閉鎖的な空間にいた所為で些か判断力が落ちていた。無論、あとでその事に気付いた真島によって、西田がお仕置きされたのは別の話である。

「ほー 久しぶりの神室町もええもんやなあ。部屋にいたから気付かんかったけど、随分と暖かくなつたものやな」

燦々と降り注ぐ陽を浴びながら、真島は呟いた。とりあえず、何か食べに行こう。行き付けの蕎麦屋へ向かう為、通りに出た時。真島は一人の少女に気が付いた。その少女は不安気な表情でキョロキョロと見回していた。少女の様子からして、都会の空気に困惑している様に感じた。そんな困っている姿を見てしまつては、放つて置く訳にもいかない。真島は話を聞こうと少女へと歩み寄つていった。

「なあ。自分、何か困つとる様やけど、どうしたんや?」

「え? あの… 申し訳無いですが、どちら様ですか?」

「お、そうやった。俺は真島というもんや。それであんたは?」

「私は名嘉原咲といいます。実は…友達に誘われて沖繩から来たんですが、迷つてしまつて困つてるんです。携帯に送られた地図では、待ち合わせ場所はこの付近というのは分かっているんですけど…」

「そうやったんか。そら、難儀やのう。せや、良かったら俺も手を貸そうか? 俺も暇しとつたし、街に詳しいから助けになれる筈や」

咲と名乗る少女は苦笑して、今の状況を口にした。それに釣られて真島の顔にも笑みが浮かぶ。案の定、彼女は迷つていた様だ。此処で会つたのも何かの縁。真島は咲の助けになればと、手を差し伸べた。

突然の真島の申し出に咲は戸惑う。しかし、真つ直ぐ自分を見る目に嘘は無い。その目は昔、自分を守つてくれた人に良く似ている。初めて会う人だけど、彼は信用出来る。そう確信した咲はにこりと笑うと真島の手を借りる事に決めた。

「…良いんですか? それじゃあ、案内お願いします」

「おう。任せておきや。あと別に頭を下げんでええ。俺が好きでやる事や」

深く頭を下げる咲に、真島は頭を上げてくれと言った。口にした様に手を貸すのは自分の意思であり、そんな事をさせる為ではない。何より、自分の見た目では他人から脅してる様にも映ってしまふ。余計な騒動になれば、咲に迷惑が掛かるだろうし、自分もトラブルに巻き込まれたくはない。

「いえ。親切にしてくれる人には礼儀を尽くせ。父からそれは厳しく言われてますから」

だが、真島の胸中とは別に咲はまたにこりと笑うと、真島にそう言った。その態度に真島も素直に感心する。全員とは言わないが、大抵の若者は礼節を欠く者が多い。そんな中、しっかりと芯を持つ咲に真島は好感を抱いた。

「ほうか。立派な親父さんがおるんやな。咲ちゃんみたいな子を持つて、その人も鼻が高いやろうな」

「ええ。昔気質の人だけど、誰よりも人に優しいから…地元の人からも頼りにされてるんです」

「そりや凄い事やな。おっと、そーいや咲ちゃんは何処に行く予定だったんや？ 確か友達と会うと言うとつたけど…」

父親の話題になった途端、顔を輝かせて咲は饒舌に語った。その様子からして、彼女にとつては自慢の父親なのだろう。もう少し聞いて上げたい所だが、友達と会うという用事に遅れては本末転倒だと…真島は話を戻した。言われた咲もハツと我に返り、一言謝ってから真島の質問に答え始めた。

「友達と会う場所ですが、確か…中道通りと言っていました。あそこなら人が多いし、慣れてない私も安全だからと…」

「中道通りか。それならすぐ近くや。奇遇な事に、俺もそこで飯食おうと思っていた所や。ほな、一緒に行くとするかの」

「そうだったんですね。じゃあ、案内お願いします」

咲から友人と会う場所を聞き出し、真島は彼女を連れて目的の場所へと向かった。

目的の場所への道中、無言で移動するのも何だと…咲の友人について尋ねてみる事にした。

「そういや、咲ちゃんの友達って…どんな子達なんや？遙々、沖繩から来るくらいや。仲もええんやろう？」

「…実を言うとその友達と会うのは今日が初なんです。会話の方はメールやチャットを通じて何度かやり取りをしてたんです。それで最近、東京へ遊びに来ないかと誘われたので思い切ってやって来たって訳なんですよ」

「…何や、一度も会った事ないのに来たんか。失礼な事やが、咲ちゃんは騙されてるんとちゃうか？中には人の心に付け込んで悪さを働く奴が多いんやで」

この話を聞いた真島は思わず耳を疑った。まさか、会った事のない人を尋ねて沖繩からやって来たとは想像もして無かった。此処、神室町でもメールやチャットを利用して悪事を働く輩が大勢いる。もしかししたら、咲もそういった類の連中に弄ばれている。そう感じるのも仕方が無い事だろう。

「まあ…真島さんの言ってる事も分かります。けど、その心配は大丈夫ですよ。悪戯と分かったら面倒になる前に縁を切りますから」

「…ある程度は覚悟しとるんやな。ま、そうじゃないと沖繩から来たりはせんか」

心配する真島を余所にあっさりと言葉を返す咲を見て、心配は杞憂

だと悟った。本人も騙されている場合も考えてはいた様だった。まあ、そうでなければ東京まで来るわけも無い。要らぬお節介だったと真島はこの事に口を出すのを止めた。

そうして二人は目的地の中道通りに到着した。昼時とあって、通りは大勢の人達で賑わっている。この中から咲の友人を探すとなれば、相当に骨が折れるだろう。下手に動いて行き違いになっても面倒だ。真島はこの後、どうするかを咲と相談する事にした。

「やはり昼時は人が多いのう。そうや、会う友人にメールしたらどうや？ この人の多さや…下手に動くよりも相手が来るのを待つ方が確実やからな」

「確かにそうですね。分かりました。ちよつと連絡入れてみます」

真島の言葉も尤もだと、咲は素直に頷くと携帯を操作してメールを送るとすぐに返事が返って来て、今から咲がいる場所に向かっているとの事だった。咲はその話を真島に伝えた。それならもう大丈夫だと、咲と別れようとした時、「あれ？真島さん…此处で何してるの？」と聞き慣れた声が響き、振り変えるとそこにツバサ達の姿があった。思わぬ人物の登場に驚く咲を見据えながら、真島はツバサに言葉を返す。

「…ああ。俺は人助けの最中や。何でも遠路から友人に会う為、来た子がいてな。初めて来た土地で困ってたからのう。友人と会う場所まで案内した所や」

「どうも初めまして！ 私、名嘉原咲です。はい 真島さんの親切に助かってます」

真島の言葉に続き、咲はツバサ達に自己紹介をした後で彼のフオローをする。自分は真島が親切な人と理解しているが、他者からは見た目が怖い人。そう誤解されるのは、避けたい。そう思っている言葉

だった。

「そうだったの。あ、自己紹介がまだだったわね。私は綺羅ツバサ。それで後ろの二人が…」

「わたしは優木あんじゅ。宜しくね」

「自分は藤堂英玲奈だ。ツバサは強引だが…悪い奴じゃない。どうか仲良くしてやってくれ」

「は、はい。此方こそ…。あの、もしかして皆さん。A—RISEの…むぐ」

三人の紹介が終わった後、咲はある事を口にした時。ツバサによって口を塞がれてしまった。突然の行動に驚き、固まる咲に気付いたツバサは…罰が悪そうに謝った後で手を離れた。

「ご、ごめんね。でも、今はフリーで来てるからさ。私達が街にいるって公にしたくないの。それに今日は友人と会う予定だし、その子にも迷惑を掛けたくないからね」

「い、いえ。私の方こそごめんなさい」

「…ツバサちゃん。その友人って、誰の事や?」

「ああ!… そうだった。さつき着いたって、メールが来てたの忘れたよ。じゃあ、真島さんまた今度…「ちよい待ちや」え?」

二人の会話に引っ掛かりを覚え。ツバサに問い掛けると当人は、慌てた様子で立ち去ろうするが、真島はそんな彼女に引き止める。

「…済まんけど、そのメール。送ったのを誰か教えてくれへんか?」

「え? メールの相手、確か…なにか何とかさんだったかな。実は漢字が難しくくて読めなかったけど、到着した場所は書かれていたから名前はその時に聞けばいいかと思ってね。もういい? 早く迎えに行かないとだし」

「いや、それは必要ないだろう」

「それはどういう事?」

説明した後、移動しようとしたツバサを今度は英玲奈が止めた。まともや制止され、少し苛立った様子でツバサは英玲奈に言葉を返した。だが、当の本人は何処吹く風で彼女にその理由を口にする。

「私達が会う友人なら、もうそこにいるからだ。さっき、ツバサが言った言葉で確信した。それはきつと名嘉原さんの事だとな」

「うん。私も英玲奈ちゃんに同感」

「…じゃあ、空回りしてたのは私だけ？」

英玲奈達と真島達に視線をやりながら、ツバサがぼつりと呟くと…四人はこくりと頷くのを見て、ツバサはガクツと項垂れる。そして恥ずかしいのか。両手を顔を隠してブンブンと首を左右に振る。

「ま、まあ…。行き違いにならんで良かったやないか。この広い街ですれ違ったら、探すのは相当大変やからな」

「ええ。…皆さんと会えて良かったです」

「そうね。私もそう思うわ。改めて言うわね。沖縄からようこそ 咲さん」

「はい」

真島のフォローで気を取り直したツバサは、パツと満面の笑顔を浮かべて咲に手を差し出した。いきなりの事でキョトンとするが、すぐに笑顔を浮かべてツバサの手を取ると握手を交わした。新しく出来た友達と楽しそうに話す咲達を見ていた。そして用が済んだと真島が立ち去ろうとした時、気付いたツバサが彼を引き止める。

「ねえ、良かったら真島さんも一緒にどう？ 咲ちゃんと会えたのも真島さんのおかげだもん」

「ああ、それはいい提案だ。人数が多い方が盛り上がるし、何よりいてくれると頼りになる」

「そうねえ。私も二人に賛成よ。ね、咲ちゃん」

「はい。私も皆さんと同じです。それにまだお礼もしてませんから」
「…気持ちは嬉しいけど、俺がおったら場違いやし…それに目立つやろ」

一緒に遊ぼうとツバサ達の誘いを真島はやんわりと断る。その気持ちは嬉しかったが、咲との親睦を深める邪魔になる。真島はそう思ったからだ。この言葉に四人は顔を見合わせた後、彼女達は左右から真島の腕を掴むと引きずる様に歩き出した。その唐突な行動に困惑する真島にツバサ達はそれぞれの想いを告げた。

「…気にしないで。いざとなったら、マネージャーだと誤魔化せばいいのよ。それに私達にとっても…真島さんも友達なのよ」

「ツバサの言う通りだ。迷って悩む私達の背中を押してくれた。私達の頼れる人だしな」

「そうよ。今回の事も真島さんがいたから、私達は咲さんと会える事が出来たんだもの」

「皆さんの言う通りです。それに不思議な事に真島さんなら信頼出来る。変な言い方ですが、そう感じるんです」

「……。分かった。そこまで言われたら、断るのは失礼やな。それじゃ、厄介になるで」

面と向かって、こうも言われてしまつては断る事が出来ない。折れて同行する事を決めた真島を見て、四人は笑顔を浮かべて喜んでいった。そして一行は咲の親睦会の為、街の中へ意気揚々と歩いていった。

サブストーリー1032 続 南からの訪問者

真島が神室町で咲達と会っていた頃、桐生は部屋の中でのんびりと寛いでいた。そんな桐生の自堕落した姿に不満を覚えていた遙は、思い切って自分の気持ちを桐生にぶつけることにした。

「ねえおじさん。家で寛ぐのは良いけど、少し出掛けて来たら？今日は良い天気だし、街で何か面白い事があるかもよ？」

「…外か。確かに寝てばかりじゃ、体に悪いしな。分かった。それじゃ出かけて来るとするか」

普段と違い、遙の厳しい言葉に桐生も思う所があったのだろう。此処は逆らわらない方が得策だと、素直に桐生は外出する事を決めた。そして桐生が出かけようとした時、彼の携帯が音を立てる。こんな時に誰だ？と顔を顰めて画面を見れば、相手は琉道一家の幹夫であった。態々、電話を掛けて来るという事は、何か不測の事態が起きたのだろうか？一抹の不安を感じながら桐生は電話に出た。

「…俺だ。お前が電話するとは珍しいな。何かあったのか？」

『ええ。そうなんです。実は…』

幹夫の話は琉道一家の頭。名嘉原茂の義理の娘、咲が一人で神室町に向かったという事だった。それで神室町にいる自分を頼って、電話して来たらしい。だが、腑に落ちない事が一つあった。それは電話をして来たのは、名嘉原でなく幹夫だという事。過去、咲が行方を眩ました時は相当、荒れたのを覚えている。もし…今回もその類なら名嘉原が出向いて来てもおかしくはない。

「幹夫、一つ聞かせてくれ。今回の事、名嘉原はどうしてるんだ？」

『お、親父ですか？ いや、特に何も言っただけですけど…』

「そうか。なら、心配はいらないんじゃないか？ もし…そんな事があれば名嘉原の事だ。あいつ自身が電話してくる筈だ。単刀直入に

聞くぞ。お前、名嘉原に隠れて電話してるのか？」

『え？ 桐生の兄貴。一体、何を言ってるんすか。そんな事ある訳…。あ、やべ』

桐生の言葉に焦りの色を隠せない幹夫の様子に、桐生は予想が的中したと確信する。そして、電話の向こうでは幹夫の慌てた声が聞こえた後、自分がよく知る男の声が聞こえてきた。

『おう 兄弟。久しぶりだなあ。元気でやってるか？』

「俺は変わらない。そういうあんたも元気にやっているか？」

『勿論だ。ところで：幹夫から咲の話を聞いたんだろ？』

「ああ。確か、一人で神室町に向かったとな」

『あいつめ。俺は心配するなって言ったんだけどよ。まあ、話しちまったなら仕方ねえ。もし、街で見掛ける事があつたら声をかけてやってくれ。俺からはそれだけだ。それと沖縄に戻ったら、一杯やろうぜ』

「フツ そうだな。沖縄に戻ったら、そっちへ顔を出ささ」

そう言つて、桐生は名嘉原との会話を終えた。それを見計らつて、話を聞いていた遙が声をかけてきた。

「ねえ、咲ちゃん。今、神室町に来てるって本当なの？」

「ああ その様だな。俺は街を散歩がてらに探してみるつもりだ。どうだ？ お前も来るか？」

「うーん 私も行きたいけど、やる事があるからやめておく。でも、会ったら…家に連れて来てよ。色々とお話もしたいから」

「わかった。じゃあ、行ってくる」

「いつてらっしやい」

遙も誘つたが、彼女はやる事があると桐生の誘いをやんわりと断つた。だが、会いたい気持ちはあるらしく。会えたら家に連れて来てと彼女は、桐生に頼み込む。囁かなお願いに桐生も微笑み、それを了承

して家を出た。

街は休日という事もあり、人で賑わっていた。その活気を楽しそうに眺め、街を歩く桐生の正面から来る真島に気付いた。まだ向こうは気付いていない。面倒に巻き込まれる前に立ち去ろうと振り向いた瞬間。自身の肩に手を置かれていた。遅かったと溜息を吐きながら振り返ると、相手はやはり真島であった。その後ろにはA―R―I―S―Eの三人の姿も確認できる。どうやら、ゆっくり出来るのは此処までのようだ。桐生は内心、落胆した。

「何処行くんや？ 俺を見て、逃げようなんて桐生ちゃんも酷い奴やなあ。のう 皆？」

「そうね、私達も少し傷付いたわ」

「あんじゅに同感。私達と遊ぶなら許してあげる」

「そうだな。こういうのは人が多い方がいい」

「決まりや。今回、珍しいゲストもおるから。桐生ちゃんも来いや」

「ゲスト？ それは誰なんだ？」

真島達の言葉が引つ掛かり、桐生は首を捻る。話を聞く限りでは、自分も誘う予定だったらしい。ならば、ゲストは自分と関係があるのだろうか？ そう思い、視線をツバサ達に向けて桐生は驚いた顔をすする。そこにいたのは、何と咲本人であった。幹夫からの連絡で神室町に来ていたのは知っている。しかし、まさか真島達と行動していると予想していなかった。

「ゲストは咲の事だったのか。だが、どうして兄さん達と一緒にいるんだ？」

「それは道すがら話したる。とりあえず、人目もあるから行くこうや」

「ああ。分かった」

真島の言う通り、確かに人の視線が自分達に向いている。事情は気になるが、桐生は真島の言葉に従い、皆に付いて行く事にした。

移動を開始して数分後、真島はぼつりと口を開いた。

「ところで桐生ちゃんよ。さつき、咲ちゃんの事を知ってた様やけど…一体、何処で会ったんや?」

「ああ。俺が沖繩で養護施設を開設して間もなく、名嘉原の組と一悶着あったんだ。出会ったのはその時だ」

「ほー そんな事があったんか。人の縁つてのは、不思議なもんやなあ」

「そうですね。確か、桐生さんには…私が誘拐された時も助けてもらいましたよね。その節は本当にありがとうございました」

桐生の話を聞いていた咲は、当時の事を思い出して彼に礼を述べた。あの時は騒動の混乱とショックで言いそびれてしまった。今更遅いかもしれないが、言わないよりはマシだと思つての事だった。

「いや、礼はいらない。俺がやりたくてやった事だ」

「そうですね。桐生さんは変わりませんね」

「せやな。大抵は皆、変わってしまったが…桐生ちゃんだけは変わらんからのう」

「俺の話はいいだろう。それで咲が此処にいる理由をそろそろ教えてくれないか?」

「あ、そうですね。実は…」

これ以上、放っておくと良い事は無い。経験からそう感じた桐生は誤魔化す様に話題を変えた。当然、それに気付いた真島が追及する前に咲が答えた。流石に真面目な話を茶化す訳にいかない。少し詰まらなそうにする真島を見て、桐生は内心安堵した。

「そうか。咲が神室町に来たのはそんな事情があったんだな」

「はい。まさか、私もこうなるとは思ってませんでした」

「そうよね。でも、咲さんの描く絵。私、いえ私達は凄く惹かれたの。だから今回、無理言つて来てもらったのよ」

「ツバサは一度言い出すと止まらないからな。正直、断られると思つてたが…私も来てくれて嬉しく思う」

「そうねえ。それは私も同じだわ」

咲から話を聞いて、桐生は漸く事情を知った。そんな咲とツバサ達を結んだ絵。それが気になって、桐生は咲に尋ねることにした。

「ところで…ツバサ達が惹かれた絵。どんな絵なんだ？」

「ああ、それですか。見せたいんですけど、今はその絵を持って無いです」

「私、持ってるよ。ちよつと、待ってて〜」

二人の会話を聞いたツバサは、そう言うやスマホを取り出して何度か操作をした後、桐生に手渡した。そこに映っていたのは、咲が描いたツバサ達のイラストだった。画面の三人はライブの衣装を纏っており、凛とした表情であった。見る者を惹き付ける魅力がこの絵は放っていた。成程、ツバサ達が会いたいと思うのも納得がいく。

故にツバサ達はこの絵を描いた人に会いたい。そう思つたのだろう。暫し見つめていると、ニヤニヤと笑みを浮かべたツバサが話しかけてきた。

「どうしたの？桐生さんつてば、私達のイラストをじーっと見てるけど…まさか私達に見惚れてた？」

「そうだな。ただ、美しい絵だと思つただけだ」

「それは嬉しいな」

「うん。桐生さん、お世辞を言うタイプじゃないから。本当にそう感じてくれたのよね〜」

「私も嬉しいです。自分が描いた絵で人が喜んでくれるのは気持ちいいですね」

「なんや？偉い盛り上がってるのう〜 俺だけ蚊帳の外で寂しいやな

いか〜」

四人で盛り上がっていると、泣きそうな声で真島が割り込んできた。見た目のギャップに桐生達は思わず、笑い。それに釣られて真島も笑い出した。場の空気が和んだ所で一行は移動を開始した。

そんな一行が訪れた場所。それはボーリング場であった。中に入ると球を転がす音やピンを倒す音が鳴り響いていた。桐生達と違い、咲は慣れて無いのだろう。音が鳴る度に体をびくりと震わせる。その姿が可愛らしく、五人は堪らず笑みを漏らした。

「もう…皆さん笑わないで下さい。こういう所、あまり来ないから思わず反応しちゃうんです」

「ごめんね。咲ちゃん。じゃあ、分からない事は教えてあげるわ。一緒に行きましょ」

「ツバサ、あまり強引に迫るな。それにまだ受付も済ましてないんだ」
「そ、そうね。悪かったわ」

「気にせんでええ。受付ならやっておくから、咲ちゃんの案内頼むで」
落ち着きのないツバサを英玲奈が諫めると、ツバサは素直に反省した。その様子を見て、真島が受付を済ませると言うのと、ツバサ達に先へ行く様に促した。真島の言葉でツバサはパツと笑顔を見せて、お礼を述べると咲の手を取り歩いていった。それに続いて英玲奈とあんなじゆも礼をして、ツバサの跡を追った。何だかんだで二人も早く遊びたい気持ちもあったようだ。残った桐生と真島は手早く受付を済ませるとツバサ達の元へ向かった。

二人がツバサ達を探して、ホールを見渡していると…右のレーンにいたツバサ達が声をかけてきた。

「あ、こっちだよ〜」

「ツバサ 大声を出すな。周りに迷惑だろう。それに私達の事が知れたら面倒だぞ。そうになったら、咲さんの歓迎会どころではない」

「フフ 大丈夫よ。元より、誰も気にしてないって」

「私も英玲奈の言う通りだと思わ。ツバサちゃん。少し不用心だもの」

「もうく あんじゅまで言うの？ 酷いわね」

「まあ、大丈夫やろうが、用心するに越した事はないで」

「むく 真島さんまで、分かった。少し気を付けます」

「おう。素直が一番や。そんじゃ、思う存分に楽しむとしようか」

人目も憚らず、はしゃぐツバサに英玲奈が再び注意した。それに続いてあんじゅから注意され、不貞腐れるツバサに真島も注意すれば：彼女も素直に頷き反省した。そして皆はボウリングを楽しんだ。初めて遊ぶ咲は最初こそ、ガーターの連続だったが：コツを覚えたのだろう。次第に咲は上達していき、連続ストライクを決めて皆を驚かしていた。

「いやあ、咲ちゃん。えらい強かったのう： 本当に初めてだったんか？」

「はい。ボウリングは初めてです。普段、外に出て遊ぶ事は無かったもので」

「え？ そうなの？ 沖縄って、結構：遊ぶ場所が多いイメージがあるけど」

「皆が思ってる程、少ないですよ。海は毎日入れるから珍しさも無いし、街は土産物や飲食店が殆どです。基本、観光客が喜ぶ感じですが：元より住んでる地元からしたら見慣れた光景ですから」

「そうなんだ。だったら、今日はとことん遊ばないとね」

真島と咲の話を聴いて、ツバサが会話に入ってきた。彼女は思った事を尋ねると、咲は優しく問いに答えた。それを知り、ニコリと笑っ

てツバサはそう言った。咲もまた明るい彼女に微笑むと首を縦に振る。親睦を深める咲とツバサ達の姿に桐生と真島は顔を見合わせ、どこことなく笑みを浮かべた。

「ほな、次にいくで。せやな…次はゲームセンターにいこか」

「今からか？この時間だと、混んでるじゃないのか？それに五月蠅い場所は慣れない内はきついと思うぜ」

「それもそうね〜 だったら、バッテリーセンターにいかない？あそこなら人は少ないと思うわ」

「お、バッテリーセンターか。俺も久しく行つたらんう。よし、そこに行こか」

次に行く場所にゲームセンターを提案する真島に桐生は難色を示した。遊ぶには持ってこいの場所だが、あの手の場所は人混みで溢れ、騒音ともいえる音は耳に優しくない。桐生の言葉にあんじゅも頷くと彼女は代案を口にする。その案に真島も賛同し、桐生達は目的の場所へ移動を開始した。

幸いな事に目的の場所は近く、10分程で到着した。外にも響く金属音は聴く者の気分を自然と高揚させる。中に入れば、人は少なくのんびりと遊ぶ事が出来そうだ。

「おお〜 この音はええのう。聴いてるだけで最高や」

「少し落ち着け。とりあえず、今回は騒ぎを起こすのはやめてくれよ」

「なんや？俺がそんな事をする訳ないやろ〜 桐生ちゃんは心配症やのう」

「真島さんの言う通りよ。それよりも咲ちゃん。どのコースでやる？」

「これも初めてなので簡単なコースが良いです」

心配する桐生に真島は何処吹く風である。これ以上、言っても無駄だと桐生は悟った。それを知らず、はしゃぐツバサは咲に話しかけ、初体験の咲も楽しめる様、簡単コースで遊ぶことになった。

「えーっと、このバットを振ればいいんですよね？」

「そうや。あと其処にいと危ないで。右か左に立たんとボールが当たるからのう」

「は、はい。じゃあ、右に立つてと…それで飛んでくるボールを打てばいいんですね？」

「おう。ま、物は試しや。一度やってみい」

「は、はい」

一通り教えた後、真島は咲を残して部屋を出る。中には緊張した様子でバットを構える咲が、今か今かとボールを待っている。すると奥から飛んできたボールを見て咲はバットを振るが、それは空振りに終わってしまった。

「あゝ 惜しい。次こそいけるよ」

「そう？ でも、次は当てたい」

一球目は空振りで終わった事を残念がるツバサに、咲は力強い返事を返した。そして、再び飛んでくるボールを見据え、咲は流れる動作でバットを振った瞬間。気持ちのいい音を立て、高い位置のボードにヒットした。そこからは咲は次々とヒットさせ、どんどんスコアを上げていく。

一ゲームを終える頃には、既にスコアは千点を超えていた。最初のボール以外、彼女は外す事は無く。しかも全てのヒットはホームランスコアであった。この事に初めは傍観していた桐生達も気付けば、啞然としていた。それも当然だった。何せ、先程と同じく初めての人間

が出したスコアである。これで驚くなというのが無理である。

「なあ…桐生ちゃんよ。思うんやが、咲ちゃん。意外と運動神経、ええんとちやうか?」

「いや…もしかしたら、簡単なコースだからも知れない。試しに上のコースにやらせてみるか?」

「成程。それは名案や。よっしゃ、善は急げやな。なあ。咲ちゃん。次はもつと上のコースやってみんか?スコアを出せば、良い景品も貰えるしのうち」

「そうなんですか?　じゃあ、やってみます。何となく、コツも掴んだし…」

真島の提案に咲は二つ返事で了承した。そして、促されるままに咲が選んだのはかなり難しいハードコースだった。これで咲が持つ運動神経の有無が分かる。あわよくば、咲に活躍してもらい、此処の景品を根こそぎ頂く。真島はそう企んでいた。その事をツバサ達は知らず、彼女達は難しいコースに挑戦する咲を応援していた。だが、真島が良からぬ企みをしている事を長い付き合いの桐生は気付いており、面倒になる前に逃げよう。そう心に決めていた。

しかし、天は悪い事を見逃さない。いざ、咲がゲームを始めようとした時…桐生の携帯が音を立てた。液晶を見れば、電話の相手は遙であり、桐生はすぐに電話に出た。

『ねえ、おじさん。今何処にいるの?あれから大分経つけど、まだ帰らないの?』

「ああ。今は真島の兄さん達といるぜ。それに咲も一緒だ」

『本当に!?　だったら、もう帰って来てよ。丁度、晩御飯の用意をする所だから。あと…達と言ってたけど、他に誰がいるの?』

「うん?　A—R—I—S—Eというアイドルグループだ。奇遇な事に咲が会おうとしてたのは、彼女達でな。俺も偶々、皆と会って少し遊んで

た訳だ」

『そうだったんだ。だったら、皆も連れて来て。今日はシチューだから、大勢でも大丈夫だしね』

「分かった。そう伝えてすぐ戻るよ」

そう言って、桐生は電話を切ると：遙の伝言を伝えた。するとツバサ達は喜び、二つ返事で行くと決めた。だが、唯一真島だけは些か不機嫌そうな様子だった。それもそうだろう。咲にゲームをやらせて、景品を取るといふ企みが水泡に帰したのだ。しかし、楽しそうにするツバサ達の手前。彼は何も言う事が出来ないでいた。

一体、何故真島はそこまで景品に拘るのだろうか？疑問に思った桐生が書かれている景品一覧表に目をやって納得した。今回の特賞景品はゾンビ映画のDVDセットだった。最近、その映画に嵌まっていると、西田から聞いた覚えがあった。恐らく、咲に難度の高いコースを勧めたのはこれが理由のようだ。

「真島の兄さん、あとで付き合うから今は我慢してくれ」

「ホンマ？ 約束やで桐生ちゃんよ。あとで嘘だったら承知せえへんで」

「俺が嘘を吐いた事があったか？ 約束は守るぜ」

「そうやったな。ほな、遙ちゃんの料理を食べに行こか」

何とか、宥めすかし。桐生は皆を連れて家に向かった。家では遙が皆を迎え入れ、ツバサ達とも意気投合して、楽しい晚餐を堪能した後、遙の提案でツバサ達は桐生の家に泊まる事になった。

その後、こっそり抜け出した二人は景品を取る為、バッテリーグセインターへ向かったが：件の景品は誰かに取られた事を知った真島は暴れ、桐生は騒がしくも疲れる夜を堪能する事となったのは別の話。